連句協会十周年記念

現代連句集

連句協会

連句協会十周年記念

現代連句集

連句協会
十周年記念

現代連句集　目　次

序……阿片瓢郎……1
連句協会十年史……阿片瓢郎……2

受賞作品

第一回連句懇話会賞
「満天星（どうだん）」東京義仲寺連句会〈水野隆捌〉……11
佳作「群青や」あした連句会「梅雨明」あしべ連句会「古雛」都心連句会

第二回連句懇話会賞
佳作「さくら咲き」市川俳諧教室「立春」信州大学連句会「天行や」俳諧寺芭蕉舎

第三回連句懇話会賞
「十鴉」白燕連句会〈文音〉……18
佳作「名月や」くのいち連句会「日は天に」獅子門「水を射て」連句かつらぎ

第四回連句懇話会賞
「石蕗」連句研究会〈京極杜藻捌〉……22
佳作「神の貌」茨の会「露団々」東京義仲寺連句会「春山の」芭流朱連句会

第五回連句懇話会賞
「団扇持つ」市ケ谷連句会〈伴野渓水捌〉……26
佳作「花の神」市川俳諧教室「あぢさゐ」奥美濃連句会「望の月」岐阜高校連句会

第六回連句懇話会賞
佳作「初句会」啐啄会「葱白く」猫蓑会「山茶花」あらくさ連句会「ルノアール」鹿の会
特別作品「四季それぞれ」かつらぎ

第七回連句協会賞
佳作「夜の雪」あした連句会「雪の奥」かびれ連句会「雉の声」鹿の会
佳作「いかに見よと」東京義仲寺洵沃庵の会「大暑」瑶沙連句会

第八回連句協会賞
「ゆく春」都心連句会〈小林しげと捌〉……40
佳作「子規山脈」茨の会「風花」東京義仲寺水分の会「龍の髭」風信子の会

第九回連句協会賞
「春の雪」獅子門〈國島十雨捌〉……44
佳作「野火猛れ」松山連句会「合歓」海市の会「素麺」連句研究会
佳作「畑霞む」東京義仲芭蕉庵の会「鰯雲」啐啄会「夏の河」ひよどり連句会

作品

藍の華連句会
「革ジャン」……51
青葉城連句会
「梅一輪」……52
あした連句会
「二の酉」……53
「浦霞む」……54
「節分」……55
「春隣り」……56
「祝ぎごとの」……57
「おもしろや」……58
「宗因忌」……59
あしべ俳諧塾
「日向ぼこ」……60
「あぢさゐ」……61
「ひと葉」……62
あらくさ連句会
「終戦の日」……63
市ケ谷連句会
「クリスマス」……64
市川俳諧教室
「冬の鳥」……65
「春の夢」……66
「牧水忌」……67
「春の雲」……68
「秋郊や」……69
「花菜漬」……70
「暮春」……71
伊豆芭蕉堂連句会
「出漁」……72
茨の会
「あせびの香」……73
「秋涼し」……74
「美の山の」……75
奥美濃連句会
「旅の袖」……76
「清水汲む」……77
「春の雲」……78
小野連句会
「にいにい蟬」……79
おぼろ連句会
「明易」……80
海市の会
「天の河」……81
佳菊会
「山中や」……82
「暖冬」……83
「明月」……84
かすみ会
「こま犬の」……85
風の巷
「葭切」……86
花扇会
「曲馬団」……87
金石公民館俳諧研究会
「夏氷」……88
かびれ連句会
「竹山」……89
「箱根路」……90
「鉦叩」……91
「飛ぶ雲」……92
「鮎落ちて」……93
からむし庵連句会
「鬼やんま」……94
夏炉の会
「爽かに」……95
「優曇華の」……96
「天皇の」……97
義仲寺婦人連句会
「青梅」……98
義仲寺横浜戸塚連句会
「初蝶の」……99
錦心会
「藤の房」……100
句華苑吟社
「花山に」……101
草茎
「曝書日々」……102
「祭酒」……103
「雁ネ」……104
「月冥し」……105
「隠岐の海」……106
草茎松山支部
「鍋奉行」……107
「天高き」……108
「木の芽晴」……109
くのいち連句会
「長城も」……110
「鯊釣るや」……111
「うろこ雲」……112
興聖寺連句会
「君や亡し」……113
「千早ふる」……114
「泉殿」……115
郡山連句会
「躓きし」……116
小松連句研究会
「春眠」……117
ころも連句会
「恥多き日」……118
「秋風」……119
佐久良連句会
「懸想文」……120
三冊子研究会
「松陰全集」……121
「菫草」……122
「網代笠」……123
鹿の会
「大寒」……124
「ぼうたんや」……125
「凩や」……126
「花野」……127

子規記念博物館友の会連句教室
「師　走」……128
慈眼舎
「片時雨」……129
獅子門
「嶽見ゆる」……130
「ひつじ草」……131
「初時雨」……132
「兎づくし」……133
「かくれ家や」……134
「十徳は」……135
秋紅雅友連
「サングラス」……136
樹氷連句会
「うろ有漏と」……137
湘南吟社
「花通草」……138
正風大府支部
「秋燕」……139
正風和気支部
「廟前の楷」……140
信州大学連句会
「雪形」……141
新庄北陽社
「霧深し」……142
「蟬の声」……143
「紅葉山」……144
すみれ連句会
「平成と」……145
啐啄会
「落椎」……146
「揚羽」……147
「赤城嵐」……148
染井の会
「七草」……149
「柚子湯」……150
「水明」……151
第六天連句会
「しぐるるや」……152
「昼顔」……153
「露時雨」……154
多摩連句会
「野遊び」……155
丹想
「鮟鱇鍋」……156
「若葉雨」……157
「川の瀬の」……158
出合川
「花守」……159
東京義仲寺連句会馬山人記念会
「若竹」……160
東京義仲寺連句会水分の会
「現身」……161
桃夭樹嗌聚
「ささむか」……162
桃林会
「喜雨」……163
都心連句会
「明治神苑」……164
「梅雨に入る」……165
「芽木明り」……166
「手賀沼好日」……167
「木蓮の芽」……168
「年賀の上鶏」……169
「春水」……170
どん・あ・くらぶ
「匂いたつ」……171
習志野連句会
「山宿」……172
南海放送学苑連句教室
「福寿草」……173
「聖絵」……174
「舟廊下」……175
虹の会
「春雨」……176
猫蓑会
「花の冷え」……177
「雪解け」……178
「青しぐれ」……179
「落葉」……180
「走り梅雨」……181
「秋しぐれ」……182
「ゆく春」……183
乃木坂散人連
「梅散るや」……184
俳諧寺芭蕉舎
「リビングストーン」……185
「大阪で」……186
「水澄むや」……187
俳諧接心
「豆撒き」……188
「松籟に」……189
「米寿とは」……190
「虫鳴くや」……191
「伝統を」……192
「生身魂」……193
「鉄斎の」……194
白塔歌仙会
「湯葉求む」……195
芭蕉記念館連句会
「風痕の」……196
「噴水の」……197
「ブランデーグラス」……198
巴世里の会
「青葉の雫」……199
八戸俳諧倶楽部
「鬢に白きものを」……200
「帰る雁」……201
「年の瀬や」……202
花野連句会
「とうがらし」……203
祓川
「うすものや」……204
芭流朱連句会
「二色に」……205
「山茶花の」……206

「石蕗咲く」……207
「春雪崩」……208
「柿若葉」……209
東松山連句会
「天の破れ」……210
白蕪連句会
「柿の村」……211
「黴の宿」……212
「灯を消すや」……213
「帷子に」……214
「藁しべ」……215
「老人と」……216
「胴伸びる」……217
ひょどり連句会
「顔見世」……218
「水底」……219
「今年竹」……220
広野連句会
「夕暮れて」……221
風信子の会
「風信子」……222
「天使の尻」……223
「溶けてゆく」……224
鳳松連句会
「紫木蓮」……225
北杜連句塾
「雪女郎」……226
松喜久会
「秋空」……227
松山連句協会
「改元」……228
松山連句教室
「緋牡丹」……229
摩天楼連句会
「純情派」……230
「冬籠り」……231
「登山電車」……232
三河連句会
「月挙げん」……233
夢茶の会
「投げ捨てし」……234
瑶沙連句会
「夏深し」……235
葉門連句会
「たんぽぽや」……236
連句愛好会
「獅子頭」……237
「宗因忌」……238
「宍道湖に」……239
連句会「Za」
「北風ぞ」……240
連句研究会
「八幡像」……241
「端居して」……242
「風呂吹」……243
「匂ひ鳥」……244
連楽会
「灰汁」……245
鹿吟舎
「落椎」……246
「杜鵑」……247
「淡影」……248
若泉連句会
「寒晴れ」……249
座談会――現代連句のあれこれ……250
参加グループ一覧……2
連句協会・顧問、名誉会員、評議員及び役員名簿……1
〈あとがき〉……近松寿子……1

序

阿片瓢郎

連句懇話会の創立後満十年、連句協会に改組して三年になるのを記念して本書を編集した。最初は「昭和連句集」として、昭和初期からの連句の収集を企画したが、その選出について種々議論が出て、小委員会を設けて検討したが資料の選別に困難の多さが指摘され、結局発刊以来の連句年鑑の毎年の作品中より、主要結社毎に若干を、各自に選出して貰い、これに毎年の選賞作品を併載することとなった。但し頁数の関係上作品は歌仙以下の形式とし、世吉、源氏、百韻は除外した。尚連句作品の冒頭に各結社の沿革、師系、方針等を簡単に記載した。座談会を含め近松寿子が、十年史は阿片瓢郎が担当した。本書の刊行は連句の普及と興隆を期するため、数十回の連絡でまとめ上げた。出来るだけ廉価に会員が入手出来るよう、連句協会基金より特に補助金を支出して頂いたことを感謝すると共に、印刷、発送に協力下さった朝陽会にも深謝するものである。

連句協会十年史

一　連句懇話会の創立と連句協会への改組

昭和五六年三月十日、阿片瓢郎、岡本春人、大林杣平三氏が会合し、連句懇話会（仮称）の設立を目標として詳細な打合せを行った。（参考三月十日概案）。数回の打合せの結果八月一日付にて懇話会案を関係者に送付し、九月末日迄にまとめることとなり、十一月三日俳句文学館にて創立総会を開催し正式決定した。

即ち会の事業として三月案では、(イ)式目の大衆化、簡易化を計り　(ロ)捌きの養成を行い　(ハ)初心者啓蒙のため定期講習会を催し　(ニ)各地に実地指導員を派遣し　(ホ)適当な参考文献を複写頒布することであったが、八月案では　(イ)会員の連絡強化を計るため年二回関東・関西で懇親会を開き　(ロ)随時会報を発行すると共に各グループよりの優秀作品をまとめ、年間連句集を発行するとなり、十一月案では八月案通りとなった。

組織についても三月案では、会長、顧問、幹事長、幹事を置くこととなっていたが、八月案及び十一月案では、事業が軌道に乗る迄は、会長、顧問は置かないことになっていた。又八月案では代表幹事は阿片瓢郎、岡本春人、大林杣平のみで、十一月案では今泉宇涯、わだとしお両氏が追加されていた。当時の分担は大体次の通りであった。

総務会計　阿片瓢郎　城戸崎丹花　岡本富子　松村武雄
会　報　わだとしお　宮下太郎　大畑健治
全国大会　大林杣平　土屋実郎
年　鑑　今泉宇涯　松村武雄
懇話会賞　岡本春人

其後五八年十二月の役員任期満了に際し、常任幹事、会計幹事、監事の外、名誉会員を推すこととなり、阿波野青畝、京極杜藻、清水瓢左三氏を決定した。其後六三年五月(イ)国民文化祭への独立部門としての参加を容易ならしめ(ロ)全国的事業を行うため文部省より社団法人としての認可が必要であるが、常時基金（預金及国債で五千万円）を保有する要あるも、当分この調達は困難なるにより、法人格なき組織とし　(ハ)社団法人としては役員の改変、事業計画

の提出が求めらるるも特別の恩典なきため、単なる連句協会への改組を、全国大会で正式決定することとして役員会に付議した。その最終規約は連句年鑑に記されている。かくて連句協会の設立は十月一日で、その披露会が六三年十一月十日新宿海洋ホテルで、多数の俳壇関係者を招待し盛大に挙行された。

尚連句協会役員会は懇話会発足以来、隔月第一土曜一―五時新宿俳句文学館を借用して来たが、平成二年九月以降は北区赤羽会館で従来通り開催されている。

主要役員の中わだとしお氏は、その主宰誌「杏花村」（月刊）が六〇年一月百号での終刊を機に、児童文学への専念を理由に代表幹事を辞任し、宇咲冬男、国島十雨両氏が副会長になったが、平成元年二月には創立以来協力されて来た岡本春人氏が病気のため辞任して、名誉会員となった。又懇話会以来総務、会計、年鑑の担当者として、協会の中枢的役割を果たして来られた常任理事松村武雄氏が、平成二年三月俳誌「沖」関係の業務の超多忙を理由に辞任された。近未来に理事長乃至会長候補と目されていただけに惜まれた。後任は、小林しげと氏。又健康上の理由で阿片瓢郎が兼務していた理事長に土屋実郎氏が専任することとなった。

尚当初懇話会では置かなかった、名誉会員に五八年十一月阿波野青畝、京極杜藻、清水瓢左の三氏に依頼したが、連句協会の改組に当っては顧問に阿波野青畝、宇田零雨、暉峻桐雨、東明雅、名誉会員に橋閒石、高藤馬山人、草間時彦、伴野溪水、木村葉山の諸氏が就任された。又評議員を始め会長、副会長、常任理事その他の役員の氏名は別項の付表を参考にされたい。

因みに連句協会十年間に逝去された主要な方々は次の如くである。（敬称略）

斎藤石鼎	昭和五七年	一二月　五日
野村喜舟	五八年	一月一二日
各務於菟	五九年	二月二八日
中村俊定	五九年	八月一九日
京極杜藻	六〇年	一一月　七日
戸塚黒猫子	六二年	一二月　九日
清水瓢左	六三年	五月二五日
木村葉山	六三年	一〇月一二日

吉岡梅游　六三年一二月三〇日
髙藤馬山人　平成二年　八月二〇日
伴野溪水　二年一二月　一日

二　協会報の発行と連句年鑑の刊行

第一号は五六年一二月二三日、一頁三段組、一段三〇行、一行二〇字詰八頁建て開始、一―一六号迄阿片瓢郎担当、各号により八、一〇、一二、一四頁と変遷したが、主要連句結社の師系、連衆、方針等沿革を詳報した。其後三一号六一年七月より一六頁建、五五号平成二年八月号より二〇頁建と逐次増頁となった。この編集発送を一手に引受けているのが宮下太郎氏である。

内容としては第一頁は主として会長、副会長が執筆し、以下各グループの連句作品、随筆、小論文を掲載、特に亡き清水瓢左氏よりは屢々連句年鑑作品への詳細な論評を頂いた。「現代連句を語る」座談会も催された。関西大会記、全国大会記等は当日の雰囲気が伝わるので不参加会員のため講演内容の抄録と共に重要視されてよい。新人練成の場所としての今泉宇涯、宇咲冬男両氏の募吟講評は、それぞれの個性を示しつつ啓蒙に役立っている。当初は見学玄、岡本春人両氏も一時担当されていた。

毎号の連句自註は会の雰囲気を伝え、気楽に同座の楽しみが味わえるが、特定作品についての稍々詳密な鑑賞は入門講座の代用になり、協会だよりは協会の進め方なり動きを知悉せしめ得るので、新グループの紹介と共に、協会報が会員との接触の唯一の場所故活用されたいと思うのである。

連句年鑑の刊行

懇話会結成の翌年即ち昭和五七年に第一回の連句年鑑を阿片瓢郎が作成した。次年度からは今泉宇涯、松村武雄両氏が中心となり、五八―六三年分を編集した。平成一年よりは福井隆秀氏が担任し目下四年版に着手している。当初から結社別出稿依頼先と篇数の選定、連句形式の選択、掲載論文の依頼先検討、連句界の状勢、選賞経緯、結社グループ、住所録の詳密な準備と打合せの結果に基いた依頼状の発送が行われ、最後刊行部数については、全主要結社の購入希望を集め、これに寄贈先の分を加え、発注総数に基く

予想原価を徴し、発送費用を加算した売価を設定して役員会に付議し最終注文数と売価を決定して来た。優秀作、佳作の賞金は本部負担、掲載連句の掲載料、評論々文執筆者への謝礼等を本部門に含ませての売価は頁数の増加により、当初より割高となったが本部会計へ貢献している。但し会員へのメリットを考え、住所録、結社その他の部分は別冊にする案も屢々論議されるが結論は出ていない。最近迄の状況は次の如くである。

	注文数	売価	文章	連句頁	結社表	住所録	合計
57年	八三〇部	一四〇〇円	四頁	一三七頁	三一頁	三一頁	一七四頁
58	一〇〇〇	一五〇〇	三五	一四六	八	三五	三三〇
59	九〇〇	一五〇〇	三一	一五一	八	三八	三三六
60	九〇〇	一五〇〇	二七	一六一	九	二九	二四四
61	一〇〇〇	一五〇〇	四七	一七七	一二	三三	二七九
62	一〇〇〇	一五〇〇	二六	一七一	七	三四	二五一
63	一〇〇〇	二〇〇〇	一六	一九一	四	三一	二六九
元	一〇〇〇	二〇〇〇	四一	一九一	四	三六	二八二
2	一一〇〇	二三〇〇	三七	一九一	四	三七	二八三

選賞経緯は勿論であるが其他以外の文は殆ど全会員に亘り依頼され、外部依存は殆どない。連句実作者は漸増しているが、連句評論は俳文学界誌にも古書発見等の内容が多い。本年鑑の各年度別論文名と筆者は次の如し。

58年	連句は何故衰退したのか	髙藤　武馬
〃	連句の伝承を考える	宇咲　冬男
〃	俳諧の基本	三好　龍肝
〃	連句文芸とその周辺	沢井山帰来
〃	付合の歴史的変遷	今泉　宇涯
59年	連句の様式	伴野　溪水
〃	連句に於ける私性	藤井　晴子
〃	「第三」の難しさ	山地春眠子
〃	月は東に	近松　寿子
〃	現代の連句に思うこと	大畑　健治
60年	三合の俳諧論	国島　十雨
〃	共生の文学	別所眞紀子
〃	現代連句の形式	佐野　千遊
〃	私は何故連句を作るのか	名古　則子
〃	蕉門俳諧本質への回帰	柚木　治郎
61年	支考と美濃派についての断想	堀切　実

〃　俳諧師のオモテ、ウラ　平井　照敏
〃　現代性先取りの連句　鈴木　香歩
〃　西独の連歌　馬嶋　春樹
〃　子規と連句　小倉　星女
〃　開かれた楽しみ　四方万里子
〃　連句見直しの一視点　柴崎正寿郎
62年　忘れられた「体・用」　浅野　黍穂
〃　「羽州新庄」のこと　渋谷　道
〃　今昔霞漫歩　小林しげと
63年　近頃思ふこと　清水　瓢左
〃　石川淳に於ける連句とは　福井　隆秀
〃　女流俳諧（江戸中期）　品川　鈴子
〃　連句とおさかな　磯　直道
平元年　蕉門連句の注釈　上野　洋三
〃　ドイツ語連句菅見　赤田　聴雨
〃　新治筑波を過ぎて　村松　定史
〃　二つの「山中三吟」　松村　武雄
平二年　寺田寅彦の連句実作とその理論　宇和川匠助
〃　回顧と将来　今泉　忘機
〃　俳諧と茶の湯　大林　杣平
平三年　連句の周辺　尾形　仂
〃　連句初学八章　古館　曹人
〃　八九間雨柳　池　翳雉
〃　連句寸感　石橋筑紫男

三　全国大会と国民文化祭

創立総会は昭和五七年十一月三日俳句文学館にて開催、暉峻桐雨氏講演の後懇親会に移り七三名出席。以後の大会状況は次の如くである。

回	場所	日時	出席者	講師	演題
1	比叡山	57・6・12	70	阿波野青畝	連句について
2	増上寺	58・6・11	131	大岡　信	私の連句観
関西大会	かんぽーる京都	59・2・25	66	桜井武次郎	有明月物語
3	増上寺	59・6・9	150	金子金次郎	連歌の視座から
関西大会	伊賀上野観光ホテル	60・3・23	67	山本　茂貴	郷土の芭蕉

岐阜大会	岐阜臨川クラブ	60・8・31	95	鈴木　勝忠	江戸座俳諧
4	増上寺	60・6・9	113	外山滋比古	短詩型文学と日本の伝承
松山大会	ホテル葛城子規記念館	61・3・22 23	200	宇和川匠助	寅彦の俳諧
5	増上寺	61・6・14	126	北村　太郎	連句私観
関西大会	高野山普賢院	62・3・28 29	80	森　寛紹	高野山の文学あれこれ
6	増上寺	62・6・14	109	金子　兜太	連句雑感
臨	関西支部のつどい	62・9・20	56		
関西大会	大阪天満宮大阪リバーサイドホテル	63・4・23 24	86	坪内　稔典	連句の行方
7	増上寺	63・6・11	125	東　明雅	連句の手法—自他伝
8	〃	平1・6・17	145	森川　昭	奥の細道と連句
9	〃	平2・6・23	153	有馬　朗人	漱石と連句
10	〃	平3・6・15	120	村松　友次	心敬と連句

国民文化祭は昭和六一年東京、六二年熊本で開催されたが、連絡もなく関係資料も残っていない。第三回は六三年兵庫県に於て十月二二日より十一月三日迄開催されたが勧誘なく不参加、第四回埼玉県大会には、協賛参加としての諒解を得、十月十四日秩父美之山にて井本農一氏を講師として開催、一五一名が出席、始めての参加に拘らず県及び地元の応援で意気大いに昂った。第五回愛媛大会は平成二年十月十九日皇太子の御臨席を忝うし、講師は暉峻桐雨氏、四百数十人の連衆が会場を埋めつくし今後にも恐らく予測し得ない俳都ならではの盛会であった。第六回は千葉県幕張メッセにて、十一月二四日、東明雅氏を講師として松山と同様国民文化祭に正式独立部門として募吟への賞状授与と興行が実施された。第七回は石川県にて四年十月二四日、第八回は岩手県にて五年十月八日より十七日迄開催、以後三重、栃木と決定している。県によっては連句愛好者も少く、独立部門として参加も困難なので前向な対策が必要である。

四　功労者の表彰と優秀作品並に著書の選賞

連句協会の改組と共に基金制度を設け、全国多数の連句

愛好者による貴重な浄財の蓄積に対し、その最も有効なる使途として、多年に亘り連句の普及と興隆に貢献された功労者に感謝の意を表することを念願とし表彰の制度を設け、平成二年には宇田零雨、暉峻桐雨の両氏、三年には橋閒石、東明雅、岡本春人の三氏を役員の満場一致で決定し、当該年度の全国大会で発表された。

第二の優良図書の表彰も、基金制度の創設と共に開始された。予選委員の選考書について別途詳密に検討され次の三書に決定した。

平成二年　別所眞紀子著　オリジン社
「芭蕉にひらかれた女性の俳諧史」

平成三年　鈴木漠著　書肆季節社
「連句集　海市帖」

浅野欽也共著　創元社
「俳句・連句療法」

他の部門での選彰と異り、著者、著書の範囲が限定され、対象文献も少くなりつつあり、関係者の格段の努力により、新しい連句の生成発展に役立つような著作の出現を期待したい。前年の連句年鑑よりの優秀作品の選賞―懇話会賞とも呼ばれたが、百数十篇以上の各種形式の作品に全部目を通しての選出故、毎回各種の意見が出たが、茲数年定着した方法は理事、常任理事を予選委員として役員会で依嘱し、これに基き正副会長により決定する方法で、この審査の過程は各年鑑に大体表示されている。各予選委員は結社を異にし作品鑑賞の態度も当然異り、序破急の置き方、表六句禁忌への配意、月花恋の在り方、社会現象の織込み方、自他場の扱い方、季語の充実感、片仮名数字等の濫用を避け、哀れさと面白さの程よく均衡とれたものと願うが、この十年間の選賞決定乃至選者鑑賞の文章に、各結社の式目への扱い方、見方が微妙に相違し時に論争のこともあったが、要は優秀と佳作を発見せんとする熱意の現われとも言える。とも角この十年間の成果を熟読玩味してもらいたい。

参考

概要（案）

（五六・三・一〇）

名称　連句懇話会（連句協会、歌仙会）

目的　各連句グループとの連絡を計り連句の興隆を計る

行事　㈠式目の大衆化、簡素化を計る
㈡捌きの養成を行う
㈢初心者啓蒙のため定期講習会を催す
㈣各地に実地指導員を派遣す
㈤適当な参考文献を複写頒布す

組織　会長、顧問、幹事長、幹事を置く
役員の任期は三年とし会員の互選による
会員としての入会は三名以上の会員の推薦による

会費　会員は年三〇〇〇円を納付する（入会金は徴せず）
後援会費年五〇〇〇円以上を納付するものを特別会員とする

会計　本会の会計を掌理するため会計幹事を置く

事務所　本会の事務所を□□□□□に置く

その他　本会は五六年十月一日より事業を開始する
本会設立のため準備委員若干名を置く
本会の定例的業務として毎月会員に会報（四頁）を配布す

連句懇話会設立準備委員

各位殿

愈々御健吟賀し奉ります。陳者三月以降数次に亘り有志により種々協議して参りました「連句懇話会」の件、左記のように漸くまとまりました。

連句懇話会規約（案）

名称　連句懇話会（将来俳諧連句懇話会又は連句協会との意見あり）

目的　連句実作者及愛好者の連絡を緊密にし連句の興隆を計る。

事業　1.会員の連絡引化を計るため年二回関東、関西にて懇親会を行う。
2.随時会報を発行すると共に各グループよりの優秀作品をまとめ年間連句集を刊行する。（尚将来全国連句人名簿の作成を計画する）

組織　1.会員の入会は自由とし会費納入を以て資格を取得する。但し連続二年に亘り会費未納者は脱退したものと看做する。
2.事業活動が軌道に乗るまで会長、顧問等は置かない。
3.取敢えず代表幹事および幹事若干名を置く。（幹事の内編集幹事を別に定む）
4.幹事の任期は二年とし会員の互選による。但し重任を妨げない。

会費　1.入会金は徴収せず、普通会員の会費は年二千円とす

る。

2.賛助会費年一万円以上納入したものを賛助会員とする。

3.会費の納入は切手の代用又は連句研究会振替口座東京七―三七三七八番　に連句懇話会費と明記の上送付する（将来別口座）。

その他

1.各グループおよび一般よりの入会希望者の申込その他の連絡先は　352　埼玉県新座市石神一ノ五ノ九　阿片瓢郎とする。

2.本会の設立は五六年十一月一日とし会計年度は十一月一日より翌年十月三十一日とす。

3.前項以外必要あるときは幹事会にて変更又は追加することとなる。

幹　事

1.代表幹事　阿片瓢郎　今泉宇涯　岡本春人　大林杣平　わだとしお

2.幹　　事　宇咲冬男　城戸崎丹花　国島十雨　見学玄　伴野溪水　土屋実郎　松村武雄　宮下太郎　山地春眠子

（五十音順）（敬称略）

発起人

1.本会設立の発起人は次のグループであります。

俳諧寺芭蕉舎、青葉城連句会、草茎社、都心連句会、杏花村塾、慈眼舎、鹿の会、第六天連句会、麿尼絵連句会、北区連句会、くのいち連句会、市ケ谷連句会、松喜久会、多摩連句会、湘南吟社、戸塚連句会、鳴立庵連句会、連句研究会、花扇会、あしたの会、市川俳諧教室、かびれ連句会、信大連句会、小布施連句会、正風社、白寿社、南美濃連句会、獅子門社、義仲寺、落柿舎、白燕連句会、かつらぎ連句会、丹想社、あしべ連句会、東松山連句会

第一回連句懇話会賞

《東京・義仲寺連句会》

歌仙『満天星』

水野　隆捌

晩禱や地に満天星の花幽か　水野　隆
かつて樹たりし記憶透く春　別所　真紀
鞦韆に水平線をひきよせて　安宅　夏夫
貴人ひとり住む新開地　山地　春眠子
ざらざらと月光首に巻く立夏　古池　淳嗣
水鳴る谿の流し素麺　村松　定史
液晶の青より蒼に変るとき　〃
あかり窓より簪の降る　紀
きぬぎぬは風花となる雪をんな　淳
八千年待ちて神迎へせむ　紀
地震ふれば万巻の書もおそろしや　隆
秋銹びにける釣鐘の舌　淳
菊売つて市の牀几であぶら売る　紀
月を揉みあふ産卵の鮭　夏
親と子の修羅場を出でて吹かれをり　春
焙烙で焼く塩ひとつかみ　隆
バルトークの弦軋みつつ花の冷え　春
春の兎の穴に夕星　お
たんぽぽの酒を明るき窓に据ゑ　紀
かさこそかさとうたふ骨壺　春
莫嗅ぎつつ使徒狩り終へぬ皇帝は　史
赤き群盗虹の根を過ぐ　隆
拭へども汗は目に沁む遠眼鏡　夏
摩天楼にて旅信したため　淳
勝手知る留守をたづねん黒き猫　お
木の葉髪なり火を抱き立つ　紀
朝の凍て千の切尖地に生ひぬ　史
波止場の坂をあやかしの列　お
白桃のひとつは月に罅割れて　隆
瞼の裏の芒かるかや　お
廃屋を焼く誰が昨日を焼く匂ひ　史
頬髭かゆき妻が長唄　夏
東京は車馬多くして落ちつけず　春
海苔好き鸚哥菫喰ふ犬　淳
酒・清水・山葵・芥子菜・初桜　お

花背峠はかげろふのさき

昭和五十六年四月十八日首尾（於・青梧亭）

第一回連句懇話会賞　佳作

《東京・あした連句会》

歌仙『群青や』

宇咲冬男捌

群青や光となれる風の芽木　宇咲冬男
十まり五つの春をあしたに　東城伸吉
背の温く池に水輪の生れ継ぎて　角田双柿
未知を展ぐる画布のおほきさ　木暮万里子
円型の空のすきまの月の弓　林里子
玻璃の深さに懸巣翔けゆき　野本四朗
釜底(ウ)に栗飯の香の焼けのこり　高野夜穂
独身寮の暗き裸灯　冬
乱筆のメモひらひらと竹奴　万
寝巻の裾を見つつ恥ぢらふ　夜
忍ぶ川登音(あと)にすくむ細き肩　四
地に吸はれゆく塔堂の影　双
弁慶の鬚はしろがね小望月　伸
通草の蔓に足をすくはれ　夜
裁判官やめてさばさば鳴子聴く　里
御隠居さんは叱言(ごと)幸兵衛　樋田初子
花の酒呑んでだいこん蒲鉾に　万
氷流るる海峡の島　伸
鳥帰(ナオ)る山脈山のふところへ　里
東京の街凸凹に昏れ　夜
唄ひ出し廻る人形紙ドレス　大谷幸
枕辺淋し雨の病棟　江
工事場のひびきもろとも寒波来る　万
うちの亭主は粗大ごみなり　幸
札束で頬なぐられて炎ゆる肌　初
夢の名ごりの薔薇の入墨　双
北極圏まはりの旅の果て知れず　白根順子
巫女は信じて四柱推命　冬
月蝕も天の摂理と思へども　幸
濡れて伸びゆく紫蘇の実の穂の　斉藤八千代
ひねもす(ナウ)をうすばかげろふ戯れて　四
年金ぐらしいつか身につき　万
喜寿祝ふ尺余の鯛の活造　双
和敬静寂こころにとどめ　順
花びらのいのちを綴り合はせたる　初
しらべを軽くまとふ残雪　冬
昭和五十七年三月二十二日首尾　四
（於・熊谷身障者福祉会館）

第一回連句懇話会賞　佳作

《大阪・あしべ連句会》

歌仙　『梅雨明』

片山多迦夫捌
清水瓢左初校

もろ鳥の暁の鋭と声に梅雨明けぬ　片山　多迦夫
蛇殻光る椎茸の榾　大堀　鶴侶
焼きあげし窯の熱気の面吹きて　郷　三四郎
　騰る株価にはじく算盤　平井　峯星
月の宴老人達もあれこれと　〃　三
　秋扇もて隠すさゝやき
露ちるや十六歳で嫁ぐ身に　〃　迦
　叔母の刀自がくれし紅筆　〃　三
車井の音懐しき露地にして　迦
勝プロ倒れ騒ぐ新聞　峯
悪の果逃げしマニラで夏痩せて　鶴
　コレヒドールの夕焼に泣く　〃　三
月今宵疎林の上に円かなり　〃　迦
　冬瓜抱へ畦を行くひと　〃　三
出土品並べどびろく酌み交し　〃　峯
　剃刀とても関の孫六　〃　鶴
股立を取る源水に花散りて　〃　三
旅の一座に賑かな春　〃　迦

鯛網もまぢかし瀬戸の浮島に　迦
　万祝の背に褪せし鶴亀　〃　三
馴染の妓のぞきて漢はにかめる　〃　鶴
　手に手をとりて出れば嘘　〃　迦
ルーツあり雪ははるゞ国越えて　〃　鶴
　三寒四温かこつ苦力　〃　〃
公害と戦は人のある限り　〃　迦
　怪鳥のごとくコンコルド飛ぶ　〃　三
せはしなきVIPの旅のスケジュール　〃　峯
　秋の声聞く八橋の箏　〃　〃
米減らし芋の穫れすぎ月笑ふ　〃　鶴
　テレビの前で夜なべする人　〃　〃
たゝら踏み鬼が主役の秋祭　〃　三
　マネキン乗せて走るトラック　〃　〃
綿雲のほぐれくて今日は晴　〃　迦
　はつきり聞きし虫出しの音　〃　〃
矢狭間より花を明るう見渡して　〃　鶴
　野点催す蝶狂ふ丘　〃　峯

昭和五十六年七月二十九日起首
昭和五十七年三月　四日満尾

第一回連句懇話会賞　佳作

《東京・都心連句会》

歌仙『古　雛』

名古則子捌

我と齢同じうしたり古雛　名古則子
父の好みは蕗のなめ味噌　清水瓢左
曳船のロープの張りもうらゝかに　小林静司
口笛軽く画架立つるなり　倉間千代
ひとり居の月の繊さをひとしほと　大林杣平
風透けて見ゆきち〳〵の翅　高木義子
うとつときの棚に残れる大南瓜　高橋笑楽司
家賃値上げに家主来るらし
媒酌の数はそろ〳〵百近く　左代
小・中・高と共学の仲　義則
楽書きの相合傘の消えがてに　司左
登りつめれば海見ゆる丘　代則
月涼し露店守りて毛蟹売り　楽平
新しけれどステテコの皺　義平
隣家へ麻雀誘ふ声かけて　代平
抱き上ぐ犬の頬に口付け　楽司
花日和鎮守の杜に人あふれ　義平
篤農として春の表彰　義平
白魚の眼の点々として赤絵皿　義平
戦線の日々偲び乾盃　代平
塩なめの地蔵の風化鼻を欠き　義司
児玉求刑七億の罰　平子
工事場の昼餉新妻のろけつゝ　平左
炬燵重宝老の媾曳　高橋ツ
日本橋冴えてチャルメラ近付きぬ　代司
後一手なる劫を見落し　楽左
宿命を唱へし荘子後世に生き　代則
外人買の去りし株安　楽則
月やよし酔心地よし歌筵　義〃
雁の渡りに気付く者なく　〃平
やゝ寒の三里に灸を据ゑさせて　楽代
福祉政治を洋の東西　代則
大太鼓どんどろ響く川の面　則左
ケニヤの旅に心ときめき
ひとゝきを花片の舞見つめ佇つ
霞沾ふ大仏の袖

昭和五十六年三月十三日首尾（於・東日本橋松妍楼）

第二回連句懇話会賞　佳作

《市川・市川俳諧教室》
「沖」百五十号記念

歌仙　『さくら咲き』

さくら咲きしばし山河に浮ごころ　今泉宇涯捌
雪洞よりも紅き春月　能村登四郎
母に似し菜飯の出来をほめられて　今泉宇涯
詩文の才のつどふ太梁　松村武雄
夜もすがらひびきて裏の猪威　岡本富子
秋の蛍の消えしそのまま　藤井晴子
膝寄せて新酒を交す同級生　松本秀子
風土のにじむもろもろの顔　鈴木良戈
妖精と小悪魔の差は紙一重　小椰鳩子
禁断の実のひたる真清水　上谷昌憲
梳きなほす昨夜の黒髪うねらせて　湯橋喜美
亭主の好きなシャネルの五番　黒古フク
胸襟をひらき月光おのづから　都筑智子
随身門に雁わたるこゑ　吉田明
美術展観てきしほてり紅葉濃く　毛塚静枝
雑踏に酔ふ銀座地下街　武良
ゆつくりと花の前線北目指し　富
民話のけもの眠い雪融　武
書記長の交替春は名のみとか　晴
「罪と罰」読む思ひはるけく　良
若者の自殺相次ぎかなしかり　宇
大年の夜は凡て忘らる　晴
使ひ捨て懐炉何でもない原理　富
隣りの町へいそぐ往診　良
絵のやうな夕日運河は七彩に　武
ふたり分だけ温泉溢るる　静
別れよと聞かば絶えなむわが命　晴
おさん茂兵衛の熱き幕切れ　富
小屋がけの取り払はれし月今宵　武
旅人の墓に露の結べる　静
安曇野に次第にふえし赤蜻蛉　宇
あの橋わたり予備校へゆく　武
魚扁の文字がこんなに大湯呑　富
乙姫様の金の瓔珞　静
揺れとほす夢ものせけり花見船　林翔
埴輪の眼にも引鶴の舞ふ　河口仁志

昭和五十七年十二月十四日首
昭和五十七年十二月三十日尾　（於・雲遊亭）

第二回連句懇話会賞　佳作

《松本・信州大学連句会》

歌仙　『立　春』

宮坂静生捌

春来つゝ北京印泥匂ひ立つ　宮坂　静生
親子自転車風光る坂　山岸　剛
蛙には貸せぬとばかり目を閉ぢて　小出　きよみ
冷めたスープを吹いて飲みをり　倉知　まき子
煙突に月がかくれる盆踊　剛
茸の家のこびと七人　み
女郎花ウふりかへりなば男郎花　〃
レズよりもホモ流行る新宿　生
人前でそしらぬふりの悲しくて　ま
ガラス瓶より水あふれ出し　山見　智子
フォスターの海の町より聞こえ来る　〃
地図携へてセールスに行く　武田　岳人
抽斗の奥に紙魚老い月昇る　み
砂糖を嘗めて酒呷る嬶　生
僧形のひとりもクラスメートにて　み
お国訛りに風のまつはり　〃
信濃路の花を荒しと思はずや　剛
つばめの巣から雀貌出し　〃
清明ナオより穀雨に渡り吉と出て　み
かの死刑囚九十となる　ま
地下室のコンピューターが狂ひ出し　人
お稲荷さまの鳥居真つ赤に　み
見合しに一目小僧山下る　剛
ヒップステップバストこんにやく　生
鉄瓶の疣疣拭いて冬ぬくし　み
京南座の顔見世のビラ　〃
シマウマの縞のシャツ着て夜となる　智
青いインクに染まるペンダコ　み
月割つて遊ぶ漫画の主人公　人
秋鯵を酢でしめるお祝　み
背景ナウに案山子を入れて撮りもして　人
生命保険迫る女房　〃
しゆんしゆんと熟年の湯が沸るなり　み
雨となるべき雲の塊　〃
花冷えの鏡の翳をぬぐへども　生
卒業までにたどる思ひ出　ま

昭和五十七年二月二十日首尾
（於・松本市信州大学宮坂研究所）

第二回連句懇話会賞　佳作

《札幌・俳諧寺芭蕉舎》

ダブルソネット

『天　行　や』

窪田　薫捌

天行やむらさきつよき田螺和え　永田耕衣
狂ひあまりて降れる淡雪　佐藤淑子
振りかへる堤の柳芽ぶきゐて　依田公子

とぼとぼくるは薬売りかも　前田竜子
月光にめざめてをりし錆び馬穴　四方万里子
羊　千　匹　浮　ぶ　鯖　雲　窪田薫

ひややかに定式幕を引きて消ゆ　新妻博
旅の虚無僧そっと袖打つ　万
口笛を吹いて明く窓バルコニー　公
鬼　哭　啾　々　生　贄　の　島　万

眠りたいアンドロメダを眠らせて　竜
藤七硝子に夢の泡立ち　淑
花喰ひの雑魚の涌き出る井の頭　博
照　鷽　が　啼　き　雨　鷽　が　啼　き　淑

通りやんせ八幡様の霞む道　万
朧の富士をヴェール透して　公
ヴィオロンの溜息なれやヴェルレーヌ　竜
枯　蔦　か　ら　む　ユ　ト　リ　ロ　の　指　〃

ゴムの葉の片意地なりし理容室　博
アイソトープがありそでなさそ　〃
月探険あんまりするな留守するな　淑
邯　鄲　の　脚　簡　単　に　折　れ　万

みせばやな美男葛に酔芙蓉　薫
白川郷の濁り酒のむ　博
ムックリに乳色の霧流れては　淑

長い釣橋ぎすぎすぎすぎす　公
消えなんとして燃えあがる花篝　〃
舌やはらかに菜飯青饅　万

昭和五十七年四月十一日十五時四十五分首
十七時五十八分尾

第三回連句懇話会賞

《神戸・白燕連句会》

歌仙『十鴉』

十鴉に十の声あり初霞　佐野千遊
水餅の水なみなみと張る　坂本巽
匂いたつ紺の絣の際立ちて　松浦力
磨きこまれし稽古場の床　澁谷道
明月を仰ぎてしばし言葉なく　遊
前後左右に虫すだくなり　巽
矢先から露零したる武者案山子　力
屈託のなき児らの道草　道
教会のチャペル明るき北の町　遊
土産ともなく木彫熊買う　遊
恋唄は海の方より聴えけり　巽
いつ出来るとも知れぬ編物　力
ひとり居の心楽しき年となり　道
小さき石の水輪ひろがる　遊
忽ちに寄進の瓦万を越し　巽
月の朧を纏い寝る鹿　遊
ふもとより咲きのぼりゆく花の色　力
都踊りの出番待たるる　道
ジーンズをはいて素顔にもどりけり　巽
轆轤にのせる手すさびの土　遊
千年の夢封じたる壺の出て　道
朱雀大路を夏燕飛ぶ　力
身一つを研師にやつす佗住い　巽
芝居見たさにテレビ買い替え　遊
暫くは浮気の虫も静まらん　巽
おこがましくも袈裟をまといて　力
敦盛の首洗い池濁りたる　道
写真に入りし土地の赤犬　遊
歯を出して笑えり月は雲の裏　巽
コスモスばかり乱れ咲く庭　力
薬草を煎じる匂い秋深む　遊
流儀まもるは信仰に似て　道
当代も槍一筋の頑固者　巽
末の娘の殊にやさしき　力
暁に消え残りたる花簪　遊
巣立の近き鳥ごめの梢　道

昭和五十八年二月十三日首
昭和五十八年六月十二日尾（文音）

第三回連句懇話会賞　佳作

《東京・くのいち連句会》

歌仙『名月や』

名月や見しらぬ顔もちらほらと　暉峻桐雨捌
露にぬれつつ萩の隧道　暉峻桐雨
到来の松茸飯のよく炊けて　内山司花
風が頁をめくる絵日記　伊藤紫苑
息をのむ空中ぶらんこ宙に舞い　小方光浦
唐子あやつるからくりの糸　矢島眸
おとがいが尖って見える夕あかり　吉田吉女
勤行終えて内庭を掃く　仙波鶴女
甘くちの酒は好まぬ村の衆　桐司
仲人ぬきで睦みあう床　紫
初あられ冷たい足をなでてやり　光
急いでくだる川添いの路　眸
野天風呂肩しずめれば月も揺れ　吉
ひと山もえる奥飛騨の秋　鶴
口あけてあけびは人を呼ぶならし　桐
幕開き近き木戸のにぎわい　司
早立であすは花見の旅に出ん　紫
雲雀とってとせがむ腕白　光
たらの芽をならべる縁に日ざし伸び　眸
竿竹売のながす片町　吉
島沈む噴火のニュース生々し　鶴
あくびかみかみ語る初恋　桐
野馬追の武者を今日だけちょっと惚れ　司
日ざかり暑し峰の笠雲　紫
立ち読みで醤油の小買いつい忘れ　光
ジャズ聴きながら髪染めている　眸
六本木原宿あたり灯がともり　吉
差額ベッドもこれでお別れ　鶴
仲麻呂がふりさけみれば月暗し　桐
波立ちさわぐ秋の海原　司
晩稲刈やっと済ませて骨やすめ　紫
ゲートボールでもめる爺婆　光
気にしてたわたくし雨が通りすぎ　眸
渡り廊下に三毛の鈴の音　吉
花の屑あつめて小川里に入り　鶴
鳴物入りでくれる春の日　桐

昭和五十八年十月十一日首尾（於・四谷、内山宅）

第三回連句懇話会賞　佳作

《岐阜・獅子門》
各務於菟前道統句碑除幕記念

脇起歌仙　『日は天に』

日は天に夜は五月の風あをし　国島十雨捌
睡蓮たたむ庵の古池　各務於菟
たつぷりと墨の香筆にふくませて　澤田芦月
瞑想やぶる玄関のベル　唐渡北勢子
鉾杉の鉾を離れし月の影　東海大智坊
露しとどなる畦つたひゆく　藪下綏軒
松茸も栗も出て来るかやく飯　高橋啓秋
金ンの眼にうづくまる猫　野村輝雄
朝湯からしなくゝ戻る化粧焼け　高井禎子
街道筋に噂ふりまく　洞下一恵
すゝけたる廣貫堂の薬箱　高木和子
修復されし山の尼寺　恩田とくを
錣田の一つ一つに月置いて　梅村五月
ぬすびと萩も萩のうちなり　出口陽山
茶うけにと湯気のたつ甘藷運ばるる　山下小波
橋のたもとに臨時バス停　早川笹舟
庄川のダムをいろどる花吹雪　櫻井雅秋
石に座れば蝶のもつれる　近藤寿仙
春愁はポケットパークの時計台　川島三州
ゲートボールのスティックを買ふ　春日井朱雀
尻ふつて電車の走る城下町　清水一樹
灸では効かぬ恋の患ひ　村瀬頼霆
牛のごと寝物語りを食み返し　相宮緑峰
早白々と明け易き窓　高樹旭子
幾支流蒐めて大河夏海に　益井菊枝
菰樽届く金北羅の宮　渡辺靖子
故郷の訛りではづむ国自慢　小澤柳之助
同期の兵はみんな老いたり　高井幸子
ベランダに佇ちまんまるの月を見る　遠藤せい
轡虫鳴き鈴虫も鳴く　仲谷牧鹿
ねつかれず木天蓼酒をとり出して　松井敏子
撃墜事件のニュース伝はる　加藤充彦
山桐の片減りしたる重き下駄　蓑島菊代
ボタンを押してタバコ求める　三島道雄
黄山の峰遠くして花の雲　島野雄雲
連塔の翳もゆる糸遊　尾藤静風
昭和五十八年十月三十日首尾（於・獅子庵）　國島十雨

第三回連句懇話会賞　佳作

《西宮・連句かつらぎ》
連句かつらぎ三十五周年記念

歌仙　『水を射て』

水を射て沈むことなき草矢かな　岡本春人捌
飄々乎たり炎天の雲　阿波野青畝
めいめいに新茶の茶碗運ばれて　岡本春人
宮殿の庭孔雀遊べり　岡田水都子
家元の来られしお能月の宴　小倉星女
朱の房垂るる邯鄲の籠　武田無涯子
萩を刈りかつらぎ庵に巻く歌仙　増田草介
ふるさとよりのカルカンの味　高本時子
思ひ出は遠し文がら燃やしつつ　林由子
消すすべもなき恋の刺青　福田リキヱ
あとつぎもなしと炭窯守る翁　小西須麻
寒月かかる祖谷の吊橋　山崎綾子
馬子唄の鈴だんだんに近づきて　中沢早太
村を一つに割りし政争　西浦綾子
掌を重ね思惟したまへる地蔵尊　二塚元子
凧の骨にと竹をさくなり　原田且鹿
ファッションのボロボロルック花盛　岡下青顆
小枝に鳥の巣がしつかりと　山尾克代
ナオサバンナの果ての大きな朝の虹　森田蓉子
シャッターチャンス片目こらして　竹山美代子
Vサイン高くタラップかろやかに　小東泰子
祖母のピアノのモザイクの艶　岩井双葉女
留学の浩宮さまインタビュー　城戸崎丹花
起居のたびにほのと誰が袖　時
お祭りが好き下町の女の子　山崎綾子
フレンチキッスお帰りなさい　花
猿石の鼻の欠けたるていたらく　克
三方正面活ける賀の菊　星
借景の山に月代濃くなりて　無
大蔵王堂修理成る秋　鹿
ナウ家計簿のつじつま合はす掘炬燵　顆
溢るる柚湯ひとりたのしむ　西浦元
真珠貝はぐくむ潮の透き通り　綾
瑠璃の鱗の桜鯛にて　泰
花筵五味八珍をひろげつつ　麻
木の芽の雨に濡るる双塔　山本多河史
昭和五十八年六月十八日首尾　太
（於・宝塚グランドホテル）

第四回連句懇話会賞

《新座・連句研究会》

歌仙『石蕗』

京極杜藻捌

石蕗の黄や老境進みつつも健　京極杜藻
三寒四温今日も亦無為　阿片瓢郎
外は風硝子戸の音時折に　今泉忘機
丁字路多き城下町なり　杜
夕月に鵙の猛りの険ならず　瓢
出来秋楽しひとり爪切る　忘
枝柿を藁に括りて齎らされ　杜
登り窯にて紋瓦焼く　瓢
食攻めの長対陣に館普請　忘
恋ほのぼのと鼓打つなり　杜
眉目清き学僧文筥たづさへて　瓢
冷房列車客行儀よく　忘
夏の月おぼろでもなきうす濁り　杜
鶴の名多き国々の酒　瓢
江東に住居定めて年久し　忘
雪が誘へば旅に漂ふ　杜
花筏きびしき峡の道迫り　瓢
光るを見れば小鮎さ走る　忘
絵踏寺今も残れる島の西　瓢
人には言へぬ胸の秘め事　杜
横顔に女の性の憂ひ見つ　忘
鋏の鈴を猫の鳴らしぬ　瓢
なつかしき木曽路の宿の掘炬燵　杜
武骨男の茶をうまく立て　忘
屋根の石漬物の石それぞれに　瓢
筆は枯れゐて作はなめらか　杜
思はずの興に乗りたる謡の譜　忘
外風呂沸かす豆殻の束　杜
秋も稍々肌寒むとなる風の音　瓢
養魚渡世の二代目の月　忘
銀杏を拾ひべい独楽知らぬなり　杜
良寛様にいろは教はり　瓢
性善の哲学をもつ淋しさよ　忘
母の病のつづくいつまで　杜
御神籤は大吉とあり花の宮　瓢
遠道選び雲雀鳴く土手　忘

昭和五十八年十二月七日首
昭和五十九年六月十八日尾

第四回連句懇話会賞　佳作

《茨木・茨の会》
「遊神帖」「夜がらすの記」出版祝

歌仙　『神の貌』

近松寿子捌

若葉風遊べば神の貌に似つ　米満英男
書(ふみ)の火照りへ捧げる麦酒　近松寿子
夜がらすはさつきの宙を啼き連れて　川崎彰彦
　家出の猫も疲れてねむる　天野律子
月の輪の中なみなみと光盈ち　英
人紛れ込む干柿のれん　寿
県(ウ)警の不祥事つづきそぞろ寒　彰
秋繭煮られふと決心す　律
絡ました小指の約束ただ信じ　寿
マリンルックの肩抱きて行く　英
露地の果汽笛のとどくかくし部屋　律
　またも生れる四人目のぼこ　彰
卒然とえりまきとかげひた走り　寿
　追い追いて追いつけぬわが影　英
負われればおぼろの月は幻か　律
　忘れ風船ときたまゆらぐ　彰
花の蕊あらわに覗きみたる午(ひる)　英
秒位の消えた電光時計　寿
旅先で金引き出してカレー食う(ナオ)　彰
　酔うて眠れば野仏女御さ　律
手枕の跡くれないに染まりいて　英
　敵襲の銅鑼響くきぬぎぬ　寿
驢馬数頭つながれたまま月天心　彰
　明日の飯場は秋蝶の谿　律
身に沁むは悔恨いいえ山葡萄　律
　孤り斧打つ発止発止と　寿
捨てられた古い机に雪が舞い　英
　やがて別れるおふくろの声　彰
唐錦いつも裏見て織りつづる　寿
　自己愛冥く持て余しおり　英
地誌(ナウ)の汚点(しみ)濃き資料館迷路めき　律
　蓮池の鯉跳ねるかわたれ　彰
非定型のこころを映す水の上　英
　巨きな雲の今移りゆく　律
花冷えを超え花の香の一きわに　寿
　校了となり春昼の伸び　彰

昭和五十九年五月二十四日首尾
（於・茨木・成田家）

第四回連句懇話会賞　佳作

《東京・東京義仲寺連句会》

歌仙『露団々』

高藤馬山人捌

露団々いちゞく口を開き初む　高藤馬山人
オカリナ吹けば色を増す月　中島啓世
残り蚊を宙に発止と打ち据ゑて　山地春眠子
浪人ぐらし貸間三畳　内田麻子
百合鷗一番電車灯をともし　川野蓼艸
水槽に浮く山茶花の紅　蓼
妾宅の門ひつそりと路地の奥　啓
夜離れのつゞく独り寝の夢　麻
駐在の長びく巴里うらめしき　馬
音消してゆく沖のヨットは　麻
さるすべり骨董店の手風琴　蓼
征露丸売る敗兵の唄　〃
鯖鮨を食みて月夜の酒に泣き　馬
たまゆら告げる虫のりりりり　春
賜はりし小さきふくべをかざるなり　蓼
はがき一枚出しそびれたる　啓
花冷えの佃の真昼腰病みて　麻
浅蜊の春は遠き日のこと　蓼
喜見城はるかの波に揺れ動き　馬
夜更けてくづす綾取の橋　蓼
吊欄間越の長者の古館　啓
婿取話千里走りて　春
絵姿の電話美人を売物に　啓
賽子振る腿をときにちらりと　蓼
主なき子に二代目を名乗らせて　馬
薄羽蜉蝣その親は誰　蓼
もうあかん先生少し弱気見せ　麻
札所めぐりは夫婦饅頭　春
夕風にメロンの色の月出でて　麻
奈良坂行けば何を恋ふ鹿　蓼
登校の児らの摘みゆく萩桔梗　啓
郷言葉らし聞きもらしたる　麻
戦陣訓げえろつぱら（蛙原）で暗誦し　春
顔をかくして猫も逃げゆく　蓼
ひよつとこが出て花の宴にぎやかに　馬
チョゴリに映ゆるかげろふの庭　啓

昭和五十九年九月九日首尾　（於・関口芭蕉庵）

第四回連句懇話会賞　佳作

《松山・芭流朱連句会》

脇起歌仙　『春　山　の』

春山の山彦は朱髪童子かな　松根東洋城
　水ほとばしる雪解の沢　鈴木春山洞
垣手入するも一人の業ならん　東明雅
　布巾を掛けし茶布台の上　草間時彦
月に挿す芒の影のうつりつつ　岡本春人
　夜なべ終りて払ふ藁屑　洞
葡萄(ウ)醸す香りを納屋にただよはせ　雅
　思ひのほかの美女でありけり　彦
金釘の裏を返せとなじる文　人
　波音を聞く泊船の中　洞
鉄鉢に霰飛びこむ旅の空　雅
　根深の汁の味噌が濃すぎて　彦
おふくろの継ぎの前垂れ盲縞　人
　涼しき月に屋根の青猫　雅
麦刈りを終へし疲れのどつと出て　洞
　八十路過ぎての大手術なり　人
ミルクティミルクたつぷり花の昼　彦
　燻し銀なるペンダント春　洞
乗(ナオ)込を追ひて釣師の今日も来る　雅
　汽車の鉄橋渡る近道　彦
月見草ぽつかり富士の雲晴れて　人
　夏念仏の揃ふ声々　雅
豪商の淀屋闕所の噂立つ　洞
　千鳥啼き交ふ澪あり　人
中年も初老も過ぎし恋ごころ　彦
　何にも知らぬ女房は神　雅
跫音をしのばせ月の背戸を脱け　洞
　露しとどなる桔梗刈萱　彦
法師蟬大名の墓列なれり　人
　老いも若きも混ぢるジョギング　雅
癇癪(ナウ)を手酌の酒にまぎらはし　洞
　腕の入れ墨消すべくもなく　人
年金を使はず溜めて死ににける　彦
　雨も上りて謝肉祭なり　洞
まつしぐら花前線の北上し　雅
　霞たなびく子規のふるさと　彦

昭和五十八年十一月二十六日首
昭和五十九年　九月　十六日尾　（文音）

第五回連句懇話会賞

《東京・市ヶ谷連句会》

歌仙『団扇持つ』

伴野渓水捌

団扇持つ手振りに舞の名残かな　家室翠雨
たそがれ近き床の涼風　伴野渓水
白桃の皮つるくとむきあげて　宮下太郎
路地につどへる子等のはしやげり　山本朝子
なほ残る土蔵造りの十三夜　阿部喜美子
雁かと思ふ声のすぎたる　橋本多佳子
山盛りの松茸飯をふるまはれ　雨
丸ぼちやの嫁京都から来る　水
しきたりは何もわからず新枕　郎
さらりとかはす憎き言の葉　朝
次々に小学唱歌消されゆき　喜
音かしましきゲームセンター　多
襟巻をした一期生月仰ぐ　雨
六代目から芸を仕込まれ　水
原文のシェークスピアは読めぬなり　郎
袖に涙のかゝるパロディー　朝
胸を病む身をひたかくし花の山　野口里
栄養よろし蛤の鍋　井喜
春風に紺の暖簾の新しく　水
宝くじをば当てし婆さま　郎喜
土産物誰彼の顔画きつゝ　井喜
在来線の乗り心地よき　水
海岸に泳ぐふりして背中干し　郎
うぶ毛金色そばかすの肌　朝
一度は離婚考へ我慢する　井
眠れぬ夜半の犬の遠吠　水
断水の告知柱に貼りつけて　郎
洗濯板はいつかなくなり　喜
マンションに月光あふれ灯消し　水
木の実ころがる音しきりなり　郎
夕刊の三面記事のうそ寒く　朝
安達ヶ原に往きて還らず　井
注連縄の殺生石の側避けて　多
山焼く煙太々と立ち　アンドレ・デルテーユ
薄墨と名を得し花の今盛り
蜃気楼にも仁王門妙

昭和六十年七月六日首
昭和六十年十月五日尾（於・市ヶ谷、渓水宅）

第五回連句懇話会賞　佳作

《市川・市川俳諧教室》
手術の為入院中の岡本富子氏を激励して

歌仙『花の神』

花の神台上の君守り給え　今泉宇涯
霞の奥のあつき友情　岡本富子
しろがねのわかさぎのよき苦みにて　松村武雄
前の林に鳥の声せる　鈴木良戈
望月をひたといただくにじり口　上谷昌憲
つぎつぎに寄る秋風の中　宇
パステルの赤をつくせし葉雞頭　富
視線そらして掻きあげる髪　武
この頃の六年女生徒胸隆く　良
あたしの部屋に電話つけてよ　昌
UFOの飛んだ噂さの夏の空　宇
半月あわき補陀落の滝　富
柚味噌を舐め皺よせる母がりに　武
菊の枕に夢をあずけて　良
こえのなき絶叫もあり捨案山子　昌
病肢の杖か遍路の杖か　宇
さくらどきかもめただよう波の上　武
襤褸のごとく若布干さるる　富
かわらけを投げて禍福となす（ナオ）　良
完成近きジグソーパズル　昌
万博に忍の一字の列長し　〃
肖像画かくロボットの腕　宇
鍵っ子のいつもおんなじ笛の曲　武
良寛さまの熱き晩年　富
日本海背にはるばると逢いに来て　富
色と慾とをかけるふたまた　宇
暗き世を透かして見てもなお暗し　昌
大欠伸して耳垂るる犬　良
山頂の城跡に降る月雫　武
ちちろの宿に方違いして　富
みどり児が巡査に抱かれ在祭（ナウ）　富
都を遠み「フォーカス」を見る　昌
おろおろと肴をさがす盗み酒　武
ごみに混りしきれぎれの券　富
青空の隅まであふれ花吹雪　宇
亀を鳴かせて耽読の刻　良
昭和六十年四月　十六日首
昭和六十年七月二十三日尾　（文音）

第五回連句懇話会賞　佳作

《岐阜県・奥美濃連句会》

歌仙　『あぢさゐ』

あぢさゐに遍歴の翳重ねけり　水野　隆捌
青鷺の目に晴れてゆく空　清水　志無子
音楽のごと一片の雲翔ちて　所　山　花
居待ちの月をこの潦　水野　隆
秋蝶の闇の深さ思ひやり　水野　吐　紫
冷腹にまづ新生姜摺る　服部　一　放
宿酔の昼の真澄を目覚め来て　紫
音なく落ちぬ絹のブラウス　放
頬に熱き桟敷の記憶牡丹雪　松村　あ　や
恋よりほかに盗むものなき　隆
丹の橋のひとりの身幅わたりけり　志
還暦過ぎて棚田三枚　放
晩鐘のひゞける海の岬に立つ　紫
松の根方は未知の風吹く　あ
リリリリとまるくおほきく春の月　花
鼻押しあてて暖かき窓　志
花ふぶき遂の栖と決めかねて　花
踏繪の番が廻り来るなり　あ
石地蔵摩崖佛又石地蔵　志
燧の火の粉滅ゆるさいはて　隆
鳥を追ふ少年うぶ毛光りをり　あ
雲をまとひて聳え立つ槍　花
宿下駄のなにやらうれし夕河鹿　美
ほのと面輪の簾越しなる　志
杉玉の庇ふかきに吊られあり　放
帽子で掬ふ奥飛騨の星　隆
豪速球國なまりまだ抜けきらぬ　紫
加速つけつゝ紅葉麓へ　乙
夕月も吾子の乳房もふとりゆく　志
とろろ汁吸ふ蒼む厨に　あ
冬怒濤崩るゝ町に帰り来て　〃
髪をきりりと眠る霜の夜　花
娶唄よそごとなりと聴きをりし　志
掌にとどまらず雪解けの水　花
ジークフリートの躬を覆ひつつ花の渦　隆
春のしぐれが虹をかかげて　志

昭和六十年六月首尾

（於・岐阜市水口真砂子氏宅）

第五回連句懇話会賞　佳作

《岐阜・岐阜高校連句会》

歌仙『望の月』

綿飴にまがへる雲や望の月　渡辺正昭
十字路渡る風のやや寒　佐口修一
秋の宿横笛チッと響かせて　兼松修司
痒い所に尺の届かぬ　村木正子
嫁姑鎌をしばらく休めたる　伊藤俊一
畔走る子の影の三つ四つ　河村泰子
ここかしこガスの工事の通せんぼ　昭
かたかたと鳴る抽斗の鐶　一
寄り添へる君の黒髪頬を撫で　司
ためらひがちに灯を消す　正
さりげなく吹き抜けてゆく松の風　俊
水母浮きたる浜の賑はひ　宏子
浴衣がけ道を急げば月出でぬ　泰
箍の外れし古き肥桶　西尾昭夫
エッサッサ権三と助十名コンビ　昭
徹夜の列の尻に取つ付く　一
縁先に散り乱れをる花吹雪　司
囀り満てる神宮の森　正

入学のこの日ばかりは取り澄まし　俊
晴着の吾子をうつとりと見る　泰
虎勝つてハンシンハンギ流行語　昭
俄かファン等の浴びる樽酒　一
凩に父偲びつつ飼葉切る　司
騙され続け今はこの仕儀　正
耳元であなた一人と囁きて　俊
鼻歌まじり握るハンドル　泰
国分かつ川滔々と流れゆく　宏
雁来紅の姿定まる　昭
偶々に見上げる月は十三夜　一
舞台を下りて情身にしむ　正
旅の朝渋茶片手にFRIDAY　俊
逆巻く波の窓に迫れる　泰
岩頭に無念無想の人のあり　司
琴の音軽く幔幕の中　昭
大木のそよろともせぬ花万朶　正
陽の沈みゆく春の山道　俊

昭和六十年十月　一日首
昭和六十年十月二十八日尾　（於・岐阜高校）

第六回連句懇話会賞　佳作

《寄居・啐啄会》

歌仙『初句会』

森　三郎捌

初句会李白に遠し杜甫とほし　真下　草笠
御慶片言すぐ退さる孫　森　三郎
おだやかに番ひの鳩の舞ひ下りて　柏原　和宏
土の香りの散策の道　猿田　寿子
濃く淡く影を残して月渡る　石川　光男
ともし火消せばしきる虫の音　柏原　知子
前垂れの真新しきも地蔵盆　森　恒子
身を堅うして酒の燗番　坂本　純子
秘めごとを告げてはづかし糸切歯　小菅　一憲
エーゲの海に寄せる白波　宏
夢のある老後とやらのアンケート　知
仕掛花火の果てて寂寞　光
干蛸のしくしく縮む夏の月　寿
玩具の犬の声の悲しき　憲
税関吏言葉も情も知らぬげに　三
阿修羅の貌に移る黄昏　光
ひたすらに行方定めぬ花吹雪　草
都の風に燕すいすい　純
種浸(ナオ)すことなど野良の立話　草
防衛予算枠を越えたり　寿
どこ迄も伸びる背丈の父に似て　宏
罪の重さを畳む歳月　郎
手術室閉してよりの冷じく　草
心萎えたる木の葉髪すく　恒
仕舞た屋の目立つ通りにお題目　寿
吉相印の誇大広告　宏
マキシムを本場パリよりつれて来て　野村　静男
グルメの果ての家のお茶漬　宏
星一つ打ち添へ昇る眉の月　恒
木守りの柿の凝と動かぬ　純
辿(ナウ)り来し砂丘の風に秋惜しむ　知
指先で読む碑の文字　郎
孫六の質札だけが唐櫃に　草
孕みの鳥の影のせはしき　恒
篝火の花の坩堝に吾もまた　寿
朧おぼろに消ゆる鐘の音　執筆

昭和六十二年一月四日首
昭和六十二年二月一日尾（於・寄居町、三郎居）

第六回連句懇話会賞　佳作

《東京・猫蓑会》

脇起歌仙　『葱白く』

秋元正江捌

葱白く洗ひたてたる寒さかな　翁
しぐれ心地にのばしたる背　秋元 正江
竈猫家人の暮らし眺めゐて　東 明雅
カレーの匂ひながれくる窓　米谷 貞子
月の出に応へて雲のたなびくか　草間 時彦
初雁を見し山のわらんべ　坂本 孝子
菊人形祖母の話の団子坂　中川 哲
解いたはいいが結べない帯　上月 淳子
ストローと一緒にのびる鼻の下　彦
BMW速度超過で　哲
熱風の沙漠の果で麻薬売る　雅
月は涼しくうだる五右衛門　彦
影うつる祇園まつりの青簾　孝
惣菜売場味見して買ふ　淳
コンピューター占ひの列しんがりに　貞
ギターの絃の切れて久しく　孝
二十日鼠くるくる廻る花の昼　貞
おつとあぶない春のぬかるみ　彦
かぎろへる港の巨船眺めをり　淳
外道ばかりが釣れる桟橋　彦
今すぐは死なぬ病と医師の云ふ　雅
厨でそつと盗み酒して　淳
ぼんやりと鏡にうつる雪女　貞
玉三郎と契る少年　哲
夏布団軽いタオルの手触りに　雅
七七忌なり偲ぶ絵唐津　孝
仏蘭西に栖みつきしまま勲章を　哲
葡萄を醸す香の村にみち　彦
寝藁かく馬にいとどの跳ねる月　孝
なんで年よるこの秋のわれ　彦
人の世も釣瓶落しよ束の間の　雅
叱言なれつこたたむスカート　貞
東大を受けると云へる馬鹿野郎　彦
雛納めせし部屋のひろびろ　貞
花矢倉花簪燃えつづら折り　江
めかり時なり口伝たまはる　淳

昭和六十一年十一月十六日首尾
（於・深川芭蕉記念館）

第六回連句懇話会賞　佳作

《逗子・あらくさ連句会》

歌仙『山茶花』

草間時彦捌

山茶花の門を掃きゐる夕心　草間時彦
古きこの家に鳴る虎落笛　内田英夫
大寒の地球儀は海ばかりにて　笠井まを
青磁の皿に盛るはワッフル　柳田尚宏
山の端を押しあげて出る望の月　北澤葭
わが公達は栗さへむけず　鈴木雪王
カラオケに蟋蟀和する田舎バー　英
千住の先は草加越谷　〃
目の前で耳飾り揺れ通勤車　王
口説の汗は冷汗ぞかし　葭
年甲斐もなくと女房にどやされて　英
寒月のもと別れ話に　葭
磯の香の立ち初めて冬終りけり　王
ひたすら願ふ内需回復　宏
置き傘のたまりて今日は二本持ち　王
詩作専念鞄忘念　英
鈴の音のお遍路さんに花吹雪　宏
下手な鶯またも裏庭　英
なぜんまいの雌草の料理味のよさ　宏
常連でもつ小店にも春　葭
日記には何事もなき晴れと雨　宏
うまくやつたと思ふかつさ　王
狂言を見ての帰りの恋狂言　葭
終には鬼に変はる姫君　英
鳶の輪に届かぬ谷戸の青嵐　王
慈雨の中なる松たくましき　英
誤字脱字當て字だらけのダサいぶり　〃
この幸せは癖になりさう　王
水没ときまりし村の月今宵　葭
どの窓からも見ゆる鯖雲　宏
秋祭り南部の馬も肥え過ぎし　王
あてどなきなり旅路行方は　葭
母の日に母を訪ねず臥りつゝ　宏
二と二で四とならぬ世の中　宏
初花の植物園に子の満ちて　宏
青芽の微塵日々にふくらむ　宏

昭和六十一年十一月九日首尾（於・内田庵）

第六回連句懇話会賞　佳作

《東京・鹿の会》

歌仙　『ルノアール』

阿片瓢郎校合

ルノアール茶館の名としシクラメン　阿片瓢郎
窓越に見る春雨の糸　宮田恭子
図らずも公魚釣りに誘はれて　戸田貝江
高速道路出口混み合ふ　黄川田美千穂
月光の椅子にくゆらす葉巻の香　芳田龍子
岩打つ波の音のやや寒　島津貞子
送り来し国の新酒を温めむ　貝
テレビに充たす恋のあこがれ　龍
六十の自惚鏡見る男　美
猫鳴きながら裾にまつはる　龍
雪吊りの松美しき庭にして　恭
月凍み渡る山の大寺　美
寒柝の街角曲り消え行けり　貝
点滴二本命綱とす　恭
原子炉の下火となりし敦賀湾　美
昔語りの岸壁の母　龍
銅像の幕引落す花盛り　貝
小径に現れし白き初蝶　恭
独り居の朝の退屈田螺鳴く　恭
書道教授の古りし看板　蒲幾美
革新の市長の負けて保守となり　宮下太郎
鯨のやうな雲の流るる　貞
寄添へる新婦関取面映ゆく　貝
膝枕して耳を掻かせる　美
一大事馬引き立てて駈けつけん　龍
行手果なし蒙古平原　貝
名を知らぬ木々の下より湧く泉　幾
大きやんまの水に尾を打つ　美
千枚田案山子が月を迎へゐて　恭
赤い羽根挿す少年の帽　貞
秋祭祀れる神は猿田彦　太
ハレー彗星かすめ去りたり　貞
肩の張る力なき身の厨事　龍
食ひ道楽の旅の終りて　貝
風吹きて花撩乱と舞始め　幾
鶏なが〳〵と春昼の閼　美

昭和六十一年三月二十五日首
昭和六十一年四月二十二日尾（於・俳句文学館）

第六回連句懇話会賞　特別作品

《西宮・かつらぎ》

歌仙　『四季それぞれ』

四季それぞれこの草庵の冬が好し　岡本春人
たしかに日脚伸びし昼風呂　阿波野青畝
水餅のかけらも共に沈みゐて　小倉星女
Don't knock とドアの貼紙　星人
噂立つ彗星と月出会はざる　星畝
露の尾花か尾花の露か　星人
蓑虫(ウ)の身をのり出してしまひけり　星畝
見たことのなき恋のくづし字　星人
うき思ひ畳の筋目かぞへつつ　人畝
団十郎の怖い大首　星人
ひよつこりと新内流し現はれて　畝人
舳を押して出す納涼舟　星人
水煙の天女逆立ち舞ふならん　星畝
鰈の目玉引つついてをる　畝人
砂かぶり席へ横綱ずでんどう　人星
弥生も七日過ぎの月なり　星畝
伊勢参りかねたる花の旅仕度　畝星
獺の祭のあとのかげろふ　星畝
春塵(ナオ)といふものはただ柳絮なり　畝星
壁断聞の糊ばなれして　星人
剝げてゐるびんづる尊者膝を組む　人畝
筍料理評判の良さ　畝星
衣更博多献上きゆつきゆつと　星人
赤く燃ゆるはさそり座の星　人畝
円高をよろこぶ兄とかこつ叔父　畝星
カルテをちらと盗み見てをり　星人
月洩りてそこにまします観世音　人畝
虫行灯の消えなんとする　畝星
秋風に豆腐ののれん二百年　星人
らくがき帳に括る2B　人畝
朝刊(ナウ)も夕刊も今日休みなり　畝星
鴨鍋の酔さめぬおばしま　星人
五六戸のいづれも木地師ぐらしかな　人星
はるばると来る蓮如忌の輿　畝畝
いろせとぞ詠む二上の花霞　星畝
田を打ち返す腰たしかなり　人人

昭和六十年十一月二十三日首
昭和六十一年四月二日尾　（文音）

第七回連句協会賞　佳作

《東京・あした連句会》

歌仙『夜の雪』

夜の雪の激しさを掌に受けきれず　宇咲冬男捌
寒鯉ねむる庭の一隅　宇咲冬男
久びさに竹馬の友の訪ね来て　山司英子
出世街道まっしぐらなり　清水うた子
煌々と影ひとつなき月の浜　関根雪子
秋草の実のこぼれつづけし　蓮見林
黄泉（ウ）の旅きのうは新酒くみし父　加藤田鶴子
めったに逢わぬうから眷族　岩上千枝子
お下げ髪女盛りとなりていて　英
慰謝料めあて株屋言い寄り　林
騙された振りして裏をよまれいし　田
湯島の神の右往左往と　英
気がつけばひとりぼっちに夏の月　片桐百合子
うなずくごとく風鈴の鳴り　千
税々と新聞テレビあきもせず　雪
無いの出ないの大騒ぎする　う
素人の奇術の種のばれて花　千
鶯餅がのどにつかえし　英
日溜（ナオ）りの縁に影置く目借時　千
秘湯めぐりの勧誘の来て　英
ものごしの良さに絆されついその気　う
足袋のこはぜをおずと外せる　英
冬燈時計の針の速きこと　千
ドアの開閉日がないちにち　雪
断食も不眠も越えて大阿闍梨　〃
地価高騰は押えられずに　川岸冨貴
名苑といわれて石の錆びいたり　冬
耳をすませば螻蛄の鳴く声　林
秋扇流してしまい月見船　田
崖深く紅葉且つ散る　冨
画用紙（ナウ）に子のクレヨンのおどるらし　〃
誕生会のかずかずの品　田
屋上に望遠鏡をのぞきみて　林
小雀どちが砂を浴びいる　千
散り敷きて花よりも濃き桜蕊　冬
連れ立ちて行く今日の野遊　林

昭和六十二年一月十五日首
昭和六十二年四月九日尾
（於・熊谷ニットーモール文化教室）

第七回連句協会賞　佳作

《日立・かびれ連句会》

歌仙『雪の奥』

小松崎爽青捌

雪の奥雪降り雀昏るるなり　小松原爽青
ぐらりぐらりと揺らぐ湯豆腐　田川節代
兄弟のよく似し癖のをかしくて　西幾多
答案なれどまんが文字書く　木崎節子
月光に濡れて家路を千鳥足　井上佳子
案山子と交はす軽き挨拶　引地冬樹
ウ仲のよき医者と坊主が菊くらべ　〃
移り香こもる文を抱くなり　節代
うらみ言猫に聞かせるあはれさよ　渡辺芳子
経を誦しつつ居眠れる婆　幾
とろとろと煮つまつてきし鍋のもの　新井佳津子
男世帯に子供三人　上田渓水
宿題をもてあましゐる夏の月　滑川美智子
向日葵の絵が紙をはみだす　久代好子
狂ひしと噂いつしか広まりて　幾
安達太良の天今日も晴れをる　松崎五美
花守は白髪めでたき滝桜　冬
幾世を此処に亀の鳴くらん　佳津子
耳成(ナオ)も畝傍も昼を霞むなり　節代
渺々と吹く埴の玉笛　渓
俤の醒めては消ゆる儚さよ　佳津子
一夜の夫は征きて還らず　幾
人ごゑも足音もまた空耳に　爽
手術の医師の白き群像　冬
巫女舞に冴えて妖しき鈴の音　〃
吉兆としも鳩が翔つなり　佳津子
果てしなき夢に開きし世界地図　小畑恵子
新人類といふならば言へ　伊藤延子
逆立ちの家建ち月を笑はせる　爽
実に毒茸は笠の紅きよ　冬
吹(ナウ)き晴れて山並の朝爽かに　佳津子
頬をすり寄せ啼ける仔羊　渓
ざわざわと野外保育の列くづれ　羽場桂子
腕の時計がちりちりと鳴る　小出民子
咲き満ちて静もる花の明るさに　幾
鞍を置かれし木曽の春駒　渓

昭和六十二年三月満尾（文音）

第七回連句協会賞　佳作

《東京・鹿の会》

脇起歌仙　『雉の声』

父母のしきりに恋し雉の声　宮下太郎捌
淡雪とけて伝ふ槙の木　松尾芭蕉
春炬燵田楽味噌の味は濃く　芳田龍子
祝電打ちし連句大会　黄川田美千穂
月明に屋根行く猫は立止り　畑村春子
不意に消さるる秋のともしび　山田章子
落し湯のシャボンの香り鉦叩き　加藤美智恵
人の噂に耳聡くなる　美章
修行僧恋を知らずに清らかに　龍
赤い小石と青い小石と　宮下太郎
ジャンケンの声呼びかはす帰り路　春
お化け出さうな崖の洞穴　龍
月の精月下美人に降りたまふ　恵
水胞眼は口をぱくぱく　太
朝早く窓に流るる売上税　章
潮じめりせる三陸の浜　美
花曇り大吟醸を携へて　龍
草に座れば孕鹿来る　春
風船は糸つけしまま青空に　美
笠雲かかる富士の頂き　章
ときじくの香具の木の実を探さんと　太
徐福の墓は今もあるらし　龍
初夢は見しが忘れてしまひけり　美
手焼煎餅届く松過ぎ　恵
嫁ぐ娘の色まさりゆく日数にて　春
半襟箱は母の手造り　美
身の程を知らぬわけではないわいな　太
女心の苅萱の堂　章
夕月に精進料理早も出て　春
瓜くれなゐに種はじきそむ　恵
雁や轍に減りし石だたみ　龍
関所の跡に記念撮影　美
何やかや手捌きのよき浪速つ子　太
雀にまじりうぐひすの鳴く　春
花篝媼舞ひ出づ神の庭　恵
夜あたたかき風が吹くなり　章

昭和六十二年三月二十九日首尾（於・高野山普賢院）

第七回連句協会賞　佳作

《東京・東京義仲寺連句会芭蕉庵の会》

歌仙　『いかに見よと』

高藤馬山人捌

いかに見よと雪積む庭の芭蕉庵　高藤馬山人
万両垂るる古池の橋　久木田朱美子
紙干場尾のある人の覗きゐて　中島啓世
白髪の婆の背中曲れる　若松照代
雑踏に号外を売る昼の月　石飛千可良
鯊も秋刀魚も皿に盛られて　中島まさし
錦(ウ)をば抜けて四条を秋蝶と　川野蓼艸
待たせたいのにまた待たされる　内田麻子
あれこれと思案の挙句嘘も出て　小林しげと
あつけらかんと手を握る君　浜本青海
飛行機が次つぎ通る山の嶺　宮下太郎
青木ヶ原は野ざらしの月　馬
ボージョレー・ヌーボー載せてひた走る　朱
馭者の帽子につるむ蟷螂　千
禅・俳句・宰相やめてくつろげる　照
今ひとたびの出番あらなむ　蓼
橋脚を一銭蒸気花の雨　麻
若鮎はねて水清らなり　ま
瓜(ナオ)坊の縞くつきりと春たけて　啓
九十歳が自転車に乗り　太
このあたり実朝の墓虚子の墓　蓼
死しての後も恋の道づれ　馬
横櫛に役者模様のしどけ帯　朱
鳶が輪を書く夏場所の空　蓼
風狂を天明調にまぎらはし　し
呉れると云へど返す勲章　麻
「外郎」が菓子の名となる世の中に　馬
ハイテク野菜季節かまはず　啓
大屋根を伝ふ黒猫月に吠え　照
べつたら市で財布すられた　ま
ひよどり(ナウ)が鳴けば平次の銭が飛ぶ　青
ちやんの帰りの遅き夕暮　朱
お下りの巫女が持て来る貰ひ酒　千
津軽訛りに愛嬌を見せ　麻
花簪鬼剣舞は奥の舞　馬
明けてそのまゝ風光る宮　太

昭和六十二年十二月三日首尾（於・関口芭蕉庵）

第七回連句協会賞　佳作

《横浜・瑶沙連句会》

歌仙『大暑』

土屋実郎捌

萬年青の根蟇棲みつける大暑かな　土屋実郎
藁屋ふきかへ涼し茶道会　保坂木羊
夏羽織五つこはぜの足袋はきて　石井飄士
趣味を同じく旅は楽しき　梅村ただし
すすき原連る果てに月昇る　栗田年代
虫も交りて細き琴の音　土屋真澄
台風の予報外れて暇生じ　羊
*コアラ見んとて孫の伴する　し
谷根千といふタウン誌に人気出て　郎
薔薇からませしベランダの恋　士
ひらひらと雄蝶をじらし雌蝶舞ふ　し
耳無し地蔵春泥に立つ　澄
花筏児等と競ひて流れ行く　代
宗匠の説く芭蕉直参　士
苦吟して暫く忘る神経痛　し
地価高騰に悲喜はこもごも　羊
停電に月光さやか兎小屋　代
推薦きまりギター弾く秋　澄
零余子飯舌にえぐさの残り居て　郎
センス抜群青山の店　士
陽を吸つて虹と輝くイヤリング　澄
ルージュ拭きとる逢引の後　代
知らぬ間に企業の秘密流れいで　郎
外人力士ねらふ横綱　羊
甲羅酒せよと蟹提げ友来る　し
塒は皇居怖ぢぬ白鳥　澄
ひとしきり虎落笛鳴る寒の月　し
ファン沸き立ち歌ふマドンナ　羊
若き日の遠き想や巴理祭　士
よきものはよし手造りの家具　郎
ゆつたりと鯉泳ぎゐるびいどろ亭　し
半日かけて詰まぬ王将　郎
三姉妹嫁ぎて手持無沙汰なり　代
納め忘れし眉長き雛　士
同期会夫婦同伴花吹雪　羊
核全廃を冀ふ春　し

*谷中・根津・千駄木からとる

昭和六十二年七月二十六日首尾
（於・横浜びいどろ亭）

第八回連句協会賞

《東京・都心連句会》

歌仙『ゆく春』

小林しげと捌

ゆく春や反故には惜しき小短冊　小林しげと
朝顔蒔きて一服の贅　名古則子
隣保館町に誕生藤咲きて　保坂リエ
わらしの群れる壁に落書　見学玄
稜線のなだらかなるに月仰ぎ　蛭海停雲子
酒を温めて旅を楽しむ　岩永極鳥
鬼灯を鳴らしつそれを賣る少女　エ
押し隠しをる胸のときめき　玄
椅子席を譲られ彼の戸惑ひて　エ
傘を忘れし争ひのする　雲
貿易の包括法案通過せり　則
パチパチはじく算盤の玉　鳥
麦飯を炊きて「日暮硯」繰り　と
蝙蝠翅を月に拡げる　玄
境内の素人歌舞伎賑はうて　山口良子
弘化丙午と読みし道標　エ
花守の矍鑠として鶴のごと　〃
かすかな風に揺るるふらここ　則
四月馬鹿発毛剤をつかまされ　則
どこまでつづく長城の天　玄
メガホンのうしろいきなり撮影班　と
受身の稽古臍を噛めとよ　良
白衿の清らに紺のうつりよく　則
冷えたる恋にふれぬいたはり　小林静則
冬ざれの縁切榎注連はられ　司
一の鳥居は町並の端　玄
地価安の分だけ高き交通費　則
傷害保険受ける災難　司
光陰は矢に明月の同期会　鳥
澄むせせらぎに萩のこぼるる　司
親王を偲ぶ御座所に虫しげし　エ
もと来た道へ戻す飛石　良
裏表流派の呼び名異にして　鳥
口にふくめる蕨餅美味　玄
花前線近づき城の絶頂に　司
三つつ五つと石鹸玉舞ひ　と
昭和六十三年五月二日首尾　雲
（於・日本綱管高輪クラブ）

第八回連句協会賞　佳作

《茨木・茨の会》

歌仙　『子規山脈』

子規研究家坪内氏と一座

近松寿子捌

東風はるか子規山脈より吹きにけり　近松　寿子
ふわふわふわとまろぶ猫の仔　坪内　稔典
蕨餅隣へわける気になって　出来　千恵
つっかけ下駄の鼻緒のきつさ　横山　康子
潮騒の遠ざかりゆく月の浜　薗　理恵
睡むる茸の夢のはじまる　天野　律子
秋冷の仮宿で読む鏡花伝　稔子
〝叶う〟とでるまで恋を占い　寿
長電話十円玉もあとわずか　康
雪の深さに愛埋もれず　千
狂いたる時計をはめて父出奔　律
郵便受けの昨日の夕刊　理
にこやかな詐欺師を照らす夏の月　稔
酒あふれさす献杯作法　寿
異人街さまざまな衣ゆき交うよ　康
托鉢の頬まだ柔らかな　千
暁の闇のまつわる残り花　律
径畔をぬい響く囀　理
ぶらんこの軋み心の軋みとも　寿
フリル揺らしてとんと跳ぶ溝　千
ふところにあるはあなたの文ばかり　康
つと口ずさみ「黒髪」の姿媚　理
耳奥にとどまり熄まぬ声ふとし　律
縁切り願い鳴らす神鈴　寿
丈高き草絡み合う河川敷　千
民兵たちは銃を構える　康
砂あらし蠍の寝ぐらの在り処　理
微熱がつづく淋巴腺炎　律
孤り居もよし此の月をひとりじめ　寿
宇野重吉は柿の木の上　千
おおらかに翼ひろげて鶴きたれ　康
薩摩出水の手がき地図帖　理
道具屋の灯りの隅にかがまりぬ　律
元禄の香と明治の匂い　寿
緋毛氈ゆたかに延べて花点前　千
若鮎のぼるせせらぎの音　康

昭和六十三年四月二十四日首尾（於・大阪天満宮）

第八回連句協会賞　佳作

《東京・東京義仲寺連句会水分の会》

胡蝶『風花』

戊辰極月十五日、山口青邨他界、享年九十六

風花の坩堝へ御魂帰りゆく　真鍋天魚
緋裏のマントいまも鮮やか　万波鮎
一行の日記に干支を書きこんで　滝田遊耳
どこからが海どこからが川　草苅澄
月の出を床の中から聞いてゐる　山内加代
明日のバイトは秋のバーゲン　澄
ウ男坂飯桐の実の美しく　吉田梨江
てらてら光るサンプルの海老　藤原千恵
はんなりとすすめ上手や京薄暑　鈴木喜久
約束だけは忘れないでね　原口一草
断崖のガラの記憶に固執する　魚
ボルサリーノにのこる弾痕　梨

真鍋天魚捌

七変化（ナオ）といふ銘柄の酒を飲み　耳
穴場さがしの相対性理論　草
春楡の深き眠りを出でんとし　鮎
吹けば飛ぶよなごんずいの髭　千
いかならんと問へば横向くひとでなし　加
朱雀門にて凍つる月光　鮎
あんこう（ナウ）の肝の太きを喰らひける　草
時計回りが反対になり　喜
このしじま学徒の息吹聴かんとす　加
春の袷のしつけ糸抜く　鮎
花咲いて非常階段のぼりゆき　千
楼蘭の町かげろふのなか　澄

注　ウラ五句目のガラはダリ夫人

昭和六十三年十二月二十三日首尾（於・関口芭蕉庵）

第八回連句協会賞　佳作

《東京・風信子の会》

歌仙　『龍の髭』

去年今年龍の髭珠を抱きしまま　別所真紀
記憶の奥拠叩く寒雷　滝田遊耳
渡殿を十能の燠なびかせて　川野蓼艸
自由自在に話題あやつる　神山みち
月に触れて飛行士の顔まんまるに　川端秀夫
ビルのまとへるたをやかな霧　村田実早
枯露柿の村トロッコのとことこと　小倉流花
「きれいなピンクの心臓売ります」　別所真紀捌
幸福な後追ひ自殺のお婆ちゃん　白夫
地震雲ふとし東京の空　村野夏生
初夏の瀬田ノ唐橋瓜提げて　艸
オーボエの吹く黄金の噴水　紀
アカシアの直線上のZOOに月　花
紫式部てふラブホテル　早
「叔母」と書く獄中書簡ねんごろに　ち
種子袋より叫び声して　花
悲しみの家あかあかと花の奥　ち
長押にかしぐ春怨の面　艸
魚島のざわめく光耳に享け　生
ホーン岬の信天翁恋ふ　耳
平行線交はるあたりわが故郷　夫
ウソをぬぐつたナプキンの白　耳
足袋脱がせくれたる指の冷たくて　花
鋲打つ音のとよむ霜の夜　艸
羽根生えたバイクが朝の天駆ける　夫
トーテムポールの化けし煙突　早
団欒にうつすり笑つている檸檬　紀
プッシュホーンで椋鳥を呼び　夫
弓状火山列島秋の影落ち　梅田智江
ほの薔薇色に月と教会　生
籾殻にまみれし手つき母のごと　花
いとけなき日の歯の痛みなど　ち
神楽坂淡雪夏目写真館　艸
弧旋舞続く沙漠あたたか　ち
花ひらく傷そのものとして絢爛　紀
電気炊飯器のたてる陽炎　生

昭和六十三年一月二十三日首尾（於・東京・文京・関口芭蕉庵）

第九回連句協会賞

《岐阜・獅子門》

脇起歌仙　『春の雪』

今一俵炭を買はうか春の雪　國島十雨捌
梅まだ固き山の鑑塔　各務支考
停年の垣繕ひにとりついて　國島十雨
ほうろく灸に誘はれてゆく　伊藤白雲
ドームにて見る月面の様変り　唐渡北勢子
ことし早くも渡り来る鶴　尾藤静風
外国の松茸とんとかをりなし　近藤寿仙
姥ざくらとて頬紅をうつ　雲勢
試みに作りて送る相聞歌　風勢
思案のほかと瀬戸内の旅　雨風
源平も天下分け目も水の泡　風雨
お茶を濃くして徹夜マージャン　高木和子
藪騒の裾にころがる夏の月　仙
背丈ほどある蛇のぬけ殻　〃
幻の五百円玉守り神　和風
すつぽんぽんになつて気がつき　風雨
風の山桃太郎らが繰り込んで　春日井朱雀
つぽの田楽地酒たらふく　雲
終点とゆり起される目借時　勢
宝くじにはいつも外れる　雨
ぐつと引く浮子に胸ををどらせて　仙
口をとがらせくち付を待つ　雨
鮟鱇のやうな女の深なさけ　勢
履いて冷たき後朝の靴　〃
創生のばらまき予算一億円　悟
村起しには温泉を掘る　岸一
那比の宮「常縁」の碑草むして　梅田双十
行脚のわらぢ脱げるあばら家　勢
枕上み牛が尿する後の月　雨
とぎれ〳〵につづれさせ鳴く　仙
大小の竹刀構へし案山子立ち　悟
油で揚げし母の煎餅　和
長話用事ころつと忘れけり　〃
あとしばらくでレールバス発つ　雨
花古木あまた支柱を従へて　〃
刷毛かけられて跳ねる若駒　勢

平成元年三月五日首尾（於・獅子庵）

第九回連句協会賞　佳作

《松山・松山連句会》

歌仙　『野火猛れ』

野火猛れわが少年の日の色に　松永静雨捌
　接木の台を掘りし穴とも　松永静雨
白魚の酢物肴に酌み合ひて　寺岡情雨
　果つるともなき談義なりける　西原杏花
島影に島重なりて月今宵　宮内竹仙
　にはかに声を落す馬追　静情
障子貼る手つきもなれしカナダ人　花仙
　ゆうに腰までとどく黒髪　静仙
怒つたりすねたりついに泣きもして　静情
　からつと晴れて聳ゆ大山　花情
名物の蕎麦の味さへ懐かしく　井門可奈女
　いつきに走る水茎のあと　仙
城門の古りしがままに夏の月　静
　青龍刀を自由自在に　情
真ン中で奇声を上げる人だかり　仙
　御当所ぶりの鯰瓢簞　女
花万朶湖にうつれる浮御堂　静
　翁のホ句も暖きかな　情
みかへれば遙かに遠く霾りて　女
　ちはや真白き緋袴の巫女　仙
勿体なく納め盃仲人へ　静
　胸の黒子も御存じの筈　情
針灸を始めてすでに十余年　女
　古式を伝ふ寒の水泳　仙
しんしんと雪しんしんと降るばかり　静
　消費税とはややこしき税　情
待望の家もうかつに建てられず　女
　坊ちやん猫の落ちし四階　情
乾坤を鎮めて青き後の月　仙
　疑惑が疑惑よびしうそ寒　静
大籠に一荷の茱萸をこぎためて　情
　つぶてとなりて消えし馬鹿鳥　女
おはじきをさばきて小首かしげたる　仙
　やつとけじめをつけてくつろぐ　静
千歳の花散るとなく散りはじめ　女
　くるくる廻る春の絵日傘　女

平成元年二月二十四日首尾（於・梅之家）

第九回連句協会賞　佳作

《神戸・海市の会》

歌仙『合　歓』

鈴木　漠捌

合歓咲くや蟹行文字坂のまち　漠
倶楽部のかどにほめく瓦斯灯　鈴木　漠
少年の少女めきたる声もして　原田　昌雄
　汚れを知らぬ者のいたづら　永田　圭介
有明に飛行機雲のなびく月　漠
白露百珠に野も冷ゆるなり　昌
馬肥ゆと鄙の友より便り来て　圭
ふつと庖丁とぐ手休める　漠
獲物らの死を忌むごとく時計鳴り　昌
愛は奪ひて惜しむことなし　圭
黒髪を夢のふり投げかける床　漠
　疾風となりて猫の戯る　昌
見の限り冬浪寄るよ月の下　圭
無人の駅に注連かざりけり　漠
白く息吐きて眼を閉づ客も去り　昌
懇ろに拭く名物の碗　圭
大いなるうつぼを花の吹き溜めて　漠
弓忘れ果つ邯鄲の春　昌
来し方もゆくても霞む世紀尽　漠
　結ぶ水のみ透きとほりける　圭
生れ出でてすくと獣の立てるかな　昌
　つぶら瞳に映ゆる夕焼　漠
梧桐揺る風草笛の音を運ぶ　圭
　独り住ひのたまの沈香　昌
地図帖にゆかしき土地の名を拾ひ　漠
　菟名日処女の面をこそ思へ　圭
懸けなほし組みなほし恋流れ橋　昌
　積木細工の夜々過ごしつつ　漠
月あかりなべて黒衣の人ならん　圭
　岩にひつそり秋の草の実　昌
父母在す部屋暖かくいとど跳ぶ　漠
　言葉途絶えて淹れる珈琲　圭
いつかしら見分かぬ顔になりもして　昌
　右八丁と指すへんろ道　漠
　花挿頭す童の歌に聴き惚るる　圭
山うららかに谷の湯けむり　昌

平成元年六月六日首
平成元年十月二日尾　（文音）

第九回連句協会賞　佳作

《新座・連句研究会》

歌仙『素麺』

阿片瓢郎捌

素麺や昼の文楽見て戻り　阿片瓢郎
麻ののれんの揺るる町角　飯沼三千古
ペン使ひ左ぎっちょの女ゐて　山田章子
囲碁番組をいつもかかさず　志甫江美子
上げ汐に貝の呟き月今宵　畑村春子
小舟の蔭に浜菊の白　三
釦(ウ)ひとつ探しあぐねて秋逝かす　章
思はぬ出合ひドラマめきたる　江
品のよきポシェット下げて目白駅　春
世にはやされて髭の殿下と　三
とまどひし婚約つひにピリオッド　章
寒月高く響く靴音　江
一日の疲れを癒す薩摩汁　春
はつと驚く影法師なり　三
あらためて鏡をのぞく太り過ぎ　章
夕べの鐘のわたる大和路　江
はらはらと七堂伽藍花の雨　三
船旅ばやり春の観光　春
四月尽くお六櫛(ナオ)買ふいとまあり　章
孫子に残す伝統の技　江
意外なる批評家の言さまざまに　春
又創刊の週刊誌買ふ　三
秘めし仲盗み撮りされ夏渚　江
微笑おくる夕焼の雲　章
望郷のフィリッピン妻片言に　三
行方は知れず高齢の国　春
政界の世代引退続きをり　江
水量増えし広瀬川なる　章
目を病めば十三夜月幾重にも　三
運動会のテント紅白　春
悪童(ナウ)の渋柿めがけ石を投ぐ　江
思ひ出話さしつさされつ　章
氏神の絵馬の剝落甚だし　三
天狗の足駄参道を行く　春
明日も晴花空の星まばたきて　章
亀鳴く池の太鼓橋なり　江

平成元年八月二日首
平成元年十二月十二日尾

第九回連句協会賞　佳作

《東京・東京義仲寺連句会芭蕉庵の会》

歌仙　『畑　霞　む』

内田麻子捌

川上の山から霞む畠かな　小林しげと
　蛇穴を出でゆらぐ草叢　川野蓼艸
春惜しむ窓にイーゼル寄せかけて　井手欅晴
　漫画立読余念なき子等　中島まさし
弦の月街灯ともして鈍色に　内田麻子
　探しあてたる残菊の家　浜本青海
木のもとに酒も肴も肌寒く　石飛千可良
　話は何時かピガールへ行き　久木田朱美子
閨ねだり又要職を棒に振り　晴
　越すに越されぬ上院の関　艸
命樽さびれし磯に朽ちるまま　晴
　風の涼しく通る民宿　と
夏の月五体投地の僧照らし　海
　年号四代一身にあり　晴
これはまた在らずもがなの刀掛　と
　国の内外続く誘拐　良
夢うつつ黄泉のくにまで花筏　艸
障子に映るてふてふの影　晴
干鱈目刺し干鱈白子干　し
　手ぐすね引いて碁仇を待つ　晴
天狗とは言つても烏かあと鳴き　と
　留学の子の便り絶えたり　良
荒波の珠洲の生れと雪女　艸
　分つて居ても騙されてゐる　と
ちよつと待つてCDの音高くする　朱
　新装なりし古き常盤座　し
どの家もそれ相応のタブー持ち　晴
　ゆつくり首をあげよ起重機　と
爺と婆孫をはさんで月の道　し
　天皇陵はいま虫時雨　艸
ちやぼ追へば雁来紅に紛れけり　海
　日がな野球に遊ぶ弟　し
ぼろ市に臼のつそりと置かれたる　艸
　横浜ナンバー渡る踏切　朱
江の島の弁天詣花の昼　麻
　幕の中より飛ばす風船　良

平成元年三月十二日首尾（於・関口芭蕉庵）

第九回連句協会賞　佳作

《寄居・啐啄会》

脇起歌仙　『鰯　雲』

分校の屋根に入る日や鰯雲　石沢無腸
揺れをさまりて黙すコスモス　森三郎
月掲げそば味噌独りたしなみて　町田節子
髯の頬なで風渡りゆく　柏原和宏
山並の稜線尖り寒坐る　真下草笠
角巻重く急ぐ坂道　柏原知子
町医者の訓へ律義に守りつゝ　佐伯茂子
何年ぶりの遊山旅立ち　笠
恋文をたゝむかに蝶翅閉ぢて　坂本純子
都の手ぶり匂ふ黒髪　宏
堂塔の影をひたして湖昏るる　恒
過ぎこし方は返り見もせず　杉野弁一郎
涼しさは月の峠の休み茶屋　市川美代子
夜泣きする児に風鈴の音　郎
長官が不徳を妻に謝りて　笠
闇の作りし政界の地図　石川光男
執心の果てなる鬼の花無心　茂
仔づれの猫は痩せてしなやか　節
春塵を払ひてくれし古本屋　知
ハヤシライスが又好きになる　笠
昭和史は負ひ目の多きことばかり　郎
思ひもかけぬ壺の窯変　茂
夕顔の算盤塾の仄明り　恒
助手兼帯の妻は汗拭く　美
打ち打てど綾の鼓は鳴らぬもの　宏
明くるが怖き恋の葉隠れ　茂
拍動がブラウン管の波形に　恒
お百度石に凝りし物音　美
月天心瀬戸大橋は渦の上　笠
リズムを持たぬちちろさび行く　節
城崖の崩れに野菊ゆらぎつゝ　宏
舌にまろばす吟醸の酒　弁
また聞きの野鳥の名前メモにして　知
ドナウの河は水ぬるむらし　笠
重々と花枝垂るる無人駅　郎
またゝき初むる町の春の灯

平成元年九月三日首
平成元年十月一日尾　（於・佐伯茂子宅）

第九回連句協会賞　佳作

《神戸・ひよどり連句会》

脇起歌仙　『夏の河』

夏の河赤き鉄鎖のはし浸る　品川鈴子捌
高き梢に鳴く油蟬　山口誓子
ウキンドの硝子に映る姿見て　金田美恵子
園児募集のビラを貼りをり　浜田漁子
本陣の月見の宴もたけなはに　山照高雄
犬が歩けば蝗跳び越ゆ　〃　漁
蛸壺に丹精の菊挿し入れて　高
煮物を焦がす思ひつめては　漁
宗匠の男手前に惚れるなり　高
三連水車夜も止まらず　〃
消費税含む吉野の陀羅尼助　〃
一円玉にポケットが脹る　〃
寒行の僧佇つ街を月照らす　〃
聖樹きらめく垂直の壁　〃
救急車隣の門に止りたり　小林波留
たたみにおちし白き折鶴　〃
外人も子を連れてくる花の宴　高
卍巴の蜷の道筋　〃
揚舟の櫂の雫もぬるみたり　波
帝釈天へ人途切れなし　高
思ひきや団地住ひの三十年　波
測候所員今はタレント　高
無農薬夏大根の繁り様　波
大原の野に渡る涼風　岡田麗
コーヒーを待つ間も指をからめゐて　波
個展を開く出戻りの姉　高
ガキ大将四十を過ぎて思ひとげ　麗
かけら持てくる伯林の壁　波
天心の月にガチャリと販売機　高
残す一つの柿を決めかね　〃
色鳥の森へ入りゆく探鳥会　波
過疎の村にて駐在も留守　高
歩道より手をあげてゐる車椅子　波
土星火星とひくく連なる　〃
鬼棲みし山と思へず花の雲　高
ヘリコプターに風光るなり　波

平成元年八月二十二日首
平成元年十二月五日尾
（於・産経学園神戸教室）

《松山・藍の華連句会》

歌仙『革ジャン』

藍の華連句会。昭和六一年四月創立。代表者白方筍子。会名は代表者の第一句集名から採集した。代表者は民芸伊予かすり会館を経営する白方興業の会長で渋柿俳人。師系は東洋城・里井・春山洞を掲げている。会は限定会員制で運営され、会場・松久庵。月例会・毎月最終土曜日午后六時半から、諸礼停止。渋柿俳諧根本義に立脚した連句を楽しんでいる。

タラップを降る革ジャンのひとりかな　鈴木　春山洞
パイプ咥へて暖房の部屋　〃
滅反の蜜柑の畑に実の熟れて　白方　筍子
針を持つ手に児のたはむるる　井門　可奈女
佇ちてみる波縮緬に月揺らぎ　森　法輪
舞ひ戻りたるはたはたの数　筍
小伝馬でべつたら市の人の渦　奈
振り袖に入る紅ニの付け文　洞
忍ぶ夜のをかしくなりて連れ笑ひ　筍
伯林の壁開きしニュース　輪
相ついで交通事故の身近かなる　奈
短き命野牡丹憶ふ　筍
北齋の版画の富士の月涼し　洞
とんとんとんとリズムとる毬　奈
閑かなる社の庭に雀来て　輪
春光今は遮りもなし　奈
花の色ほのかに茶店こみあへる　筍
風車など木戸に忘れて　輪
起きぬけに煙草くゆらす朝寝床　洞
猫ののびしてゆるり去りゆく　奈
傾ける納屋へかぶさる樹冠なり　筍
水にひたせる古き鋤鍬　久
角巻の老女と会ひし馬場の辻　奈
炉ばたのあたりいざなひにけり　洞
裏口を包みを抱きて急ぎたる　久
涙の出るをひとには見せず　筍
赴任せし留守を守れる岩田帯　奈
ローヒール履くことに馴れたる　洞
語らひもはづむ明るき月の窓　久
赤き実石榴到来の品　奈
馬追が機のたて糸切るといひ　筍
瓦祠に銭たてまつり　久
小きざみに大店法の話出て　奈
アテネ旅行にシンガポールへ　筍
花うらら海うららかに飛機の景　洞
陽炎たてる島の浦里　久

平成元年十二月二十三日首尾
（於・久万の台松久庵）

《仙台・青葉城連句会》

仙台に昭和二九年から三九年迄百十七号を発行した連句誌「遊」があった。主宰は当時「駒草」初心欄選者の飯田岳樓氏。この現代への連句復活の遺志を継いで五三年に三名でスタート、現在会員七名。仙台に根ざした会として基礎をしっかり築こうと青葉城の名をグループ名にしたが、遊心も大切に例会は隔月予定して多忙の時は文音が多い。

歌仙『梅一輪』

梅一輪大寺の庇反り返る　小野寺妙子
日和続きの春の縁日　佐々木志遙
朦朧の小網さす湖水鳥引きて　佐藤ちよ子
遠くつづきて低き山なみ　長田雅道
薄揺れ恥らうごとき上り月　福田けい子
酒温めて友をもてなす　鈴木文男
湯の宿の秋炉に滾る鍋の汁　志
紅のたすきの娘の目秘めやか　妙
いつよりか恋知りそめしおさげ髪　雅
歩け歩けでめぐる観音　ち
ゆりかもめ巡航船に餌をねだり　文
波間に見えし巌の奇しき　け
真夏日の幾日もありて月のやせ　ち
団扇持ちかえおくる夕風　志
消費税話題おちつく事もなく　妙
県知事選挙棄権しようか　雅
この坂の行きも帰りも花の屑　志
自慢高らか鱒釣りし子ら　け
婚前旅行何喰わぬ顔　文
手をつなぎみやげいろいろさがしてる　妙
掃き目たつ庭尼僧明かるき　雅
朝まだき凍てる川辺にねぎ洗い　ち
味噌の香たちて母の温もり　文
六尺の間口で商う何でも屋　け
前掛はずし渋茶一服　妙
テレビ見てシスコ地震に驚きぬ　志
電子ロックのマンションの増え　ち
野の上に位置うつりゆく赤き月　け
夜なべして書く事故の報告　雅
廃鉱のケーブル宙に冬隣　文
正造の本読み更けるまで　志
志成らねば帰る町ならず　妙
東西の壁除かれし世に　雅
花の下異国の人の多き群　ち
風やわらかに野点毛氈　文
ぶらんこに飛行機雲をのぞみつつ　け

平成元年三月八日首
平成元年十二月三十日尾　（文音）

《東京・あした連句会―その一》

両吟歌仙『二一の酉』

昭和五十五年「梨の芯の会」から「あしたの会」に改名、月刊俳誌「あした」を創刊したのを機に〝現代連句の実践〟を二本の柱の一つにして旗色を鮮明にした。俳句を座の文学ととらえるためもある。「あした」は冬男の命名で、連句は〝前進あるのみ〟ということで、きょうを大切に「あした」の創造を、あしたは「朝」をも「晨」「未来」とも意味深し。

二の酉もすぎて寂しや寄席ばやし　暉峻桐雨
雪を催す万太郎句碑　宇咲冬男
更科の軒行燈のしゃれていて　桐雨
とぼけ顔なる陶の小狸　冬男
高層のはざまいざようはつか月　桐雨
虫売りいつか来ずなりにける　冬男
ウリューマチにことさらしみる初嵐　桐雨
比良を間近に弘法の秘湯　冬男
新婚の旅の絵葉書買いあさり　桐雨
むつみ疲れを時差ぼけのせい　冬男
朝めしも店屋ですます癖がつき　桐雨
夜さんざめく神宮の森　冬男
人散りて所を得たる夏の月　桐雨
カーターが来てはやるジョギング　冬男
鎧戸のまだ下りているお濠端　桐雨
雀のあとに鳩の鳴く声　冬男
花びらを無造作に掃く寛永寺　桐雨
弥生の縁にこころ安らぐ　冬男
潮騒に乗って銅羅の音長閑なり　桐雨
塔のクルスに翳る夕光　冬男
てんぷらも普茶・卓袱も食べあきて　桐雨
つむりをまろめひらく俳席　冬男
見覚えのある字にはっと胸突かれ　桐雨
あれかこれかとさぐる面影　冬男
角巻を解けば吾妹にまぎれなく　桐雨
鮟鱇鍋はうす味がよし　冬男
江戸っ子の気風のよさにほだされて　桐雨
坂をくだれば低き町並　冬男
有明に主水の論議なお尽きず　桐雨
早稲酒に酔ういぎたなき妻　冬男
豊作のたびに値上る瑞穂国　桐雨
パイプはなさぬ老いの一徹　冬男
文化財修復成りて佳き日なり　桐雨
九輪の天女碧落に舞う　冬男
花守の誰にともなく笛を吹き　桐雨
またたきそめし春のともし火　冬男

昭和五十四年十一月　十八日首
昭和五十五年　二月二十二日尾　（文音）

《東京・あした連句会―その二》

両吟歌仙　『浦　霞　む』

我が遠き祖の出でしとか浦霞む　福田水　青男
八十路の春をひとすじの水脈　宇咲冬　男
高殿の朱の欄干に蝶舞いて　青男
よく揃いたる子等の合唱　青男
篝火の消えししじまに月を待つ　青男
皿に盛られし秋果あれこれ　青男
アトリエの窓に山々粧える　青男
髪ふさふさと横たわる裸婦　青男
二の腕に恋人の名の刺青も　青男
包丁一本巴里へ乗り込む　青男
客席で調子はずれの小夜曲を　青男
落葉にわかな古き記念樹　青男
議事堂の鉄扉閉ざされ冬の月　青男
わがもの顔にねずみあばれる　青男
波止場には輸出の滞貨積まれいて　青男
『蒼氓』書きし達三も逝く　男青
花冷えに遺跡めぐりの旅つづき　男青
飼い継がれいる大き山繭　男青
草餅とお酒のならぶ囲炉裏端　男青
煤けた壁に知事の賞状　男青
集められ神の民話の本売れて　男青
蟬まで眠い午後の授業に　男青
こっそりと耳朶に香水つけてみる　男青
見合いの前に母はやきもき　男青
結婚は仏式と決めすまし顔　男青
司会はきざなテレビタレント　男青
駅頭の歳末募金始まって　男青
ふたたび三たび過ぐ救急車　男青
まだ引かぬ出水に月の冷やかな　男青
地主の跡は蔵と柿の実　男青
鵞聴くと内助の功のしみじみと　男青
叙勲の沙汰に顔を見合わす　男青
久々に伊豆の別荘灯りたる　男青
句座たけなわに披講声澄む　男青
国ぶりの湯呑茶碗に花の讃　男青
風光る里挙げて大市　男青

昭和六十年一月十一日首
昭和六十年九月　九日尾　（文音）

雅号水青は作家福田清人氏

《東京・あした連句会―その三》

あした二百号自祝

歌仙『節　分』

宇咲冬男捌

香ばしや節分の豆二百粒　宇咲冬男
あす待ちきれず冬芽びっしり　高野夜穂
新しき甍目にしむ町に来て　木暮万里子
俳諧求む館の賑い　山崎宗喜
くらがりをくまなく照らす望の月　大谷幸江
野末の川の澄むを落鮎　大沢好江
ほろほろと呆け老人の秋遍路　杉原白帆
愛憎の過去秘めいたりける　加藤田鶴子
酒あびて女自身を捨てられず　山司英子
スニオ岬の浪のさびしさ　蓮見林
部屋を埋む古今東西哲学書　成田淑美
刻は選ばず人の生き死に　菅谷ユキエ
親探す影をはなさぬ夏の月　天野正三
元気のふりの甚平を着し　岩上千枝子
届けらる「柿の葉ずし」は佳き味覚　代文子
蝶ひらひらと僧をいざなう　恩田正治
文壇に待たれし花の座の出来て　万
夏炉冬扇の稿に春光　大豆生田伴子
知と情の顔がテレビによく映えし　幸
孔明の夢邯鄲の夢　淑
大草原ひたすら駆ける軍馬団　河田房江
ぬきさしならず雪に埋まる　万
手袋を失くしたところ言えません　冬
爪を立てられこころずたずた　夜
清姫の白きまぼろし舞い狂い　宗
幽める山に啼く時鳥　淑
学究の徒へぽっかりと橋に穴　ユ
バスに続いて救急車落つ　田
天国にかかれる月もありぬらん　宗
蒲の穂絮の飛んでゆきたり　萩谷悦子
貼り替えし障子に思い眩しみて　英
よしなし事も記す家計簿　文
雨となりてるてるぼうず濡れそぼち　幸
真におかしきときは泪に　ユ
花びらを見つめておればしずごころ　冬
彩とりどりの螺鈿鮮か　文

昭和六十年二月三日首尾
（於・東京・江東区芭蕉記念館　あした二百号記念興行）

《東京・あした連句会—その四》

歌仙『春隣り』

小谷伸子捌

このあした連衆の沙汰や春隣り　小谷　伸子
明るき床に活けし室咲　岩城　順子
大川のかもめ静かにとび翔ちて　白根　順子
そぞろ歩きの苑の細道　樋田　初子
いしぶみの影あざやかに月今宵　加藤　光樹
故里人の砧打つ音　大石　視朗
唐辛子きかせてキムチ送らるる　三沢　律乃
真夜を突然おそう腹痛　中　和枝
扇風機けだるく夢をかき廻し　藤沼　亜緋子
鬼灯市に化粧して行く　初
碧眼の嫁は天真爛漫に　光
つい追伸の長くなる癖　律
信濃路の下弦の月の淋しくて　初
社の森をかけぬける猪　白　順
冷まじき総裁選の虚や実や　光
水戸黄門のまたも旅立つ　以
伝説を売りものにして花の寺　白　順
わらび団子のにわか名物　亜
のれん継ぐことを拒みて大朝寝　柳瀬　富子
母と娘が恋のライバル　岩　順
やわらかき指を炬燵でさぐり合い　和
庇の雪のどさと落ちたり　律
転勤の辞令いきなり渡されて　岩　順
国鉄運賃値上げするとか　亜
家計簿に赤字がつづき梅雨曇　白　順
敗戦の日にあおる焼酎　岩　順
膝抱きて遠潮騒を聴く窓辺　阿部　朝子
紫ふかく壺の龍胆　和
月代に山襞彫りをあらたむる　光
茸飯たく鄙の湯治場　亜
喜寿祝う秋の個展を心待ち　初
目抜き通りに張りしポスター　律
どの町も文化教室賑やかに　和
ふわりふわりと蝶の舞い込む　岩　順
長堤の万朶の花は高架下　伸
翁の庵に夕陽あたたか　光

昭和六十年二月三日首尾
（於・東京・江東区芭蕉記念館
あした二百号記念興行）

《東京・あした連句会―その五》

歌仙『祝ぎごとの』

柚木治郎捌

祝ぎごとの重なる日々や春隣　柚木　治郎
畳替して撒く里の豆　斉藤　八千代
職人の心意気なる集いにて　山元　志津香
川筋わける杭の高低　松本　健
ほのぼのと萩に夕月匂うらん　田中　悦子
茶会済みたるさわやかな縁　松沢　晴美
秋(ウ)の蚊のよろけるさまのおろかしさ　坂本　千代子
どうにもならぬ定年がくる　鈴木　幸子
満員の狭い座席に割込まれ　八
握られた手をほどけずに居り　桜沢　マサ枝
エアポート訣れはいつも忙しく　健
遠ざかりゆくつれづれの景　志
病室の窓に下弦の月涼し　晴
神田祭の太鼓どんどん　悦
枡酒を一気一気と飲み干して　八
人間万事塞翁と生き　幸
ようやくに探しあてたる花の句碑　角田　双柿
涅槃の鳩がほろほろと啼く　治
笑(ナオ)う山なだれて堕ちて海に入り　千
子連れの旅の夜はせつなき　西原　岩子
咲かせてよ桃色吐息咲かせてよ　志
雪の底なる後朝の肌　八
頼もしき地ひびき立ててラッセル車　健
遅々と進まぬ漁業交渉　幸
三毛猫のねだり顔してすりより来　悦
円朝忌なる怪談をきく　晴
湖に続く道なり夏寒み　栗原　正代
田舎教師がとぼとぼとすぎ　幸
高楼に明月光のあまねきて　志
蔦紅葉炎と這い上る垣　悦
やや(ナウ)ありて添水昂ぶる芭蕉庵　千
「柿の葉ずし」に小休止する　晴
ゆきずりの駅にみかけし相撲取　健
戦争などは知らぬ連中　千
花しまき遠き記憶のたゆたえり　治
稿積み上げて風光る晨(あさ)　八

昭和六十年二月三日首尾
（於・東京・江東区芭蕉記念館あした二百号記念興行）

《東京・あした連句会―その六》

脇起歌仙　『おもしろや』

宇咲冬男捌

伊賀上野づくし

おもしろやことしのはるも旅の空　翁
菫を尋ね ふゆる道連れ　宇咲冬男
くぐり戸の奥に胡蝶の遊ぶらん　山元志津香
わらかごに児の笑まい眠れる　池田鷺虹
まろまろと窓に入りくる望の月　岡村米子
秋の扇に賛もとめられ　井原一子
師（ウ）を決めて上野天神祭に会う　吉野良造
万葉びとのこころ深かり　高橋はじめ
鍵や辻ひだりならみちみぎいせ路　佐久間さと枝
日焼むすめの甘酒を売る　福田芙沙
組紐にまだ断ち切れぬ君の居し　斉藤玉枝
愛染院は香のせつせつ　森洋子
山風の盆地にたまる寒の月　一
下雪隠の語彙うつつなに　芙
寺町に農人忍者武家屋敷　は
世帯道具もそのままにして　良
花ふぶく城のうちそと時迅し　志
亀鳴く声を聴くや聴かずや　米
名（ナオ）の店の木の芽田楽うまかりき　鷺
語れば長き仇討の事　さ
暁の新陰流の又右衛門　一
鬘をとれば市長さんなり　冬
雪を愛で翁が結ぶ十の町　良
歌仙恋句のままの後朝　冬
嫋嫋と思い果てゆく猟師谷　志
雨のしじまに時鳥また　米
探し当て横光利一文学碑　芙
記念スタンプ先を争い　鷺
見どころも蓑虫庵の菊の月　良
小猿の跳びて樹々の露けさ　は
わびときく古酒（ナウ）のかおりの「三重錦」　さ
川面ひき寄せ貝の笛吹く　玉
亡き母に還す臍の緒あらざりき　志
庶民のゆえに自伝残さず　洋
植え継がれさまざま園に花の虹　冬
伊賀暖かに俳諧の真　米

昭和六十年三月二十四日首尾
（於・伊賀上野商工会議所）

《東京・あした連句会―その七》

歌仙『宗因忌』

宇咲冬男捌

宗因忌修すや西も晴れにける　宇咲冬男
時のめぐりて俳の藁　岩城順子
囀りに応えてベレー手に取らん　青柳よし宏
自転車をこぐ若人の群　福田芙紗
流れより河原の白き月見酒　山元志津香
障子に映る秋のいろいろ　清水孝男
胡桃(ウ)割ることにも慣れて姉妹　平本三保子
間違いて受く熱き恋文　浜野正美
大阪の街は哀しい色やねん　高橋良風
四十九日の早やも来たりし　窪岡保憲
同人の米子の謡耳につき　堀冬
貼絵の額がすこし傾く　直子
マルチーズ窓より見てる夏の月　松沢晴美
大極拳に汗をかきおり　篠原弘脩
戦後なお残留孤児の悲話哀話　三
あんまんよりも肉まんが好き　孝
肩ぐるま高々花の通り抜け　良
碑たずねうららかな旅　順

蝌蚪(ナオ)の世の己が自尊に泳ぎおり　よ
七光には遠き親なる　志
思いきりスパンコールに身をつつみ　よ
幕が下りれば戻る振出し　芙
庶民には解らぬ議論間接税　保
みどり児はもう倦みて欠伸す　志
別れねばならぬ煖炉に薪をくべ　冬
いや応もなき室の花の香　孝
一湾を抱き続ける蜑(あま)の里　正
郵便局が坂の途中に　順
月明に心もろともさらされし　三
ベートーベンに冷えて病む脚　晴
露霜(ナウ)を踏みつ七幸めぐりする　順
老いも未来もどんと来い来い　弘
自分でも読む気で漫画買いし人　直
発明王で藍綬褒章　良
花の名の花としまさる名はあらず　冬
季をととのう芳春の城　志

昭和六十三年四月二十四日首尾（於・大阪天満宮）

《大阪・あしべ俳諧塾―その一》

金刀比羅宮奉納・俳諧連歌

歌仙『日向ぼこ』

昭和52年春、芭蕉終焉の地大阪での連句復興を志して在京阪神の知友が集まり、あしべ連句会を結成した。56年春抱虚庵清水瓢左翁に師事して、あしべ俳諧塾と改称。専ら蕉風俳諧（発句と連句）の現代に於けるあり方について実作研鑽してきた。真に蕉風俳諧の道統を嗣ぐべき人がひとりでもふたりでも打出できたら、以て瞑すべしと考えている。

目ふたげば野戦の山河日向ぼこ　故吉岡梅游

笹子あらはれ鶏翔つ庭　夫

鑿刀打つ鍔師の浄居窓もなし　片山多迦夫

夜は冷ゆるとあたたむる酒　游

長尻の烏鷺のともがら去りし月　夫

ひとり静かに燃ゆるかまつか　游

十八娘の連銭葦毛乗りこなし　夫

見合ひのたびに胸痛む母　游

こらへかねし放屁一発笑はれず　夫

翻筋斗打つて落ちし仔燕　游

会釈して風鈴売と金魚売　夫

櫓灯台今も灯り　夫

月昏く何か出さうな焦れ松　游

盆狂言のおどろおどろと　夫

綿菓子を口に含めば秋めきて　游

一病守り既に六十路へ　夫

花の奥寒き姿の翌檜　游

女人高野に遅き初蝶　夫

春闘の茶番劇には飽き飽きし　夫

つくづく仰ぐ空真青なり　游

往き交へる船水尾繁き備讃瀬戸　夫

カメラ忙しき新婚の旅　游

子育ても悠揚たりや樹懶　夫

預かり孫の守りに草臥　游

残り酒早苗饗果てし炉端にて　夫

慈悲心鳥の声かあの声　游

蒼き月あがりぬ照葉樹林より　夫

薄むら伏す崇徳帝陵　游

白露より寒露にかけて歌百首　夫

長き廊下を東来西来とゆく　游

年経ても太宰治が好きな妻　夫

胸の隆起に垂るる十字架　游

オリンピックアテネへ戻せとの声も　夫

水平線に遊ぶ落日　游

魚鱗に火屑飛ばして花簪　夫

夜目にもそれと鳥帰る空　游

昭和五十九年六月末満尾

《大阪・あしべ俳諧塾―その二》

歌仙『あぢさゐ』

あぢさゐや浅き夢みし人の家　東明雅
雨蛙鳴く巷の午時　片山多迦夫
袴能シテの用意も整ひて　雅
一碗の茶のほろ苦きなり　迦
変転の世を知らぬごと月は澄み　雅
寝そびれし子をあやす露寒　迦
木(ウ)の実落つ屋根の音にも耳立てゝ　雅
キャットフードにあちら向く猫　迦
金髪の夫人ベンツを乗り廻し　雅
高くついたる火遊びの代償(つけ)　迦
吸ひかけの煙草の烟しみる宵　雅
貞徳の忌の月の白々　迦
折からの世田谷襤褸市賑かに　雅
時差呆け癒す熱燗の味　迦
ドル相場一喜一憂続くなり　雅
名刺交せばタロー・ウラシマ　迦
戦跡の巡礼団も花の頃　雅
心静かに釣釜の沸き　迦
マンション(ナオ)に暮春の空をほしいまゝ　迦
黒魔術師の黒ミサの刻　雅
政界の影宰相と噂され　迦
上布の胸を吹き通す風　雅
いとしさはしんじつ沢な洗ひ髪　迦
カスバの女海を見つめて　雅
飽食の国のあなたに飢餓の国　迦
遅々と進まぬ核の軍縮　雅
ひたすらに誦むは法華経普門品　迦
ゲートボールもあき果てにけり　雅
月を待つ野鳥保護区の村長と　迦
今年の秋の雨の少さ　雅
還暦(ナウ)の葡萄熟れよと思ふのみ　迦
人生行路浮沈さま〳〵　雅
めづらしや三ッ巴なる鳶の笛　迦
飛天の遊ぶ塔の水煙　雅
草臥れて欝金桜の花蔭に　迦
目をよろこばす菜飯青饅　雅

昭和六十年一月十日満尾

《大阪・あしべ俳諧塾―その三》

歌仙『ひと葉』

乾　裕幸
片山　多迦夫

ひと葉ちるひと葉の空をもちながら　幸
露地をつんざく鵙の一声　迦
日曜の名残の風炉の滾りゐて　幸
硯の海に及ぶ月影　迦
二千里の外の故人へ牡蠣送り　幸
年の瀬近くデパートは混む　迦
※ねずみとり感知器ピピと鳴り通し　幸
怪盗ルパンひとりうそぶく　迦
チャンネルを姉はいつしか争はず　幸
留学中に知りそめし恋　迦
酒の上の乱れを君のせゐにして　幸
風に揺らげる吾亦紅かも　迦
先生の腰折れ歌を笑ふ月　幸
五日遅れの西鶴の忌に　迦
下請けへ落ちぬ手形を振出して　幸
鞄の中はすべて擬餌針　迦
地の底に大きな仕掛花咲かせ　幸
柳の雨も古き明治座　迦
行春のガス燈遺る街角に　迦
茶色い戦争海をへだてゝ　幸
道化師の素顔はまこと好々爺　迦
お腹の上で猫欠伸する　幸
旅立ちも近き夕べの月眺め　迦
浮気封じのKISS&BEER　幸
うなだれてどんどこ舟の一隅に　迦
明日知れぬ身の太鼓打つなり　幸
虎落笛北方領土いつ還る　迦
くるりくるりと風見鶏舞ふ　幸
箒星大接近はいよ〳〵に　迦
徳川実紀めくる燈火　幸
五十石取りとは今のサラリーマン　迦
窓際に置くサボテンの鉢　幸
思はざる穀雨が尚も降りつゞき　迦
独活の膾に舌鼓うつ　幸
咲く花に呉服綾羽の宮詣で　迦
川西・池田東風の一撫で　幸

※物蔭に隠れて交通違反を取締っているパトカーのこと

昭和六十年五月満尾

《逗子・あらくさ連句会》

歌仙『終戦の日』

草間時彦捌

昭和五十六年春に結成。捌き（指導者）は草間時彦氏。メンバーは逗子市（笠井まを、北澤葭、内田英夫）鎌倉市（鈴木雪王）葉山町（柳田尚宏）の住人。以来、ほぼ三カ月に一度の割りで、各家庭を会場に持ち回りする。五十七年末、指導者にあやかって「あらくさ（雑草）会」と呼称。型式を尊重しながらも、自由な表現を追求する。

思ひ出す終戦の日の暑さかな　草間時彦
網戸を左右吊り鉢の揺れ　笠井まを
暴發の花火と知らず拍手して　柳田尚宏
眞晝の波止場猫がつゝ切る　ま
さびしきは好きなコラムの終るとき　内田英夫
枯山水に冬の月影　北澤葭
抜いたあと大根畑の黒々と　英
夕べの空を歸る鴉か　葭
友禅をたゝむ手稚き女客　鈴木雪王
目くばせ空し側に父あり　尚
急停車ラジアルタイヤきしませて　ま
ロックと競ふ蜩の聲　雪
芋幹の煮付けで我慢月あかり　英
白き木槿に墨染の僧　雪
ふるさとの創生やがて早逝し　尚
しばらくありて風渡るなり　ま
櫻餅しにせはさして甘からず　ま
浅蜊とる子ら水ぬるみたり　雪
わが胸は泣いて嘆けど山笑ふ　英
肩にあまれる三浪の髪　ま
とぼけてもディスコで分る放浪度　尚
年増好みと生意気な口　葭
佳き人は膚熱くしてカンツォーネ　雪
割に冷き尻の肉かな　葭
調教師馬に等しき長い顔　雪
夕立来たりビルは孤獨に　尚
窓際はやけにいゝ陽のあたる席　ま
碁會所通ひ気晴らしの日々　雪
十六夜の殘影淡き能登の山　雪
桔梗數輪投入れて寂　尚
そゞろ寒人の情をなつかしみ　葭
病室の窓ななかまど見え　雪
地球上どこにもあるよこんな景　葭
平野山嶽河川海洋　時
皆歩く注ぐ光の花の下　英
みちのく目指す養蜂の旅　雪

平成元年八月十三日首尾（於・笠井宅）

《東京・市ヶ谷連句会》

歌仙『クリスマス』

伴野溪水捌

創立・昭和四六年、師系は松根東洋城・小笠原樹々・野村喜舟師。式目程々に巻き終って楽しきを目標。主宰伴野溪水氏が平成二年九十五歳で逝去のあと、宮下太郎が継承。

静かなる街の風情やクリスマス　岩崎 泉溪
ミサの開始に美しき鐘　阿部 喜美子
年越しの蕎麦をすゝれば悔なくて　伴野 溪水
丁稚小僧を御用聞と呼ぶ　家室 翠雨
月今宵赤き火星を従へて　宮下 太郎
筧の落葉溜るつくばひ　山本 朝子
送られしカナダ松茸汁にせん　喜
主帰らずすぎし最夜中　水
愛用の首飾りまで憎くなり　泉
古き映画の影はうすらぎ　喜
真剣を使ひて人を殺めたる　太
飛沫あげたる荒磯の波　野口 里井
月仰ぐ賑はひ果てし暑さにて　朝
浴衣干しには長い竹竿　喜
なりわひの小唄の弟子はいと少な　水
選び抜かれし芥川賞　泉
花に明け花に暮れたる名所にて　喜
吉野すぎれば紀の川の春　太

歌書よりも軍書を学び卒業し　井
寿如南山と結び文くる　太
揚底に薄皮まんじゅう詰められて　喜
番茶土瓶に描ける唐草　水
峠路は頂き近く雪となり　泉
木の幹深く熊の爪跡　翠
引率の若き教師は声高に　朝
写真みてから見合断わる　井
特選となりし揮毫は恋の仮名　太
つんどく本が増え初めたり　喜
姥捨も田毎の月も今はなく　水
変はらぬものに龍胆の道　泉
新走り小芋をつゝく竹の箸　翠
異国の言葉多く聞こえる　橋本 多佳子
改めし胸のバッジはいかならん　井
もとはといえば家内工場　太
風雅には花盗人も憚からず　水
春のコートに軽塵の舞ふ　喜

昭和六十三年十二月十七日首
平成元年三月二十六日尾
（於・市谷溪水宅　白金喜美子宅）

《市川・市川俳諧教室―その一》

歌仙『冬の鳥』

今泉宇涯捌

市川市内二小学校PTA俳句部講師として吟行の車中で式目を略述しつつ実作したのが始り。四八年四月、教室の名称がグループの名称に連衆は沖・浜・狩・鳴・元俳句女苑に所属。欅組⑽松組⑿温掌組⑻梅組⑽その他計45名。式目は連句の根幹なれば重んずるが余り些末な事にはこだわらず。往古を顧み新しさを望み異型連句を排し中道を歩まんとす。

冬の鳥高くは飛ばず水鏡　今泉宇涯
沈みがちなる風の枯蓮　岡本富子
日曜の朝からパンがよく売れて　毛塚静枝
コーヒーの香を眠気さましに　松村武雄
トランプの手を止めてみる望の月　都筑智子
蓑虫の糸きらきらと揺れ　智
弔辞よむこゑ秋晴れの午後となり　武
うしろ姿の見覚えの人　富
簪が似合ふといつて髪に触る　武
週一回のデートと決めて　宇
持ち時間濃く使ふとも稿成らず　智
やがて落ちつく大臣の椅子　静
ふるさとへ錦をかざる月光裡　富
積み上げられし土間の馬鈴薯　武
ほろ酔ひし羅漢に降りし楡黄葉　富
芭蕉以来の連句ブームに　宇
書割は大川端の花明り　武
春のファッションあふるウィンド　静

わけあつて入学式に祖母が蹤き　富
洩れずに済みし一門の恥　藤井晴子
輸入犬買ひドイツ語の犬舎号　富
ゴルフを兼ねて避暑の習慣　晴
浴槽に伸ばせる四肢にみどりさし　武
童謡うたふ幼友達　鈴木良戈
昔なら伏字伏字のくだりにて　富
太陽を背に熱烈なキス　宇
ことごとく音を失ふ山毛欅林　小椰鳩子
笑ひの神のいます峠神　武
吉事ありけふの月光何ルックス　晴
菊の膾のややほろにがく　武
冷まじき神経痛が再発し　宇
ゲートボールの庭に降る雨　武
印旛沼の空に大鳶弧をゑがき　宇
画架をたたみて帰る人あり　武
栄光の花ふぶかせて坂上る　宇
朧の里に夢多からむ　智

昭和五十七年十一月二十七日首
昭和五十八年　二月二十六日尾

《市川・市川俳諧教室―その二》

脇起恋歌仙『春の夢』

林　翔

妻ならぬ人は白すぎ春の夢
覚めぬまぶたを過ぎる双蝶

今泉　宇涯

芽ぶきたる柳の下に待ちかねて
甘き風にも五感はたらく

松村　武雄

やや冷えし肩を抱かれ寝待月
口うつしさる古酒の味

岡本　富子

焼栗（ウ）を僕とお前で分けあひて
「チャタレー夫人」にカット度々

松本　秀子

頬赤らめSEXと書く少女なり
ホテルの庭にならぶマイカー

都筑　智子

かはたれの二見ヶ浦の夫婦岩
鏡の中で眉ひきなほす

鈴木　良戈

駈落ちの燃えたるあとの月涼し
新樹匂はせつるむ賽神

武富

大奥の大きな鈴が鳴り渡り
ふところの中忍び文ある

宇富

花の夜の涙にぬるる箱枕
おぼろに沈む後朝の嘆

武良

東風（ナオ）荒れて眼をおどろかす腕の奥
きつつあんと定愛を完璧

黒古　フク

国会をゆるがす「厳粛なる事実」
リズム烈しくフラメンコ炎ゆ

藤井　晴子

硝煙の地より航空便とどき
耳順の恋はスローテンポで

武良

日々通ふいこひの家の娯楽室
雄猫ばかり飼へる尼寺

富智

暇と毛皮あれば夫ではもの足りぬ
レズだホモだと倒錯の性

毛塚　静枝

終ひ湯の窓細くあけ月ゆるす
乳ほとばしり雁の渡れる

富フ

川照（ナウ）の「野菊の墓」の露しぐれ
足弱の妹手をつなぎやり

武富

消すべきか伝言板のイニシャル
待つか戻るかあと一時間

智武

無情なる心中の森の花吹雪
君住むかたへ雲雀とび翔つ

宇良

昭和五十七年五月二十三日首
昭和五十七年五月二十九日尾

《市川・市川俳諧教室—その三》

三吟歌仙『牧水忌』

琅玕いろの水が旅する牧水忌　今泉宇涯
月うすうすと染まる白鳥　水野隆
焙烙に塩銀杏の皮裂けて　松村武雄
何臆すなき事をしやべらん　宇涯
帆船の帆に貝殻を秘しけり　隆
悴みながら考へる嘘　武雄
橇道のえんえんつづく雪の原　宇涯
憂ひ顔なる騎士の夕ぐれ　隆
片想ひサンチョパンサに笑はれて　武雄
意中のひとの星を占ふ　宇涯
欄干に音なき笛を聞きをりぬ　隆
涼しき風が抜ける新町　武雄
汗かいてゲームセンターの上に月　宇涯
繃帯の下のぞく刺青　隆
眼ナ差しの窶れし姉が針運ぶ　武雄
けふも暮れゆく三井寺の鐘　宇涯
対岸に灯の点りそめ落花なほ　武雄
梅若の日を雨仄かなれ　隆

もつれナオては崩るる蝌蚪の陣いくつ　宇涯
樫の木かげの長き密談　武雄
王冠の重さに耐へて眉を上げ　隆
氷柱まばゆき懊悩の濃く　宇涯
冬薔薇を海に投げ恋捨つるべし　武雄
髪七尺の靡く甲板　隆
随行の犬がガウンにじやれつきて　宇涯
北は曇りの沈む山脈　武雄
隕石に宇宙の虫の潜みけり　隆
浄土にも月ありてかがよふ　宇涯
美術展見て来し疲れ独り酌み　武雄
秋のフォーレ*の杳き幻聴　隆
拍手ナウが金銀の輪をゑがきつつ　宇涯
きつちり緊まるジーンズの尻　武雄
西域はアップ・ダウンして過ぐ土屋　宇涯
点から点へ神秘つづれる　〃
花燃えて視えざる星座青天に　隆
珈琲の香のあはき春愁　武雄

*フォーレ　フランスの作曲家
昭和五十八年九月十七日首
昭和五十九年九月十五日尾
（表六句於・小料亭）
（以下文音）

《市川・市川俳諧教室―その四》

文音五吟『春の雲』

高度一万いのちが据わる春の雲　今泉　宇涯
眼下おぼろに森と湖　松本　秀子
菫咲くセカンドハウス窓開けて　都築　智子
テニスコートにひびく歓声　郷　みや
ひょろひょろの木に三日月がひっかかり　上谷　昌憲
淋しきときは秋刀魚を焦がす　宇
酎（ウ）ハイにきゅっとかぼすを滴らし　秀
じーんとしみる唇の傷　智
ウィンクを交して宵の街外れ　み
誰がために解く塩瀬の帯を　昌
古伊万里の壺が妖しきひかりもつ　宇
打ち砕きたき衝動のあり　秀
伯母連れて避暑地の月のレモン色　智
お中元には水の缶詰　み
円高も同時選挙のどさくさに　昌
春の狸とおぼろの狐　宇
振り向けば人消えうせし花の幹　秀
水尾ひと筋に俊寛忌とよ　智

初蝶（ナオ）は風の落差によろめきつ　み
大学ノートにへのへのもへじ　昌
新宿の音が右から左から　宇
あずさ一号待つ山男　秀
毛糸帽色違いにて編みくれし　智
覚めては疼く愛の顛末　み
新婚のダブルベットに医書その他　昌
沖遠く航く白き客船　宇
脱サラの波止場ちかくの珈琲店　秀
懐中深く写経秘めたり　智
パソコンの不得手の指に月さして　み
世紀末へと紅葉且つ散る　昌
火（ナウ）も息も滅入らむばかり病蛍　宇
奥の院までつづく石段　秀
三毛猫の身軽に飛びて鈴鳴らす　智
電子レンジに急かさるる朝　み
遮断機より花の校門目指しつつ　宇
松籟匂う陽炎の街　昌

昭和六十一年四月十日首
昭和六十一年八月三十一日尾

《市川・市川俳諧教室―その五》

歌仙『秋郊や』

今泉宇涯捌

秋郊やまっ赤な自動販売機　今泉宇涯
　ほつほつ暮るる潰え藁塚　鈴木良戈
月の出を待つ人形の髪撫でて　松村武雄
　コーヒー飲みつ冗談をいう　都築智子
頭白き同期の旅も五年振り　宇
　真珠筏に風花の舞い　武
芭蕉忌の大き庭下駄角あまし　智
　よろめいて手を強く握れる　宇
恋人にサーヴするどく打返す　武
　若菜集よむ日曜の午後　智
垣根越しカレー匂わす裏の家　藤井晴子
　軽鳧の子わたる水脈の消えゆく　武
警笛の彼方に浮かぶ十日月　宇
　掌にあるどんぐりの艶　晴
マル優の心がかりに秋遍路　武
　巨大な気球のっそりと航く　宇
花満ちて九段濠端・大使館　晴
　復活祭にサーリーの人　智
うつむいて春の風邪声小さくする　武
　夜中に呑みしお銚子の数　宇
とみこうみ夢のさ中をさ迷いて　良
　国鉄という名の消ゆるとき　晴
遠き山近き山雨ざんざ降り　武
　半歳かけて原稿を撰る　宇
自転車のペダルひからせ渡る橋　良
　氷柱にしるき口紅のいろ　武
寒燈のあからさまなる乳房にて　宇
　そのあとしばしAIDS恐るる　良
落鮎の斑のさびさびし串刺しに　武
　野分晴ゆく魁夷の白馬　宇
はるかなる森を浮かべる月の影　良
　せせらぎたかき旅のうたたね　智
心中のつもりの相手現れず　晴
　立ちつくしたる崖の老松　宇
濃淡の襲にかなう花の雲　智
　卒業式の瞳みなよき　武

昭和六十一年十月二十五日首
昭和六十二年三月　十日尾

《市川・市川俳諧教室―その六》

両吟『花菜漬』

甘酒・三輪のにうめん・花菜漬　高藤馬山人
　おぼろに匂ふ遍歴の月　今泉宇涯
ひらひらと夜の蝶出て遊ぶらん　馬
　千鳥足にて終電車降り　宇
お先祖に若禿のありそゞろ寒む　馬
　山のあなたに聞ゆ鹿笛　宇
新発意（ウ）の夜なべとかくに居眠りて　馬
　明日返信の文案を縷々　宇
さりげなくよそへど心ときめきて　馬
　相合傘を少しはみでる　宇
大川端暮六ッ告げる鐘の声　馬
　西に東にかはほりの舞　宇
月涼し御高師頭巾に身をやつし　馬
　王義之の書を習ひはじめる　宇
心一字新人類の忘れ物　馬
　原宿族は魚族のとなりか　宇
花吹雪都大路の賑はひに　馬
　春の茶房の名曲の会　宇
しゆる〳〵（ナウ）と火を吐き竜の昇天す　宇
　海に浮かべる蓬莱の山　馬
老松の下に縄文土器ありき　宇
　あてがはずれて嘆く地上げ師　馬
二十年ローンの利子に堪へかねて　宇
　兎小舎の浦島が夢　馬
半月が裂けてつららとなりにけり　宇
　雪降らぬ夜のモスクワの冷え　馬
澎湃と核廃絶の叫び急　宇
　原爆ドーム修復の秋　馬
アベックの歩む真上を雁わたる　宇
　野菊を摘んで今日の記念に　馬
錆鮎（ナウ）の肌うつくしき朝の膳　宇
　残こんの月の千木の片そぎ　馬
中天に祈禱の太鼓こだまして　宇
　散歩の犬の手綱ひかゆる　馬
下駄の歯にいつしか付きし花の屑　宇
　めだかの肥える寺川の溝　馬

昭和六十二年四月十五日首
昭和六十二年八月十五日尾　（文音）

《市川・市川俳諧教室―その七》

膝送り歌仙『暮春』

今泉 宇涯
鈴木 良戈
松村 武雄
藤井 晴子
毛塚 静枝
都筑 智子
武雄
晴子
武雄
宇涯
静枝
良戈
智子
晴子
宇涯
晴子
良戈
静枝

燭の灯に暮春の夜の酔えりけり
立ち去りしまま揺るる鞦韆
鳥の巣のせわしき出入見上げいて
昨日と同じ話し聞きおり
弓張りの月なり男児出生す
秋澄む窓のカーテンを開け
何(ウ)となく遠まわりして紅葉冷
六十才の後家の抵抗
待合せ場所は奥村土牛展
禁煙の札あちらこちらに
爆薬に飛行機の屋根吹飛んで
池の面をよぎる蝙蝠
曽祖父母涼しき月に訪ねんと
急ぎ爪切る夕食のあと
韓国の政局とみに逼迫し
彼岸過ぎたる硝子戸の中
ゆるき瀬にあまたつらなり花筏
ひらりひらりと蝶のわたりぬ

晴子
宇涯
静枝
晴子
宇涯
静枝
晴子
宇涯
静枝
良戈
宇涯
智子
静枝
良戈
宇涯
智子
武雄
晴子

車椅子(ナオ)にて公園の椎の下
為すべき仕事頭に去来して
突然の卒寿の翁の訃なりけり
ネクタイ替えて次のお座敷
彼らしき背中に胸のとどろきぬ
くしゃみ出るまで路地の暗がり
赫々と榾燃え陶器つくる村
莫高窟に飛天舞うなり
入りくる船の目安ののろし山
節々太き指が稲干す
月代にだらりと垂るる烏瓜
敬老の日を明日に控えて
駅のホームにひびく放送
カルシウム(ナウ)あるを盛られしこ鰯
特ダネの週刊誌すぐ売り切れし
最高裁は壕端に立つ
花ふぶき今年も沙汰のなき叙勲
この眼蛙にしばし貸さんか

昭和六十三年四月　三十日首
昭和六十三年五月二十三日尾

《伊東・伊豆芭蕉堂連句会》

歌仙『出　漁』

石渡蒼水捌

昭和五十年義仲寺無名庵改築に伴い古い建物をその儘伊東に移築、名づけて伊豆芭蕉堂とする。翌一月斉藤石叟師より俳句、連句を学び数名の会員と月一回を例会とした。五十七年石叟師に勧められ連句懇話会（現協会）に加入。同年十二月師は他界されたが今年三月より月一回の連句講座を開き結果を伊豆新聞に載せ好評。今後も続けてゆく方針。

出漁の明日へひしめく飾り船　石渡蒼水
岬はみだす初鳶の声　山老成子
頑丈な畑打つ人に道聞いて　小出文子
白木蓮の盛る旧邸　丸山嵐人
雛の宴賑ふ窓に朧月　文
空手の稽古けふはおしまひ　蒼
乱（ウ）れてるこころ鎮めて朱の鳥居　文
お下げに編んだ長き黒髪　嵐
縁談を一つ二つとふり払ひ　成
専用道は雲峰に消ゆ　文
雨を呼び風を募りしノッポビル　嵐
飲食店に客のさつぱり　蒼
月影を踏んでジョギングする漢　成
芒ヶ原でさすらひの曲　文
葬列をどこまでも追ふ虫のこゑ　嵐
胎児も同じ遺産貰へる　蒼
花片を皿にどうぞとおままごと　文
靴干してある浜はのどけし　成
噴（ナオ）煙か霞かけむる三原山　文
防災訓練やかましくなる　蒼
往来は何か知らずに走るひと　文
テレビ見ながら飯を食ぶ癖　嵐
雪催ひ賢姫事件の捜査官　文
纏ふコートの厭に膨らむ　成
独り身の旅の情は身に沁みて　文
時間をかけて頬に紅刷く　成
水に浮き海女と海士とが投げキッス　蒼
問はず語りは酒の利くころ　嵐
煌々と古城にやどる望の月　蒼
きのこご飯が湯気たててゐる　嵐
アルバイト菊人形と間違はれ（ナウ）　文
日数重ねて学業を終へ　成
買ひたての三文判の忙しく　嵐
一打で判る測量の杭　文
せせらぎの音に解るる花筏　成
風車を廻す行く春の風　嵐

昭和六十三年一月　十一日首
昭和六十三年二月二十六日尾　（文音）

《茨木・茨の会—その一》

歌仙『あせびの香』

近松寿子捌

昭和四十九年四月、京都女子大浜千代清教授より〈俳諧〉を学ぶため茨木文学同好会発足。月一度の講義を満二年、続けて「奥の細道」の精講を三年余。後半は連句の実習も。橋閒石・林空花氏の御薫陶も受く。俳人・歌人・作家等で連句を愛する人達も加え連句を楽しむ会「茨の会」結成。伝統や式目を尊重しつつ現代を詩的に詠み続けたい。

彰彦氏奈良高畑御転居を祝す

あせびの香一きわ高し高畑　近松寿子
耳を澄ませば蜜蜂の歌　川崎彰彦
和事師のさまにゆるりと海苔採りて　米満英男
吹きすぎる風髪にまつわる　天野律子
円柱の彫りに由緒と月充ちぬ　寿
夜長の時計止りたるまま　彰
金釘流賞められいそと温め酒　英
野良猫汝もしばし寛ろげ　律
この庭のもぐらは頭叩かれず　彰
藪入りに逢う固い約束　寿
交わしたる写真の中の太鼓橋　律
問わず語りの今は新妻　英
お勤めにまた出て顧客係なり　彰
だましつこなす古計算器　寿
残雪の山の端あわく昇る月　律
塩加減よき蜆汁飲む　英
友はみな定年近し花の下　彰
逃水さえも追って行きたし　寿
台秤り陽の重たさに傾ぐ午後　律
宛行扶持のマンション住まい　英
目覚めれば我も火宅の人なりき　寿
蜴座かかる密会の天　彰
ぽんのくぼに印して蒼き唇の跡　英
秘めおくべきや葬いの席　律
釋迦牟尼の裏にうごめく欲いくつ　寿
隈なき月はただ照らします　彰
菊枕縫うて疲れてつい宵寝　英
狂うがごとき紅葉眩しい　律
放射能欧州全土覆うとか　寿
東さしゆくチェーホフの馬車　彰
笄の錆びたる銀を磨き上ぐ　英
極彩の鳥いまは無口に　律
ごりがんな五輪選手の選び方　寿
春の雷だしぬけに鳴る　彰
花冷えの日の訪えば笑む水族館　英
歪む玻璃戸を染める若草　律

昭和六十三年三月二十四日首尾
（於・スペース〝文苑〟）

《茨木・茨の会―その二》

脇起歌仙　『秋　涼し』

秋涼し手毎にむけや瓜茄子　松尾　芭蕉
思ひのほかに近きひぐらし　伊藤　妙
椰(なぎ)生ふる岬の岩に月待ちて　辻岡　久子
宿は平家の裔がなりはひ　小倉　泰子
でかでかと看板の文字ぬかりなし　林　喜代子
夕立あとの高層のビル　妙
はざま(ウ)にて道説く人も人の中　久
角を曲れば飲みやびつしり　泰
春泥にのめりたる肩抱きとめ　喜
野を焼く煙消ゆるまで佇つ　妙
頬つ被り外して熱き蜆汁　久
田舎芝居もごひいきが居る　泰
月冴ゆるさんざめく席そつと抜け　喜
しはぶきこぼす総理代行　妙
キャンパスに漫画貼りゆく二人連れ　久
獅子・虎かけて優勝の夢　喜
花吹雪調教の鞭もてあます　泰
初かみなりに吾子を気づかひ　妙
川水(ナオ)のすこしきよらに梅若忌　久
放流の魚たちまち見えず　喜
後姿の似たると心ときめきて　泰
髪炎ゆるなり冬の茜に　久
賽銭が箱にとどかず三のとり　妙
痛む右腕つひ庇ふ癖　喜
泣かさるる戦ばなしや濁り酒　泰
琵琶を背負うて露の道ゆく　久
良宵のライブハウスの超満員　妙
口鬚いかすともてる実年　喜
人知れず家伝の秘薬のみつづけ　泰
ふらすこ光る錬金工房　久
七転び(ナウ)八起きももはや過ぎしこと　妙
茂りにまかす坪庭の荒れ　喜
ひととびに戻りし国は夏衣　泰
あちらこちらのコインざくざく　妙
花影にわが愛犬も眠るなり　久
うららかに行く物売りの声　喜

昭和六十年九月首
昭和六十一年二月尾　（文音）

《茨木・茨の会―その三》

胡蝶『美の山の』

近松寿子捌

美の山の霧の上なる目覚めかな　近松　寿子
まなうらに濃き昨夜の望月　横山　康子
古書店のこの匂いこそ秋ならん　久保田　堅市
積みあげられた階段の箱　理恵
誕生日おとなの声はかき消され　出来　千恵
三毛と駁(ぶち)猫順に抱かれる　寿
外(ナカ)出の帯決めかねてつむじ風　康
信号待ちに恋の告白　堅
帰り花思いのたけは記し得ず　理
ちょっぴり辛い枡酒に塩　千
もんぺとは私(モン)の足のことよ副都心　寿
舞いつつ昇る16ビート　理
縁日の仮面彼奴にさも似たる　堅
蒼沼に棲む鯰追いつめ　康
夏の月明る過ぎるな今宵のみ　千
蚊遣りの煙絡む羨しさ　寿
すくめられ子の悌を断ち切りぬ　康
西と東のドイツ国境　堅
勝鬨(ナゴリ)のうねりとなりぬバファローズ　理
寄席の幟のはたはたと鳴る　千
弁当は破天荒なる名から売れ　寿
一揆の村は川に流氷　康
初花へ人ひと人の重なりて　堅
引鴨愛(かな)し昨日より今日　理

昭和元年十月十五日首尾
（於・秩父・いこいの村・美の山）

《郡上八幡・奥美濃連句会―その一》

歌仙『旅の袖』

水野　隆捌

昭和四八年二月、郡上八幡にて連句試作、その折の「寒鴎の巻」に参加した連衆（鈴木禾火・石田幹人・水野隆ら）により結成。以後月一回程度集りを持ち、その作品は連句集「青玄抄」（昭49）に収録した。その後〈宗祇水奉納連句の会〉の中心となり、また集「満天星」（昭62）を刊行。年鑑等で水野隆捌の作品はこの名を冠すこともある。

宗祇水神祭奉納

旅の袖ぬらす宗祇の清水かな　岡本　春人
七日七夜の梅雨の川霧　横関　信生
松を抽く城の天守の聳えゐて　鈴木　春山洞
草の道とも風の道とも　工藤　繭
髪を剪る月のきれいな夜をゐらび　筒井　紅舟
くねり弾める太刀魚の銀　山地　春眠子
合宿の浜は蜻蛉の湧くごとく　土屋　実郎
眉間で止まるカンフーの拳　服部　一放
ストロボの光さし交ふ雨の寺　丹羽　由乃
マーラーを聴く朽ちし木椅子に　松村　あや
薄荷の香させて唇ふさがれし　〃
寒紅溶きし姑の想ひ出　大林　杣平
冬眠の穴にも月の遍くて　実郎
詩碑に適へる石のごろごろ　一放
右脳と左脳ふと響きあひ　繭
白魚あらふ指のこぞりて　加藤　三七子
ひとひらの花の気息の地に着けり　清水　志無子
時圭の針の青銹びて春　隆

半幅帯の今翔びさうな蝶結び　由乃
くるぶしちらと句をあつめゆく　三七子
私の名呼びしは九官鳥なりし　岡本　星女
縷紅草咲く団地十階　実郎
火のいろに形代流れつゝ染まる　三七子
忘れねばこそおもひ出さず候　繭
大土間につぶやきづめの藍の甕　一放
柿の初なり袂にて拭く　信生
実家の夜の衣かたしくちゝろ虫　古池　五十鈴
月蹴ってゆく夢の通ひ路　隆
秋の死のひそみて巴里の館の窓　小瀬　洋喜
せんぶりるゝと干しあがりたり　三七子
吸入器悪魔の笛を吹くごとく　星女
一寸法師湖渡りけむ　繭
八ちまたの石獅はなかば埋れて　〃
雲より風の光り来れる　志無子
花やさしソロモンの時過ぎて後　隆
天金の書を閉づる春暁　信生

昭和六十二年七月十八日首尾

《郡上八幡・奥美濃連句会―その二》

歌仙『清水汲む』

宗祇水神祭奉納

清水汲む片手柳を握りけり　水野　隆捌
抜けて川原はひかりある風　鈴木　禾火
石濡るゝ刻を蹄の遠のきて　横關　信生
いつか忘れし都振なれ　水野　弘子
月蒼し喰ひつく柿渋ければ　石神　堯生
井戸の奥なる星目ざむ露　高田　明夢
烏瓜熟れ停學の子がひとり　水野　隆
家系の意識今さらに無く　桑田　靖之
ぢゝばゝの豆を煮る火をさびしみて　明夢
シリウスに見る國の行末　信生
まなじりの裂けて梟首に霜満つる　日比野　安平
暁一撥雪はらむ天　靖之
移り香をはつと破れし筒袖に　隆
面をかくせ月はまだ春　明夢
編笠の裾さばき來る花車　信生
舞の輪に似てほとけのざ萌ゆ　禾火
この筋は粋人こかす千鳥掛　安平
髪結ひあぐる格子戸の陰　堯生
起床喇叭に匂へる乳房喪ひぬ　隆
若葉に染みてアマゾンの族　明夢
流鏑馬の廻り燈籠燈の入れば　信生
こむらがへりが蹴やる木履　靖之
伊勢神楽阿波の鳴戸に泣かされて　禾火
真蓙のすきまを鼬かけぬけ　明夢
佗助の花一輪の動かざり　信生
利休地獄の薄墨のそら　園部　公致
いつみきか泉を圍む草紅葉　信生
座頭の杖のさぐる秋風　堯生
くろぐろと月は屋竝を濡らし來る　禾火
鍵盤弾く幻妖の群れ　明夢
海に向く牧師の家の窓あけて　信生
坂　蝨よぎる村雨　靖之
世を経るも白壁白きまゝ暮れむ　隆
常友夢外夜霞の中　禾火
詩心滅びむか花鳥塚花浴びて　明夢
青永劫に湧く時の底　隆

昭和五十年から郡上八幡の宗祇水に因んだ水神祭（宗祇忌・八月二十日）に連俳を奉納することとなり、第一回は同年八月二日に半歌仙、第二回は続きの半歌仙を翌年七月二十日に興行、それぞれ奉納した。二年がかりの一巻である。

《郡上八幡・奥美濃連句会―その三》

歌仙『春の雲』

水野　隆捌

断ちがたきおもひいくへの春の雲　磯村　英樹
花占ひの指のたそがれ　水野　進子
冴返る玻璃のひとつは光満ち　水野　隆
水音のみの地図になき村　常住　郷太郎
耳も眸も月に羞しくさやぎけり　須永　朝彦
滝に洗はれ輿入の聟　英樹
祝ぎうたもつるべおとしに遠ざかり　朝彦
白磁の瓶の底をゆく翳　郷太郎
氷に注ぐジンの向ふの夏が終る　進子
血の一滴の泌む懈の卓　隆
秘めがたきマタギの裔よ銃磨げば　英樹
雪はきさらぎおもかげも零る　朝彦
枝わたる陽に幽かなる声ありて　水野　弘子
迷ひのマリヤまやかしの摩耶　英樹
真処女の挿頭きのふの風に揺れ　朝彦
おぼろおぼろの裾濡るるまゝ　弘子
花静か見知らぬ夜へ窓展く　進子
鐘に答ふる鐘の宵闇　隆
なおだんまりを寄席で聴きつゝ円朝忌　郷太郎
匂ひ清しもうす汗の肌　英樹
樹々暮れて浴衣の藍をたゝみをり　進子
ハンケチほどの海を振る町　隆
一点に日を据えて霧透きにけり　秋山　未踏
いまし生れたるギヤマンの蝶　郷太郎
ざんぼあと長崎渚なぎの波　英樹
髪きらきらと春の帆走　進子
花桃の其処から山は立ちあがる　未踏
信濃の旅はわが魂鎮め　郷太郎
世の果の満月を掌に受くるなり　隆
排きすてがたきちゝはゝの水　英樹
田の闇にまじる遙けき人のかげ　進子
腹に触れたるふところの手は　未踏
負け角力思案の髻揺れてゐて　隆
草萌ほどに莚しめるも　進子
巡礼の頬に降る花のさやる朝　弘子
なべてうすくれなゐのすぎゆき　朝彦

昭和四十九年四月（於・東京渋谷「一番の上」）

《松山・小野連句会》

歌仙『にいにい蟬』

渡部伸居捌

昭和六二年六月錦心会より分離独立。松山市東端小野地区の同好者にて結成。歌人小野小町の伝説に基づく地区名を冠した連句会。毎月第四月曜午後半日。会場は地区公民館。形式ルールよりも付味を重視。質素で優雅な知的趣味でありたい。頭脳の老化防止の一助ともしたい。

にいにい蟬真昼の時間とどめけり　渡部伸居
週刊誌見つ倚れる籐椅子　重松冬楊
冷奴口ざはり良きもてなしに　佐伯飛鳥
ハウス並べる過疎の里なる　奥村百合子
鉾杉の峯ほのとして月かかげ　中須賀畦月
秋刀魚やきゐる煙軒這ふ　倉本坦石
虫の声もとめもとめて忍び足　野中史香
濡れ羽の髪に黄楊の櫛置き　居
美人絵の艶めく切手貼られたる　楊
思ひもかけぬ人よりの文　飛
庄屋跡大スーパーを開店し　百
長距離トラック昼夜分たず　月
霜置ける広野厳しき月の影　石
鋤焼鍋に集ふはらから　香
自由化の波に農政論じつつ　居
休耕田の殖ゆる山あひ　楊
名刹に枝垂れ古木の花を賞で　飛
ネッカチーフを東風に靡かす　百
どこからか切山椒の香座敷まで　居
孫の寄り来て声の賑はふ　飛
新調の自動車手入れ行き届き　楊
行燈型の電燈もよし　居
夏芝居お嬢吉三に酔ひ痴れて　飛
ビールの栓を吹き飛ばす泡　楊
村雨に軒を借りしが縁となり　居
いつか心に棲みつきし人　飛
相逢ふて言なきときの双つの瞳　楊
降つて湧いたる転勤の沙汰　居
皎々と鎮守の杜を照らす月　飛
戦止めよと祈れ秋風　楊
やゝ寒の橋渡り来る脛細き　居
外国びとも長寿うらやむ　飛
古代史の文物蔵に眠りゐて　楊
駄桶ことりと秣食ふ馬　居
雲分けて旭光はしる山の花　楊
紫の溶け春の川逝く　飛

平成元年七月二十五日首
平成元年八月二十二日尾（於・松山市小野公民館）

《松山・おぼろ連句会》

歌仙『明　易』

鈴木春山洞捌

昭和六一年二月結成。黄鳥倶楽部（愛媛県立高校長ＯＢ会）のメンバーを連衆に、代表者・長井南茶亭。会名は久保田万太郎の「さくさくと砂ふみわくるおぼろかな」から採集命名。例会は毎月最終木曜日午后一時から。会場・松山市大街道甘党喫茶夢茶。モットー「和気靄々楽しく」。花前の水割り一杯も楽しい。老いて益々旺んである。

明易や川遡る膨れ潮　鈴木春山洞
鳰の浮巣の揺るる芦原　浅木巨牛
眠る児の夢に乳吸ふ唇をして　長井南茶亭
低く謡の声の洩れ来る　山本青芝
大空に暈する月のかかりけり　高橋乱水
見送りに立つ街の霧濃く　梶野浩楽
北国の友と新酒を酌み交はし　牛
移り香残る衣ヌの艶めき　洞
意識せぬままに憧れ深まりて　芝
鳴咽の中を「ひばり」の柩　亭
真つ直ぐの道果てしなきバスの旅　楽
ストーヴ囲み鰯焼くなり　水
寒月を温泉の湯槽に孤り眺る　牛
粛清を避け亡命の女ト　亭
峠路西に東に岐れ路　水
春光あふる里に住み馴れ　芝
花片の部屋に舞ひ込む昼下り　洞
石鎚遠く霞たなびく　楽
松蟬の鳴き連る林通り抜け　洞
飛び石伝ひ導かれたる　芝
廃屋に転がつてゐる一升瓶　水
発破とどろく過疎の山村　牛
帰省子は重き荷物を手に提げて　楽
汗拭く間なく馬車に乗りけり　亭
風呂上り着るもそこそこ飲みに出で　芝
うるめる眼にみつめられたる　洞
あらはなる黒きドレスの肩を抱き　牛
ウィスキーサワーほろにがき味　水
漣の水面に月の乱れたり　亭
終戦記念日また巡り来て　楽
猪のこと噂もちきり町狭く　洞
甘いマスクで受けに受けたる　芝
妻籠宿ク囲炉火燃えてとろとろと　水
赤い頭巾で祝ふ還暦　牛
花明り嫁ぐ娘と散歩する　楽
揚雲雀啼く野辺果てしなく　亭

平成元年六月二十八日首尾
（於・松山市大街道夢茶）

《神戸・海市の会》

歌仙『天の河』

鈴木　漠捌

①連句に関心を抱いてきた鈴木漠（現代詩）永田圭介（エッセイ）二人だけの会。
②名称は、連句が虚構性の強い様式つまり言葉の蜃気楼であろうとする共通認識に由来。
③それぞれの知友詩友を折々のゲストに迎えて、文音を軸に随時活動する。
④共同制作詩、座の文芸である以上に、活字表現（ケイボクラフィ）としての詩、という点を重視している。

天の河星への道を問はれたり　永田　圭介　圭
有明ちかく匂ふ麺麭（パン）種　鈴木　漠　漠
笛を手に秋祭待つ風情にて　三木　英治　英
声の去り行くゆるき山坂　圭
聖なる火捧げて走者伴走者　漠
髯の愁ひに夏風あをし　英
麦酒（ウ）あふりなほ渇きたるものありや　圭
エーゲ海ゆけ恋こがれ人　漠
貞節は深き潮の香に出でて　英
語り伝へよ夕映の雲　漠
椅子に本置かれて久し月皎々　圭
鏡の奥に虫すだくなり　英
名優のかのおもかげは白露の　漠
かねの音ひびき乱れ駒うつ　圭
みをつくし八百八橋橋尽し　英
束石めくや瀬戸の嶋々　漠
浮きしづみ霞む花べにほろ苦く　圭
不惑越ゆると嚙む蕗のたう　英

かげろふにいづれか生の道しるべ（ナオ）　圭
草原はるか民の興亡　漠
浪漫的（ロマネスク）なる歴史学教授あり　英
炉の火の精と憩ふひとときり　圭
陶房ははや風花の舞ひ初めて　漠
幽玄三昧凝り性に泣く　英
耳朶透るいとあえかなる歌声に　圭
日々に移ろふ人の世の恋　漠
原宿に両性具有者（アンドロギュヌス）懐妊す　英
柘榴にひそむ紅き世界苦　〃
月負ひて鉄路鋭く闇を突く　圭
穂波の中に出会ふ野仏　漠
酔（ナウ）ひて笑む桃源郷に友はゐて　英
謡ふがごとく電話帳読み　圭
魚河岸の入日に犬の影長く　漠
蕩児の帰館まづは祝着　英
調へし髪に花散る冠木門　圭
袴凜々しき今朝の卒業　漠

昭和六十三年七月首
昭和六十三年九月尾　（文音）

《浜松・佳菊会―その一》

脇起二十四調『山中や』

森月鼠捌

山中や菊は手折らじ湯の匂ひ　松尾芭蕉
青空広く鵙の一声　袴田花扇
三更の月を宗匠筆にして　高林柳子
和気藹々と抹茶盆点　北村佳子
雪の道助け労る姉妹　酒井一萩
年下ながらかしづきて行く　鈴木照月
漸くに膝枕さす仲となり　生駒池月
予定日待たでお喜びする　川崎恵月
花万朶化粧直しの出世城　萩
桜鯛の尾結ぶ水引　佳
梵鐘の永き余韻の寂し春　扇
島から島へ渡るロープウェー　柳

売上税反対デモに子連れして　浅風都月
本音立前其の内に吐く　沢田月舟
萌黄色袍衣の禰宜や信徒訪ふ　沢田千恵
眞榊立てゝ祝詞厳粛　笠原月笠
木登りのパンダ二世風涼し　久米風月
玄関のベル押して押売　柳
出張の夫居るやに見せかけて　照
垣根結はずに隣との仲　恵
尺八も首振り三年猛修業　扇
エレクトロンの技も上達　佳
咲き満ちし花に蝶鳥集ひ来て　森月鼠
戯れ交ふかほり春の酣　執筆

昭和六十二年三月一日首尾（於・高林柳子亭）

《浜松・佳菊会―その二》

二十四調『暖　冬』

森　月鼠捌

暖冬や老の漫歩は遊歩道　森　月鼠
日毎日毎に伸びし下萌　袴田　耕雨
就職も決まり笑顔の孫の来て　川崎　恵月
会社の写真春の荷造り　鈴木　照月
大型車続く高速朧月　恵
陰膳据ゑて無事祈るらし　浅風　都月
愛情の篭るビールを酌み交す　沢田　千恵
売上税を野党鉾とし　中村　残月
宰相は妥協の妙技振ふらん　久米　風月
ざざんざ織りは文化財なり　影山　月影
生涯をかけし此の道花と咲き　沢田　月舟
囀り交し山々の笑み　細田　花水

初孫に父母の贈らる雛御殿　小池　ふゆ子
竹の中より生るかぐや姫　鈴木　千代
白雲の輿に逢ふ瀬もかき消され　生駒　池月
野太夫振りに不倫止むなし　西川　月聰
遠雷はおどろ〳〵に響きをり　石原　清花
エーズ防除に出し法案　笠原　月笠
月の餅卯年の空にお芽出度く　照
鈴蟋蟀の唄を肴に　三輪　たつ
今場所が正念場なり水修業　高林　眞月
練磨の巧なさむ優勝　飯尾　静波
降る程に花嫁候補有卦の春　酒井　一萩
麗に伊勢へハネムーンする　執筆

昭和六十二年二月二十日首尾（於・白寿荘）

《浜松・佳菊会―その三》

十八公　『明　月』

森　月鼠捌

明月や空一面のちぎれ雲　森　月鼠
芒団子を供ふ椽側　鈴木　照月
恙なく卒寿を越して爽やかに　川崎　恵月
白髪しごき呵々大笑す　岡本　星女
見馴れたる方堂の書の佳菊庵　岡本　春人
番夏蝶群れて戯る　生駒　池月
祭笛郷の小町の勢揃ひ　鼠
ニューリーダーは外語ペラペラ　照
経済の大国として今日の月　恵
七洋の波鎮むこの秋　池
ウペルシャ湾原油輸送を如何に守　沢田　月舟
カー動かずば一日暮らせぬ　久米　風月
久方に花の隧道を二人連れ　舟
昔を偲ぶ轉の宿　浅風　都月
麗かに主恋ふ踊り静や静　恵
金色堂に在す祖師仏　照
晴れ曇り降りに間に合ふ旅の笠　池
世の太平に感激の身や　〃

昭和六十二年十月十三日首尾

《京都・かすみ会》

①設立の年　昭和五十七年一月
②名称の由来　三人の姓と名にすみがあり残り一人の香をつけてかすみ会と命名
③状況　皆八十以上の老女ですので気楽に楽しんでやっています

歌仙『こま犬の』

こま犬の足まだ濡れぬ春の雨　森島　香代子
ちらりほらりと梅を見る人　隅田　啓子
漁りの水温みけり鷺遠く　西村　すみ子
生簀の竹のふるび破れる　長江　澄
新築の祝を兼ねて月の宴　啓
爽かな気の満ち溢れたり　香
叢芒野ざらし紀行の道の辺に　澄
一円足して葉書出す世に　す
さりげなく親に知らせぬ筆の跡　香
電話離れず呼出しを待つ　啓
若葉して山門鐘楼藁葺に　す
朝の薄月足元に蛇　澄
プロ野球今日の辻占凶と出る　啓
八十媼は阪神びいき　香
新幹線ひかりは神戸止まらずに　澄
女ばかりの旅の楽しさ　す
花賞でつはしやぎつ探す土産物　香
留守居ばかりに日の永きかな　啓
春宵の祇園小路の石畳　す
首相の浮気週刊誌沙汰　澄
蓄妾を甲斐性者など誰が言ひし　啓
浮世離れて朝寺散歩　香
裏山の狸親子に撒餌する　澄
大玻璃戸越し雪の富士見る　す
病得て人生観の変りけり　香
酒の肴につまむ羊羹　啓
機械にて字を書く時代書を習ふ　す
変体仮名の美しき線　澄
松の枝透かし半月金色に　香
露置きそめし野路を行くなり　啓
稲架けの見ゆるわたりや友の家　澄
小学校のクラス会待つ　す
由緒ある門を残して鉄筋に　啓
室の中ではジャズのステップ　香
慶長の醍醐の花見さぞかしと　す
土人形の飾る春駒　澄

平成元年　二月二十四日首
平成元年十一月二十五日尾　（文音）

《東予・風の巷》

歌仙『葭切』

鈴木春山洞捌

昭和五九年一月創立。会場・桐瑠庵。毎月例会・第三月曜日午后一時から。代表者・守口津夜子。代表者が渋柿俳人であるので師系は松根東洋城・阿片瓢郎・鈴木春山洞を掲げ直接指導を春山洞先生に受けている。会名は渋柿前主宰徳永山冬子先生の御句「注連貰ひ風の巷を通りけり」から採集命名した。連衆に渋柿女流俳人多数を擁している。

葭切や汐さしくれば沈む階　守口　津夜子　夜
遡る芥揺るゝ萍（うきくさ）　鈴木　春山洞　玄
玻璃皿に白玉盛られ涼しげに　田中　一火女　洞
友達ともに戻り来るなり　〃　美
背ナの子の「月が欲しい」とべそをかき　三宅　品女　美
萩乱れ咲き露地を狭ばめし　藤村　貴美　玄
ウ鼻欠けの微笑（えまひ）仏ヶに鹿寄りて　武田　玄女　美
ついだまされし主の声色　芥川　良美　洞
四畳半手鍋提げても連れ添はん　森　風女　洞
全て忘るゝ純情の世よ　夜
馬車とめし村のはづれのなんでも屋　火
角巻女雪に消えゆく　品
月冴ゆる窓辺に群るゝエスニック　貴
庭の一隅高き築山　玄
信楽のとぼけ顔なる土狸　美
目路をはるかに鮴を挿しゐる　風
招魂の花の祭にまねかれて　夜
菜種梅雨にもなる昼下り　洞
ナオ子の飼へる盥の蝌蚪に肢が出て　夜
山下清旅に出でたつ　玄
道づれと臍の向くまゝ雲ながれ　洞
辻の地蔵の前掛は赤　美
五月場所ふれの太鼓のひゞきけり　玄
緑蔭に訪ふ移動図書館　美
さりげなく置かれし紙の走り書き　洞
忍び逢ふ時刻々せまり　夜
口づけもオフィスラブなる涙味　火
白兎海岸ドライヴをする　池田　澄子　子
断崖を離れし月の革（あら）たまり　玄
ひつそり浸る湯舟秋寂び　貴
ナウ軒を打つ木の実の音を聞きゐたる　玄
送電線に鴉止まれり　貴
醫（くす）者（し）乗る自転車曲るパン屋角　玄
弁当箱に詰めるおむすび　夜
花大樹忘れ瓢のかけらるる　洞
古びし雛の息吹き聞こゆる　藤岡　信子

平成元年六月二十五日首尾（於・桐瑠庵）

《春日部・花扇会》

歌仙『曲馬団』

昌木　良捌

①萬緑・狩の俳人五名で、昭和61年7月発足。
②歌仙のみなので花扇会と漸定的に付けたのがそのまま会名。
③三ケ月に一回、定事四～五名出席、巡送りで和気藹々に。
④楽しく、気楽に。

鯖雲や駅の跡地に曲馬団　昌木　良
高速道の上に月の出　岬　里程
斜ノ畑いちめん蕎麦の花咲いて　宮　県人
二日まとめて新聞の来る　来　拓夫
土用波越え難民の船いくつ　拓
揃ひ浴衣の娘三人　中　米夫
競輪の予想いろいろ喫茶店　里
蘊蓄ばかり吐いて口説かず　県
手八丁口八丁の色事師　良
ひそかに成りし都銀合併　里
特上の象牙の判を頼みける　米
また棒に振る大臣の椅子　県
まあなんもねえが見ろやと寒の月　米
明日は狸の罠を仕掛けむ　良
トランプのばばを引いたと大騒ぎ　里
葡萄酒飲みに空港へ急く　県
花筏ぽかつと割つて亀浮かぶ　拓
お神楽殿に白蝶の舞ひ　里
角笛を高らかに吹き牧開き　良
ベルリンの壁ハンマーで割る　拓
そこここの道路工事に異邦人　県
一羽につられ鳩の群れ翔び　拓
聖火台さながらアサヒビヤホール　里
東京湾へ涼み舟発つ　良
遠ノの灯は木更津あたり汐どまり　県
藪から棒に娘出戻る　拓
ラブレターはさみし本を探しゐて　里
ひらひら落ちる木の葉いちまい　良
名月の城趾石垣のみ残し　県
太郎次郎と柿の大成り　拓
神ノの留守なれど社を掃き清め　里
ひとり息子の先ざきのこと　良
鳶の舞ふこの霊園が気に入つて　県
日当りばかり良くてあばら家　拓
来し方も行く方もなほ花吹雪　里
子猫遊ばす山寺の縁　米

平成元年九月二日首
平成元年十一月四日尾

《金沢・金石公民館俳諧研究会》

脇起歌仙『夏氷』

江森峰雲捌

昭和五六年三月、故清水九璋翁により創始、同時に連句懇話会に入会。明治末期結成の金風会創始者藏月明師に大正三年九璋翁は俳諧の指導を受けられ、故清水瓢左・故森月鼠・故沢田冠山等金石来遊の俳諧著名人は多い。峰雲は故九璋翁に師事。公民館俳句教室で同好者が俳諧研究を目的で集る。現在会員二十六名、第七回国民文化祭にむけて猛進中。

箸つけていたゞかせけり夏氷　故桜井梅室
棚に並びし朝顔の鉢　桶千代子
海渡る渋き青磁に魅せられて　八田豊子
濃茶を運ぶ裾のなまめき　玉井富子
松風を聞くと覗けり月の眉　三浦竜居堂
山の出湯に猿も顔出し　松本苔花
色鳥（ウ）の行くてをよぎる杣の居て　大崎光子
古き手紙を胸に抱きしめ　蓮池かつみ
映画観てそっと握つた手の温さ　茜文子
毛蟹うごめくおが屑の函　江森峰雲
道産子も一時間の飛機の旅　村上富美
一家揃ひて話はづみぬ　藏たか子
潮騒を窓聞く浜に凍てし月　車谷とみ子
テレビ見ながら炬燵入る吾　梅原千重子
消費税は高齢福祉と言ふ先生　達田幸枝
またまた変る総理総裁　神尾うしお
花満開醍醐の宴偲ぶ宵　畝愛子
春雨煙る寺に琴の音　番匠敏子

ヒヤシンス（ナオ）医師のカルテの文字細し　夏岸清枝
白衣の天使と今もはやされ　豊
村はしのポックリ地蔵拝み来る　代
「いたこ」から聞く母の「口よせ」　竜
こはきもの見たさに連れだつ夏芝居　富
牡丹灯籠カランコロンと　美
「しんかい」の六千五百海の底　花
小指からます土堤の風筋　清
いつまでも昔の恋が忘られず　重
やうやく馴れた里言葉にて　か
月今宵思出多き母のこと　た
コスモス揺れる辻の野仏　文
虫（ナウ）時雨家の小窓も灯り消え　敏
更けゆくまゝに読書三昧　愛
飛行機で東京よりの俳諧師　お
ベレー帽子で銭五像見る　幸
花莚草餅食べて史を語る　と
庭もうらゝに渋茶飲む老　雲

平成元年七月　三日首
平成元年九月二十七日尾　（於・金石公民館）

《日立・かびれ連句会―その一》

歌仙『竹山』

小松崎爽青捌

昭和四十七年かびれ誌上での連句教室を小松崎爽青捌により文音で始む。同時に興味を持つ人が小グループで歌仙を巻くようになった。俳誌「かびれ」に拠るので「かびれ連句会」と称す。誌上の連句教室と東京同人会グループは爽青捌。日立在住グループは西幾多捌。他に、隨意三・四人で歌仙を巻いている。「付合い」というように親睦がモットー。

竹山に秋の来てゐる風の色　小松崎　爽青
金糸のごとく懸る夕月　西　幾多
露寒の貝を洗ひし門端にて　きくち　つねこ
はめ掻く音の気になつてをり　爽青
いくたびも目を覚しける旅枕　守田　碧
飴ころころと舌にまろばす　新井　佳津子
天気図は西の方から晴れとなり　木崎　節子
明日逢ふ衿を附け替へてゐる　つねこ
連衆とは心を許す仲にして　幾多
胸にふれゆく源氏蛍よ　つねこ
ゆくりなく近江の里を通りける　爽青
葡萄を珠とふふみをるなり　田川　節代
月よさの紅殻格子濡るるらん　つねこ
木屋町あたり下駄の音澄む　幾多
墨染がいつか昵みしかなしさに　〃
ちびりちびりと一合の酒　節子
谷越しに花の盛りをめでにけり　碧
雲雀の声が足下に湧く　佳津子

藍甕の深きねむりの昼霞　つねこ
草に身を投げ泣きくづれたる　節代
古里を捨てる覚悟の舟出にて　つねこ
書割の松色も鮮か　節子
掛小屋の幕を煽りて更けまさり　幾多
火の用心は語尾長く曳く　佳津子
あすといふ日が恃みなる独住　爽青
個人負担の増えし医療費　節子
姥捨ての昔を今に思ひみて　幾多
白寿越えねばならぬ気構　節子
迫上る月に怒涛の光るらん　節代
新走酌む赤き大盃　幾多
やや寒く鄙の味なる朴葉味噌　爽青
円空仏に名残り惜むか　佳津子
買ひ足して始末におへぬ土産物　碧
発車に間ある単線の駅　佳津子
青毛てふ一樹の花の咲き溢れ　爽青
夢のごとくに雪霞む山　佳津子

昭和五十九年九月十三日満尾（平潟港「柳屋」にて）

《日立・かびれ連句会―その二》

歌仙『箱根路』

小松崎爽青捌

箱根路を越えし疲れや朴の花　小松崎 爽青
新茶の湯気に眉のあをめる　新井 佳津子
脛長き弟を兄と見違うて　西 幾多
電話の声のしばし間を置く　石田 栄子
旅行記を綴る手許へ月流れ　羽場 桂子
おもむろに振る馬追のひげ　幾多
ゆくりなく古里の秋見つけたり　爽青
幼なじみの噂あれこれ　栄子
妬しき思ひばかりが募りきて　〃
こけしに目鼻よう似たる顔　桂子
竹山の風さやさやと更けまさり　幾多
尾鰭をぴんと魚拓匂へる　栄子
赤坂のあたり五日の月いろみ　福田 安子
萩の下枝の雫こぼすか　佳津子
うそ寒う犬に踵を嗅がれゐて　〃
連衆の卓に茶を替へて出す　幾多
繽紛と花の吹雪を頭より浴び　田川 節代
遅日の歌仙やつと半に　爽青
おぼろ夜の夢にあらざる弟の死　中村 奈美子
メトロ出るより雲の眩しき　節代
耳うちにときめく胸を抑へつつ　栄子
アイドル歌手が嫁に行くとふ　安子
雀来て朝より軒のかしましく　木崎 節子
ふと思ひつく痩せる献立　栄子
円相場しばらく高値つづきたる　安子
罠仕掛けしは何処の誰ぞも　栄子
探鳥に団鑑を持ちて出づるらん　桂子
両の手の荷がきしきしと鳴る　節子
早ばやと月の供物が盗まれて　爽青
芒に跳びし影は狐か　幾多
時じくの秋の風鈴さみしけれ　佳津子
錆びゆく水に寺昏れてゆく　節代
里とほく離れ住みたる歳月を　山本 つや子
溜めし一円どさと募金に　幾多
褒賞を言祝がれゐる花の宴　爽青
舞ひ昇りては耀る双蝶　奈美子

昭和六十年五月十五日満尾

（奥湯河原「うおしづ」にて）

《日立・かびれ連句会―その三》

歌仙『鉦　叩』

小松崎爽青捌

オ指に来て鳴くはかなしも鉦叩　小松崎　爽青
軒端を洩るるあをき月影　新井　佳津子
柿熟す借家住ひの気楽さに　石田　栄子
眉目のよしあし雀にもあり　小出　民子
はやばやと麻のスーツを身にまとひ　木崎　節子
漣　光　る　河　口　広　き　よ　田川　節代
ウ爪弾きのトレモロ風に運ばれて　引地　冬樹
鬢をかき上ぐ仕種いとしき　飯泉　葉子
葛飾に真間の手児奈の噺旧り　上田　渓水
念　佛　講　の　大　き　ぽ　た　餅　節代
鼻眼鏡ずり落ちさうな居眠りに　矢島　艶子
家鴨の列が尻振って行く　中村　奈美子
藁屋根にまどかな月の昇り来て　佳津子
種　瓢　下　げ　天　下　論　ず　る　冬樹
蛇穴に入るを忘れしうかつさよ　葉子
首を洗うて辞令待つなり　福田　安子
降りしきる花に埋もる小盃　渓水
熊野がなさけの春や惜しけれ　節代

ナオおぼろ夜の濡れてまたたく一つ灯に　佳津子
髭もなごみて幼な顔なる　冬樹
猫の餌の魚の骨をとりのぞき　栄子
一口減らす寺の御寄進　民子
割られたる西瓜真赤に飛び散りて　節代
宵越しの銭持たぬ江戸ッ子　安子
二つ目の枕言葉をまた違へ　渓水
天井向いて口笛を吹く　冬樹
よれよれのネクタイをして往診医　渡辺　芳子
素知らぬ兒の老いし番犬　佳津子
月あげて軒が触れ合ふ下町に　安子
菊　人　形　は　お　染　久　松　葉子
ナウうそ寒う唐桟の衿かき合はせ　艶子
世渡りうまき若い美容師　青山　倫子
地上げ屋はしわがれ声の猪首にて　冬樹
口あたりよきお茶うけの菓子　佳津子
古里の花にも名残り惜しまるる　〃
雪霞してたたなはる山　爽青

昭和六十三年四月三日満尾

《日立・かびれ連句会―その四》

歌仙『飛ぶ雲』

西　幾多捌

飛ぶ雲に矢をなす雨の今年竹　小松崎　爽青
　代掻いて来し馬の荒息　沢田　冨美
いそいそと俳句の旅に出づるらん　鈴木　かつ
　車の玻璃をみがき抜きたる　伊藤　延子
走りゆく月の砂浜親子連れ　黒澤　朝子
　峰はろばろと雁渡るなり　滑川　美智子
栗飯(ウ)を手皿に貰ふよき日和　鈴木　美代
　見合ひ写真をいつも鞄に　延子
娘はすでにデート重ねてをるらしく　朝子
　越冬隊に選ばれしてふ　美智子
いつよりか髭濃きことを自慢して　冨美
　看板描きの筆の早さよ　延子
月餅で祝ふ異国の月の宴　美代
　はづめる声の背戸に爽やか　朝子
秋晴れに児の手をひきて小買物　美智子
　垣根に沿へる流れちよろちよろ　美代
城跡の眺望展け花万朶　かつ
　そよかぜに乗せしやぼん玉吹く　冨美
父親(ナオ)がまんまとかかる四月馬鹿　美代
　涙にじませ遺言を書く　美智子
潮の香に肩を並べて影を曳き　〃
　ささやきに似し相聞歌なり　美代
後宮の欄間の彫の細々と　幾多
　石に乗りたる亀の動かず　朝子
相談を受けて日暮れし地主さま　美代
　選挙に出ると噂ちらほら　朝子
運動を兼ねて社の庭を掃く　延子
　留守番役の犬に吠えられ　美智子
月影の冴ゆる門辺に人送り　冨美
　朱の哀しきマフラーの裏　美智子
この頃(ナウ)はミニスカートが流行り出し　かつ
　よく売れている自然食品　小畑　恵子
鶴のごと痩せて顔色つややかに　美代
　お手玉をとる手付あざやか　延子
はじまりし風流物に花が散り　幾多
　伸びきる象の鼻の長閑けき　美智子

昭和六十三年四月十九日満尾

《日立・かびれ連句会—その五》

歌仙『鮎落ちて』

小松崎爽青捌

鮎落ちて風の錆びゆく水の音　小松崎　爽青
月にただよふ杣の口笛　上田　渓水
新走りあふれるほどに注ぐらん　羽場　桂子
床へ掛けたる大観の軸　松川　五十五
寒山と拾得何を高笑ふ　引地　冬樹
魚籠を逃れし鯰一匹　新井　佳津子
髭張つて鬼らちもなき赤ら貌　爽青
大津絵節は声の艶やか　西　幾多
百円の恋占ひが吉と出て　佳津子
仮初ごとにあらぬきぬぎぬ　爽青
かしこまり遅参の背を丸めをり　冬樹
お膳の陰へ猫控へたる　幾多
月の夜の夫を待つ間の盗み酒　石渡　耶司
目がすわりをる蟷螂の斧　冬樹
明日売らむ当年の駒のうそ寒う　飯泉　葉子
小芥子の首を欲かすつれづれ　林　乃婦子
旅の夜の花のふぶきにぬれるらん　渓水
網の蛤つぶやいてゐる　葉子

なおうらうらと一猪口ながら利いて来て　小畑　恵子
音なく崩る尉の白さよ　田川　節代
お手打の身を永らへて睦みをり　冬樹
心こめたる写経千枚　佳津子
忍従といふ歳々を生きし母　爽青
結城紬が織上りたる　幾多
濡縁に来ては雀の嬌え鳴き　耶司
馴染の客の淡き掛香　渓水
さりげなき言葉に心ときめきて　五十五
シェープアップに励むこの頃　伊藤　延子
新宿は月より高きビルの群　冬樹
望郷の唄霧に吸はるる　節代
なからすみがそろそろ届く季となり　中村　奈美子
頬杖ついてひねる付け合ひ　渓水
雨樋の今日も朝よりひびきたち　幾多
部屋いつぱいに小切拡げる　小平　裕子
うからどち倶して花見のお大尽　幾多
高舞ふ鳶の長閑なる笛　奈美子

昭和六十三年十一月三日満尾

《伊那・からむし庵連句会》

歌仙『鬼やんま』

宮脇昌三捌

本来は、連句界の耆宿であった根津芦丈翁の庵号をとり名づけたものである。翁は昭和四十三年二月、九十五歳の高齢で永逝せられ、そのあと当伊那地区の連句活動は休止状態であったのを、昭和六十一年九月、宮脇昌三が帰郷してから、芦丈翁の孫女たる芙紗（房子）と相謀り、芦丈翁の遺志を嗣ぐべく始めたものである。現在会員十五名。

ダム渡るまなこ翡翠の鬼やんま　戸田　恵美子
秋風に乗るパラグライダー　代田　敬一郎
画架たたみ仰ぐ夕月雲引きて　堀田　澄子
旅芸人の笑ひ満つ宿　笠松　道代
軒氷柱折りて入り来る人のあり　倉沢　友子
咳き込みしあとくさめ幾度も　根津　芙紗
腹（ウ）底に響く神園（みその）の木遣節　道
見直し税の行方案ずる　恵
サッチャーの弁舌巧みサマドレス　春日　愚良子
殿下の恋は青信号に　友
ひそやかに地球を潰す酸性雨　芙
燈明あげて二十二夜様　澄
ひやひやと涼けの立ちて食進む　愚
鹿牧場を守るチョビ髭　敬
谷一つ渡り届きぬ祭笛　友
ちらほら町の灯がともり初む　道
花の下ちんまりとゐる核家族　友
風船放ちて挙ぐる歓声　愚
のんびりと糸を垂らして鱒（ナオ）を釣る　芙
貌さまざまに野良猫の群れ　道
米めぐり本音建前入り混り　宮脇　昌三
なほいかめしきベルリンの壁　芙
永劫に飛天は天衣ひるがへし　〃
カップル好む橋の欄干（おばしま）　道
制服の第二ボタンを渡されて　芙
上から融ける霜の玻璃窓　敬
半床に白隠の書を掛けてみる　〃
利久ブームにわく映画館　芙
月上げて侘びしき里となりにけり　道
老いの身ながら茸山主　敬
グランド（ナウ）で仰ぐ雁群海越えむ　芙
ポニーが目玉特殊学級　〃
善光寺如来は深き秘仏にて　敬
妙高山を遙か彼方に　道
花の塵流るる水のささ濁り　敬
小屋の古巣をいとほしみつつ　昌

平成元年九月二十六日首
平成元年十月三十一日尾　（於・からむし庵）

《高知・夏炉の会―その一》

歌仙『爽かに』

高橋柿花捌

①俳誌夏炉の有志二十名にて昭和三十年より〈連句・夏炉の会〉を設立。
②芭蕉の〈俳諧は夏炉冬扇の如し〉に寄る。
③月二回の春隣句会、十五句会後に連句勉強会及び柿花指導による連句実作を行う。
④連句を実践することにより、句作に発想の豊かさを拡大することを念願する。

爽かに言葉飾らぬ人とあり　高橋柿花
月を横切り飛べる五位鷺　松林朝蒼
露けさの卓のワインの封切つて　池田和子
庭前に来てかしこまる秘書　岩村牙童
財閥の血累多く集ひ来る　安藤哲夫
雪降りつもる古き湯の町　岡本歩城
バス路線廃止の噂しきりなる　上田天仰
家業を継げと連れ戻されし　木戸節童
夕されば風の音にも涙ぐみ　喜多村美枝
色褪せゆける数々の文　武内南歩
顧みて戦中戦后矢の如し　岡田一枝
広々かかり川尻の橋　山本呆斎
客居らぬ電車が走り月寒し　小笠原裕子
火を落したるおでん屋を出る　花野一花
明日から他人のものとなる畑　内原陽子
過疎の歯止めの企業進出　千頭秋子
花の寺より稚児衆の寄附集め　前田欣一
蛇穴を出てあたりうかがふ　柿花童節
陽炎に遁げ口上のロス疑惑　花野一花
航空券を胸ポケットに　蒼童
重ねての公定歩合下るらし　仰
ハイテクロボット人を殺めり　枝
山積の書類を飛ばす扇風機　和子
祭浴衣を娘が見せに来て　内原陽子
黒髪の見ゆる几帳の裾の端　仰
長谷川一夫恋のかけひき　柿花童
痛くない肚を探らることは嫌　陽子
舟漕ぎ出して鬱を散ずる　仰
中の島マンション建ちし月の土堤　田村三翠
芒ケ原に殺陣のはじまる　和子
今昔志士の別墅の秋の風　千頭秋子
NTTの株の値上り　前田欣一
子に残すものなにもなし悔もなし　柿花童
空の酒壜ならべ楽しむ
花吹雪夜昼となき奥道後
百千鳥とてふりあふぐなり

昭和五十九年九月二十日首
昭和六十二年五月十日尾（於・中の島柿花居）

《高知・夏炉の会―その二》

歌仙『優曇華の』

高橋柿花捌

優曇華やカーテンを夜の音に引く　高橋柿花
梅雨を聞きつゝ酢にしめる鯖　岩村牙童
拝領の家宝と伝ふ朱杯にて　田内露風
陶鶴のあり陶榻のあり　中西克喜
さやくと月がもたらす風のこゑ　童
河口の砂嘴の真菰穂に出づ　花
着(ウ)こなせる光琳模様秋袷　喜
手管隠しの帯を前結ひ　風
ふざけゐていつか涙の流れをり　童
縁切り宮の錆びし包丁　花
仮の世の大字典より字を拾ふ　風
からりと晴れて同日選挙　喜
公民館錠固く閉じ月凍つる　童
寒菊凜とピアノ演奏　風
一望のスカイラウンジ硝子張り　花
郊外電車地下に入り行く　喜
花疲れとや眠むとうてねむたうて　童
白子干場にとどく速達　花

未(ナオ)決囚鉄の格子の揚げ雲雀　風
銀行員の汚職つぎく　喜
橋渡り街に入るよりチンドン屋　花
日曜市のしよば割りをして　童
鷹城の茂り真直ぐに追手筋　風
テニスコートに汗を流せる　喜
待たせある外車の方へ小走りに　花
肘に乳房を押しつけて来る　童
独り身を守り徹して四十路肌　風
洋裁展へ弟子をひきつれ　喜
岬に立つ半平太像月をあげ　花
古文書解きにすがれ鳴く虫　童
開(ナウ)拓の秋耕の暇少し持ち　喜
からくれなゐに文相の首　花
閼伽井汲む長柄の杓の新しく　風
四百号の俳誌ことほぎ　喜
手を繋ぐすべて家の子花の下　童
草の朧に団地成りゆく　花

昭和六十一年五月十日首
昭和六十一年九月十日尾　（於・中の島柿花居）

《高知・夏炉の会—その三》

歌仙『天皇の』

高橋柿花捌

天皇の若きうつしゑ河鹿宿　高橋　柿花
窓に涼しくかゝる吊り橋　上田　仰星
噂のみ道路計画のびくて　上田　天仰
三百年を超えし杉原　白石　はる子
合宿の月の部屋より話し声　岡本　歩城
土産に買ひし葡萄重たし　池田　和子
秋潮（ウ）の瀬戸の島々見つゝ航く　松林　朝蒼
とはず語りの懺悔いろくく　内原　陽子
物腰に粋の名残りの茶屋の媼　木戸　節
男を磨くための遊び場　花
大衆の敵とさげすまれて生きて　仰
運河を潮の逆のぼりくる　岩村　牙童
月寒く神牛に触れ願詣　花野　一花
冬バラを買ふ銀座二丁目　田村　三翠
すめらぎの手術軽快寿げる　安藤　哲夫
大和島根は雲一つなし　童
新築のベランダに酌む花見酒　竹林　美和子
つちふる朝の遭難の報　和子
竹秋（ナオ）の鯉釣る人を見下ろして　蒼
大臣辞めて尚も放言　武内　南歩
億といふ納税洩れを発かるゝ　城
惜しみなく買ふ世界の名画　節
かはほりの軒を飛びたつ二階蔵　美和
盗人かぶり鼻にむすべり　仰
呼び出しの電話かかりし幕の間　和
湯女の情の只一と筋に　陽
岬鼻の瘡除り地蔵沖に向き　花
ミクロをあばく顕微鏡据ゑ　仰
韓国に聖火の燃ゆる月の秋　一花
湖を覆うて渡り来し鴨　童
村（ナウ）の子ら榎の実鉄砲打ち遊び　吉本　幸枝
童謡歌碑のまた一つ増え　きよ子
老いて尚日雇ひ稼ぎ石切り場　岡田　一枝
学生町のロッジめく駅　蒼
城山を埋めつくせる花吹雪　石原　のぶ
俳諧の旅水温みつゝ　花

昭和六十二年六月一日首
昭和六十三年十二月二十四日尾
（於・中の島柿花居）

《浦和・義仲寺婦人連句会》

歌仙『青　梅』

八木荘一・高橋微代捌

昭和52年1月、大津義仲寺の斎藤石鼎和尚を師とし、高橋微代が同級生を募って発足。昭和57年12月石鼎師死去、59年4月義仲寺横浜戸塚連句会代表・俳誌「寒雷・杉」の同人、八木荘一氏に指導を仰ぎ今日に至る。毎月一回連句張行、隨時に俳句吟行。作品は義仲寺発行「義仲寺」誌上に発表。連衆の和と楽しみに輝やく時間を共通に持ちたいと希う。

青梅の生毛はもつと光るべし　八木　荘一
白き雀のゐる朝曇り　高橋　微代
二十歳初投票に意気込んで　中島　好江
造花の薔薇が足りないといふ　吉江　和香
川面の月乱して艀突進す　永山　ひろ
前菜につく鯊の佃煮　塚本　稲子
自愛せむ銀河の粒の燦々と　荘
ふたりで渡る真間の継ぎ橋　微
見つめ合ひ時間が止まりたる畳　石井　美雪
こころ一字で見事入選　藤井　佐和女
燿変の天目茶碗日の滴　吉田　光簫
訪問商法年寄がかも　美
凍る月悲劇の月を仰ぎみる　荘
引きつけられる栗鼠の襟巻　好
金髪を緑に染める酸性雨　和
怪奇映画へならぶ行列　美
花の冷え夜は断水する厨　光
母上に買ふ苧環の鉢　美

ベルリンの壁の上ゆく春の雲　佐
熊のかたちと鯨のかたち　荘
まとひつく子は預けられ教壇に　好
髭の男と焼酎をくむ　美
新しき義足が涼し整形室　和
不老長寿の玉だれの滝　光
日本語の達者な外国人ばかり　稲
悪ほど私ときめかすなり　光
ハチ公前彼を待つてる気になりて　ひ
着更へは駅のコインロッカー　好
竹藪に月光浴びる札の束　稲
鈴虫浄土うつらうつらと　微
霧の海ここで振返つて見やう　荘
赤いホテルの屋根が虹色　和
もしもしと幼児受話機をすぐ取つて　ひ
天幕の下で青き飴売る　佐
曳山の子供歌舞伎へ花吹雪　微
大切に持つ春の絵日傘　稲

平成元年七月六日首尾（於・東京都港区三田）

《横浜・義仲寺横浜戸塚連句会》

昭和54年4月「杏花村」から分れ「横浜戸塚連句会」として発足。昭和56年春大津義仲寺住職斎藤石叟和尚より「義仲寺横浜戸塚連句会」再興引継ぎを要請されて改名、現在に至る。連衆約20名、毎月第3土曜午后1時～5時。横浜女性フォーラム。連句帳興は、一座する全員が演者であり且つ観衆である。闇を貫く白虹のように輝く時間を共有したい。

歌仙『初蝶の』

ゆらぎゐる黄を初蝶と見付けたり　八木　荘一　徳
畑の起伏に遠足の子等　斎藤　徳治　白
春の雷戻りくる刻すぎてゐて　吉沢　保代　徳
電話のベルを待てる月なり　岡本　富士枝　魚
新涼の大きな顔の朴ひと葉　海野　金魚　富
見得を切つたる菊の人形　浅沼　白　〃
暗転（ウ）の桟敷は眼鏡きらめける　堀口　喜美男　徳
言伝てをして人知れず発つ　保　喜
流暢な英語美人の宇宙館　徳　魚
瞑れる君まばたける星　魚　白
戸籍謄本われひとりのみのこされて　富　徳
少なくなりぬ到来の品　喜　魚
ネオンかと思へば夏の月出でて　白　魚
蟹の卵嚢あらそつて食ふ　徳　白
「嗚呼昭和敗戦平等リクルート」　魚　富
睫のパーマ五千円也　富　喜
連れ立ちて花咲く里を訪ぬきぬ　吉沢　茂　〃
朧にうすれゆける嗅覚　正木　万喜江　白

蛍（ナオ）烏賊己が悲しみに発光す
銀行員がワープロを打つ
熱心の鉄筆が持つ磁力線
地球自転に音は起さず
物怪の棲む崖となり風花す
冬の林檎をとろとろと煮る
点滴の患者に午後の陽の移る
隣の部屋で衣擦れの音
クレーンを操り君もあやつらむ
言はれるままに伊勢へ出張
月の宴司祭真紅の酒呷る
華麗に紅葉して山は老ゆ
給食（ナウ）のむかご御飯の評判記
外側ばかり踵減りゆく
腐る札一億円は拾はれて
道成寺には松のみどりを
はからずも花の下にて眠りこけ
橋を渡つて霞みゆくなり

平成元年三月二十一日首
平成元年四月　十七日尾　（於・横浜婦人フォーラム）

《松山・錦心会》

(1)昭和六一年四月。松山市久米地区の同好者により結成。
(2)名称は詩文の才能を賞賛する意の「錦心繡口」（唐の柳宗元の語）より選ぶ。
(3)毎月第三火曜半日、公民館にて例会。
(4)形式ルールより付味を重視。質素で優雅な知的趣味でありたい。将来作品集も作りたい。

歌仙『藤の房』

中須賀畦月・渡部　伸居捌

笏を手に佇ちてもみたし藤の房　中須賀　畦月
霞みわたれる借景の山　曽我部　登志子
三獣鏡埋もれし里の春たけて　三好　郁子
なんでもこなす器用貧乏　稲垣　杜駆子
月見んと池のほとりの廬にをり　荻山　幸子
主ジ自慢の松茸の飯　土居　りつ子
溪ウ谷に谺するなり鹿の声　乃万　易子
思はず触れしやさしもの肌　月
ひとまはり年上といふ妻貰ひ　志
目より鱗の剝がれ落ちたり　郁
紙漉きの手だれにをどる水のあや　杜
休耕田は畦も絶えだえ　幸
草原のキャンプの村に月更けて　り
涼みがてらに吹けるハモニカ　易
戦友を懐へば悲し今むかし　月
涅槃会にだす寺宝曼陀羅　志
はらりひら花降りしきる石畳　郁
瀬音まじりに小綬鶏の啼く　渡部　伸居
口ナオ数のへらぬ子等にもある稚心　藤田　節子
訪問客は選挙運動　志
揺れうごく東欧諸国不穏なる　幸
振舞酒に酔へる旅先　り
夜もすがら焚火神楽につきあひて　居
縕袍を透す膝よりの冷え　節
京の街べんがら格子よくうつり　志
お茶屋通ひに商ヒを捨て　幸
書きためて出すこともなき文の束　り
思ひのたけの歌もかずかず　居
かぐや姫涙の眼ミに仰ぐ月　節
露をふくみし萩のゆらゆら　志
ひねもナウすを蓑虫の蓑風のまま　幸
海見はるかす窓に患ひ　り
交際も薄き義理なる金を貸し　居
逢ふ時毎に変はる言ひ訳　節
ひと日とて花に浮かるる暇もなく　志
段々畠てふてふのとぶ　幸

平成元年三月二十日首
平成元年四月十七日尾　（於・松山市久米公民館）

《栃木・句華苑吟社》

歌仙『花山に』

昭和五十年頃、連句という形式に魅せられて集った同志により自然結成。名称は文字通り詩歌の草苑を夢に想定した。我々は皆大差なく老輩の面々なれど心若やぎ至上への遍路を辿っている。伝統に立脚、連句のもつモンタージュ的手法集団芸術の叙事詩的精華を祈念する。

花山に見立ての松や翁舞　早乙女 房吉
春惜しみつつ唐様の笛　桑原 民人
猫柳橋あれば橋渡り来て　沼尾 虹
いつなん時も媚含みをり　新村 正一
月皎々田夫野人の面構へ　吉本 三蔓
三味線がきこえる虫が啼きだす　石川 白路
秋風(ウ)のはや立ちにけり門の影　島海 順之亮
酒旨き日は鯉になりたや　房
漱石を夢に見し夜や草枕　民
吾が自画像の仙に以て来し　虹
瞑想のやがて失せたる熟寝かな　正
水鏡人と名乗るおいぼれ　三
空に浮くまどかな月に髪匂ふ　白
流星ありて夜の更けにけり　順
奇蹟なく妙案なくて耳が効く　房
たのみの米もいづれ弗立て　民
売り逃げの利かぬ下げ幅廿日月　虹
慮外に酷なビルの秋風　正

鳳仙(ナオ)花わが感傷の日もむかし　三
拾つた銭を誰に渡さう　白
角の家人影らしき動きをり　順
唄のリズムに雨だれの音　房
青赤のネオンマップを色どりて　民
ホテルを出でて右と左に　虹
あたふたと別れ去りしもうつつなの　正
忘れていつたハンカチ撫づる　白
思慕しらじらとすさびてありぬ荒磯に　三
夜も白みて明けの風吹く　順
残る月鏡磨けば匂ひ立つ　房
踊りの好きな僧のまなざし　民
連れ(ナウ)添ひて戻る山路のやや寒く　虹
悔のうすらに残る行程　正
間をおいて発破のけむり石灰沢に　房
防塵マスク赤き旗ふる　民
散り敷きてわれを遊ばす花吹雪　三
雀と唄ふ都踊りよ　白

平成元年五月二日首
平成元年五月二十日尾　（於・句華苑吟社）

《東京・草茎―その一》

付勝歌仙『曝書日々』

宇田零雨捌

昭和十年設立。「ホトトギス」のリアリズムに対するロマンと連句の復興が旗印。「草茎」は秋の季語の鵙の早贄による。時鳥に対する百舌に由来。本社連句会をはじめ月に六回、各支部で大体月一回の勉強会。その他、誌上歌仙の勉強および通信による歌仙の勉強等。連句は座の文芸であり、一座して心と心が通い合うことが最も重要である。

曝書日々蕉門の句になじみけり　宇田零雨
青葉若葉を渡りくる風　井上きよ
光りつつ見えかくれする湖ありて　仁杉とよ
声をそろへて古里の歌　下村てつ男
山の端に登り始めし望の月　石井一夫
壺にあふれる秋の七草　宇田川貞子
父（ウ）の忌をはらから修しそぞろ寒　日笠靖子
円高不況嘆きあひつつ　渡辺梅子
血圧の心配をする齢となり　瀬戸ハル
ふと目覚むれば木枯の音　岩間克而
熱燗にひとり酌みつつ句を想ひ　堀内一子
哀しみ秘めて過ぎし光陰　伊藤芳子
月淡く恋に乱るる胸いだき　克
雁に托さむ相聞の文　ハ
爽やかに比叡は波の上に立ち　梅
記念写真を何枚も撮る　芳
ダムとなる村に桜の咲き満ちて　貞
草にまろべば暖かき土手　ハ

雲雀野（ナオ）のかけらの雲を追ひながら　春日やす代
試歩ゆるされて心軽やか　同
何時も会ふ人がいつしか好きになり　て
プールサイドの愛の告白　靖
向日葵は西日にかつと燃えたてる　克
絵筆離さぬ精薄の子ら　梅
セーターの胸にクルスのペンダント　克
寒潮昏きさいはての旅　端
打ちつづく不漁をなげく漁師町　一
稲荷の鳥居ならぶ坂道　克
ひつそりとお月見団子供へられ　益田きみ江
台風それてほつとするなり　ハ
いそいそと年寄りの日の集まりに（ナウ）　梅
習ひ覚えし詩吟一ふし　ハ
良寛の扁額古りし草の庵　靖
水陽炎のゆらぐ柴垣　克
残雪の嶺々をはるかに花吹雪　と
汐騒高く鳥雲に入る　一

昭和六十二年七月（於・草茎社）

《東京・草茎―その二》

付勝歌仙『祭　酒』

宇田零雨捌

ぐいのみに溢れてうれし祭酒　宇田零雨
藍の香残る浴衣涼しく　稲垣治子
旧道をゆけばせせらぎ聞えきて　東浦佳子
見渡すかぎり穂芒の波　加藤えう子
向つ嶺に今宵の月の登るらん　岸本花子
風爽かな草庵の庭　鈴木つとむ
やうやくに試歩許されてお茶の会　え
うひうひしさに口紅を濃く　花
お揃ひのセーターで行くスキー場　同
三平汁のうまき民宿　同
いつからか居つく野良猫ふとりゐて　佳
下校の子等の高き歌声　古田悦子
干網の匂ふ海辺に月淡く　佳
一羽離れてわたる雁　同
うそ寒く御巣鷹山の遭難碑　悦
雲の流れをじつと見つめる　つ
花過ぎの古刹をつつむ閑けさよ　清水福子
うつつなに聞く遠き春雷　益田きみえ
残雪の襞切り返し飛ぶ燕　つ
昔かはらぬ故里の村　花
亡き夫の座りし椅子もそのままに　き
恋の思ひ出辿るアルバム　下村てつ男
風鈴のことに涼しき昼下り　福
虹美しき瀬戸の島々　同
賑やかに観光バスを降りたちて　花
冬夕焼に映ゆる雪像　悦
寒鴉影を落して鳴きわたる　山尾糸紅
翁の句碑がひつそりと立つ　て
杉の秀に眉より細き月かかり　同
端山にひびく鹿寄せの笛　悦
懸崖の菊を飾りし寺座敷　つ
柱にかかる古き短尺　花
喜寿祝ふうからやからの打ち集ひ　田坂八重子
窓を開けば風は暖か　西郡真佐女
池の面に爛漫の花映りゐて　佳
百囀りのこぼれくるなり　糸

昭和六十二年八月（於・草茎社）

《東京・草茎―その三》

奉納歌仙『雁ネ』

宇田零雨捌

雁ネに托すかなしみ限りなし　宇田　零雨
月に浮かべる遠き島影　東浦　佳子
身のほとり爽やかな風吹き抜けて　仁杉　とよ
ペタルも軽く自転車の子等　木部　八千代
幾本か枯れ残りたる杉並木　梅主　共栄
しきりに思ふ故里の冬　佐藤　寒郎
口笛を吹けば亡き人返りくる　田村　登喜子
しつぽを振つてついてくる犬　永見　徳代
向つ嶺にむくむくと涌く雲の峰　佐野　とし子
浜木綿の道海へつづきて　野口　能武子
立ちならぶ売地の札の新しく　高須　節子
皮算用をはじくそろばん　小谷　伸子
何事もなく月が出し出水あと　佐渡谷　ふみ
蜻蛉とまる狛犬の鼻　黒須　静江
来ぬひとを待つ間寂しき秋の暮　西尾　みゐ
髪になじまぬ買ひたての櫛　清水　福子
町内のお花見の宴賑やかに　飯沼　しほ女
味噌田楽の匂ひただよふ　鈴木　喜久
うらうらと大空に浮く飛行船　水野　幸
SOSの文字を見つける　富田　鈴
五月富士いただき樹海くろぐろと　野口　郁子
衙を返す郭公の声　鶴田　裕道
松葉杖やつと馴れたる試歩の道　浅田　みゑ子
そつと従ふ糟糠の妻　岡本　きくゑ
このわたに二人で酌めば冬ぬくく　春日　やす代
ひばりの声に凩が吹き　宇田川　貞子
ビル街に高いアンテナ乱立し　河合　澄江
鴉がわがわかしましきこと　木村　筧水
産土神の森の明るき十三夜　鈴木　佳子
新酒の樽の荷ひ込まるる　永雄　もりえ
秋まつりひよつとこの面よく売れて　広田　節子
憂ふることの多き此の頃　山尾　糸江
沖縄へ行つてみたいと子に云はれ　岸本　花子
大海原を帰りゆく鳥　下村　てつ男
古へのみかど偲べば花吹雪　磯　直道
水無瀬の春は静かなるかな　宇田　都子

平成元年八月（於・草茎社）

《東京・草茎―その四》

奉納歌仙『月　冥　し』

宇田零雨捌

月冥し憂き身の果ての隠岐の島　宇田　零雨
簷かたむけて木の実降りつぐ　宇田　都子
あるときは声を落して渡る雁　磯　直道
思ひ出の唄口ずさみつつ　田坂　八重子
碑の古びしあたり森閑と　下村　てつ男
青嶺の囲む湖沿ひの径　岸本　花子
葭簾（ウ）かけて山寺涼しげに　加藤　えう子
法要終えしこころ易さよ　古田　悦子
ひとり居の篭のインコに話しかけ　山尾　糸江
出張の夫偲ぶ雪の夜　東浦　佳子
妊りしいのちいとしみ毛糸編む　広田　節子
帰る故里持たぬ淋しさ　小林　三代子
臥待の海鳴りどどと岩を嚙み　日笠　靖子
やや寒の衿かき合はすなり　永雄　もりえ
白萩をはらはらこぼし風の筋　稲垣　治子
築地の隅の小さき抜け穴　益田　きみえ
花屑の吹きよせられし一ところ　西郡　真佐女
水かげろふのゆるる池の面　渡辺　志計子
離（ナオ）りゆく遍路の鈴に春惜しみ　鈴木　佳子
雲わきいづる国境の山　伊藤　芳子
つぎつぎの地震噴火におびえつつ　木村　筧水
肩寄せあへば灯蛾のまつはる　河合　澄江
お揃ひの浴衣で拝む荒神輿　堀内　一子
様変はりたる浅草の街　仁杉　とよ
やかましく走りすぎたる選挙カー　宇田川　貞子
埃りをかぶる千両の鉢　春日　やす代
北風強くつとめ帰りの年の暮　馬渕　通子
評判悪き消費税なり　大沼　三栄
湯煙りの匂ふ細道月出でて　井上　きよ
揺れるともなく揺れる穂芒　清水　せつ
光（ナウ）りつつ空流れゆく赤とんぼ　渡辺　梅子
遊びつかれて戻りくる子ら　秋葉　文子
手作りのサンドイッチを篭に盛り　山口　安子
ギプスもとれて長閑なる昼　奥平　ふみ子
ほつほつとほころび初めし糸桜　松田　千佐代
盃まはす春愁の宿　大江　加代子

平成元年八月（於・草茎社）

《東京・草茎―その五》

奉納歌仙『隠岐の海』

宇田零雨捌

隠岐の海に白菊を撒く遠忌かな　宇田 零雨
残ンの月の淡くかかれる　下村 てつ男
添水鳴る故里の径なつかしく　木村 筧水
まぶたに浮ぶはらからの顔　日笠 靖子
窓越しに青い山脈つらなりて　佐藤 寒郎
来し方しのぶ風は涼しき　益田 きみ江
甚平(ウ)を着て亡き父に似しといふ　松田 千佐代
お銚子二本夕食の膳　高須 節子
好きな娘を連れて婚約許さるる　東浦 佳子
お揃ひのシャツお揃ひの靴　渡辺 梅子
お土産にケーキの箱をたづさへて　山口 安子
降誕祭の聖樹かがやき　広田 節子
雪やみし異国の空に仰ぐ月　田坂 八重子
コーヒーの香の流れくるなり　大江 加代子
映像に誘拐犯がうつされし　稲垣 治子
歯ぎしりをする癖が直らず　古田 悦子
定年の間近になりし花今宵　永見 徳代
石投げてみる蝌蚪の古池　磯 直道
お遍路(ナオ)の鈴暖かく聞こえきて　小林 三代子
遥かに浮ぶ瀬戸の大橋　春日 やす代
髪のくせ気にしカメラの前に立ち　木部 八千代
耳のうしろにつけし香水　仁杉 とよ
予後の身に虞美人草のたよりなく　伊藤 芳子
低く舞ひきて消えし鳥影　井上 きよ
手をつなぎ子供が帰る町の辻　宇田川 貞子
哀愁こもる豆腐屋の笛　河合 澄江
積みあげし新藁ほのと匂ひたる　奥平 ふみ子
髭のぞかせる閻魔蟋蟀　鈴木 佳子
芭蕉破れ翁をしのぶ今日の月　田村 登喜子
土橋わたれば産土神の宮　加藤 えう子
腰伸(ナウ)ばし爺いそいそと年用意　小谷 伸子
冬空晴れて鳶の輪をかく　佐野 とし子
街騒を離れて小さき駅に着き　西郡 真佐女
一樹をたのむ高き囀り　岸本 花子
花吹雪はらはらかかる旅衣　宇田 都子
春惜しみつつ嘆きあふのみ　山尾 糸江

平成元年八月（於・草茎社）

《松山・草茎松山支部―その一》

脇起歌仙『鍋奉行』

寺岡情雨捌

(一)師系　宇田零雨・神尾静光・松永静雨。
(二)創立　昭和十五年一月。
(三)近況　第二日曜日、第三土曜日に例会を開き実作をつづけている。
(四)伝統に即した、正しく新しい連句を目標として精進を続けている。

鮟鱇のきもを配るや鍋奉行　宇田零雨
又ひとしきり粉雪舞ひ初む　寺岡情雨
最終の電車もすでに発車して　山田久栄
揺れるともなく揺るるコスモス　杉浦朝子
一行の詩をあげつらふ月今宵　武知千代
虫籠置きし部屋の片隅　千
白妙(ウ)のマリア観音美くしく　朝
病み伏す心癒やすあけくれ　千
くづれたる再婚話まとまりて　久
髪染めるやら眼鏡買ふやら　千
抽せんで引きし海外旅行券　寺岡冬煽
やゝ濃いめなるカルピスの味　久
デパートの屋上照らす夏の月　千
共産党の宣伝のビラ　朝
摺り切れた運動靴を気にもせず　千
狂ひても尚福相な顔　冬
産土神のきざはし高く花満ちて　朝
弥生の空にけむる山々　千
バイパス(ナオ)の完通成りて暖かく　朝
赤い単車のバイト学生　久
姫彦の哀れをさそふ比翼塚　冬
外套に付く君ヶ移り香　久
玄海の北風荒ぶばかりにて　朝
邪馬台国の幻を追ふ　冬
白々と静寂の中に著莪咲けば　千
雨呼ぶらしきまくなぎの群　朝
嘘つきの萬太と人にさげすまれ　冬
大どんぶりで呷るどぶろく　千
せせらぎの音聞こえ来る十三夜　朝
刈田に続く刈田ありけり　冬
漸(ナウ)くに暗きトンネル抜け出でて　千
祖母の笑顔の浮かぶ弁当　朝
あなどれぬ相続税を気にしつつ　冬
乗る人もなく垂れしふらここ　千
山寺の昼を静かに花吹雪　朝
屋根葺き替へる話纏まる　情

昭和六十二年二月十五日首
昭和六十二年四月十五日尾　（於・東雲公民館）

《松山・草茎松山支部—その二》

脇起歌仙　『天　高　き』

寺岡情雨捌

吾が小さき詩は天高きより生まる　宇田零雨
咲き盛りたる千草八千草　寺岡情雨
新築の祝をかねし月の宴　武知千代
掛け流したる双幅の軸　山田久栄
せゝらぎの何処ともなく聞こえ来て　中野かずえ
土産と共にひさぐ甘酒　千
石手寺の大師が見上ぐ雲の峰　千久
夫婦気どりの恋のバカンス　千
さりげなき仕草に赤く頬を染め　吉金白水
映画帰りにつゝく寄せ鍋　か
枯枝の影を地に置く冬の月　富田きみ枝
癌病棟へ続く廻廊　杉浦朝子
夢はなほオリンピックの空へ飛び　千
独り静かに吹きし尺八　山本保
磯の香の漂ふ窓を開け放ち　白
明日の日和をそつと占ふ　き
花どつとお城祭もたけなはに　朝
群れ引き連れて帰る雁金　寺岡冬煽

連山を映して蒼き春の潮　千
夢に夢見て暮らす生涯　冬
中国の硯や墨を買ひあさり　朝
二人仲よく銀婚の旅　冬
柚子風呂に倖せの日々かへりみて　朝
背戸吹き抜ける凩の音　冬
立ち退きの噂話が真実に　千
財布の紐がゆるむ昨今　〃
どぶろくに酔へば己を見失ひ　朝
泥にまみれて稽田に寝る　冬
ひとときを雲間に消ゆる二十日月　千
騒音高き瀬戸の大橋　朝
過疎続く鎮守の森の楠若葉　冬
蝙蝠あまた遊ぶ黄昏　情
バス埃かむる小店も懐かしく　朝
真珠の育つ麗かな海　朝
久々に花の盛りに帰り来て　千
風狂の師を囲む春昼　情

昭和六十三年九月二十九日首
昭和六十三年十月　九日尾　（於・武知邸）

《松山・草茎松山支部―その三》

歌仙『木の芽晴』

寺岡情雨捌

果てもなく為すこと多し木の芽晴　吉岡老鶴
山の彼方を還りゆく雁　寺岡情雨
瀬の音は日毎に高く華やぎて　杉浦朝子
いと爽かに吹き抜ける風　武知千代
畏みて叙勲を祝ふ月の宴　千
炊き上がりたる松茸の飯　山田久栄
由緒ある寺の離れの大厨　千
杉の禿に夜鷹啼くなり　情
見るものが皆珍らしきキャンプの子　千
段々畑の続く岬路　情
釣舟が三々五々と帰り初め　朝
焚火をたいて待ち佗びる妻　千
風邪声をいとしと抱けば月凍て　情
赤提灯のゆるる町角　千
高層のビルが次々建ち並び　朝
遠廻りして戻るジョギング　千
堀端の花はやうやく咲き揃ひ　吉金白水
ゆるゆる空に上る風船　山本保
遍路笠置いて憩へる草の庵　朝
人だかりする綿菓子の店　保
心中の片割れと言ふ噂あり　朝
遂に生涯妻を娶らず　情
石鎚は昨日も今日も大吹雪　千
麓の宮の冬菊の垣　千
一筆に描きし俳画の墨の彩　情
面影偲ぶ有馬白陽　朝
瓢々と雲は流れて行くばかり　〃
旅寝の宿に仰ぐ月光　千
スイッチョの鳴けば秋逝くこと迅く　情
呆けつくした丘の穂芒　千
そのかみの開拓団の夢破れ　富田きみ枝
暑中見舞で繋ぐ友交　情
四枚の玻璃戸にせまき青簾　久
浮き燈台に揺れる灯び　〃
夜桜の花の宴の更けまさり　朝
折り折りに吹く暖かき風　情

昭和六十三年六月十二日首
昭和六十三年十月十六日尾（於・東雲公民館）

《東京・くのいち連句会―その一》

歌仙『長城も』

暉峻桐雨捌

①俳諧をちゃんと理解するために実作を始めました。連句集第一集出版は昭和四十八年。
②先生を除いてメンバーが女性ばかりですので「くのいち」です。
③電音が主ですが、月に一度、一直するために集まり同時に連句の勉強をしております。
④遊俳ですので、心を豊かにすることを第一にいたしております。

長城も果はあるらし鳥雲に　暉峻桐雨　鶴
入試を越えた少年の眉　伊藤紫苑　光
野茨の芽のそれぞれに萌えたちて　吉田吉女　司
ハミングまじる包丁のおと　矢島眸　桐
あすからのことは忘れて月今宵　仙波鶴女　紫
水涸れそめてのこるたも網　小方光浦　吉
施主なれどわが家はなくて破れ芭蕉　内山司花　眸
かわらぬものは婆と酒蔵　桐　鶴
かまくらで三々九度をせしことも　紫　光
別れた女に出会う顔見世　吉　司
にわか雨やりすごしたる築地河岸　眸　桐
峠の村でざこを商う　鶴　紫
母屋では月見の沙汰がひとしきり　光　吉
手元たしかに新蕎麦を打つ　司　眸
はっぴ着て娘のいさむ秋祭　桐　鶴
ペーパー英語で案内にたち　紫　光
花ざかり梅やあんずも咲き揃い　吉　司
はや売り切れし茶屋の壺焼　眸　桐
このひまにおばに貰った種まかん　鶴
出前落語にふえるごひいき　光
風絶えてネオンの色もうるみそめ　司
今夜かぎりとしたたかに酔う　桐
またの日のかたみに残すキスマーク　紫
舌にころがす白玉の冷え　吉
柳蔭ショートパンツの人通り　眸
外人墓地の扉とざされ　鶴
海すこし見える屋敷の赤い屋根　光
餌のちらばるからの鳥籠　司
新月とともに旅だち望の月　桐
しし垣ごしに世辞をばらまく　紫
去年より棚田の米がよくとれて　吉
はやりの柄の服地買いこむ　眸
夜も更けて山のいで湯のこんこんと　鶴
のびたうどんをすする広敷　光
在所衆なごりを惜しむ花むしろ　司
ゆくもかえるも人の世の春　桐

昭和五十九年四月二十日首尾（於・四谷）

《東京・くのいち連句会―その二》

歌仙『鯊釣るや』

鯊釣るやいつしか軽き船徳利　暉峻　桐雨
夕月淡く昏れのこる尾根　吉田　吉女
唐黍をもぎつつ人を呼びとめて　仙波　鶴女
伝言聞いてふかすナナハン　鳥沢　霞
いにしえの面影きざむ道しるべ　矢島　眸
軒のつららののびた暁　伊藤　紫苑
借りてきたスケート靴を肩にかけ　内山　司花
向こう払いで祝うおめでた　小方　光浦
腹の児にせかれせかれて式をあげ　桐
半年でまたもどるホステス　吉
傘の色とりどりにじむ昼の雨　鶴
土産の積木かたかたと鳴る　霞
夏祭だしひく子らの声かすれ　眸
早寝の床にすだれもる月　紫
けものみち辿りて撮りしころ偲び　司
テニスコートもできた民宿　光
花だより今日も朝から書きつづけ　桐
ぬけそでぬけぬ春の風邪ひき　吉

暉峻桐雨捌

橋桁（ナオ）をついとかすめてつばくらめ　吉
髪刈りながらゴルフの談義　鶴
前ぶれもなしに娘の帰りきて　霞
親ばなれせぬ恋の行末　眸
血統の正しき猫をもてあまし　紫
暮れかかってもやまぬ大雪　司
ふっつりと話とだえて蕪汁　光
まぶたに描く黒土のうね　桐
浅草の六区の店にまたも寄り　吉
からおけに乗る矢切の渡し　鶴
後の月ゆれる芒の影くらく　霞
届いた新酒おすそわけする　眸
行く方へカゲロウのむれ慕いきて（ナウ）　紫
当確に沸く女代議士　司
たのまれた家具のデザインはかどらず　光
昨日もきょうも鳥帰るなり　桐
天守閣ひときわ高く花の波　吉
津軽三味線ならう遅き日　鶴

昭和六十年九月三十日首尾（於・四谷）

《東京・くのいち連句会―その三》

歌仙『うろこ雲』

暉峻桐雨捌

掃きよせてみたし夕べのうろこ雲　暉峻桐雨
木槿の垣のつづく月白　伊藤紫苑
炭ひとつ名残の風炉につぎたして　小方光浦
街のはずれにできたブチック　仙波鶴女
冬晴れのきょうは朝から種まかん　内山司花
あかり障子に鳥の影さす　鳥沢霞
もう一度さがった熱をたしかめる　矢島眸
隣のピアノまた鳴りはじめ　吉田吉女
片思いはやふたとせとなりにけり　桐
はたが気にする僕の純潔　紫
直木賞だけで今度もまた終り　光
珈琲すゝる夜ふけのショップ　鶴
人通りたえて涼しき夏の月　司
肩車してつるす風鈴　霞
落書も三代つゞきのいろは蔵　眸
気軽にうごく町内の世話　吉
満開はもうすぎたけど花むしろ　桐
長生きうれし開帳に会う　紫
すき鍬で片付くほどの田を返し　紫
ワープロで打つ父への手紙　光
小糖雨休講つげる掲示板　鶴
バイトをやめてメイクラブする　司
風邪声でわるい人ねとさゝやいて　霞
寒椿さく宵の公園　眸
ちょっとだけ屋台をのぞく帰り途　吉
もうあの婆も喜寿すぎつらん　桐
赤字線最終電車はしりだし　紫
移転通知にそえるイラスト　光
ふりかえりお気ばりやすと月明り　鶴
ことしは莟つけぬ秋蘭　司
窓あけてそっと追いだす残る蠅　霞
茶器の手いれを念入りにする　眸
植木屋がたばこくゆらす小日の暮　吉
ものの芽を踏む練塀の道　桐
花のころ孫もようやく初舞台　紫
春の渚にあそぶくのいち　光

昭和六十一年九月二十八日首尾（於・四谷）

《松山・興聖寺連句会―その一》

追悼

歌仙『君や亡し』

松永静雨捌

(一)師系・宇田零雨・松永静雨。
(二)創立昭和五十八年二月。
(三)創立時は毎週水曜日に例会をつづけていたが、近時は月一回集会となった。
(四)此の興聖寺は赤穂浪士、大高源吾俳号（子葉）と木村岡衛門の墓のある寺である。

君や亡し古里に花満つれども　松永　静雨
ひたすら綴る惜春の詩　井上　弥生
つばくらめひねもす軒端にぎやかに　高智　美智恵
分教場に届く給食　桑原　光子
一輪車とめて見上ぐる昼の月　前原　四月
新藁の香を存分に吸ふ　高智　晶子
ウくどくどと愚痴聞きをればうそ寒く　白石　葉子
ぎつくり腰もやつと癒えたる　弥
馳け出しの記者はもつぱらスクーター　光
幼な妻でも料理満点　葉
口づけも抱きあふこともあたりまへ　光
新作こけし飾る湯の宿　美
短夜の月光ヲ青く射し入りて　神尾　千津子
祭大鼓にいこふひとときお茶うけは生姜ききたる岩おこし　四
クラス会とて集ふ人々　光
千年の桜大樹の今もなお　弥
風に乗りくる蜜蜂の群　静
子遍路をうながす声の遠くより　美
門前町にひさぐべん当　四
後足を上げたる犬を手で追ふて　光
一一九へ報らす船火事　美
地吹雪の待合室に荒れ狂ひ　四
破れ看板があちらこちらに　美
りりしくも男姿に身をやつし　弥
やむにやまれぬ行きずりの恋　静
鬼になり蛇にもならうでよくもまあ　菅　千冨美
町のはづれに残る灯篭　林　悦子
笛の音に誘はれ月も昇るらん　美
社員旅行で新酒味はふ　弥
ナウともかくも売上税は廃案に　千
次期総裁をねらふ算段　悦
かみ合はぬ入歯ばかりが気になりて　静
今日も賑ぎはふ瀬戸の朝市　光
花筏のたりのたりと波に乗り　四
石に座れば石も暖か　弥
　　四

昭和六十二年五月二日首
昭和六十二年六月六日尾（於・松山市民会館）

《松山・興聖寺連句会―その二》

脇起附勝歌仙『千早ふる』

井上弥生捌

千早ふる伊予の出湯に年迎ふ　松永　静雨
松竹梅の匂ふ門松　井上　弥生
ととのはぬ初音なれども明るくて　松田　絹恵
列を正せる卒業の子等　前原　四月
昼月の呆けきつたる四月馬鹿　桑原　光子
今日も昨日も連句三昧　高智　晶子
目印はお稲荷様の赤鳥居　白石　葉子
片足あげて犬が尿する　菅　千冨美
電話にて思ひのたけを打ち明けて　林　悦子
恋に身分のへだてなしとか　美
夏痩せと答へしままに涙ぐみ　静
やき餅ならぶ瀧見の茶店　弥
歌碑の字を浮きたゝせたる望の月　四
風に揺られて鳴子からから　光
葬列の長くつづきてうそ寒く　絹
暴力団の怖き面々　美
闘牛の幟はためく花日和　絹
遠く消えゆく蜜蜂のむれ　葉
つくし摘む子等の倖願ひつつ　悦
核廃絶を説きて久しき　晶
石仏を片手拝みに急ぐ旅　干
瀬戸大橋の夢も叶ひて　同
冬ぬくく老人ホームにぎやかに　葉
狸二匹がのぞく裏木戸　四
残飯のぶちまけられし桶の中　二神　芙久子
愚痴も言はずに船乗りの妻　四
ハンサムなセールスマンに一目ぼれ　美
用もないのにぶらりぶらりと　悦
いささかの叙勲に浮かれ月の径　弥
しるく匂へる黄菊白菊　美
積み出しの近き新酒の蔵に満ち　静
竹下総理訪へる故郷　悦
空前の土地問題はむつかしき　静
なんだかんだと果ては無茶苦茶　葉
霏々と舞ふ花に憑かれて蝶も舞ひ　芙
瀬音のどかにひびく草庵　弥

昭和六十三年一月九日首
昭和六十三年一月二十三日尾（於・市民会館）

《松山・興聖寺連句会―その三》

脇起附勝歌仙『泉殿』

前原四月捌

泉殿四方の緑を砦とす　宇田零雨
水面かすめて飛ぶ夏燕　前原四月
記者団がシャッターチャンスねらひいて　井上弥生
受賞の御師祝ふうれしさ　松田絹恵
月今宵郷土料理をふんだんに　高智美智恵
芳香放つ黄菊白菊　二神芙久子
秋愁（ウ）の一句したたむ旅の果て　桑原光子
冨士真向いに見えるマンション　菅干冨美
カーテンに新婚気分満ちあふれ　白石葉子
ふとよぎりたる初恋の人　高智晶子
手作りの楽の茶碗をいとしみて　弥
おびえた様に吠える柴犬　四
北風荒さび月天心に動かざる　弥
水洟すすりお百度を踏む　葉
やうやくにイランイラクに来し平和　弥
土鳩五六羽ゆるき旋回　首
連衆の打ち揃ひたる花の園　絹
翁・媼のひさぐつぼ焼　美

春（ナオ）昼の門前町は賑はひて　光
駐車禁止の太き貼り紙　晶
板塀にぽつりぽつりと雨の跡　干
着たり脱いだり買ひたての服　葉
避暑客の噂の的となる姉妹　四
サングラスかけはひるモーテル　干
新型のタイムレコード置かれたる　晶
橋建設が進む公団　葉
総裁の自筆の色紙かざられて　干
孫も祖孫も集ふ日曜　絹
月代に遠山並のくつきりと　光
静寂をやぶるむささびの声　弥
白秋（ナウ）を偲ぶ湖畔のそぞろ寒　美
足の痛みをかこつ此の頃　光
本箱に新刊ばかりとり揃へ　晶
終の栖をつつむ潮の香　芙
灯台へつづく小径は花満ちて　四
師の留守まもるのどかなる句座　絹

昭和六十三年八月二十日首尾（於・津和地亀川旅館）

《郡山・郡山連句会》

脇起歌仙『躓き し』

佐藤　淳捌

躓きし石にもの云ふ寒さかな　野村喜舟
霜を踏み行く幾とせの路　佐藤　淳
街角に発展誇るビル建ちて　大和田悠紀
フロントにあり英字新聞　中西　瞭
澄み渡り吾れに付き来る後の月　佐藤　春
名も無き草に光る露玉　大槻芳野
ウジョギングに交はす挨拶さはやかに　大原紗都
軽き姿のナウイ良き人　依田きよの
会ひ度くて通ふ日課の駅茶房　野
先づやんはりと恋の手ほどき　淳
贈られし拾萬金貨偽ものと　瞭
文化財として眠る仏像　紀
湖に影をとどめて月涼し　の
宵待草の匂ふ民宿　春
このところ大国揺れる地球上　都
西と東に現れませる神　野
花吹雪水上バスの懐しき　紀
写楽の額にのどかなる風　瞭

ナオ鳥雲に長き無沙汰を詫びる文　の
進学塾を頼る偏差値　春
突然に事故発生の電話受け　都
慌てて探す不義理せし銭　淳
凩を避けて落合ふ隠れ宿　紀
暖房利きて露はなる乳　野
酔ひ覚の水したたかな味教へ　瞭
赤じゅうたんのバッヂ嬉しく　の
札束の重さが光るお国入り　都
はや移ろひて冷やかな野辺　春
名月に昭和も積り改元と　紀
菊人形の秘むる哀れさ　淳
ナウカラフルなバイクの列と渡る雁　の
温泉湧き出里は賑やか　野
ファミコンの遊び夢中に更くる夜　瞭
入学準備了へし弟妹　都
日は寧く天の賜へる花の庭　春
舞ひ合ふ袖に春を惜しみて　紀

平成元年十月十五日首
平成元年十二月五日尾（於・佐藤淳宅）

《愛媛県・小松連句研究会》

歌仙『春眠』

鈴木春山洞捌

昭和六〇年一月創立。会名は阿片先生の連句研究会にあやかって地名を冠した。代表者は石丸信義。会員は全て渋柿俳人である。師系は東洋城・春山洞を掲げ、直接指導は専ら鈴木春山洞先生に受け、地域文化活動に融和した連句を楽しんでいる。会場・小松町立中央公民館。毎月例会・第四金曜日午後一時から。渋柿俳人歓迎。

春眠や読みさし本に頭を預け　鈴木春山洞
するすると開け覗く麗か　石丸信義
揚雲雀天一枚の蒼さにて　曽我部介以
広き裾野の忘れ湖ミ　洞
肩落し行くを案山子に見送られ　義
月も待たずに酒の座となり　以
老僧ウと歌ふカラオケ秋深く　洞
ベッドの下に衣ヌを脱ぎ捨て　義
札束に出張妻の契約し　以
雑煮の膳を独りで祝ふ　洞
ベルリンの壁も話題の選挙戦　義
悪戯電話に噎ぶ麩　以
月照らす水着乙女の肢体あり　洞
鬘姿に早変りする　義
石鎚の山は神なる座にゐまし　以
昂りのまま囀つてゐる　洞
幼な掌に花ひとひらのこぼすなく　義
鳴く浅蜊聞く真夜中の桶　以

城師ナオの句思ひ深吟朧なり　洞
皿ヶ嶺登る下駄履きの人　義
教会の塔いち高き邑にして　以
くねくねの道バス埃あげ　洞
滑川の涸れを跳び跳ぶ猿の尻　義
何事ならんかの大焚火　以
円陣に顔みしり皆まじりゐる　洞
胸おどらせてそばにちかより　義
結局は泣かせて帰すうなゐ髪　以
犬走り去る街の横町　洞
満月を揺れ揺れ渡る葛ラ橋　義
ひとに知られな松茸在り処　以
冬ナウを越す支度に板戸うちなほし　洞
翁のあとをみちのくの旅　義
ターミナルデパート冷房効きすぎて　以
ロングスカート脚にまつはる　洞
とみかうみ花見の場所を定めかね　以
小袖の色を杉菜と選ぶ　執筆

平成元年二月二十二日首尾
（於・愛媛県周桑郡小松町・石丸邸）

《豊田・ころも連句会―その一》

歌仙『恥多き日』

キャキャキャッとはしたない笑い声をたてつつ、自己流で数年間も連句をやってきたイマドキ女が主力の会です。四年前から東明雅先生に師事。豊田市の昔の地名衣の里に因み「ころも連句会」として勉強を始め、今は男性会員もいます。モットーは「現代を遊ぶ」。現代の渦の中にいる自分たちの表現を大事にしたいのです。取り柄は元気と陽気！

初オ梅雨寒や恥多き日のひとりごと　八木聖子
友ここにあり揺るる紫陽花　聖
防波堤ナナハンの群れ駆けぬけて　矢崎藍
ジーンズ干せる土産屋の庭　聖
名月の白さ連山藍の濃さ　々
絵の具ぽたりとにじみゆく秋　藍
ウ唐黍の皮むき捨つる厨ばた　々
愛がさめれば疎ましきのみ　聖
化粧へどもまつ毛かげさすゲイのママ　々
消費税なんか通しやァしないよ　藍
機下に見る平和列島欲の渦　々
物の怪どもの生臭き息　聖
月凍り湖も凍りて念佛会　々
いさかひ飽きし老夫婦とか　藍
癒ゆるなきことには触れず検査室　々
玻璃をよぎりて鳩の大群　聖
花の街トランペットを吹き上ぐる　々
木靴のステップ和蘭陀の春　藍

ナオ叱られたやせ猫親の乳吸つて　聖
内朱外黒絵漆の椀　藍
装束のまま神官がビザを食ひ　聖
寅さんばりの香具師の口上　々
醜男に情が移つた恨めしさ　藍
青嵐一陣恋はあぶない！　々
笑ひたる少女の喉の匂ひたち　聖
繕ひきかぬ過去もありけり　々
死んだ子が呼んだと外に佇める　藍
三和土すみずみ浸す月光　々
芋煮会うからは誰も名を成さず　聖
ソウルに弾む若者の声　々
ウミセス記者市の賑ひ送稿し　藍
水平線に小さき舟影　々
路地の奥ひらき直つて住みついて　聖
銘酒とくとくさしつされつ　藍
姉の読むメルヘン優し花の下　聖
兎過ぎしは夢か若草　藍

一九八八年八月十日首
一九八八年九月末日尾　（文音）

《豊田・ころも連句会―その二》

二十韻『秋　風』

柿本時代捌

秋風やヴィオロン鳴らす胸の奥　八木　聖子
今宵の月に並ぶ赤星　加藤　治子
むかごめし幼馴染と酒酌みて　谷口　幸子
家禽会議に途中下車する　阿部　都美子
推薦（ウ）の横文字はえて本の帯　後藤　志津枝
ベッドルームはおあづけの恋　柿本　時代
バーゲンで婚礼道具買ふ十代　螺沢　代（のり）
陶の狸を洗ひ浄むる　都
父の死を痴呆の母に告げし冬　幸
砕氷の中鰤が目をむく　聖
二（ナオ）の腕の名を新しく彫り変へて　治
加賀友禅を脱ぎ捨つる女　都
坪庭の水琴窟の音の澄み　治
千年の松残すビル街　田川　慶子
月明に鮫鶉そっと拾ひ上げ　都
血液型がどうのこうのと　志

バス（ナウ）が出る寿司屋の次男の甲子園　矢崎　藍
贔屓筋から届く草餅　志
どん帳のゆるりお江戸は花吹雪　藍
四人姉妹の春のよそほひ　時

一九八八年九月二十一日首尾（於・棒の手会館）

《松山・佐久良連句会》

歌仙『懸想文』

鈴木春山洞捌

昭和六十三年六月創立。会名は代表者井門可奈女の親戚筋栗田樗堂の佐久良塚から。師系は栗田樗堂・富田狸通（代表者を連句に導入）鈴木春山洞（現在指導を受けている）を掲ぐ。三者の間に連続脈絡はない。現代生活を謳歌する連句を郷土・愛媛の詩として楽しんでいる。例会・第四火曜午後一時から。会場・愛媛県生活文化センター。初心者歓迎。

誰が筆のその紅や懸想文　松根東洋城
箱つるす枝に射す初日影　鈴木春山洞
揚げ雲雀聞き睡うなる部屋居して　白方荀子
白酒をのむ老夫婦あり　井門可奈女
かすかなる遠潮騒を春の月　古川任子
ぺたりぺたりの櫓音近づく　大本まこと
あまが家は一すぢ煙おこしそめ　石丸律子
次第次第にやするあはれさ　荀
船霊に憑かれし恋にやつれゐて　洞
行水流す庭のくらさよ　任
夏帯を胸高キュッとしめて出て　奈
抹茶をたててすすめける席　律
池の月くだきて鳥の飛びたちぬ　ま
琵琶を弾いて秋の詩を賦す　洞
農繁期林檎の青き久万の里　荀
平和を祈る平成二年　奈
ワシントン旅して花を拾ひきて　任
凧の思ひ出アルバムに貼る　ま

大川（ナオ）に稚魚放したるうららかに　律
藍染がすり上りよろしく　荀
道後の温泉宿屋満員高景気　洞
右手をあげて金まねく猫　任
雪だるま空にらむ様写しけり　奈
焚火の輪して五六人ゐる　ま
年よりのなかうど役はうつてつけ　律
口争ひもながすぎし仲　奈
往き摺りに触れし小指のうづきをり　任
三味のねじめをしめあげし夜　洞
目をとぢて無念夢想に月広野　荀
虫鳴く声にしばし佇む　律
紅葉（ナウ）背に白皙の僧箒持つ　ま
華やぎて来し振袖の舞ふ　任
山頂湖朱き鳥居の波に浮く　奈
かな女の像に糸遊のたつ　荀
しをり戸をおし花の径散歩する　洞
鱒のぼる瀬に沿ふ坂をゆく　律

平成元年一月二十四日首尾
（於・愛媛県生活文化センター）

《高知・三冊子研究会―その一》

歌仙『松陰全集』

高藤馬山人捌

主宰が高知大在職時、学生訪問日を月一回と決め芭蕉関連の古典を輪読、「三冊子研究会」と称す。その会が卒業生O・B会となり、さらに高知新聞社その他文化諸団体主催の文化講座聴講生有志を加え、いつしか連句研究と実作の場となり、かつ郷土出身の寺田寅彦の研究をも兼ねた。結社性の排除、自由な発言、親睦を旨とした会をと念願している。

梅活けて松陰全集新たなり　高藤馬山人　涼
蕗のたうにも似たる人品　石原　涼　馬
ほつ〳〵と二十四気の地虫出て　徳岡　紫　乃
巣箱をさがす鳥のおとなひ　馬
次の間もまた次の間も月の影　涼
新酒の酔ひのかすかなりけり　乃
居合抜露を相手の身のかまへ　馬
山と積まれし決裁書類　涼
離婚にも昭和元禄のすがたあり　乃
さま変りせる心中の沙汰　馬
誰やらの推理小説まがひにて　涼
黒きかげもつ庭のつくばひ　乃
のつそりと蟇の出てゐる宵の月　馬
甚平を着て東北訛　涼
仁といふ医を志し無医村へ　乃
戦争にくむ民草の声　馬
花吹雪夜もはらはらと散りつゞき　涼
朧の時計まちまちに鳴る　乃
逝く春の珈琲ブラック卓の上　涼
娘心のむつかしきかな　馬
湯殿の灯消して点してまた消して　乃
鏡に映る頽れ気にする　涼
受験子の追込近き明け暮れに　馬
鳶滑翔の涯の海原　乃
円安のつゞく株街さびれつゝ　涼
軒場を借りて手相占ふ　馬
極楽もありて地獄も見ゆるなり　乃
犍陀多のぼる糸のキラキラ　涼
赤い鳥金の木の実をまき散らし　馬
蒔絵仕上げの月の工房　乃
うち払ふ夜寒の膝のうすほこり　涼
何に驚く犬の遠吠　馬
白樺の山の匂ひにマッチ擦る　乃
織雲ひとつとめぬ青空　涼
鳥啼いて社頭の花も咲くやらん　馬
乳母車ゆく陽炎の土手　乃

昭和五十七年六月一日首
昭和五十七年九月二十三日尾　（文音）

《高知・三冊子研究会―その二》

歌仙『菫　草』

石原　涼捌

浅茅生にむらさき濃ゆき菫草　石原　涼
紋白蝶々道の案内　徳岡　紫乃
春炭を焼くと小さき窯築きて　高橋　柿花
詩人とよばれ分校教師　岩村　牙童
中天に月かかりをり笛を吹く　村田　敬子
すゝきのなびき風のかそけき　西本　星夢
爽(ウ)かにホールインワン賞を得し　田ノ内　露風
熱海に近き地の利よき場所　柿
手土産のひとつをかゝへ供つれて　河野　伸子
逢へばさびしく逢はねばさびし　乃
かざしあふ提灯匂ふ分れみち　童
下駄の緒切れて赤き布出す　伸
夏芝居はねたるらしき月高し　涼
甚平を着て村の長たり　柿
遊学の子にマイカーをねだらるゝ　高橋　恒介
長距離走者やはり孤独か　吉本　青司
志賀の花吉野の花も見捨てたる　涼
印象主義派の春の画展へ　浜田　すみ子
気(ナオ)ままな子一人旅なりうららかに　敬
黒きドレスにピンクのリボン　星
ひたすらに塾の教師に焦れつゝ　童
母も娘(むすめ)も男遍歴　柿
枯芦を縫ふてひと筋川流る　敬
オリンピックに不参加の国　柿
落下する気球仕かけのビラ合戦　涼
ここは昔の平氏末えい　伸
僧俗を問はず険しき面構へ　童
雑草のみのはびこれる野ら　乃
月の出の暗さに灯りダム飯場　柿
村の祭のひよつとこ踊り　星
淋(ナウ)しらに虫鳴く昼の森を抜け　童
子の手を引きて家路たどりぬ　敬
立ちあがる潮騒の音風の音　童
漁を招きの礒宮詣で　柿
花を折るうつろごころに身をおきて　星
ひとひらみひら春の浮雲　乃

昭和五十九年五月一日首
昭和五十九年八月一日尾

（於・高知新聞文化教室）

《高知・三冊子研究会―その三》

歌仙『網代笠』

網代笠ぬぎし雲水日焼せる　岡本春人
風の湧くなる青芒叢　草間時彦
何処からとなく鳥の声流れ来て　春彦
紙に馴染まぬ新しき筆　春彦
酔ふほどに乱るる付句月高し　春彦
寄りかかりたるうそ寒の壁　春彦
そのかみの戸塚ケ原は虫の国　春彦
駆けて来たるは堀部安兵衛　春彦
腰紐を四本五本とほどきつつ　宇和川涼
黒板塀の夜も深みぬ　高藤馬山人
舟唄を粋に流して遠ざかり　徳岡紫乃
持ちものひとつなきは涼しき　彦
雲赤く染まりて夏の月出でし　涼
泉殿にて謀議果てざる　春
比例代表制の上位は学者なり　馬
何にもせずにさげる禿頭　乃
高きより花散りかかる浮御堂　彦
道に跼みて蜆売る人　涼
肩の子を時にはあやし風車　春
ジェットコースター轟音を巻く　馬
打ち上げし核の行方のおそろしき　乃
いまぞ小雨の降りはじめたる　彦
これやこのたましひぬけてとぼ〳〵と　涼
恋のうらみの半鐘をつく　春
ぼろ市の堀り出しものの麗子像　馬
財布の中の寒き夕映え　乃
マフラーの胸にクルスの銀光り　彦
馬小舎ありて馬の睡れる　涼
沈みゆく砂漠の果てに月浮び　春
零余子の飯をもてなされたり　馬
山と海ふたつながらの獺祭忌　乃
我が人生を綴る小説　彦
坂多きここらあたりは下宿町　涼
連翹の垣服は詰襟　馬
非時のキャンプファイヤー花の宴　乃
お茶ほろにがく春を惜しめり

昭和五十八年六月十二日首尾（於・俳句文学館）

《東京・鹿の会—その一》

歌仙『大寒』

宮下太郎捌

昭和五四年六月創立。毎月新宿文学館にて連句の実作講評を行う。
講師阿片瓢郎・宮下太郎　連衆二五—三〇人。

大寒の一刀入るる鮭頭ラ　坂田はま子
番屋にて聞く海の地吹雪　菊池由美
写真展オープニングの人溢れ　宮下太郎
経済大国底地値上り　畑村春子
手作りの月見団子はいびつにて　加藤真知子
秋の遠足明日に迫れる　志甫江美子
鰯雲故里の家今はなし　〃
叩きて洞の欅瘤々　は
抜ける程白き女体に出逢ひける　郎
手のぬくもりの消えてゆく朝　真
噴煙を上げし新島小さくなり　江
医療費変るニュース頻々　春
ざわざわと青桐ゆれて月涼し　太
車の中で缶ビール飲む　由
隧道を二十数へて岐神　は
揃ひ衿なる講中の人　由
北を指す花前線のゆるやかに　江
ハレー彗星見えぬ朧夜　春
蕨採るそばのぜんまい闌けてゐて　太
細くやさしき爪先の紅　戸田貝江
とまり木にずらりと並ぶ男の眼　芳田龍子
過去ふり捨てて惚れる刺青　笹川耕人
蠟涙のひとすじ凍る持仏堂　佐々木展子
落人部落春を待ちつつ　春
銅像は浦佐の駅にそびえ立ち　太
おしやべり雀休むひまなし　真
大統領二人現はるテレビなり　貝
野天風呂より顔上気して　真
長寿会一茶の里に月昇る　春
南瓜煮込んで工合見る嫁　耕
秋風にゴム匂ひ立つ水枕　〃
富士山のごとボタ山の見え　太
北斎は夜逃げ疲れに酒を酌み　耕
九十歳を越えしよろこび　龍
花のもと耳聡くして孕み鹿　展
素足の孫が青草を踏む　貝

昭和六十一年一月二十八日首
昭和六十一年二月二十五日尾　（於・俳句文学館）

《東京・鹿の会―その二》

歌仙『ぼうたんや』

山口みづゑ捌

ぼうたんや濡れ傷みたる花摘まる　黄川田美千穂
青き蜥蜴の消えし草むら　山口みづゑ
招きたる人を離れに案内して　加藤美智恵
のどを鳴らして膝に来る猫　山田章子
山際に淡く上りし二日月　安江眞砂女
触れてこぼるる芋の葉の露　戸田貝江
手（ウ）に取りし合せ鏡に秋つばめ　佐々木展子
部屋取り違へ慌てふためく　展
思ひ切り抱きしめられて胸痛む　み
神田明神近き銭湯　眞
天心の月に寒柝遠ざかる　穂
焼芋の店仕舞ふ頃なり　章
引き込めてまたちらつかす売上税　展
父の形見の辞書を携へ　穂
半世紀経しクラス会乾杯す　貝
湖のほとりにわらび長けたり　恵
秘佛在す醍醐の花にまぎれ入る　章
高架の駅の灯朧に　穂

春深（ナオ）し武原はんの舞姿　恵
ぱらつく雨にかぶる風呂敷　眞
ポケットに小銭チャラチャラ坂下る　貝
目利き自慢が根付講釈　展
藍浴衣恥かきの兒を妊りて　穂
やけぼつくいはダイバーの彼　み
連日の群発地震落着かず　恵
真珠ねむらせ筏たゆたふ　章
岬めぐる一番バスに乗りこめる　眞
吹き込む風の爽かにして　貝
盃に月受けかはす父と子と　展
夜長の碁打ち何時果つるとも　眞
白黒（ナウ）のファッション粋に着こなせる　章
叙勲の御沙汰晴れてかしこし　眞
とりかこむ取材フラッシュ一斉に　貝
母なる川に放たるる稚魚　展
久し振り故郷に帰りて花筵　貝
音なく清く春の虹立つ　章

昭和六十二年四月二十八日首（後半文音）
昭和六十二年五月二十六日尾（於・俳句文学館）

《東京・鹿の会―その三》

脇起歌仙『凩や』

山田章子捌

凩や座敷わらしの嗤ひ声　阿片瓢郎
蜜柑の皮のうづ高き山　安江真砂女
寒雀群から離れついばみて　畑村春子
信号赤に溜る人波　山口みづゑ
月の海上司の愚痴も出尽しぬ　若松照代
厄日は無事に過ぎゆくごとし　山田章子
清水の紅葉も今はさかりなる　真
彼の人が出る駅伝競走　み
恋に勝つ炎と燃ゆる下心　章
三鬼の海の色さだまれる　春
里外れかまぐれひとり黙々と　照
団扇ぱたぱた月の出を待ち　真
心太ヘルシーブームによく売れる　照
ブランドに凝り中流意識　み
大喪の手筈すすめる宮内庁　真
医術の進歩目のあたりして　章
渦汐の巻き余したり花吹雪　み
雨あたたかき瀬戸の大橋　春
おほらかに鐘鳴りひびく復活祭　照
馬の背並べトロットで行く　み
ジャムを煮る孫娘より便りあり　春
つきし口紅直ぐ咎められ　真
離婚式挙げて笑つて別れよう　み
氷を割りて蘭草植ゑたる　真
丸まつて炬燵にもぐる老いし猫　照
自信作なる「卒寿漫遊」　章
夜明来るエルミタージュの美術館　春
ひつきりなしに鉦叩鳴く　真
漣の長江下る月の船　春
菊の膾に母を偲びて　照
なつかしきショパンのワルツ弾いてをり　み
渾名呼ばるる公園の径　春
ひやかしに銀座八丁足伸ばし　照
時計の裏に名前刻まれ　真
みちのくへ花誘ひゆく日本晴　章
のどかにふかす細巻煙草　み

平成元年一月二十四日首尾（於・俳句文学館）

《東京・鹿の会—その四》

脇起歌仙『花　野』

宮下太郎捌

みちのくに荘園ありし花野かな　阿片瓢郎
とぎれとぎれに蟋蟀の声　安江真佐女
月させる縁に縫針進めゐて　芳田竜子
乳のしみある母の八つ口　佐々木展子
煤払ひ御用納めも明後日　遠藤翠
厨に吊す塩鮭の数　黒坂綾子
回遊(ウ)にアラスカを経てカムチャッカ　宮下太郎
夢のやうなる遠き日のこと　翠
小屋出でて少年口笛それつきり　展
胸元おさへさりげなくせる　真
アクセルを思ひ切り踏む高速路　展
消費税をば廃止するてふ　竜
アントニオ猪木が笑ふ夏の月　太
土用鰻をつぎつぎと焼き　綾
行列の裾にからまる犬の鼻　展
マイクにのつて読経流るる　真
散る花のまつただなかに坐してをり　〃
地酒一献春宵一刻　翠
白鷺城(ナオ)少し霞める美しさ　竜
元亀元正戦(さ)あけくれ　太
大奥の大河ドラマに夜を更かし　綾
睡気をとばす美人キャスター　展
神前の結婚知らす新年号　真
荒磯づたひ浜千鳥啼く　翠
寒昴風にきらきら露天風呂　竜
坊主あたまの男四五人　太
仮の世の仮の姿のそれぞれに　綾
お百度石を往きつもどりつ　展
櫨紅葉ちらりと白き実もつけて　真
チャペルの塔にかかる夕月　翠
秋灯下(ナウ)ルーペの中に地図を読む　竜
抱へて重き舞茸の嵩　太
海山の幸を広げて市の婆　綾
旅の記録のふえるアルバム　真
佐保姫のそぞろ行くまま花もまた　展
いつのまにやらあたたかき雨　太

平成元年七月二十五日首
平成元年九月二十五日尾　後半文音

（於・俳句文学館）

《松山・子規記念博物館友の会連句教室》

脇起歌仙『師走』

鈴木春山洞捌

平成元年四月開設。毎月松山市公報「まつやま」に開講日が掲載され、鈴木春山洞講師と紹介される。連衆は初心者が多く平均年齢も低い。第5回国民文化祭連句大会に備えての勉強会だったが大会後は更に盛り上がり毎回新しい顔が覗いている。そして定着率が高く市民の連句への関心の高さが窺える。一番喜んでいるのは子規居士ではないだろうか。

恋わたる人に文ミかく師走かな　松根東洋城
夜着の手が持つ筆の冷たき　鈴木春山洞
絵画市バーゲンセール始まりて　岡本美代子
電車カーブを走る堀端　加藤朋子
大盃に月を映して飲み干さん　後藤波久
松茸狩の獲物高々　松田靖夫
木ウの実降る子規漱石の住みし庵　朋洞
俤ゲ愛し狂ほしきまで　朋洞
紫の闇にシャネルの匂ひくる　朋洞
口を拭つて出し藪の径　波朋
住職の身代金は六億円　朋波
楽隠居して縁ンに涼める　菅伸太郎
草刈を終へたる我を月の射し　靖伸
牛売りし銭妻に渡しぬ　波
解散を近くし首相外遊す　〃洞
伊佐爾波神社朧磴ンに　代
賑やかに道後公園花見客
瓢ゴも腰に揺るるうららか　東ナオ西の壁を破りて噴きし春　代朋
珍味多きをする迷ひ箸　朋洞
瀬戸内の一本釣は鯛あげて　代
渦潮とけて流れ来るなり　波
人形も風邪声なりし腹話術　洞
懐手して喝采の嘆ンに　先野信子
目を偷みさりげなく置く走り書き　靖
化粧せずとも新婦艶めき　朋
イヤリングはづす耳許昂れる　波
ひとりふらりと入るスナック　代
路地裏に射し込む月の山はなれ　朋
舷を打つ舟唄の秋　靖
新ナウ酒呑み児を抱きあげて神輿守り　代
記念写真を撮つて貰ひし　波
国民の関心あつめ紀子ブーム　洞
「好きになつたらプリンスだつたの」　朋
花夕べ雨を静かに弾奏す　靖
雲雀啼く土堤足どり軽く

平成元年十一月二十三日首尾
（於・松山市道後公園・子規記念博物館和室）

《東京・慈眼舎》

歌仙『片時雨』

三好龍肝捌

最初の月例会は昭和六十年一月。舎名は観音経「慈眼視衆生」より。故師瓢左は、蕉風連句に流派などはない、ただ三十六歩往きて帰る心なし即ち前進あるのみ。汝はその骨法を会得、芭蕉正統の自覚を持てと龍肝を警しめた。これを蕉風の允可と自覚し、この連句基本を全員に植栽すべく努力、諸雅も領得に懸命。準舎員の三、四の米国人も研鑽中。

扑近藤蕉肝雅君入室

俳諧の国の風雅や片時雨　三好龍肝
晴れ間〳〵に潜む蒼月　赤田玖実子
機嫌よき狐の顔を見つむらん　金子恭子
重代の雛愛し初孫　近藤栗子（クリス）
ふらこゝの下の泥靴はね返る　近藤蕉肝
むせぶ胡弓にゆれる青柳　木戸口てる代
斜（ウ）に構ふ冷酒のグラスも浅い智恵　蛭海停雲子
肉もてあましつかふ行水　安江真砂女
宝物剣玉めんこマジンガー　清水由江
バスの遅れか早く来過ぎか　栗
株の線シスコの地震に動かされ　玖
文があふれる平内の箱　恭
月齢は15・6円となり　砂
宿はいづこぞ秋の蝶々　由
傷痕の戦さがたりに雁渡る　蕉
飛天菩薩は領巾をふるはせ　玖
踏み迷ふ吉野の霞乱れ舞ふ　栗
奥の桜もあとを慕ひて　蕉

卒業（ナオ）でねだりにねだるコンピューター　蕉
右翼街宣我鳴る防共　恭
ひそやかに公益質屋店を閉ぢ　玖
心せつなく理より毀たれ　雲
シャモニーをスキーで下る半ズボン　蕉
パズルのピーステンサウザンド　栗
ぬか味噌の樽に銹釘牛王札　恭
産前の妻榊ささげる　砂
流れ星罪の自覚の足らぬ月　る
道のくらきに誘ふ躍り手　由
案山子守るバイオ育ての大南瓜　雲
黄瀬戸傘立て破れ傘　る
喜（ナウ）こんではしやいでかける赤電話　蕉
課題レポート不審紙貼り　栗
波羅門とパリジャンの佇つ孔雀園　玖
旧の元旦しづかなる市　肝
花は咲きかねての件も落着し　蕉
眼まぶしく光る残雪　恭

平成元年十一月二十八日
（於・相模原市上鶴間　桃夭樹）

《岐阜・獅子門―その一》

歌仙『嶽見ゆる』

国島十雨捌

わが獅子門は、松尾芭蕉を宗祖と仰ぎ、蕉門十哲の一人、各務支考を始祖とし連綿と今日（道統第三十九世青々園、國島十雨）に至り、全国に美濃流として親しまれている。大正八年、森桂園により〝俳句と連句〟の研究誌「獅子吼」が創刊され現在六三〇号を越えた。祖翁が到達された「軽み」の蕉風を伝承し、連句実作上の指針としている。

嶽見ゆる谿の夕映え蕎麦の花　渺美
玉兎をかすめ渡る鳥影　双十
村役の毛見の済みたる札立てて　湖城
疲れをほぐす地酒一本　啓子
後ずさりして吠え猛る小さき犬　嶺火
尋ねあぐねる暗き門標　伝明
雑談（ウ）のあとに取り出す奉加帳　静女
胸をたゝいて旦那顔する　植川千代
行先は下呂の泊りか山代か　支川
袖摺り合うて忘られぬ仲　卓矢
ラブホテルネオンの色のなまめきて　青桐
陶の狸のとぼけたる面　華宵
メルヘンの月団々と山離れ　烏水
あけびとる竿かつぐわらんべ　紅雲
音たてゝ秋の出水の簗の川　すみ子
まつ赤に塗りし橋のかゝれり　鈴代
爛漫の花に写真のコンテスト　勝忠
春椎茸（はるしいたけ）料理が売りものの寺　一悟

ひらひらと（ナオ）風船窓に二階バス　淳夫
又しても富士見えぬ因縁　康隆
溶岩の流れた島は動転し　てる子
慰問の文が恋の馴れ染め　繁子
踊り子の宿にひと夜の契りして　稔
朝湯もよいが朝酒もよい　京雄
寒むくと石の井桁の深き井戸　義雄
顕彰の碑に山茶花のちる　ヒロ
堤防の小段に牛のつながれて　善家
始動に入りしライスセンター　鷲見千代
中天に昇り切つたる望の月　守
障子に来たるうま追ひの声　國士
麻雀（ナウ）はもう一卓（いいちやん）とねばられる　和子
カップラーメンあつくをふく　陽山
保険金億といふ金積みたして　一恵
政治浄化を望む民衆　一悟
藍川の水洋々と花ざかり　寿仙
獅子庵のほとり舞へる白蝶　十雨

《岐阜・獅子門―その二》

歌仙『ひつじ草』

ひつじ草咲かせゆかりの池眠る　尾藤静風
遠く近くに透ける蟬声　梅田双十
移りゆく雲の形の彩昏れて　小川守
とうとうととと鶏を追ひ込む　春日井朱雀
裏門に門をさす十三夜　國島十雨
南蛮黍の匂ひ漂ふ　洞下一恵
里祭邪気を払ふて獅子を舞ひ　近藤寿仙
尾張訛りで話まとまる　〃
連れだつて新居さがしの日曜日　恵
子授けと云ふ土鈴購ふ　双
ゆるゆると尻振つて行く赤電車　風
城の鯱鉾おろされてゐる　雀
余震来て月は丸・さを失へり　風
虫聴きつ酔ふ六四の酎　唐渡北勢子
評判の悪い新札そぞろ寒む　雨
駐車違反のシール貼られる　守
花堤香具師の口上人の群れ　〃
双眼鏡に揺れる陽炎　高橋啓秋

國島十雨捌

風船のふはりふはりと逃げてゆく　高木和子
ダムの補償の決る徳山　雨
荒波を乗り切る岸の地蔵尊　川島四郎
ニューリーダーは話題ふりまく　北
ぼろ市に金鵄勲章賣られ居り　仙
鳴る北風に急ぐ帰り路　常川和光
おづおづと背中の方よりもぐり込み　守
忘れられない肌のぬくもり　仙
鉈彫の木屑が遊ぶゆらゆらと　高木和子
刈り始めたる飛騨の車田　雨
布袋台からくり山車に月澄みて　守
地酒まろやか虫の音もまた　光
どちらかと云へば無口も親ゆづり　〃
太公望が何よりも好き　雨
防衛費兎に角とほし一安堵　秋
世代交替国際化する　雀
満願の笈をさめんと花の寺　澤田蘆月
日が傾きて亀が鳴き出す　北

《岐阜・獅子門―その三》

脇起歌仙『初時雨』

國島十雨捌

旅人とわが名呼ばれん初時雨　松尾芭蕉
祖師の庵も二回目の冬　國島十雨
さまざまの庭木生ひたち狭くして　小川守
遊ぶ雀の声のほがらか　高木和子
麺棒をくるりとかへす宵月夜　高橋啓秋
秋の袷のしつけ糸抜く　松澤光津
町内で割当てらるゝ赤い羽根　山中淡月
カード電話の長いやりとり　恩田とくお
変身にロッカー使ふ女学生　田中湖城
立ちし噂もなんの火遊び　川島四郎
牧尾ダム枯れ節水をせまられて　相宮緑峰
忘れたころに地震ひとゆれ　伊藤白雲
ビヤガーデン大ジョッキに月の笑み　岸一悟
折たゝみ杖しまふ短夜　梅田双十
落書を走る車内でする子達　常川和光
捻り鉢巻客を呼び込む　村瀬頼霆
空洞を持つ銘木も花盛り　唐渡北勢子
ジャンボ田螺に困る百性　山本米子
種案山子（ナオ）またの勤めに納屋を出て　相宮嶺火
寂を伝へるお点前の腕　平光美泉
隠れ見るひとが待つとはつゆ知らず　大野古久志
ディスコで別れモーテルで逢ふ　梅村卓矢
入籍を迫られいつもはぐらかし　小瀬渺美
赤も黄もある庭の千両　春日井朱雀
埋もれし水琴窟を掘らんかな　和子
X線を観音に当て　近藤寿仙
桝酒を呑みに連れ立つ足軽く　古
江戸の擬宝珠を残す大橋　朱
月の名の夜毎に変はる面白さ　美
雁の竿折れ曲りゆく　守
神（ナウ）かくしありたる宮の秋祭　双
羅宇屋の笛の下町に鳴る　和光
噴火して溶岩テレビ溢れ出し　雨
孫の顔見てニコ〳〵の婆々　執筆北勢子
瓢箪を土産に選ぶ花の山
降りくる道のすぐ霞むなり

昭和六十一年十二月七日首尾
（於・忠節天神・忠節公民館）

《岐阜・獅子門―その四》

初懐紙歌仙『兎づくし』

國島十雨捌

丁卯の兎づくしを吉書かな　國島　十雨
幸の溢るゝ蓬來の台　尾藤　静風
蕗の薹雪解を待ち顔出して　近藤　寿仙
命大事に二日灸する　唐渡　北勢子
鮎挿を影にうつして湖の月　岸　一悟
過疎の里にも増税の声　川島　四郎
足らぬ酒買ひに自転車借りに來る　高木　和子
夜がな寝られず朝鴉啼く　清水　としゑ
結んでは又ふりほどき恋の髪　大野　古久志
別れ話に虹はるかなり　和
美しや姿さかさの五月富士　北
けふのコースは石和温泉　雨
葡萄棚待宵のまだ明るくて　仙
くるよと見れば崩れとぶ雁　雨
ほつほつと鮠飯の炊き加減　〃　北
お千代保稲荷は昔海とか　小川　守
予想屋の新聞を手に花堤　北
ボートレースに拍手喝采　雨
留年と今年も決めて万愚節　守
仲間集まり盲牌に凝る　北
碑の裏に興醒めのする文字の列　雨
漫画本だけ伸びる売れ行き　春日井　朱雀
向ひあひ深く座りし置炬燵　北
玉子酒にて色気でるなり　仙
老いらくの恋とてお辞儀してばかり　和
寺が反対村の合併　北
ユーモアも混じへて話す選挙通　仙
あの手この手で地上げ屋が来る　高橋　啓秋
月丸し高層ビルのレストラン　仙
朴葉味噌てふふる里の味　悟
百姓に停年はなし赤い羽根　常川　和光
七夜の宴は産婆上席　雨
堂の名の麦焼酎に足とられ　梅田　双十
尻尾がとれて足を出す蝌蚪　光
花守の労をねぎらひ咲きさかる　北
旧道のどか不破の関跡　北

昭和六十二年一月　十一日首
昭和六十二年六月二十八日尾
（於・岐阜市黒野上ノ切公民館、京町公民館）

《岐阜・獅子門―その五》

脇起歌仙『かくれ家や』

國島十雨捌

かくれ家や月と菊とに田三反　松尾芭蕉
刈りあげ祝ふ裾分けの餅　青々園十雨
蚊の姥を平手で打てど逃げられて　伊藤白雲
朽ち舟なほす老いし棟梁　松澤光津
返へしくる谺訛つて冬ぬくし　曽根須恵子
むしろ一ぱい乾く割干　武山照子
坐禅堂襲ふ睡魔に堪へかねて　沢島郁子
礼深くして受ける警策　子安美代子
肉付の面を土産に買ひこんで　松岡裕子
背に「の」の字を書いて別れる　工藤星峰
益軒の「養生訓」を持ち出され　田中湖城
ドライビールに月が涼しい　雲
廻り道廻り道してそれでよし　部田春子
大河ドラマは武田信玄　高田久枝
よそ者と言はれながらも住みついて　西脇美智子
男三人女三人　提民女
縄の輪を花見電車として遊び　唐渡北勢子
水を替へては田螺鳴かせる　渡辺きん
すつぽりと黄沙に山が隠されて　峰
山東竜が引越してくる　恵
正午には忙しくなる出前持ち　代
化粧丹念猫の出迎へ　小林美苑
吉と出た神籤見せ合ふ神の留守　旧井功
絡めし足の白い屏風絵　小林久月
ほつれ毛を直す鏡に朝の地震　田辺啓子
キラ〳〵光る木曽の三川　裕
駆引きであつてはならぬ消費税　堀内洋子
丘にのぼりてオカリナを吹く　郁
ぐづる子に月の兎のわらし唄　城
猴酒てふをぬすみ飲むなり　木村和喜
秋競馬鼻先に舞ふ負け馬券　峰
ころがつて行く高騰の地価　浅野繁子
看板はみな名物を売り文句　苑
光り噴き上ぐ駅前の塔　智
ざいがう道歩け〳〵と花盛り　津
別れの像に夫婦てふてふ　啓

昭和六十三年十一月二十日首尾（於・大垣文化会館）

《岐阜・獅子門―その六》

勝付歌仙『十　徳　は』

國島十雨捌

十徳は袴の要らぬお元旦　國島十雨
蓬来盆に髭を振る海老　大野嵐山
借景の霞棚引く嶺々にして　唐渡北勢子
馴れし鍬にて畠打つなり　常川和光
朧月やうやく背ナの児が眠り　伊藤美和子
机一ぱい読みかけの本　谷口章部
斑ウ鳩に太子の遺跡見つけられ　岸一悟
思ひ出はみな美しきもの　鈴木北伸
誓ひ合ふことば神父の前に立ち　岡崎愛土
上のそらにて退社待たるる　岩永極鳥
核家族ふえて団地があちこちに　白潟思月
テレビアンテナによきによきと峙つ　松井敏子
おとがひに月の光の寝付かれず　本屋良子
羽音たよりに払ふ溢蚊　部
天籟に色そへにけり網代打　高木和子
瀬田の唐橋からかね勾欄　飯田呼牛
花の山法灯たえぬ屋根の反り　中尾青宵
春の声撒くジェットコースター　良
ナオポシェットに仔猫を拾ひ帰り来る　光
手毬作りは老いの楽しみ　和
どこまでも夢はひろがる空の色　伸
砂漠緑化の奉仕計画　鳥
縁談は馬耳東風と聞き流し　部
第一陣の冬鳥の群　宵
芝枯れていづこに球のころがれる　伊藤白雲
富士をまともに飛ばす小便　川島四郎
燃えさかる不義の火遊びたのしくて　月
人には言へぬ恋の柵　土
ふかぶかと霧に流るる十三夜　伸
ひそかに渕を下だる落鮎　和
ナウ野あがり酒案山子に軒を守らせて　牛
マドンナ旋風吹き抜けて行く　勢
さぐり合ふ攻守を逆に消費税　敏
薬持参の一泊の旅　雨
鯉はねて動き出したる花筏　仙
伝統ここに俳諧の春　近藤寿

昭和六十二年一月二十五日首
平成元年十二月二十五日尾

（於・獅子吼誌上）

《安城・秋紅雅友連》

歌仙『サングラス』

昭和四十九年、俳人大野秋紅を中心とした気尽な連句遊びの雅友九名にて発足結成。結成以来十七年。その間に連中の恒川浮月（愛知）株木芳樹（尼崎）松崎杜人（安城）鈴木香歩（東京）清水瓢左（鎌倉）などの知友・先輩を亡くしたが、現在十人程の会員。俳諧の両輪たる俳句と連句の両立を計り自由に同好の縁者と文音を主とし七十巻に及ぶ。

サングラス外したしかに故郷のいろ　大野秋江
今を盛りに競ふはまなす　金谷松翠
最果ての蟹族といふ名を負ひて　紅翠
流行り廃りは時のなりゆき　翠紅
夜の水月汲みこぼし汲みこぼし　紅翠
裏山かけて鹿の鳴くなり　翠紅
丹精（ウ）の主は誰そや青ひさご　紅翠
独自にひらく土光哲学　翠紅
連日の会議に魂をすりへらし　紅翠
もう一本と頼む晩酌　翠紅
何事も世話女房に任せきり　紅翠
商品券ですます御歳暮　翠紅
ビル谷間冬三日月の見え隠れ　紅翠
臨時ニュースの走る電光　翠紅
棚ぼたで選ばれ総理強気なり　紅翠
お人柄ともあれでなかなか　翠紅
花の下唄ひ踊つて且つ飲んで　紅翠
龍天を指し登る勢ひ　翠紅
社日（ナオ）とて種蒔く支度急がるる　翠紅
同じ所でまたも躓く　紅翠
公金の授受に汚職がからみあひ　翠紅
リコール前に市長退任　紅翠
病院へ逃げて面会お断り　翠紅
待ちうけて読む朝の新聞　紅翠
打水の庭木の緑鮮やかに　翠紅
空蟬の目の生きて輝く　紅翠
落人のいはれ伝へる峡の村　翠紅
変色のまま残るフィルム　紅翠
月の出とおぼしき頃の薄明り　翠紅
ひとり宿りし部屋のうそ寒む　紅翠
一茶（ナウ）にも句ありおどけた放屁虫　翠紅
浅間の煙のをさまるはいつ　紅翠
減税の餌に倍増す消費税　翠紅
小さい川に橋の多さよ　紅翠
ゆく水につれて散り浮く花の屑　翠紅
覚悟新たに平成の春　紅翠

平成元年八月五日首
平成二年二月二十日尾　（文音）

《富山・樹氷連句会》

歌仙『うろ有漏と』

是行修吉捌

樹氷連句会は昭和六一年の発足で、会員は六名、昔、若かりし頃、蔵王でスキーに熱中した仲間が主体で始めたので、樹氷の名称を冠した次第です。会員の処在が、神奈川、富山、千葉、福島、宮城の各県に散っているので、連句はすべてFAXによる文音で、付句に添えて各自の近況が書かれてあるのも、またひとしお良しと楽しんでいます。

うろ有漏と遠き日辿る冬日向　是行修吉
肩に優しき枯葉ひとひら　紺野笙治
「そしてまたあした」となのるカフェありて　犬島正一
片下駄ぽんと空を占う　久我妙子
人気なき公園広く黄なる月　紺野愛子
白露踏んでETが来る　修
木犀の館賑わう舞踏会　妙
ワルツなどよりサンバがお好き　正
両親へ土産にリオの嫁連れて　妙
火照る身を先ず浴衣に包む　笙
たもとにも胸にも蛍入れてみる　修
ゆらぐ星空手にとるごとく　愛
ひとすじに干魚匂う月の町　正
艶歌聞きつつ飲む温め酒　妙
秋時雨猫背の杣の独り言　笙
餌を頬ばりて栗鼠鞠となり　愛
急流を誰が棹さすや花筏　笙
F1レース春をつんざく　修

風船で飛ばした便り返事来て　妙
こはそもいかに達筆の婆　正
拝領の品と自慢の名器見せ　妙
時を経てなお問いかける謎　愛
枯野には母の守りし石仏　笙
年が明けても茶断ち塩断ち　正
でしゃばりと男勝りが邪魔をして　妙
福は寝て待て馬で来る騎士　愛
ナナハンに武者振りつけば海走る　修
悲しき心風になびかせ　笙
高層に住んでひときわ月白し　妙
秋の山へと試す階段　正
松茸の籠に集まる目の重さ　愛
学芸会でセリフ忘れる　修
予備校のオウムがしゃべる京訛り　笙
若草萌ゆる古里を恋う　妙
角隠し見え隠れ行く花吹雪　愛
雲の形に託す春愁　正

昭和六十三年十一月二十八日首
平成元年九月十三日尾　（文音）

《所沢・湘南吟社》

歌仙『花通草』

倉間千代捌

昭和四四年八月、都心連句会主宰清水瓢左師鎌倉七里浜に転居と同時に設立。都心連句会の湘南在住者が集まり瓢左師の厳しい指導を求める勉強会となった。名称は師の発案で地名による。瓢左師没後も清水邸で、毎月第四日曜日午前十時より行っている。師の「蕉風の心を見失うな」がモットー。又、連句の命とも言うべき連衆の和を大切にすること。

師の笑顔深空にありき花通草　倉間千代
ボートの舳掠め乙鳥　土屋実郎
鮒膾格別なりと杯あげて　名古則子
ポケットの中小銭ふくらむ　金子恭子
月良しと駅まで迎へ頼みけり　小林静司
案山子の被る笠は斜めに　杉浦智恵
泉石を洗ひ清むる秋の水　伊東桃庵
釉の肌合ひ志野の皿らし　司
文出してときめきてゐしこともあり　則
身を助けたる三味を抱へて　恭
危いよ横断歩道立ち話　郎
小さき八百屋が消費税とる　代
月昇る河童が山の神となり　則
扇開いて白檀の風　恭
姉と旅昔語りに時忘れ　庵
コーヒーよりも緑茶好まる　恵
花の里耶馬台国のほの見えて　司
蝶の仲間に入る童等　高木義厚

春昼の爪の先まで無為無策　厚
易者宣ふ剣難の相　郎
社会記事よりも漫画の辛辣に　恵
北京に飛火学生のデモ　庵
歌留多取り手の甲の傷大切に　〃
寒天小屋の熱き抱擁　郎
花嫁は俥にゆられ振りかへり　則
色紙一枚般若心経　司
いかにせん地球の汚染続々と　則
ペットのチワワくんくんと鳴く　恭
休耕田あまねき月に静もりて　厚
柿熟れそめぬ速歩楽しむ　代
秋刀魚焼く煙流して疎まるゝ　庵
酒は男の子守唄とや　厚
携帯の硯に垂らす宗祇水　〃
晩霜予報触るゝ農協　恵
御衣黄の一本司法研修所　郎
風鐸古び塔のかげらふ　代

平成元年四月二十三日首尾（於・鎌倉松隣居）

《大府・正風大府支部》

歌仙『秋　燕』

豊明市暁会（主宰加藤竹翠）大府市大府俳壇（主宰久野渓流）は共に五十年以上前に結成された。両会は昭和二十三年に大津無名庵寺崎方堂師の正風に入った。連句懇話会に加入する際に連絡の便宜上両会を合わせて正風大府支部と称した。熟練者は各地の俳人と文音に依って風交を行っている。地区内では毎月新人の育成を兼ねて歌仙を行っている。

山襞の深き翳りや秋燕　鈴置一　花
澄みたる空に白き昼月　山岡暁　風
賓客に新酒の味を誉められて　花
払へど猫の膝に寄り来る　風
夜の間に積りし雪の尺近く　花
瓜籠作りも地方色あり　花
口伝に古き民話のつたへられ　風
祖谷の乙女のどこかたをやか　花
恋病とは今時に珍らしき　風
愛染明王に朝夕の願　花
大荒れのあとに静かな波の音　風
老舗の暖簾落付のあり　花
月ほめて寝るには惜しき門涼み　風
祭用意に作る早鮨　花
民営の一番電車飾り立て　風
切通しからつゞく浜道　風
此のあたり花はちらちら咲きはじめ　花
門葉揃ふ野遊びの興　風

家苞に鶯餅もよからむや　風
茶道指南は祢宜の片手間　花
狭間潜りしてより幾世此処に住み　風
美林となりし桧山杉山　花
縁組は今も家格を言々し　風
既成事実を示す腹の子　花
卵酒作る銅壺をたぎらせて　風
家の中でも頭布離さず　花
墨柄に挟めぬ程に墨ちびり　風
無の字の多き般若心経　花
葦葺の高屋聳ゆる望の月　風
妻恋ふ鹿の声のをりをり　花
紅葉する山にカメラを撮りつゞけ　風
硫黄の匂ひ強き湯の宿　花
壁羽二重とて余所行に贅ならず　風
日和続きに心浮き立つ　花
降る花の中を園児のがやがやと　風
行方定めず逃げる風船　花

平成元年二月一日首
平成元年七月二十日尾　（文音）

《岡山・正風和気支部》

鼎吟歌仙『廟前の楷』

桐山北天捌

蕉門梅室から継承する「餘花園」の机が和気町にあり、その傘下に同好者が集り現在に至る。当初は〝全剛吟社〟として発足、昭和二十八年四月、五ケ町村合併により「和気吟社」として現在に至る。正風和気支部は、十八世寺崎方堂師以後の名称。高齢者あけぼの大学及び地元公会堂が各々月一回、俳句・連句講座を開催。心の豊かさを求めて行きたい。

変りゆく世を廟前の楷芽吹く　桐山北天
蝶舞ひ上がる苑のそよ風　桐山和美
春の雪独り句集を繙きて　藤本花子
傘寿の我れに古稀の門弟　天
臥待ちの月に棹さす渡し守　美
夜をとほしてしげき虫の音　子
和気富士の霧も晴れたり稲を刈る　天
掛軸売りの訛馴染めず　美
姑留守とまことしやかに断りて　子
婿には呉れずやりたくはなし　天
屋台骨揺るがす娘みたり居り　美
光政公の墓所に参拝　子
俳談の尽きぬ麦酒を月の縁　天
祭囃しの峠越え来る　美
定年後二度の勤めの口ありて　子
舁ぎ出さるゝ選挙参謀　天
次々に人の増えゆく花の城　美
黄砂蔽ひて山も霞める　子

御殿雛下段にあれば胡坐掻く　天
煮つまつてくる再婚話　美
妊婦服工夫こらして二枚縫ひ　子
広間狭しと高脚の膳　天
賑やかに外孫集ふ一周忌　美
北風を防いで寒牡丹守る　子
森繁の十八番を真似て「枯すゝき」　天
外人投手何時もガム噛む　美
久々に伏見稲荷へ連れだちて　子
預けもせぬが銭は借らない　天
忘られし案山子を照す後の月　美
新米入れて満たす米缶　子
初猟の犬も帰りの顔となる　天
不動明王いかめしき面　美
松割木山と積まれし陶の町　子
銀の腮髯しごく宗匠　天
囀りは日々賑やかに背戸の花　美
陽も麗らかに歌仙巻き終ゆ　子

平成二年二月十五日首
平成二年三月十四日尾　（於・北天居）

《松本・信州大学連句会》

経緯・昭和三十六年九月、根津芦丈師を招き連句の教えを乞い以後、毎月、歌仙を巻く。主宰東明雅。主宰が信州を去られた後、一時中断したが、宮坂静生が継承。
現況・毎月一回、俳誌岳事務所で歌仙を巻く。
方針・作句体験を連句に生かすと同時に連句体験を俳句に生かす。

歌仙『雪　形』

宮坂静生捌

雪形の蝶の耀ふ村祭　宮坂静生
拡声器よりうぐひすの声　柳沢和子
霞みをり絵の中の川そのままに　市川葉
早めに灯す一人居の部屋　窪田英治
月出づるからまつの森歩み来て　小林貴子
相撲甚句を好きな校長　曽根原幾子
秋逝くと紫蘇かまぼこのほくほく煮　貴
余生たのしむ為に連句を　田多井みすゞ
赤髭の祖父の躾のきびしくて　本間美翠
海の際まで続く牛糞　折井眞琴
アメリカへ飛行免許を取りに行き　和
星占ひの恋は信じず　治
蝙蝠が蝙蝠慕ふ月の夜　貴
かつらはづして湯浴みする尼　幾
ほら吹きのなんのかんのとパンを食べ　葉
寄付金つきの切手買はされ　和
花万朶馬券ちりぢりばらばらに　琴
蜃気楼出て鷗ぎやあぎやあ　葉
日脚伸ぶ筬目数ふる媼ゐて　ず
眼鏡のつるにピエールカルダン　葉
混浴の湯気にあわてぬふりをして　翠
よき恋せよと恩師より文　貴
婿様がドレス踏み踏み祭壇へ　琴
涙落して埋火の上　ず
三滴は消費税なり酒一升　貴
牡丹灯籠からんころんと　幾
夕凪の天草小屋に捨て赤子　治
岩の形の象亀蛙　和
木の実降る降るにまかせて月が出る　葉
くるくるぱあと案山子に言はれ　貴
露けしよ夫より先に床に入り　和
壁の中から都々逸の声　翠
高原に教会忽とあらはれて　幾
身づくろひする暮れの鶏　琴
花冷えの身欠鰊の哀れなる　生
野焼の煙たゆたへる碑に　ず

平成元年四月二十八日首尾
（於・信州大学宮坂研究室）

《新庄・新庄北陽社―その一》

歌仙『霧深し』

笹 白舟捌

当北陽社は明治四十一年に発足以来八十余年、俳句・連句を続けて参りました。翁が奥の細道で泊られた封人の家を修復完了した昭和四十八年に「のみしらみ」の脇起し歌仙一巻を和額装に仕上げ寄贈し掲げた。又、翁は当新庄渋谷盛信亭に二泊し歌仙他を残した。之を記念して平成三年には第三回目の全国連句新庄大会を催しました。

霧深し出湯の朝市賑はへる　笹 白舟
待つ甲斐ありて栗の名月　伊藤 香月
威勢よく鮭真黒に上るらん　武田 富水
宅配便の土産重たし　加藤 清流
縁側に小春賜り毛糸編む　斉藤 一竿
碁将棋友に冬籠るなり　岸 春生
歌(ウタ)声の弾む高速バスの旅　坂本 露香
散歩帰りにもらふたまつさ　阿部 一笠
新婚を電話でのぞく里の親　大川 耕月
空晴々と鳥海の山　伊藤 緑雨
額づけば注連の見事な宮居にて　金沢 苫舟
笹の葉で汲む清水冷たき　竿
浴衣がけ庭下駄軽き夏の月　富沢 比佐女
奥の御廟所揺るる香煙　斉藤 孤柳
百歳の坂を越したる長寿村　耕
海の底にも汽笛間近かに　早坂 孤月
客引きに取囲(かこ)まれし花の道　渡辺 黙咲
野は麗らかに蝶のたはむる　荒木 清玉

宇治(ナオ)の茶に鶯餅の香りよく　苫
総裁戦は今がたけなは　山崎 松風
老楽の恋の芽生えもたのもしき　孤
肌もあらはに写る手鏡　黙
天下とる雷火立つなり桶狭間　耕
早き御平癒祈る民草　竿
見事なる兼六園の庭ひろし　露
窓を開けば降りしきる雪　孤
罰金で初心にかへるドライバー　影沢 笑山
好きな読物推理小説　露
飛石に露の光りて月清し　山崎 茶
紅葉の山はつづら折なり　竿
串柿(ナウ)も化粧のできて庭の先　耕
喪中の便り多いこの頃　香
タンカーに波立ちしぶくペルシャ湾　苫
村興しする話まとまる　柳
幔幕を支へて花の真盛り　白
八万石は長閑なる里　執筆

昭和六十二年十月十一日首尾
（於・新庄市民文化会館）

《新庄・新庄北陽社―その二》

新庄市立図書館新築記念

歌仙『蟬の声』

図書館のテープカットや蟬の声　笹　白舟
樋の古木の造る緑蔭　斉藤一竿
見渡せば山脈遠く連りて　荒木清玉
風さわやかな窓を開きぬ　斉藤孤柳
月天心一つかけらの雲もなし　伊藤香月
萩は静かに真盛る庭　金沢苫舟
喜捨(ウ)により嘉作稲荷は甦り　渡辺竹園
オリンピックのメダル尊し　岸春生
テレビドラマときめく胸の恥かしく　玉
小雨の中を相合の傘　村松松風
国会の行方を阻むリクルート　坂本露香
龍の彫刻残す名匠　大川耕月
冬の雁五重の塔に月薄し　内田素舟
鏡の道を押すや炭橇　富沢比佐女
賑やかに方言交りに譲り合い　竹
リゾート開発今が酣　井上玲虹
記念樹の花は見事に咲き揃い　早坂和風
野立の席をなぶる軟東風　伊藤緑雨

李蔵(ナオもぐぞう)山裾を取巻く夕霞　横山稲園
心のつかえ晴らす晩酌　阿部一笠
紋服の龍馬がはいた革の靴　玲
旅の土産に碁石すすむる　熊谷喜楽
豊満な肌に金髪なびかせて　武田富永
国際婚を息子実践　苫
時鳥夜明けの峠越えてゆく　玉
遠しと思う舟泊り道　浅沼葛子
広縁に丹精の菊飾りおき　耕
連勝記録伸す秋場所　加藤清流
月清し笑みを浮べる仏たち　緑
柵をめぐりて金山の牛　三上渓人
飛行機(ナウ)は一直線に空を行き　和
陛下のご平癒祈る民草　玲
灯火は温く明るし雪の宮　喜
威勢よき声はづむ競市　露
花に酔い人に酔うたり旧城址　白
文化最上にのぼる陽炎　海藤一瓢

昭和六十三年十月九日首尾

（於・新庄市民文化会館）

《新庄・新庄北陽社―その三》

北陽社創立満八十年記念

歌仙『紅葉山』

笹　白舟捌

ふり返る路ははるかに紅葉山　笹　白舟
文化の佳き日祝う俳莚　伊藤香月
和やかに円かな月に酒汲みて　大川耕月
父が得意の小謡も出る　斉藤一竿
涼しさを求め単衣の散歩道　海藤一瓢
青葉を縫って走る自動車　富沢比佐女
遍路笠並ぶ札所に辿りつき　早坂和風
野はうららかに花嫁の馬　浅野目弄風
頼母しや新妻姿五加木摘み　熊谷喜楽
研ぎも鋭き鎌の切れ味　山崎茶香
悠々と下る舟唄最上川　荒木清玉
貰った土産あげ底の菓子　村松松風
移りゆく世に煌々と冬の月　内田素舟
むささび狩りの樔の跡　岸春生
リクルート税の改革阻むなり　渡辺黙咲
ぽつりぽつりとぼろが出てくる　三上渓人
満開の花も驚く大鼾　阿部一笠
鰊ねらって野良猫の寄る　伊藤緑雨
朴葉飯子供の頃がなつかしく　鎌田実与子
世相グルメの経済の国　八戸一橋
短か夜の暁破る本能寺　山崎松風
雲の切れ間を時鳥飛ぶ　瓢
老杉の御神坂長く奥の宮　横山稲園
そっと刷いたる薄い爪紅　香
寝乱れの髪恥かしき朝鏡　金沢苫舟
押売りめがけ吠える番犬　坂本露香
ボーナスの軽きふところ雪の道　浅沼葛子
句碑の移転に募る浄財　竿
豊作を祝う踊りに月高く　渡辺竹園
千輪咲きの菊見事なり　加藤清流
威勢よく鮭上りくる母の川　小川庭水
古代のロマン語る木簡　斉藤孤柳
映画館時の流れに逆えず　影沢笑山
芭蕉イベント競う町村　井上玲虹
北陽の傘寿芽出たし花の宴　白
希望溢るる三元の春　武田富永

昭和六十三年十一月五日首尾

（於・新庄南部公民館）

《三田・すみれ連句会》

歌仙『平成と』

①昭和六二年四月連句かつらぎより独立
②「すみれの花咲く頃……」より命名
③会員二四名（俳句のみの準会員四名）月例会並びに文音指導
④たのしく連句の勉強をすること

岡田水都子捌

平成と四たびの元号老の春　歌川 山黛
歯ごたへしかと粥柱佳し　岡田 水都子
梅が香に庭の陶榻ところ得て　山崎 綾子
輪を画く鳶の笛ののどかさ　林 由子
大いなる渦の海峡おぼろ月　民岡 照子
科学技術は日々に新たに　田島 竹四
鉢巻を締めて翡翠を磨かなん　小林 樹巴
毛槍抛り上げ奴道中　峯友 昭代
一山の松蟬はたと鳴きやみて　山田 八重椿
遊船泛べ思ひ告げんと　中島 ふゆみ
夢うつつラストダンスの灯の暗く　宮本 藻屑
婿になるならこいさんの方　永井 一子
うらなりの瓢箪ころぶ土間の月　竹山 美代子
そぞろ寒さの無人駅なり　松宮 弘枝
出来秋に活気あふるるUターン　関本 正緒
総檜建て校舎落成　綾
作り花リボンたたみて七重八重　四
ほうほうほうと鳩時計鳴く　巴
朝涼に産土さまへ詣でんと　由
濠をめぐりて藻刈棹さす　生
飛鳥路を銀輪連ね光らせて　舟
君の瞳はエメラルドグリーン　代
「ベルばら」の恋のさまざま絢爛と　都
女出入で大臣失脚　黛
右ひだり行つたり来たり檻の熊　み
断酒の会へ木枯の道　一
すは幽霊小田原提灯ふつと消え　四
ほほけ芒にだまされはせず　椿
群なして鮭遡りくる月の川　巴
秋のしぐれに打上げの寺　藻
礼宮さま紀子さん晴れて御婚約　生
目白通りをデートコースに　由
ゆれ〳〵てプリーツスカート清楚なる　枝
遊び足らざる永き日も暮れ　黛
初花の牡丹桜や表坂　綾
陽炎もゆる曲水の宴　都

平成元年一月十日首
平成元年十一月九日尾　（文音）

《寄居・啐啄会―その一》

歌仙『落椎』

森　三郎捌

啐啄の機　とは中国の古諺。卵が孵るとき内側から雛が殻を叩く（啐）機と、外側から親鳥が殻を叩く（啄）機とが同時なれば殻が破れる、との意。若者と年寄りが心を合せて諸々の我見や旧弊の殻を破るように、との心で先師石沢無腸が命名下されたもの。

椎落つや昼を灯して三夜堂　森　三郎
思はぬ方にかかる薄月　柏原　和宏
風呂加減蟋蟀ひとつ迷ひ来て　柏原　知子
順送りにて廻る町役　森　恒子
流れ来る笛に心もそぞろにて　真下　草笠
削り氷のはらとこぼるる　坂本　純子
夏帽を脱ぎて凜々しき子の会釈　知草
古りし写真に探す面影　猿田　寿子
かの人の住むとふ町に旅衣　宏郎
出雲は屋根の反りのやさしき　草郎
手料理のかくれた味にもてなされ　草郎
首相の決まる山荘の夜　寿恒
捨て犬のか細く鳴けば月寒し　恒寿
湯婆の位置足で直して　福島　正人
名匠のカメラアングル地に構へ　恒知
燕来る日のお化け煙突　寿草
岸離る渡船に花の吹雪入る　知竜
入学の子に光うららか　天翔（ナオ）る企業戦士の名を負ひて　郎正
海に消ゆるも命運として　小沢　竜波
三碧はまつ黒々の星まはり　郎草
ひらき直つてあほる冷酒　草宏
川狩の外道に堕ちし毒流し　宏草
塀の内なる懲りぬ面々　草恒
同情がいつもの事の恋となり　恒知
片手の指にあまる隠し子　知竜
大喝に憑きもの落ちし破れ寺　竜正
月の径に栗のいが踏む　正草
穂芒を梳りつつ峡の風　草正
みかん育てて落人の裔　正知
正調（ナウ）の木曽節細う唄ひたる　知宏
寮の玻璃戸を染むる夕映　宏竜
望郷に月日過ぎ行くばかりなり　竜恒
山紫に遅き雪解け　恒草
花匂ふ一樹が句碑を覆ひたり　草知
大いなる夢果てぬ春眠　知

昭和六十二年十一月一日首
昭和六十二年十二月六日尾　（於・三郎居）

《寄居・啐啄会―その二》

歌仙『揚羽』

神杉の陽の箭揚羽を捕へけり　森三郎
露も涼しき駒つなぎ石　柏原和宏
久々に親子碁盤に対座して　森恒子
古城に望む川は東に　柏原知子
月を踏む袖かき合す戻り道　佐伯茂子
菊人形に似たるせんせい　茂
ウベッタラの声突き抜けるビルの街　知
用立つ小銭恋のはじまり　恒
拾はれるより拾ひたき結び文　宏
郵便受に厚き札束　茂
紳士録あごひげ長き祖父の像　知
虎造節をカセットで聴く　宏
美酒に酔ふて出づれば月冴ゆる　郎
雪の達磨に敬礼の人　知
番組の小さな旅にふる里が　恒
柱の傷がいまは自慢に　郎
初孫の寝顔見飽きぬ花の午　茂
触れても見たき土の青踏む　恒
ナオ一せいにカタカゴ傾ぐ風のみち　宏
忍びの影は伊賀か甲賀か　茂
さだかには知らずで済ます御方便　知
ゴルフ場にもグリーンキーパー　宏
広告のビールの泡に唾をのむ　郎
郊外電車冷房の過ぎ　知
香奠の返しに句集添へられる　恒
逝きにし人は片恋の人　郎
淋しさに合せ鏡を手入れして　茂
李朝の壺の竜が見てゐる　宏
月明の流砂の道はどこ迄も　茂
葡萄の種子をぷつとはき出す　知
ナウ老いてなほ昔のなごり秋蚕飼ふ　宏
本屋のつけは催促がなし　郎
馬子の居ぬ浅間の煙りゆつくりと　知
浮雲に乗り雲雀さへづる　恒
昏るるまでボート賑ふ花の湖　茂
血統書つけ猫の子を賜ぶ　茂

昭和六十三年七月　十日首
昭和六十三年八月十六日尾　（文音）

《寄居・啐啄会―その三》

歌仙『赤城颪』

森　三郎捌

表戸へ背戸へと赤城颪かな　森　三郎
水碧くして映す寒林　真下草笠
甘え猫膝に重みを乗せて来て　森　恒子
都の振りに庭の説明　郎
月明のなまこの壁は武家屋敷　笠
竹伐る音の谺戛々　恒
年寄りが大事に虫籠提げて来て　郎
貴女のファンと口ごもりつゝ　坂本純子
コップ酒あほり一途の無法松　笠
虚空に消ゆる遠き海鳴り　恒
雌木雄木の区別も句座の肴にて　純
単線駅に不時の団体　郎
月待ちて浴衣姿の往き戻り　市川美代子
土用鰻の旗がひら〳〵　恒
自民党総主流とてかばひ合ひ　郎
ゴシップ雑誌直ぐに売り切れ　石川光男
方便を究竟と為すと花の僧　佐伯茂子
鳥雲に入る武蔵野の涯　笠
配達の車を停めて芹を摘む　福島正人
城址保存の褪せた立札　郎
モンスラを昔小町の選り好み　恒
うしろ姿に婀娜を残して　純
後朝に水白粉の冷え〳〵と　光
くもりガラスに山茶花の彩　美
鳴り出せば孫の眼が追ふオルゴール　柏原和宏
港未来の夢よ横浜　笠
霊峰を朝夕眺む土地求め　郎
野鳥の声の小うるさくなる　杉野弁一郎
一筋の川皓々と月高し　柏原知子
詩碑のほとりは草紅葉して　町田節子
旅の宿早めにともす秋灯　茂
ニッキの飴を舌で転がす　宏
退院も間近かですねと配膳婦　恒
野焼の煙り遠く流るる　知
雪洞に浮き出づ花の影幾重　美
春のショールにうたふ倖せ　純

平成元年二月五日首
平成元年五月七日尾（於・佐伯茂子宅）

《川崎・染井の会―その一》

歌仙『七草』

蒲幾美捌

①昭和五十五年六月。中村俊定先生指導による蕉風連句を学ぶ会を結成。
②会名は俊定先生命名。先生の連句の師、天つ雁翁永眠の染井霊園に染井吉野が咲く。
③連衆十名。自然の残る小田急沿線柿生と都心の巣鴨に会場を置き毎月例会を開く。
④蕉風連句の精神を大切にし、余情の付けの中で現代の素材を如何に生かすかが目標。

七草を籠に育てて宝とも　蒲幾美
窓辺明るき春の曙　嶋津亜希
鶯の初音に車出しかねて　大江秋光
子等駆け遊ぶスナップを撮る　久保田富子
名勝の松にかかれる三日月　菊谷由起子
街道に沿ふ秋風の声　片倉綾子
向き合ふて舌にやさしき新豆腐　田中ツル
胸に燃えたつ愛の羽根なり　小堤郁代
沖碧く翼広げし帆前船　湯川道子
埋め立てられて青果市場に　石井八重子
月寒し団地住まひの流離めき　山口たま子
吊すあんこう出刃を逆手に　秋
びんぼつれ玉三郎の立姿　亜
男の見栄のボトルキープ　ツ
田舎への国鉄料金また上る　た
隣近所の犬の吠え出す　郁
紀州より熊野へ越ゆる花の山　秋
女人遍路の鈴のあはれに　亜
忘れな草互ひの過去を秘めしまま　郁
そしらぬ顔で渡す合鍵　道
古ぼけし鈴蘭灯の宵の町　ツ
柳並木の雨にそよげり　秋
へそくりをつぎ込み株の暴落し　八
血圧高いといはれ気になる　富
肌ぬぎの浴衣にのぞく般若面　由
御輿のあとにつづく人波　ツ
蜜豆のままごとめきてひとり住み　綾
やつとやみたるピアノレッスン　由
月代にはるか山脈浮き出して　綾
宮城野萩にしのぶ故郷　富
澄む水にさらす藍染長のれん　亜
旅のリュックにみやげふくらむ　綾
手料理に昼の疲れを忘れたり　富
飛行機雲の触けかかる空　由
薄墨の花ちりかかる能舞台　亜
畑打つ人に軽き挨拶　由

昭和六十一年一月七日首
昭和六十一年四月二十五日尾（於・柿生会館）

《川崎・染井の会―その二》

歌仙『柚子湯』

蒲　幾美捌

人間の心しみじみ柚子湯かな　中村菜圃
垣ごしみゆる白き山茶花　蒲幾美
新築を寿ぐ歌仙巻き了へて　嶋津亜希
天壇といふ煙草にほへる　菊谷由起子
浜風に誘はれゆけばのぼる月　阿部ヒロ
角切られたる鹿の鳴き声　田中つる
手（ウ）になじむぐい呑み選りて新酒汲む　久保田富子
人目気にせず頬を寄せ合ひ　片倉綾子
青空に円画くジェットコースター　湯川道子
母とまみゆる中国の孤児　亜
掛けている眼鏡を探す朝の卓　富
呆けの記事のみやたら目につく　道
団体客いつか眠りて月涼し　つ
仏法僧を聞きに一夜を　由
だんだんにおしやれとなりしアナウンサー　亜
古都税寺を開く開かぬ　つ
花の下太鼓たたきて猿まはし　大江秋光
子の手離れて飛びし風船　綾
弾（ナオ）みつつ都電のゆくて陽炎へり　富
一葉しのぶ駄菓子屋の土間　道
堀割の流れに夕日ゆらめきて　石井八重子
青信号鳴るレミファ、ソラ、ソラ　小提郁代
初めてのくちづけ暖炉燃えさかり　綾
誕生石はむらさき水晶　八
装ひて行くこともなく月日過ぎ　秋
今日めずらしく郵便夫来る　つ
赤飯に山海珍味ととのへて　由
玉取祭汐の満ちくる　郁
月光に舞ふ幻の能衣裳　亜
萩のうねりの打ちかへしつつ　道
鬱（ナウ）の日は友達のみな偉く見え　八
大関ころりと負かす夢覚め　秋
軒うちて何時のまにやら雨となり　郁
売れぬ空地に蕗の薹出る　富
花おぼろ鼓の形に桜橋　由
東踊りの春惜しみける　幾

昭和五十九年十二月十五日首
昭和六十年四月二十五日尾（於・柿生会館）

《川崎・染井の会―その三》

歌仙『水　明』

蒲　幾美捌

水明に真菰のささる天深し　蒲　幾美
くひな叩きて揺るる桟橋　湯川　道子
旧道に本陣跡の普請して　田中　ツル
寄木細工の土産買ひたり　久保田　富子
古稀祝ふ月見の宴に招かれぬ　菊谷　由起子
玻璃戸いつしかぬらす秋雨　嶋津　亜希
ハーブ茶の香りただよふ夜長なる　ツ
英語で綴るあつき胸うち　亜
寄り添はれ人目はばかる管理職　片倉　綾子
泪岬と伝ふあはれさ　亜
単線の旅の車中の獨り酒　山口　たま子
あぢさゐ崖を埋めつくせり　ツ
鬼瓦目ン玉涼し朝の月　道
飛行雲行く原子炉の上　由
停戦をいひつつ互ひ爆撃す　ツ
早逝の子の年を数へり　た
花の下縫ふて吉野の花会式　綾
元祖・本家と競ふ草餅　由

春昼のビルの窓拭く命綱　富
海外登山の貯金ふやして　幾
後楽園ドームに熱気たちこめて　ツ
さりげなく手を肩に廻しぬ　綾
寒き夜の浴室ふたりの湯が溢れ　〃
看板が飛ぶ強き北風　由
釣り船が沈み潜水艦が浮き　道
テレビの前で発作起きたり　大江　秋光
故里は煙る浅間の裾の村　〃
ふなどの神はほほゑみてます　富
掌に胡桃を鳴らし十三夜　た
金木犀の匂ひくるなり　秋
いなびかり都心空地の増えてゆく　富
噂話のあれやこれやと　秋
カルチュアーの帰りいつもの喫茶店　た
地震ぐらりと予報などなし　富
花うらら秋舎の牛の長鳴けり　亜
谷戸のげんげに遊ぶ人々　道

昭和六十三年七月二十五日首
昭和六十三年八月　五日尾
（於・大塚社教会館）

《船橋・第六天連句会―その一》

脇起歌仙　『しぐるるや』

赤田聴雨捌

昭和四十九年七月、今泉忘機が友人たちとはじめる。市川市若宮、第六天神社の一室を借り、月一回、第二日曜を例会と定め、同神社の名を冠す。連句誌『杏花村』の好意により作品を同誌に掲載、また連句協会などにも加入。連句の普及またこれを通じての懇親、さらに国際交流連句、精神医学連句療法等、同時に作品の質向上を目指す。

翁

しぐるるや田のあらかぶの黒む程　赤田　聴雨
少し黄ばめる軒の大根　今泉　忘機
テレビ見る主人突然足袋呼んで　浅野　黍穂
葉巻のにほひ二階まで来る　小谷　参木
かな文字の橋の名読める月の光　馬場　彬風
鈴虫の声前栽の籬　鹿倉　糸
陸稲（ウ）の穂の出でて知る都会つ子　田口　猛康
リトルリーグの早朝野球　菊池　和法
ジョギングで芽生える恋は配達夫　機
雨を悲しく物言へぬ悔　穂
中年をやつと支へて抗酒薬　木
兇弾為せるエジプトの性　糸
数千年消えぬファラオの呪ひなり　木
断食を止む暑き三日月　機
湯殿山即身仏を涙にて　穂
お好み焼は木の下で売る　糸
名所避け町角で愛づ花盛り　木
はづれ馬券を舞はす春風　星野　恵則
犬（ナオ）ふぐりオケラ街道慣れた道　機
札所の里にセメント工場　木
初雪に廃線鉄路一風情　機
宿題返せと駅の黒板　穂
たばこ屋の代替して娘坐す　雨
饐えた臭の玉の井界隈　康
ぼろぼろになつて心の諦めが　穂
幕間忙し国立劇場　糸
一筋の鉋作りが報はれて　木
手塩にかけし松の盆栽　風
北海の宿の窓なる夜半の月　法
台風ぐづつき二日いらいら　機
候補（ウ）者の着替背広の赤い羽根　穂
止長の筋を追ふ客の指　木
空蟬に伊予の湯桁を十、二十、三十　風
新たに建ちし子規記念館　木
花食んで梢に高き鳥の声　雨
毛蚕のぞき込む泥んこの子等　則

昭和五十六年十月十一日首尾（於・俳句文学館）

《船橋・第六天連句会—その二》

歌仙『昼　顔』

下総中山駅

今泉忘機捌

昼顔や自転車置場うるさしと　今泉忘機
買物龍は胡瓜枝豆　馬場彬風
ステレオの邦楽の声たけたかに　小谷参木
曲り廊下をにほふコーヒー　浅野黍穂
池の月揺るるは鯉のみじろぎか　赤田聴雨
ころころころと椎の実の音　機
孫（ウ）と子に老の遅るる鵯の道　風
浅間山荘十年の秋　木
イラ・イラの止らぬうちにまた戦火　穂
恋を語らで征きし兵（つはもの）　雨
嬉しさは覚えある手の慰問文　機
ゲーテの詩集秘めてひもとき　風
マフラーを飛ばしスケート人の数　木
海賊船らし寒月の下　穂
忽然と深淵ひらく鬱の虫　雨
抜け禅の名の円覚寺古る　機
ジンタ鳴り見世物あはれ花の雨　風
やは肌霞むブーシェの朱（ヶ）　木
犬（ナオ）ふぐり踏み残されて家建ちぬ　穂
デパートで喇く樽出しの酒　雨
講釈のむづかしき兄今は亡き　機
浮世小路と云ひし路地裏　風
先づ贈る橘の香を国の果（テ）　木
この垣守れ千夜も一夜に　穂
津軽凧画く手許を見入る子ら　雨
雪国楽し囲炉裏火の榾　機
黒光る柱に残る刀傷　風
自嘲に苦笑の直参の孫　木
往診の背広の肩を坂の月　穂
木犀の香に恋の生まるる　雨
虫（ナウ）の音をただに聞きゐる二人して　機
声色流しはおのが声なり　風
ふつとメモ飛んだ幸ひアリバイに　木
ツッパリの輪の踊るカセット　穂
花の香に日曜ジョギング遠道し　雨
見付けて嬉し蛙鳴く里　機

昭和五十七年六月十三日首尾（於・俳句文学館）

《東京・第六天連句会―その三》

世吉桐『露時雨』

浅野黍穂捌

家々のポストの赤き露時雨　浅野黍穂
牛ののそりとコスモスの垣　今泉忘機
残る月空に溶けよと眺めゐて　小谷参木
コーヒー碾けば香湧き出づ　赤田聴雨
子ども好き子どもと暮す日曜日　機
罐見えぬまで罐蹴りをする　木
教室に鳴り続きゐる虎落笛　雨
鸚鵡の籠のいささかの揺れ　穂
午後静かソファーの隅に母老いて　機
指先たぐる白き灯心　穂
ひめゆりの本土決戦楯と散り　木
燃ゆる火中に遂げざりし恋　雨
怨念は十七年の砂をかけ　木
病院の夕飯午後四時　機
ノッポビル雀百羽に傾いて　穂
路に絵を売るフランス女　雨
月暑しモンパルナスの語にはしやぎ　機
お御堂の下異教ちんまり　木
眠られぬ新幹線の二階席　穂
四つの島を結ぶ鉄道　雨
花の雲安竹宮記紀にあり　機
わけぎをめでてふるさとの酒　雨

昭和六十二年十一月二十五日首尾
（於・東京女子医大小会議室）

《東京・多摩連句会》

歌仙『野遊び』

前身は谷中連句会と称し、日暮里の朝倉彫塑館で年六回の会を持っていた。その後不定期の多摩連句会となり春秋の野遊びの会などとドッキングして連句を楽しむほか文音も多い。連句はこころの運動ということで学生達ともときに連句を巻く。

野遊びや自然学なる事始め　斎藤吾朗
大吟醸をこぼす草萌　宮下太郎
新築の軒に燕の巣の出来て　吾
この一年のお目出たきこと　太
ひとところ赤米実る夕月夜　吾
絵を描く髭を芒（のぎ）がくすぐる　太
瓦（ウ）礫にて埋めたてられし鯊の海　吾
どこの車も三河ナンバー　太
待ち合わす深夜喫茶の飾窓　吾
おぼこ娘はおもてむきなり　太
雑踏に刑事の尾行振り切って　吾
上海帰りの歌流れくる　太
かまくらの中のラジオの青ランプ　吾
冬あたたかきお袋の腹　太
温泉に毎日つかる日々を得て　吾
金たつぷりと使ひこみたる　太
月の出にうこんの花の散りぬるか　吾
宵の祭に吹くや春風　太
蒲（ナオ）公英を次々食らふ兎にて　太
漂着民に学ぶ農耕　吾
ごんごんと銅鐸の音響くらん　太
悪霊払ふ入墨をせり　吾
のぼり龍太く短く五十年　太
汗とほこりのホームスチール　吾
大美人手は届かぬと思ひつゝ　太
望遠鏡で覗く女子寮　吾
ともかくも安定剤はあとわづか　太
鴉の耳に勝どきを聴き　吾
十三夜あかき火星を従へて　太
やゝ寒なれば僧の縄跳　吾
この秋（ナウ）はあたふたとして過ぎゆくも　太
考現学でゴミの分類　吾
リクルートそれにつけても意味不明　太
猿面冠者と酌める白酒　吾
花の雲もくもくとして桃色に　太
鳥居くぐりて飛びてゆく蝶　吾

昭和六十三年　四月首
昭和六十三年十二月尾　（文音）

●昭和五十年九月、「春燈」の関西在住で連句を愛好するものが集まり発足。
●名称の由来は吟行を兼ねた鍛足の意から連句を目的とする「丹想」に転。
●会の方針　推薦による同人制。
●運営状況　年二回機関誌、年一回懇親連句会等。

《尼崎・丹想―その一》

歌仙『鮟鱇鍋』

鮟鱇鍋涛音高くなりにけり　柴徳郎
縁に並びし室咲きの梅　古市狗之
村長（むらおさ）の鍬をかついで畦添ひに　石橋筑紫男
外車をとばす街の若者　秋山正明
母一人子一人月の出のおそき　上田晩春郎
からからと鳴る高き桐の実　斎藤小微亭
ウループ橋はるかに沈む稲架の列　高田きみえ
九十九島をフェリー縫ひ行く　志水圭志
取材する記者といつしか結ばれて　益田紫葉
赤いカーテン昼過ぎに開け　徳之
銀行も第二土曜は休とし　男
幸先悪き追剝の夢　明
月涼し御神酒たつぷり振舞はれ　晩
遠ざかりゆく二挺三味線　亭
持ち崩したる身の今はよしもなく　き
夜明の堂にひびく警策　志
花曇沖の巨船の名は知らず　紫
メアシヤムパイプの古色うららか　徳
青（ナオ）き踏む西部戦線異常あり　之
見咎められしシャツの口跡　男
その道の前科気にする婿養子　明
どこかで帳尻あはす算盤　晩
懐手して悠々と構へつつ　亭
癌によしとふさるのこしかけ　き
民宿のおやぢ剝製自慢にて　志
千谷斧鉞を入れぬ密林　紫
雲ついて謎の怪物突如崛（た）ち　徳
探険本を伏せて一服　之
病む人にけふ満月の窓ひらく　男
秋刀魚焼けたとおらぶ大黒　明
ひとしきり銀杏を散らす風となり（ナウ）　晩
早く錠鎖す寮の裏木戸　亭
やはらかき灯影に池の鯉跳ねて　志
自由に使ひこなすワープロ　き
花冷やいつとはなしに急須の艶　紫
酔もほどよき蛤の膳

昭和五十八年五月首尾
昭和五十八年十二月

（於・沼津同人会および文音）

《尼崎・丹想—その二》

歌仙『若葉雨』

若葉雨嵯峨野に濡らす小さき墓　上田晩春郎
風薫りつつ運ぶ琴の音　古市狗之
玉かづら纏く大杉の磴踏みて　高田きみえ
杖をたよりに腰伸すなり　斉藤小微亭
月明の渕に魚影のうごき見え　西山葉子
どこからとなく匂ふ木犀　秋山正明
霧(ウ)襖道連れとなる大原女　石橋筑紫男
守り本尊膚身はなさず　益田紫葉
老いらくの水より淡く恋ひわたり　亭
男も赤き宿のはんてん　き
正宗を打つ気で鍛治の火を熾し　葉
由比ケ浜辺を酔歩蹣跚　之
しょぼくれの財布は軽く月寒く　男
故郷(く)へ便りの親爺ばんざい　之
曲り家の壁に富山の置きぐすり　葉
育ち盛りのわらし腕白　紫
ベレー帽ぬぎて三和土に花散らし　之
税申告はよそさまのこと　亭
猫(ナオ)の仔にミスタースリム吹きかけて　明
夢二の絵ある港の茶房　き
行きずりの愁ひの睫毛忘れかね　亭
躓く石も縁のはしくれ　之
髪に霜おきても似寄る兄いもと　葉
ゴール間近で入れる一鞭　紫
千秋楽(ら)の日の楽屋明るく華やげる　郎
誰が忘れし塗りの小扇子　明
長兵衛といふ居酒屋に立ちよるか　男
幾年経しや出稼ぎの身の　亭
余生への縁起をかつぐ月夜餅　紫
土塀に萩の垂るる古道　き
秋簾(ナウ)あるじは籠りおはすらん　亭
呼びに走らす碁敵のもと　之
音もなくいつの間にやら降りそめし　明
格子構へに献酒貼り紙　葉
飛竜頭の薄味も佳き花の旅　き
数奇の連衆に山笑ひけり　男

昭和五十九年五月十七日首
昭和五十九年五月十八日尾
（於・京都嵯峨野某民宿）

《尼崎・丹想—その三》

歌仙『川の瀬の』

川の瀬のきらきら光る酢茎宿　佐野千遊
鵙啼き立つる背戸の枯枝　西川巴
棒持ちて騒ぐ子供に声かけて　前典次
一村すべて同じ姓なり　遊
月光に余熱さめゆく登窯　巴
鉢の小菊にふりかかる灰　次
「酒」と言へば焼酎が出る爽やかさ　遊
単身赴任手足のばせり　巴
新顔のテレビ女優に瓜二つ　次
黒子ひとつを忘れたるらん　遊
ジーンズで南の島へハネムーン　巴
しつとりとした銀座恋しく　次
窓々に赤き花咲く夏が来て　遊
祭囃子がクライマックス　巴
橋桁を少しさびしく山谷舟　次
月の朧に心ゆらめく　遊
僧形の旅は落花を踏み迷ひ　巴
歩みを止める藪の鶯　次

長びきしサナトリウムの明け暮に　遊
艶夢のつづく高き寝台　次
キャンバスの裸婦の瞳はうつろにて　巴
モンパルナスを吹き荒れる風　遊
革命もなく政権の逆転す　次
魂胆ありて囲む河豚鍋　巴
寒星を頭上に見つつ用を足し　遊
電動兎かざる玩具屋　次
背伸びして少女はガラス窓磨き　巴
十字架祭の準備ととのふ　遊
昔見しデッキの夜の清き月　次
熟柿落ちたる音に驚く　巴
聞きつがれ歌ひつがれしわらべ歌　遊
老杉聳え急な石段　次
名物の団子に腹の虫なだめ　巴
越え来し国は雲か霞か　遊
学童の列消え易き花の道　次
春の渚に打ち返す波　巴

昭和六十三年五月首
昭和六十三年八月尾　文音

《松山・出合川》

歌仙『花守』

鈴木春山洞捌

平成元年三月創立。師系は、松根東洋城（流祖）・米田双葉子（現主宰）・鈴木春山洞を掲げ、会名は代表者中川久子宅付近の地名に拠る。構成連衆は全て渋柿俳人で「渋柿」の中に脈々と伝わる安心立命の渋柿俳諧精神に立脚して、俳句と連句と一つに綯い混ぜられた現代渋柿の詩精神を堪能している。毎月第三月曜日午後一時。

花守の街騒遠き庵かな　中川久子
炉の名残りなる松風の音　鈴木春山洞
子供連れボートレースの応援に　中川琅朗
キャンディーの店堤に並ぶ　麻生禎子
やうやくに月出かかりし杜の上　洞
ひとり住まひの虫にかこまれ　久
義経を偲ぶ北上川澄める　禎
舞扇持つ面影を恋ひ　朗
狂ほしき思ひのたけを書きつづり　久
短檠かかげ日記読める冬　洞
王たちの流離の説のとりどりに　朗
西の孤島に立てるざわめき　禎
月の光笛あはあはと簾越し　朗
褌とびこむ裸祭よ　洞
たちよりしひつかけ酒の屋台店　禎
よもやま話ひとくさりして　朗
ふるさとは紅白桃の花盛り　久
野面埋むる葱坊主見ゆ　禎
ベンチにも腰掛けうたふ春の歌　禎
札所参りの男女つらなる　久
断崖の下に瀞瞰る散歩して　洞
鳥の声する峡の吊り橋　朗
はらはらと美しき紅葉の散りかかり　禎
炭担ぎ屋と擦れちがひたる　洞
愛らしき双手合はする願ひごと　久
大吉と出し神籤喜び　禎
彼の名をばかり書いたるノートなり　洞
ホルンの響くアルプスの嶺　朗
母危篤急ぐ車窓の月暗く　久
芒をくぐる鹿の群眺る　洞
引板の縄引く学童の帽まぶか　朗
廻転木馬高く低くに　禎
旅すがら異人館の珈琲飲む　久
衝動買に走る思惑　朗
世界的不況のきざし花乱れ　洞
観覧車稼動長閑なる空　禎

平成元年三月二十六日首尾
（於・松山市南余戸中川邸）

《東京・東京義仲寺連句会馬山人記念会》

昭和六十年三月、長らく続いた杏花村は解散。わだ・としお氏は新たに風信子を創刊。残った者は東京義仲寺連句会芭蕉庵の会と名乗ったが、昭和六十二年七月、真鍋天魚一門は退会され水分の会結成。平成二年八月、敬愛おく能わざる高藤馬山人先生逝去。先生の名を末代に留めるべく、我々は以後東京義仲寺連句会馬山人記念会と名乗っている。

歌仙『若竹』

小林しげと捌

若竹や風のそよ吹く庵ぞ窓　小林しげと　朱海
色さまざまの庭の翠菊　若松照代　海
前衛の移動劇団賑はひて　内田麻子　麻
書店の時給五百円なり　久保田朱美子　と
山脈は襞くつきりと望の月　浜本青海　海
早稲の話で弾む寄り合ひ　中島まさし　代
目を入れて見事にかがし出来上り　と　朱
追はれ追はれて雀追ふ鳩　海　代
半玉の傘くるくると潦　朱　代
愛嚙の味・虚無の決算　海　麻
ダリ逝きしそこは地の果海の果　麻　朱
アルシュサミットシャンパンで開く　朱　し
空港の灯も凍てついて月走る　代　と
隣の村の藁葺の火事　し　し
念仏をひとり律義に繰り返し　と　代
孫は毎年ふえるいつ方　麻　海
花ふぶくおくのほそ道結びの地　〃　と
勤めを了へて春の雁見る　し　し

手術室メスの反射のかげろへば
烏鷺たたかはす盤の巣ごもり
人の気も知らずに三毛がニャーと鳴き
かちんと動く秒針の音
まんじゅうで呷る麦酒の飲み心地
野暮は野暮でも憎めない奴
ラブホテルゴルフバッグをかつぎ込み
いざよひせいしんばれて居直る
市議会は補正予算の是非でもめ
少年野球銀輪で行く
潮どきの小樽運河に泛ぶ月
鮀が安く糶られ出廻り
幸便に紅玉もあり母在し
候文のハガキ珍重
珈琲をキリマンジャロで聴くフーガ
鎮守の裏の畑の雪解
薄墨のさくらは花のなかの華
鶯笛を鳴らす笛売り

平成元年七月九日首尾（於・東京関口芭蕉庵）

《東京・東京義仲寺連句会水分の会》

昭和六十二年六月、われわれは「関口芭蕉庵の会」から分岐して同人制の「水分の会」を結成した。「水分」とは分水嶺の古語で、吉野の水分山は西行や芭蕉とも縁が深い。以上が会名の由来であるが、われわれはかねがね一即多としての発句と連句の本有の関係を回復したいと念願してきた。そこで、隔月毎に両者の興行を実践して今日に至っている。

胡蝶『現身』

真鍋天魚捌

現身の暈顕れしくさめかな　真鍋　天魚
天より魚の冴えわたる声　浅沼　ハク
つつかひ棒いつのまにやらはづされて　鈴木　喜久
三角空地何が建つのか　万波　鮎
大写し月光仮面まむかひに　原口　一草
万年床で灯下したしむ　瀧田　遊耳
ウはらからも少くなりぬとろろ汁　吉田　梨江
摺針越えて醒井に着き　魚
鮮やかに今も台詞をおぼえてる　喜
ふいに抱かれて靴のころがり　耳
短夜の蚊やりの灰のおちる音　山内　加代
仕掛人どもひそむくさむら　〃
ナオ雛の前赤ん坊の足よく動き　藤原　千恵
椿　黄　梅　辛　夷　海　棠　鮎
トラバーユしても駄目ならデューダして　ク
うどんの玉のもつれしを解き　千
月光に輝く蜘蛛の糸の揺れ　草刈　澄
引越先を玄関に貼り　〃

ナウ手拍子もみな六調子酒のんで　梨
口にあそばす蛸の切れ端　耳
眇から涙をながす天邪鬼　加
プラハの春の記録掘りだし　草
花屑が車窓を擦過する真昼　ク
炬燵ふさいでオカリナを吹く　梨

平成元年十二月二十四日首尾（於・関口芭蕉庵）

《相模原・桃夭榭唸聚》

歌仙『ささむか』

三好龍肝捌

㈠平成元年十二月結成。
㈡名称は詩経の「桃夭」に依る。
㈢月例会を持ち、連衆は十人。
㈣蕉風の基本の〝三十六歩帰る心なし〟を貫くことと物の哀れが句作りの底流である。

ささむかの散り敷く庭や昼の酔　清水　由江
唸聚法度聴くや白炭　赤田　玖実子
浮寝鳥波の騒ぎに流れ来て　木戸口　てる女
新製品が街に出廻る　蛭海　停雲子
鋭さが心をひかむ三日の月　三好　龍肝
アマチュア芸の笛のうそ寒　玖
刈急ぐ田圃はづれの立木稲架　由
助言を信じ株で儲けん　〃
逢はずとの文に逆らひ又も逢ひ　雲
あがめたきものカーマスートラ　玖
県知事が賞める健康優良児　〃
注連の綯ひ方牛蒡くちなは　雲
西南の月に金星摺り寄りぬ　る
オキシダントが許容量超す　雲
この選挙タタカエマスカカテマスカ　玖
ガラス張りとは嘘の上塗り　由
花の茶屋美味求真も緋毛氈　雲
友禅の袖ひろふ春泥　由
ゴム風船はちきれさうにふくらませ　る
ビデオ映画が秘めた楽しみ　〃
プチブルは銭で済ませる恥知らず　由
スポーツ競技ルール厳し　肝
厳島奢る平氏に変る潮　玖
暗闇の底なにか蠢めく　〃
鈍妻をやさしく月はつゝみこむ　雲
皀莢寺の尼が親戚　由
手負猪芻堯の道跡もなき　る
砂漠の下にUFOの基地　近藤　蕉肝
消費税見直し論は棚腐れ　由
米ソ融和で溶ける冷戦　蕉
ディスコでも古いワルツがラスト曲　〃
ダイヤカットに探る年代　〃
フラッシュを浴びて笑顔の人気者　近藤　栗子
啓蟄の亀まなこ半閉ぢ　蕉
絵馬札も花の吹雪にでんぼ神　玖
耕し終り戻る本職　蕉

平成元年十二月五日首尾（於・相模原市桃夭榭）

《東京・桃林会》

歌仙『喜　雨』

太白堂桃旭捌

昭和の始め頃より俳句会を続けており、毎月発行の機関誌を通じて四十二・三年頃より歌仙を募集し誌上に載せるようになった。四家の一つ太白堂桃隣を初代とする桃家の流れに属するところから桃林会と称する様になった。集って連句会を催すことはなく機関誌の付句募集で続けていたが、機関誌発行日時の関係で目下小休止。会員間の文音は続行中。

隣村まで来て喜雨とならざりし　日比野　桃旭
口惜しさ煽る蟬の鳴き声　高橋　恵女
なぐさめのやさしき言葉うれしくて　神永　紅雲
山のいで湯に癒す傷心　金子　桃里
段畑の蕎麦しろ〻と月の光ゲ　岸野　未到
鉄塔高く秋の風吹く　今村　ゆき女
牧帰り迎える小屋の手入れして　中島　桃玄
「むつ」の母港に賛否両論　雨宮　傘雨
黙々と生活をかけて漁網を引く　石井　松峰
冬晴れの日の佐渡は目の前　武田　菫城
湯豆腐にさしつさゝれつ旅の宿　宮崎　明月女
かけ落ち者と誰も気付かず　未
取締りする國道に月細し　田中　稲青
朝霧消えてとける渋滞　阿部　桃豊女
新涼の風ほの〻と渡り来て　菫
酔ざめの水ぐっと呑み干す　松吉　清月女
染つけて悔やむ衣桁の花ごろも　傘
陽炎うベンチペンキ塗りたて　長沢　明月

子の指を離るゝ風船空漫歩　水谷　寿美女
足すべらせし久米の仙人　明月
まぼろしの面影そっと胸に抱き　本沢　桃枝女
ふくらみ崩る雲の峰々　本多　幸月女
干草をとりこむ間にも雨の粒　紅
心ならずもあららげる声　本多　進水
つっぱりの生徒に教師業煮やし　ゆ
手もつけられぬ熱き焼芋　恵
年忘れ怒り上戸に泣き上戸　傘
習いおぼえし舞の一とさし　明月女
まぎれ出た子連れの狸月の寺　稲
石段ゆけば木の実ころころ　幸
芒の穂ゆれて河原に釣の人　吉田　あや女
楽しく終えし飯盒炊さん　仁科　石蕗女
週末を観光バスのよく通り　玄
直売所出来新鮮を売る　ゆ
心こもる土産と共に花だより　旭
故郷の空は遠くかすみて　進

《東京・都心連句会―その一》

歌仙『明治神苑』

宮脇昌三捌

発端は、昭和三十三年十二月二十四日俳文学会で清水瓢左、大林杣平邂逅。談論風発、共に連句実作の重要性を強調。翌三十四年七月十一日神田司町で旗揚。都心の名もこれによる。現在月例会は第一月曜、勉強会は第二木曜日に行っている。捌は輪番制。モットーは蕉風の髄を見失うことなく、現代の人間の生活を、連句を通して表現して行くこと。

清正の井戸滾々と花菖蒲　宮脇昌三
森の茂りを巣立つ小綬鶏　大林杣平
つゆ晴間人選びせぬ茶香服(かぶき)に　清水瓢左
幼女むづかる細き夕月　名古則子
こころこめ師へ捧ぐべき菊枕　高木義子
書架の詩集に秋の声聞く　小林しげと
サラ(ウ)金の広告派手になるばかり　高橋笑楽
若き夫婦にまかす餅搗　左則
酒過ぎぬやうにと云ふもうるみ勝ち　平義
自転車置場いつも満杯　と
銭湯も出入は自動扉にて　左平
小切子囃す簓(ささら)たくみに　義
七夕を過ぐるも暑さ衰へず　左
墓を洗うてすみし一と役　平
来る筈の人の座明けて盆の月　楽
水引かかる進物の贅　則
花白し緑の山を背景に　左
温みし水の落つる湖尻　平
大声(ナオ)に蜆採る児を追ひ散らし　と
今も愛用三つ矢サイダー　義
金髪のモンロー魅力なほ盛ん　三
ライターの火に頬二つ寄り　則
渡欧する船のケビンは狭けれど　左
形崩れても穿きなれし靴　平
十余年凝りしスキーのマニアぶり　山口良子
氷柱太りて垂るる寒月　平
伝来の厩はすでに豚小屋に　左
貿易摩擦政治がらみに　平
街角の手相見にふと立ち寄れば　則
ホカホカ弁当本家争ひ　義
春台(ナウ)の経済録はなほ読まれ　左
青磁の壺に揺るる木もれ日　良
御苑晴れ舞ふは納蘇利か花吹雪　三
遠足の子に車中賑ふ　義
生物の教師雉子(きぎす)をカメラして　左
蛙の紐に狭まりし池　良

昭和五十八年七月四日首尾
（於・神楽坂　真清浄寺）

《東京・都心連句会―その二》

歌仙『梅雨に入る』

京極杜藻捌

とりぐの灯に生活あり梅雨に入る　京極 杜藻
炊き上りたる釜の豆飯　佐藤 朴水
三尺の庭の隅にも蟾鳴いて　清水 瓢左
角を曲れば駅へ近道　三好 龍肝
おのがじし持ち寄るものも月の友　高橋 笑楽
定家かづらの種子の飛び行く　金子 恭子
秋草の絵付けの壺に虫を飼ふ　戸塚 黒猫子
茶の水を汲む宇治の大橋　肝
紺絣着て十八九とも見ゆる　恭
還俗直後嫁入する尼　左
鎌倉に粋な掟の寺ありし　藻
直木賞こそ我が狙ふもの　恭
廂間ひに月洩る飲屋裏の窓　猫
一合桝に菊が一輪　藻
抱へたるギターを弾かずやゝ寒し　恭
ゼンマイ捲けば時計鳴り出す　水
外つ国の花も噂に観桜会　左
島を遙かに霞み行く雁　楽
ナオトラックで畑まで運ぶ耕耘機　猫
式内神社急に建て替　肝
園児行く池のほとりのいそがしや　恭
ガセネタなれど刑事走らす　肝
長髪の写真男女を判じ兼ね　藻
民宿実はラブホテルなり　左
雪となり口説上手にほだされる　肝
借り着の羽織裏は笑ひ繪　猫
天ぷらの衣に卵多過ぎて　恭
しやつくり止めの呪ひもがな　猫
渋柿の渋抜き傳ふ母も老い　肝
二十六夜の月をおろがむ　藻
ナウ色鳥の声のさまざま録音に　左
スペースシャトル船で着きたる　肝
朝刊に主婦の一と日の始まりて　恭
史跡巡れば陽炎の燃ゆ　肝
遠ちの山此方の山も花盛り　藻
そよ吹く風に舞ひ遊ぶ蝶　良子

昭和五十八年六月六日首尾（於・神楽坂　真清浄寺）

《東京・都心連句会―その三》

歌仙『芽木明り』

高木義厚捌

千本の芽木の明るし雑木山　高木義厚
東風訪づるる髪のふくよか　金子恭子
遠蛙詩懐そゞろに促して　清水瓢左
副業なれど店は繁昌　土屋実郎
棟上の宴にほどよく月昇り　〃
新種改良豊作の米　左
菊人形首傾けて哀れなり　恭
静かに流す閉館の曲　郎
幾度目の結婚発表誇らしげ　大林杣平
赤きネクタイ青きワイシャツ　小林しげと
つくば博一番乗りに泊りがけ　厚
争ひ事も生の哲学　恭
盤石の座禅の僧に月射して　厚
馬追来りすだく半蔀　左
片口になみなみもらふ新走り　恭
ソ聯で光る握手外交　左
盲導犬曳くも慎重花の下　平
シャボン玉吹く風のなき昼　と
春闘の目標少し高めにて　郎
インク香れる刷りたての稿　大畑健治
田植時恋中至極むつまじく　左
子の持つ氷菓溶けてべた〳〵　恭
乗り継ぎて戸隠詣り恙なく　平
戸倉で語る白雄葛三　と
魚屋の当て字なか〳〵面白く　郎
角帯きゆつと音立てゝ締め　治
シャンソンを奥の間で聞き毛糸編み　と
瓢箪池に初のうすらひ　恭
李時珍は月の山迄よく調べ　左
伐りて束ねて切り試す竹　と
ぴく〳〵と鵙の早贄生きて居り　平
忌辰に偲ぶ母の叱声　恭
ポスト迄ジョギングで行く五分程　と
ねぎ鉢巻の鉋研ぐひと　厚
清らかに花咲く朝の明けそめて　治
蝶も出で舞ひ鳥も来て啼く　厚

昭和六十三年三月十八日首尾（於・神楽坂　真清浄寺）

《東京・都心連句会―その四》

歌仙『手賀沼好日』

小林静司捌

孕鮒沼へ戻せば頬に風　小林静司
天気図変り海棠の紅　名古則子
決算は黒字ときまりあたゝかに　小張昭一
除幕いき〳〵祝ふ碑　岩永極鳥
取りたての枝豆盆に山と盛り　一
月の岬に視界玲瓏　土屋実郎
給油所の夜勤に客と虫を賞で　司
キセルの切符残るポケット　則
蛸焼の原料なべて輸入品　郎
孫ほどの娘にころりまゐりて　小林しげと
スキャンダル盗み撮られし木下闇　一
噴水高くほうほうと鳩　則
半眼のゴリラ鬱々胃を病みて　郎
円高差益豪邸が建つ　鳥
中国へ育毛ツアー流行るとか　郎
花を惜しみてはじく甘栗　と
一挺身エイトが抜ける昼の月　一
棹を保ちて帰る雁　鳥
目の入りて千代紙の雛笑みかくる　司
コックピットに掛けるエンジン　鳥
いさぎよし初冠雪の峯見えて　〃
甘露の法雨他力本願　司
雑魚ばかり捕へて不満税の網　郎
よしなき氏を継ぎし仕合せ　と
柿すだれ父母縁談を進め居り　司
障子貼る手の落ちつかぬさま　鳥
月細し残留孤児の二陣着く　〃
さざえの殻で新走り呑む　と
江の島に海豚は芸のラッパ吹き　郎
長幼序あり寒稽古にも　と
縄で結ふ酢茎を漬ける重き石　一
モルモン教の聖書買はされ　郎
俳諧は特に変化の尊ばれ　と
忍者屋敷も市の予算にて　一
花吹雪花吹雪して日の暮るゝ　則
JR線めぐり来る春　鳥

昭和六十三年四月四日首尾
（於・高輪　日本鋼管高輪クラブ）

《東京・都心連句会―その五》

歌仙『木蓮の芽』

土屋実郎捌

木蓮の芽に紫の走りけり　土屋実郎
囀しきり今朝の軟東風　森三郎
島遙か桜貝など採りもして　岩永極鳥
大吊橋を渡る巡業　小林静司
月光にぬれたる荷物大行李　見学玄
蒔絵の文筥描く虫篭　姪海停雲子
想ひ出の朱の糸吐くか曼珠沙華　池田みち女
ひしと抱けばピアスきらめく　三
さまゞの猫の媚態が日めくりに　実
今は落目のプールバーとて　停
地上げ屋の恐喝はねつけあとこはき　鳥
底なき闇に神杉の鳴る　三
凍雲の僅かに動き月包む　司
コード曳きずる電気スウェーター　停
申告期医療控除をポスターに　玄
何処よりも先雲雀揚がりて　女
花なれや花の都のだらり帯　〃
塩味のみの天婦羅やよし　三
余り物残さず包み帰る癖　玄
玩具の兵を甲虫引く　司
タクシーの運賃も載す時刻表　停
集ひては散る人の世の中　名古則子
権敷二更に礼金腑に落ちず　実
さかさ徳利を耳元で振り　三
女房の声が今夜は艶めきて　則
浮気の相手探るあれこれ　鳥
宴会に配るマッチのスマートな　司
伊藤みどりのワルツ爽やか　玄
山車の上ひよつとこ昼の月仰ぐ　雲
ゆつくり飛行船の秋空　則
ヘリウムは化合を拒む元素にて　司
偽せ学生は出席のよき　雲
カルガリのメダル掲げて帰国せる　女
耕はじむ土くれの黒　則
うすずみの花の根方に酒くれて　鳥
結婚披露春は酣　実

昭和六十三年三月七日首尾
（於・高輪　日本鋼管高輪クラブ）

《東京・都心連句会—その六》

歌仙『年賀の上鶸』

戸塚黒猫子捌

真先に我を年賀の上鶸（じょうびたき）　戸塚　黒猫子
狭庭ながらも高き楪（ゆづりは）　大林　杣平
海苔干場四角四角に日の射して　小林　静司
市況安価に引けて見る月　名古　則子
客集ひ香炷く床の秋深う　小林　しげと
話もなくて揺るる虫籠　内田　さち子
国振りの機内食事の出て嬉し　平
ジンジロゲとはベンガルの唄　猫
美人画のモデルになれと頼まるる　司
茶舗の小窓に写す髪形　と
大鼠銀座裏町午下り　則
絞りの浴衣白き夕月　ち
出世せぬ人のブツブツ社内閥　司
飲めば飲む程腕上がる酒　平
正眼の素振りに業を鍛ふ可し　と
何秒持つか馬の脊の上　ち
花万朶仮装の群れのすれ違ひ　則
栄螺食ふ時袈裟ははづして　と
春（ナオ）の蚊を螫さねば打たずその儘に　則
五番勝負に布石新型　司
マイコンが四百四病を良く覚え　猫
行財改革福祉切下　平
割れ鍋の閉ぢ蓋として老の恋　則
憩ひの家に朝の媾曳　と
ほとばしる寒の湧井の湯気立ちて　山口　良子
しきたり継ぎて神事百年　平
迷宮入り間近か一件落着す　司
金大中の助命追放　良
シーレイン航く甲板に月仰ぐ　平
醤油香ばし唐黍の皿　と
ペナルティーキック（ナウ）決まりて爽かに　則
陳情団でバスが満員　司
国連はコムニケイション標語とし　平
干支の終りの癸猪の猛進　ち
天を指す誕生佛に花繽粉　猫
土筆摘む手に躍る陽炎　良

昭和五十八年正月十六日首尾（於・荻窪双樹庵）

《東京・都心連句会―その七》

歌仙『春　水』

名古則子捌

春水の昏るるに間あり石叩　小野静香
芽柳肩にふれて散策　高津明生子
しゞみ汁停年の朝くつろぎて　峰岸藍
青磁の壺の静かなる色　吉田光子
月清し句莚いよ〳〵酣に　名古則子
主は秋の簾まき揚げ　香
風ひとつすゝきの原をかけぬけり　山本修也
身代金は全部贋札　香
口元にホクロの目立つ女ボス　則
乳呑子あるにだかれたがりて　也
ニュース言ふ今の地震は震度四　〃
裏の古沼水鶏鳴きをり　香
月涼し稽古通ひの桂坂　藍
揃ひの浴衣帯は色替へ　光
耳たぶに縄文型と古墳型　香
ゆらゆらゆらと立つや陽炎　明
便り来て訪ねし故郷に花見酒　光
紋白蝶を追ふランドセル　明
バイエルの指おぼつかな日曜日　藍
ローン支払家計やりくり　香
内閣の命取りかも消費税　池田みち女
隠しそこねた男靴みえ　明
ありしこと鏡はすべて知るやらん　香
膝にのる猫空欠伸して　藍
火事近し野次馬荒く駈けゆけり　光
銀座八丁社会鍋出る　藍
絶滅の危機アフリカ展開かるゝ　〃
習ひし英語役に立たざり　光
山門を閉してよりの月世界　み
闇の鳴子のひくきつぶやき　香
新顔の担ぎ女が来て黄金甘藷　〃
とゞむを知らず経済の伸　み
満塁に一打がおとす先取点　明
予報はづれの春時雨なり　み
み吉野に花の朝風呂たまはりぬ　〃
春灯かざす巫女の緋袴　明

平成元年四月五日首尾（於・日鋼高輪クラブ）

《松山・どん・あ・くらぶ》

歌仙『匂ひたつ』

鈴木春山洞捌

創立平成二年十一月第五回国民文化祭連句大会の興奮醒めやらぬ時に誕生。ふぬきんぬきなんて言われている男性の連句会ですが女性歓迎。代表者・豊島呑烏。鈴木春山洞先生の御指導を受けている。連句の現代性、現代に生きる人間性の豊かさを詠いあげる詩精神に酔ひ痴れている。会場・梟の館。毎月例会・第二水曜日午後七時から。

匂ひたつ笛の音色や秋深し　鈴木春山洞　羽
杣の屋の窓のぞく月光（かげ）　豊島呑烏　洞
登高にゆかりある人集ひ来て　明比羽公　呑
波ゆらゆらと舟に乗りたる　児玉凡松　凡
蜘蛛太鼓大きさ競ふ競技なり　呑　洞
小便小僧像暑（しょ）に立ちつくす　洞　凡
ウベルギーへ勲章貰ふついでごと　凡　洞
碧眼美人待つエアポート　羽　洞
こつそりと恋の鞘当て避けて逃げ　洞　呑
火をつけかぬる咥へ煙草よ　呑　洞
一箱を三日もたせる病上り　羽　羽
妻は義安寺お礼詣りに　凡　洞
冬ざるる秘蔵の酒を抱き帰る　呑　洞
冱て月映る池の漣（ミ）　洞　羽
ことさらに大臣（おとど）の俳句季を外し　羽　呑
爺の繰り言仔犬相手に　呑　凡
千年の花を守りたる村に生（あ）れ　凡　洞
女系家族の雛祭なり　洞　羽
ナオ老刀自の謡の稽古春灯（シ）　羽　洞
ちよつと気障なる衒学の癖　洞　呑
人質を卍がためで救ひ出す　呑　凡
黄なる砂漠の遠ざかりゆく　凡　洞
夏まけの苦しさをふと回想し　洞　凡
糸瓜の花を今朝も活けたり　凡　洞
眼（ミ）澄みし幼馴染は藹たけて　洞　呑
赤・鳥・子供・ホステスの術　呑　洞
あることかセスナ墜ちたで曝れし仲　洞　羽
割り込み電話味をみそこね　羽　呑
月旅行青き地球を見るために　呑　洞
「どうするだろう」宮沢賢治忌　洞　羽
ナウ西東南に北に虫鳴ける　羽　〃
テーブル囲み麻雀を打つ　〃　呑
同期会「あんた誰なあ」健忘症（アルツ）　呑　凡
喜怒哀楽を卒業したり　凡　洞
花濡らす雨に片袖ひき被る　洞　羽
児等の去つたる昼のふらここ　羽

平成二年十一月二十六日首
平成二年十二月　十日尾　（於・松山市梟の館）

《習志野・習志野連句会》

歌仙『山　宿』

山宿や榾火の前に雛の段　鈴木　富江
話ほちほち開く北窓　古川　砂洲男
街筋を燕左右に飛び交ひて　田中　万茂留
渡しの小舟水滑りゆく　四十九院　科峰
月の照る入江は蜑の家並なる　鴇田　秋甫
人気なき駅匂ふ木犀　万
秋(ウ)袷小包にして寮の子に　小川　茶村
七十なれば紅はひかへめ　富
逢ふ瀬待ちハワイツアーに参加して　秋
不夜城の灯に心くるめく　科
鐘叩く力も自棄の月詣り　万
風は吹もの雨は降るもの　茶
夏の月真砂の上を素足にて　富
木剣振りて百回の汗　秋
野馬追の侍大将代々勤め　科
髯のうすさをうらむ朝夕　万
花すぎの峯の松風水の音　茶
八一の歌碑に春の深まる　砂
遠(ナオ)霞奥千本は来年に　富
酒の機嫌で腰を上げたる　秋
万歩計贈られしより所在なく　科
焼くのも惜しき古き恋文　万
襟巻に顔をうづめてなやむさま　茶
想出の人六十路こえたり　富
この島の涸るゝことなき耶蘇の井戸　砂
名物紬渋き色艶　秋
三笠優子しみじみ歌ふ夫婦船　科
地酒に餃子夜がわびしき　万
昼の月竣工近きダム工事　茶
軒下借りる野良猫に秋　砂
飛(ナウ)鳥路の築地曲りて柿たわゝ　秋
路傍石仏風狂の貌　科
千年も雲の形の出来不出来　茶
亀を聞くとて集ふ村人　砂
花の酒ほろ酔ふひまを頒ちあひ　科
いつの間にやら夕霞たち　万

昭和六十三年二月二十六日首
平成元年七月七日尾　（文音）

《松山・南海放送学苑連句教室―その一》

歌仙『福寿草』

永田黙泉捌

昭和五十一年十月十四日「南海放送学苑連句教室」結成。俳句教室開講と共に受講生全員参加、毎月最終木曜日連句会、現在に至る。学苑俳句連句集すでに二巻刊行。指導者永田黙泉の大学時代の恩師山田孝雄博士から直伝された「依於仁游於藝」（論語述而第七篇）を理想とし最指針としている。

以和為貴福寿草（和を以て貴しと為す福寿草）　永田　黙泉
親子揃ひて屠蘇の座に在り　越智　しげる
若布刈る手許に潮のさゝやきて　荒木　次郎
霞たゞよふ陶の古里　新海　左人
窓の月鏡にうつる春の色　木村　仁美
盛り場近きどよめき聞こゆ　日野　泰仙
振袖のふれ合ひながら楽しげに　清水　御杖
琴爪おきて偲ぶ文字跡　兵頭　みち子
枝折戸ゆ源氏の君は呼び給ふ　岩城　ゆき
葵の苑に滋雨の豊けく　白形　僑士
湯上りの肌浴衣の藍に染み　大西　可南呼
はづみて渡る大三島橋　長戸　弥香
水軍の神の宮居を守る月　黙
秋草見惚れ刈りしぶるらん　し
あばら家も祭近付き障子貼る　次
フィナーレかざる晴れの舞台へ　左
撞く鐘のひゞきに花の散り急ぎ　仁
海原長閑ゆるむ船あし　泰

何処やらにコーヒー匂ひ風光る　御
杜詩を吟じて部屋の片隅　み
羽むしり機織る鶴の夕明り　ゆ
重なる事故に旅はこはごは　僑
峯の杉ゆらぎて今日も雪嵐　可
いろりを囲む頬をほてらせ　弥
クラス会思ひ出話若返り　加藤　紀子
にぎる手かたく恋の道行　原田　花笑
三角の縺を解す術もなく　次
ホームメイドのクッキーさまざま　仁
くるくると回転ドアー月今宵　左
紅葉狩る人そゞろ〳〵と　泰
雁も訪ふ戸隠の里蕎麦どころ　平田　照子
テレビ体操夫婦でイチニ　御
頭上より間伸び御詠歌ひゞき来る　み
紙人形の胸ふくらまず　ゆ
枝垂れ花瓔珞さ揺る風幽か　僑
陽の爛漫に仰ぐ風船　可

昭和五十七年一月二十八日首
昭和五十七年二月二十五日尾　（於・南海放送本町会館）

《松山・南海放送学苑連句教室―その二》

奉納歌仙『聖　絵』

永田黙泉捌

聖絵のまゝの尖岩滴れり　永田黙泉
涼風に乗る振鈴の音　大西完善
増上慢暗愚の己かへりみて　日野泰仙
俳諧の座に入りつ幾とせ　岩城ゆき
深山なる堂塔照らす望の月　橘豊
子等集ひ来て花野分けいる　茅田やす子
掛け佛供養するかに昼の虫　木村仁美
黒髪なでし君ぞ慕はし　黒田きよ子
いつとなく握り合ひたる掌の香　長戸弥香
民衆騒ぐ力の政治　越智しげる
言訳も通らぬ事となり果てぬ　完善
白山権現聞こし召されよ　黙泉
寒月下千両箱を積み重ね　ゆき
むかひの山に狸提灯　泰仙
グルメ志向老いも若きも食べ歩き　やす子
こゝに縁あり二度三度来つ　豊
ほころびし花の参道唄ひ連れ　仁美
春の一夜を煎茶賜はる　きよ子
弥生尽しんそこ惜しむ熟年ぞ　しげる
軒先に佇ち碁敵を待ち　弥香
遠祖より代々に伝へし筆硯　黙泉
行き行けどなほ果てしなき道　完善
仏法僧里は「七鳥」七霊鳥　泰仙
白繭を掌に亡母の想ひ出　ゆき
口紅の色替へてみる旅の朝　豊
面輪脳裏を離れざる日々　やす子
両人して籤を引けば恋成ると　仁美
ニッケ水持ち唱ふ童謡　きよ子
腹鼓近づいて来る月の庭　弥香
木の実降り初め園児ら騒ぐ　しげる
瞑想の果幽玄の秋は逝く　黙泉
扉のきしみ静寂を断つ　完善
質蔵は郵便切手ほどの窓　ゆき
アルミ貸一つ無事息災を　泰仙
八重桜咲き満つるなか鐘の声　やす子
今日満願の遍路笠脱ぐ　豊

昭和六十二年六月二十七日首尾（於・海岸山　岩屋寺）

《松山・南海放送学苑連句教室―その三》

歌仙『舟廊下』

永田黙泉捌

かなかなや神仏結ぶ舟廊下　木村仁美
胸の鏡に映る月光　永田黙泉
七草の七様ぶりの姿愛で　日野泰仙
家宝の壺に水注ぎけり　和田数子
観能の真昼ほのかに薫衣香　長戸弥香
汗拭き立ちて夕餉の仕度　岩城ゆき
ゴルフにも政治を含め軽井沢　平田照子
心ひそかに人妻を恋ふ　中川久子
麗はしの君も四十路の生活(たつき)皺　白形喬士
家屋解体見るみるうちに　早田順子
女子ソフト泣いて笑つてフィナーレへ　黒田きよ子
子を捕ろ子捕ろ五千万円　越智しげる
月寒き街角流すラーメン屋　新海左人
逢ふて見たいよ雪女郎さん　仁
木彫りなるアイヌ人形並び立つ　泉
生涯無能無芸と悟り　仙
花弁当携へ道後公園へ　数
遠足の列賑かに過ぐ　香
揚雲雀(ナオ)遠き城山見つゝ鳴く　ゆき
「あれ」「それ」で足る金婚夫婦　照
汽車待ちの駅に頬ばる五平餅　久
交番で借る言ひわけ電話　士
泳ぐ子等魚の群の騒ぐごと　順
飲んで歌ふて花火見物　きよ
閣僚の資産公開嘘だらけ　しげ
頬染めて寄る相乗り俥　左
宿題にしばしためらひ「ええままよ」　仁
天使の翼両(もろ)にひろげて　泉
独り聞く月の笛の音いと佗し　仙
ファーブル少年虫の虜に　数
辨慶(ナウ)の見栄切る姿菊人形　香
無我無心こそ天に通ずる　ゆき
食べずとも寝ていた方がよき時も　照
福を招ぶてふ絵馬貼りしまゝ　久
金色の鵄尾燦然と花の古都　士
新入社員希望の瞳　順

昭和六十一年八月二十八日首尾
（於・南海放送本町会館）

《東京・虹の会》

歌仙『春雨』

穴澤篤子捌

猫蓑会会員のなかで気心の知れた六人で、昭和六十二年八月三十一日に発足した。会の名称は、お客様を一人お招きして、七色の変化で座を催すことによる。年二回の座で歌仙を膝送りで巻き、連衆の一人が責任者となり、作品を校合する。蕉風の伝統を守りながら、現代の文学としての連句を探求する。

春雨に多摩の横山しづみをり　穴澤篤子　晴
線路に沿ひてつづく下萌　馬場東夷　麻
ランドセルかたかた鳴らし蝶追ひに　杉戸金一　遊
プリンを作りおでかけのママ　中島啓世　篤
十六夜に二番を強ひる負け将棋　井手欅晴　夷
秋の浪よせ岩にくだける　内田麻子　一
人伝に消息のあり渡り鳥　雑賀遊　世
年のちがひに絶えぬ気苦労　篤
セクシーのダンスパリより上陸す　夷
見ざる聞かざる参考書開け　一
湖青くひそかに金貨作るひと　世
蠟涙しるき片減りの燭　晴
大ジョッキービールかかげし窓に月　麻
パン屑置きしバードテーブル　遊
自動車のこんなところに入り来て　篤
谷中寺町外人の宿　夷
殿様の宴に負けぬ花筵　一
日永の水面糸をたれつつ　世
田螺籠無沙汰ほどきの縁先に　晴
塗師の爺もけふは宗匠　麻
残業といつても実は雀業で　遊
障子を閉めて寝たふりをする　篤
嘆息に似たる風吹き散る木の葉　夷
骨盤まはすモンローウォーク　一
現世の最果ての恋しみじみと　世
行き合ひ同士ことし銀婚　晴
交差点自慢の帽子とばされて　麻
ホットドッグに辛子利きすぎ　篤
溯る鮭のきらめく月の川　遊
客を迎へる猿の腰掛　夷
運動会家を出るなり走り出し　一
昨日の神籤ポケットの底　世
大賢にあらねど市に隠れ住み　晴
蟇交るころ雲の流るる　麻
花一樹灯して色の濃くなりぬ　篤
呂宋茶壺に銘す「朧夜」　遊

平成二年二月五日首尾（於・房連庵）

《東京・猫蓑会—その一》

二十韻『花の冷え』

東　明雅捌

①昭和五十七年四月、朝日カルチュアセンター連句受講生が、実作の場を持つため発足。
②芭蕉七部集「猿蓑」から。東明雅主宰が連句集「猫蓑」を上梓されたのにちなむ。
③発足当時は十五名程であったが、現在は会員百名・昭和六十一年十月から秋は芭蕉忌、春は亀戸天神社奉納の正式俳諧。興行は二十韻、歌仙。捌き手の多いのも特長である。

竹剪りし短冊受けや花の冷え　秋元　正江
客人迎へ燃ゆる春の炉　杉江　杉亭
うららかにパイプの烟り吹き上げて　井手　欅晴
甘え声して塀の三毛猫　原田　千町
宵の月寄席看板の影長く　中川　哲
ほろほろ酔ひの中汲の味　東　明雅
秋祭り俄氏子のかしこまり　亭
雑沓まぎれ嫂の瞳よ　江
過ぎし恋歪んでダリの絵のやうに　町
補助線一本足らぬ証明　晴
病院の倒産話梅雨じめり　哲
檀家廻りにバイク颯爽　亭
真青な四万十川を越え行かむ　江
楮晒しの白き渦まく　〃
寒月に座敷童子の笑ふ声　晴
琴三味線に胡弓まじりて　哲
閑居して不善やまざる老の日々　晴
手になじみ来し信楽の盃　町
咲きみちて濃きも淡きも紅枝垂　雅
海沿ひの村魚島に沸く　亭

昭和六十年四月七日首尾（於・関口芭蕉庵）

《東京・猫蓑会―その二》

歌仙『雪解け』

東　明雅捌

雪解けといふ愉しさを来たりけり　平井　照　敏
春寒の香の桜餅など　草間　時彦
雛かざる瓔珞の玉ゆれてゐて　米谷　貞子
枳殻垣に破る袖口　式田　和子
東の指さす方に月淡く　杉内　徒司
四囲に満ちたる蟋蟀の声　東　明雅
ウ子を孕む秋の蝮に気をつけよ　司
首のうしろがこそばゆくなる　和
トランプのカードスペードばかり出て　〃
土佐の断崖涛真白かり　敏
鰭酒を始めましたとお品書　司
月を仰いで着ぶくれの客　貞
値上げせしタクシーは棄て歩きけり　敏
煙草いらいら靴底で消し　貞
焼茄子に煮茄子鴫焼漬茄子も　彦
フォア・グラのあとエスカルゴまで　敏
このままで浄土見え来し花の宴　貞
ふらここ父へ戻りて母へ　敏
ナオ行春の薄人情といふ言葉　彦
留守番電話苦手なのです　和
ちまちまと小さき家建つ坂の町　司
飼主よりも上品な猫　敏
手のひらに握れる程の下着干し　和
ペントハウスにわれの教へ子　敏
訣れたるあとに向日葵咲いてゐて　彦
柩に三度石で釘打つ　司
からからと鈴をころばす秋の風　敏
蘇州城外高き藁堆　和
李太白月の筵の端に居り　彦
姥は自慢のとろろもてなす　貞
ナウ菊枕すこしの呆けはそのままに　和
酔へば本音がほろとこぼるる　貞
宿跡に二つ立ちたるくなど神　〃
日癖雨止み春の夕焼　司
揚雲雀聞きてぼんやり花疲れ　雅
親舟子舟水温むなり　彦

昭和五十九年二月十九日首尾（於・俳句文学館）

《東京・猫蓑会―その三》

二十韻『青しぐれ』

福井　隆　秀

下町の寺めぐり来て青しぐれ
花菖蒲濃く咲きし坪庭

坂本　孝子　秀

リサイタル控へし胸の弾むらん
間違ひ電話受話器置くなり

孝　秀

「須磨明石」まですすみけり月の卓
鳥屋師ひそかに山へ入り行く

孝　秀

鮮血のごと茱萸の実のたわわなる
聞く耳もなし親の止めだて

孝　秀

パトカーを振りきる彼にしがみつき
すつきり晴れしペンションの朝

孝　秀

外交の苞は自信の俳句集
樽で買ひたるワイン毒入り

孝　秀

北斎の遠く小さく富士が見え
罠にかかりし子狐の月

孝　秀

裸木を抜けて佇む雪女郎
しばれる宵の熱きくちづけ

孝　秀

生涯の憶へば眩しひとところ
永き日の父棋譜をかたへに

孝　秀

舟唄に花散りかかり最上川
音無く吐けるお蚕様の糸

孝　秀

昭和六十年七月十四日首
昭和六十年九月　六日尾　（文音）

《東京・猫蓑会―その四》

脇起二十韻『落葉』

百歳の気色を庭の落葉かな　翁

ひそと静まる口切の茶事　杉江 杉亭

調律師鍵(キイ)の埃りを拂ひゐて　秋元 正江

散歩の時間またも遅れる　杉内 徒司

竪(ウ)褄の躾取り終へ月青し　式田 和子

ふたりのしじま鳴くちちろ虫　福井 隆秀

秋深むロダンの接吻(ベーゼ)しなやかに　原田 千町

椅子に組みたる絹の靴下　中田 あかり

朱の櫂の新樹の影を砕きゆく　川野 蓼艸

鉄漿蜻蛉灼石に群れ　坂本 孝子

信濃(ナオ)路の高嶺を背に夏座敷　加藤 K

犬を相手の所在なき酒　上月 淳子

五目飯届けられしは隣より　笠原 古畦

お下げの少女ピンク大好き　内田 麻子

初恋の願掛けに来し鴛鴦の月　下鉢 清子

他人には見せぬ貯金残高　吉沢 てるよ

老優(ナウ)のしみじみ語る老の身よ　馬場 東夷

BGMに流る囀り　米谷 貞子

俳諧の花蘇り二十年　東 明雅

夢の隣りにすんでゐて春　中川 哲

昭和六十一年十月十五日首尾（於・深川芭蕉記念館）

《東京・猫蓑会―その五》

二十韻『走り梅雨』

町の名の変りし里や走り梅雨　式田和子
歩道狭めて垂るる葉桜　京崎伸子
マドレーヌ貝の形に焼き上げて　大窪瑞枝
新聞紙を折りて遊ぶ児　和
前置きの長き話の月見酒　伸
身元調べの縁のやや寒　枝
雁金に托さん文のあてもなし　和
かばかりの土ベランダに買ひ　伸
シルクロード奈良に移して博覧会　枝
南無三宝と老の迷ひ子　和
革羽織せかせかと来て座りたる　伸
狐が肩に細き夕月　枝
すつぴんの櫛巻誘ふ小暗闇　和
とんだところにつけられた紅　伸
宇宙船宙を泳いで乗り替へて　枝
クレイターやがて湖となり　和
拍手のくぐもり響く過疎の村　伸
同窓会に行けぬ春風邪　和
文机の式部の日記花の散る　枝
箒目のたつ庭に蝶々　伸

昭和六十三年五月二十三日首尾
（於・四宮区民集会所）

《東京・猫蓑会―その六》

歌仙『秋しぐれ』

秋元正江捌

秋しぐれ駅に角川文庫買ふ　梅田　利子
ことしまだ見ぬ十月の月　八角　澄子
両の手を合はせ鳩吹く猟師ゐて　杉江　杉亭
雑種ながらも耳立てる犬　瀧川　雅代
バザー用サロン前掛縫うてをり　原田　千町
炬燵囲みし子等のなぞなぞ　金久保　淑子
雪下しすみたる屋根の黒々と　中田　あかり
紅さし指にぽつちりと棘　式田　和子
AとB恋の秤のさだまらず　秋元　正江
アシュレの他は振りむかぬ女　若尾　よしえ
貸しビデオ値引き合戦たけなはに　代
捕へし蝮壜に漬けこむ　杉内　徒司
仰ぎみて馬籠奈良井の夏の月　下鉢　清子
字の薄れたる万葉の歌碑　副島　久美子
代議士は名刺ひときは大きくし　豊田　好敏
ラジコン飛行機自由自在よ　淑
鉄鉢に御喜捨の米と花びらと　上月　淳子
杭にかたまる蜷二つ三つ　坂田　濱

孕(ナオ)鹿やはらかき土歩むなり　淳
質屋を知らぬいまの学生　敏
廃兵の縁のほつれし巻脚絆　司
おつとどつこいこの線のうち　和
湯豆腐にいつしか笑みのしどけなく　下坂　元子
離婚結婚たしか四五回　澄
鈍感の雑魚ばかり釣るこの辺り　山崎　一恵
台湾へとぶ話煮つまる　中島　啓世
短銃を入れたる鞄月を浴び　り
蜩の鳴く背戸のうら山　恵
今は亡きはらからと酌む温め酒　小林　千雪
無位無冠なり前衛の書家　篠原　達子
はたはたと平成の絵馬風に揺れ(ナウ)　美
返した傘をまた借りてゆく　蒲原　志げ子
診察券どこへ忘れて来たのやら　東　明雅
理髪屋のどかすべるバリカン　小川　弥生
簪守灯しそめたる花の下　江
縄で作りし低きぶらんこ　市野沢　弘子

昭和六十三年十月十二日首
平成元年三月八日尾（於・ACC教室）

《東京・猫蓑会―その七》

二十韻『ゆ　く　春』

秋元正江捌

ゆく春の奥踏みゆくや嬶(かが)歌(ひ)の地　秋元　正江
杣　み　ち　の　石　憩　ふ　双　蝶　加藤　K
キャンパスの句会開きののどらかに　東　郁子
厚目に切りし抹茶カステラ　海老原　久奈
大(ウ)橋にのつと顔出す夏の月　楠見　八重子
酸　漿　市　へ　っ　づ　く　ど　ぶ　板　久保田　庸子
年下の少年つかのま美しき　江
苦労して読む「ベネツィアに死す」　K
待　望　の　新　築　祝　ふ　金　粉　酒　庸
盲　の　犬　も　欠　伸　し　て　立　つ　K
冬(ナオ)霞　旗　を　飾　り　て　遊　覧　船　八
逆さ富士さし子等の呼ぶ声　郁
宗祇忌の箱根の出湯に身をひたし　東　明雅
待　人　遅　し　漸　寒　の　恋　郁
残月に騙し騙され啜り泣く　奈
ところかまはず禁煙の札　同

東西(ナウ)の壁もいつしか崩れきて　K
猫　車　押　し　卵　売　る　人　八
招かれてお重ひろげる花の下　郁
水　面　た　た　き　は　ね　る　若　鮎　庸

昭和六十三年四月十日首尾
（於・筑波大学人文社会研究科棟八階）

《東京・乃木坂散人連》

三吟歌仙『梅散るや』

宇咲冬男捌

連句実作を志した有馬朗人と古舘曹人は宇咲冬男先生を迎えて昭和五十九年、乃木坂の曹人事務所で三吟歌仙を巻いた。三人の会なので「散人連」の名称に決めた。今日まで七年近く、暉峻桐雨・宇咲冬男両先生と曹人の文音、高橋沐石氏を加えた四吟歌仙もある。今後も三人を核に客人を加えたり他流仕合に招かれたり、連句実作を重ねたい。

梅散るや声も立てずに烏骨鶏　古舘曹人
大朝寝して遠き世の塵　有馬朗人
異国より便りの届きうららけし　宇咲冬男
紫檀の机山荘に置き　曹
月光へかぎりなく湯の湧き出でて　朗
うんかの話聞かずなりける　冬
秋（ウ）渇く首都に集る警備陣　曹
しみじみとして雨の大喪　朗
アルバムのセピア色なる二十代　冬
明日（あした）待子（まち）に似たる学生　曹
いくとせのくどき言葉を胸に秘め　朗
海峡の潮渦巻いている　冬
さい果ての漁師が負える寒の月　曹
熱燗一升御飯一杯　朗
斃れても人のいさめは聞きもせず　冬
復活祭に門弟を率て　曹
振返る顔のおさなき花明り　朗
霾降る中に猿の涙目　冬
蘭州（ナオ）の鼓楼鐘楼鎮まれる　曹
替え着すくなく句帳は重く　朗
恰好よき者よりキャッシュレスの代に　冬
ないようであるお布施の値段　曹
夏の夜のゆすりたかりは付きもので　朗
忘れた鉢に土用芽の吹く　冬
裏方と駈け落ちしたる女形　曹
車の中に銀のライター　朗
誘拐の電話の口に裂（きれ）かぶせ　冬
たしなめられし悪ふざけの児　曹
どれも皆あかんべえして案山子立つ　朗
名残の月の雲の払われ　冬
そのほかの冬遠からぬ厨事（ナウ）　曹
すこしおごりて書斎六畳　朗
東大のついに学長とはなりし　冬
羽織を落すときでありける　朗
初花を見つけてうれし苑の午後　冬
万歩あるきし春日の下　曹

平成元年二月二十六日首尾
（於・東京乃木坂　古舘曹人事務所）

《札幌・俳諧寺芭蕉舎―その一》

蜉蝣風連詩『リビングストーン』

窪田　薫捌

昭和五十三年四方万里子との両吟を最初の作品とする。『世界俳句選集'78』が此の名称を用ひた最初の出版物。特定の師系なし。森羅萬象のすべてが師といへば師といへる。特定の規約・会費・名簿など一切なし、入会もなければ退会もなし。一切は怪人窪田薫の脳中に於て、俳諧興行の折に蜃気楼の如く発生し消失する。

リビングストーンのあるいた白い道を
野性の驢馬がゆつくり歩いて
アブラ菜がさかんに排水してゐる

☾

輪轉機の愛撫を乳房に溢れさせながら
神の雫は滅びの美をびびる究極
珈琲色のコーランの月を御覧
財布を忘れ薄羽蜉蝣が泣く

☾

龍月から出發した雌のUFOは小便を
割目思ふ故に遺伝子工學士は抜驅けして
翼ある蛇にならうとする業平忌である

啼くな小鳩よ
豆をやらないので
笑ひすぎて芽の出ない泉岳寺
目黒の殿様は秋刀魚をうらがへす

樟やマテバシイの青葉がやさしくて
つくりものの雲がスカートなしで走つて行く
なにかメイアンはありませんかと聞かれても
薔薇の交媒にかまけウイウイ口ごもる

裏白は鬼門にはためき
氷柱がさかさまの疑問符
ルビはビルの陰

☙

結んで開いてジャンジャンジャックナイフで
ルソーは眞赤に錆びた嘘をつく
外郎たべながらリンネは花火を鑑賞しても
何の因果か今度は放屁蟲に生れ變る

☙

いまはクタビレてクチビルも青ザメ
しどけなく歌ふ花のゴゼ唄
アニマルの系統樹を壁に貼つてゐる

昭和62年3月2日～31日（文音）　1・3・8聯・新妻　博
2・4・6聯・窪田　薫
5・7聯・四方万里子

《札幌・俳諧寺芭蕉舎―その二》

歌仙『大阪で』

窪田　薫捌

大阪でふらつぺ食べた田舎つぺ　窪田　薫
　鞄にべとり汗の掌の形　前並　素文
街道を鳥類が下駄つつかけて　八木　三日女
　すこしがたつきSLが發つ　前田　圭衛子
☾立待ちの月に囁く淡き聲　志波　響太郎
　西瓜たちまち右と左に　水島　洋一
かがし翁お前も莫のみたかろ　竹内　義　聿
　女身つらぬくシンセサイザー　三日女
逢ひみての後の心はるんるんる　圭衛子
　ヴァレンチノたらコールマンたら　洋一
片隅に化けそこねたる庭の石　素文
　積雪量は零にはじまり　響太郎
☾くやしさに凍て弦月をにぎりしめ　三日女
　尻尾を巻いて歸る狼　響太郎
チャトランと一〇一匹が行進中　圭衛子
　注文多くてんやわんやよ　義　聿
☽花の宿酔ひのいささか醒めてをり　洋一
　アンティックドール抱く春愁　三日女
April Fool, office loveがばれ　圭衛子
　ごめんごめんはあてにはならん　響太郎
青よ青よ土色の馬放たれよ　素文
　地獄煉獄めぐり天國　義聿
ダンテ的方丈記的岩清水　響太郎
　&レモンとコカコーラなど　洋一
昨日今日遠山に陽のあたりたる　素文
　月も照るらむあしたあさつて　薫
☾蕎麥枕おらが添寝の歓喜佛　義聿
　きりぎりす啼く義理できりきり　薫
小指たてあなたは會社やめました　圭衛子
　おいしおすえと舌は何故？　三日女
木屋町を千枚漬の樽提げて　洋一
　都ホテルで冬籠りする　響太郎
猿曳きも猿も疲れてチェックイン　圭衛子
　犬年悪友から年賀状　三日女
☽雨催ひしてはや花の枝たわみ　素文
　かげろふゆれて寫樂きえつつ　義聿

昭和六十一年八月三日首尾
（於・大阪郵政会館五号室）

《札幌・俳諧寺芭蕉舎―その三》

蜉蝣『水澄むや』

☾

水澄(オ)むや沈みし琴の見ゆるかに　窪田　薫
海圖のしみを泛かす月光　四方　万里子
鶏頭の窓にバタアを焦しゐて　別所　真紀
十四五分も風通すべし　薫
立讀みのうしろを覗く髭男　万理子
ページにうづくまるゆきうさぎ　真紀
こんこん(ウ)と北の狐が來たわいな　薫
紺の絣の似合ふあなたで　万理子
ムイシュキン公爵と逢ふ木曜日　真紀
オネーギンと寝る金曜日　薫
階段に生まれたばかりの蝶がゐる　万理子
測深鉛を陽炎に投げ　真紀
陰陽師地震(なゐ)に駭く花ふぶき　薫
学園祭のノラはふくよかアランフェス(ナオ)協奏曲歡そして哀　真紀
うたたかの戀さわぐ青蘆　薫
浪の閒にちりめんあらめもつれあひ　万理子
沃度・カルシウム・ビタミンと？(はてな)　真紀
なにやらを胸算用の西鶴忌　薫
八朔の祝無事にして農　万理子
待宵のペーパーナイフ兇器とも　真紀
古酒に固執する狂氣なり　薫
物臭(ナウ)の太郎大知は閑に閑　万理子
のどぼとけなき野佛に霜　真紀
神の旅鴛鴦(をし)の沓(くつ)などときに履き　薫
つまるところは賭博のすすめ　万理子
垂直に詩語は顯つべし花籌　真紀
蜂横ッ翔ビ！ Let it bee!　薫

昭和五十九年八月二十四日首
昭和五十九年十二月七日尾

（文音）

《西宮・俳諧接心―その一》

昭和十五年「俳誌かつらぎ」に連句の頁創設以来今日に及んでいる。「俳諧接心」（平成二年誌名変更）の名は、大正末年岡本松濱の寒菊堂に参ずる者等時と人数を論ぜず俳諧精進をした故事に因むものである。月例連句会四回定例。他随時。来るを拒まず去るを追わず（オープン制）フィーリング付で表現は写生による（古式にとらわれない）

歌仙『豆撒き』

阿波野青畝　草間時彦　岡本春人　青畝　彦　人　畝　彦　人　畝　彦　人　畝　彦　人　畝　彦　人　畝　彦　人

憂々と豆を撒きたる書斎かな
年の内なる立春の沙汰
しきたりの西と東は異なりて
醤のにほひしるき町並
月待つとそこらのものを羽織りつつ
みみず鳴く夜をひとり酒酌む
まぐはひの石に露置く社あり
鳥に習ふて恋をするなる
相聞とありし表紙は手ずれして
真理解かるる一粒の麦
地の涯を砂の嵐の吹き荒び
埴輪の馬に鞍はなかりし
陶枕は宋のものなるコレクション
いつか咲きゐし棚の夕顔
水打ってをれば大きな月が出た
聞きちがへして帰る質店
花莚まろめ担いでとぼとぼと
ぬけ路地青く灯る春宵

北欧の雪解の村の物語
人魚を描くはアルバイトなり
大関として五十場所つづけたる
濡れたる頬に隅田川風
はららごはうすくれなゐに飯の上
わたり酌婦に深みゆく秋
セプテンバーソングといへる歌ありて
十七日の月がお逮夜
化かされし狐の話尾ひれ又
松籟わたる河内野の果
洗ひたてられたる旅の恥をかく
衣の下に鎧ちらちら
あれはいやこれは嫌ひと食べ散らし
命なりけり命なりけり
水虫の夜昼となき苛責にて
百日雨の降らぬ村里
聞くならく鰊御殿の花明り
縄文の碑にもゆる糸遊

昭和五十五年二月首
昭和五十六年三月尾　（文音）

《西宮・俳諧接心―その二》

歌仙『松　籟　に』

阿波野青畝捌

松籟にたそがれ遅き牡丹かな　阿波野青畝
うす紫の蛇の脱け殻　岡本春人
ほの暗き狐格子をのぞき見て　福田リキエ
里のわらんべ駈くる畦径　〃
いつの間に月見団子のなくなりし　小倉星女
蚯蚓鳴くのか螻蛄が鳴くのか　〃
横綱がころころ負けし九月場所　須田三造
昔の文のむつかしき文字　〃
親鸞も蓮如も人間臭き恋　山本清嗣
耳に口よせとどめさされし　星
あきまへんさつぱりだすの儲けぶり　岡田水都子
逃げたる篭にカナリヤの餌　岡田有年女
隙間風通へばもるる月明り　造
一つ覚えのハーモニカ吹く　二塚元子
しわくちやの顔して愚痴をいつまでも　山尾克代
杓よりすぐに甘茶したたる　〃
律川に呂川に花の散るならん　増田草介
ピアノに白き春の塵見ゆ　克
おしやべりの窓辺の鸚鵡うららかに　田島竹四
逸翁しのぶ美術展なり　下田喜代
下駄ぬぎて銀杏落葉の金を踏む　克
迷子のわが子マイク呼びゐる　森嶋静女
二羽三羽塒を目ざす鴉なり　沢井山帰来
バレンタインの豚饅頭を　〃
ふたりには長すぎた春やうやうに　森山寿賀子
そろばんはじき直す申告　〃
西鶴の胸算用を名著とし　辻静穂
足で踏んだり砧打つたり　〃
クリークに影さす月の波見えて　賀
はららごこぼす鮭の太腹　星
友はいま俳句の旅のヨーロッパ　元
ビールの泡を髭にとどむる　〃
かもめ舞ふ紺は男の夢とせん　四
熊野三社に笑ふ山山　造
くたびれて脚を投げ出す花夕べ　〃
汀に狂ふ蝶もつれつつ　静

昭和五十七年六月首
昭和六十年四月尾　（付勝）

《西宮・俳諧接心―その三》

青畝米寿祝筵

居待『米寿とは』

阿波野青畝捌

米寿とは大樹の楠の茂りかな　草間時彦

端居の客もしづこころなる　阿波野青畝

雨の日の句碑の文字の鮮かに　加藤三七子

二　声　三　声　朝　の　蜩　小倉星女

けふもまた蓮の実の飛ぶ薄月夜　岡本春人

連れだつてゐる毛見の役人　彦

たてがみを靡かせて馬駈けくるよ　七

那須の乙女の名はかさねなり　人

ゆげむりにはぢらひながら物言はず　畝

日限りの地蔵さまへ願掛　星

いつの間にやみたる雪に月さして　彦

酒の肴に獲りしばんどり　人

磐梯に七つの沼の色ちがふ　星

扇拍子のよくきこえたり　七

買物は原宿族の赤時計　畝

虚子忌のころは風強きかな　彦

花の茶屋夫婦の頭もじ並ぶ　畝

芸ひとすぢもただおぼろなり　七

ばんどり……むささびのこと

花の茶屋……冨竹は百十年前冨造・竹の夫婦が、蓮料理の茶屋をはじめたもので、界隈は蓮と杜若の名所であった。庭に杜若かたるも旅のひとつかな　芭蕉

二三言恋めくもよし紅葉酒　青畝の句碑がある。

昭和六十一年六月二十三日首尾（於・大阪鷺州・冨竹）

《西宮・俳諧接心―その四》

岡本松濱五十回忌追善連句興行

脇起箙『虫鳴くや』

岡本春人捌

虫鳴くやいまだ安住の地をしらず　松濱居士

露の野末の門下幾許　岡本春人

後の月雲間を縫へるとき迅く　岡本星女

松ヶ枝の影黒く伸びゐる　竹山みどり

お茶室のにじり口よりしとやかに　松内絹女

さめ小紋とも江戸小紋とも　藤野八重

風蘭の香りほのかにただよひて　増地正恵

行水の肩少しやせたり　永井一子

ルージュ濃く今宵もタンゴ踊らうよ　増見咲子

喜寿と傘寿の眼鏡貸し合ひ　奥村勘甫

煙るごと枝の先なる帰り花　二塚元子

頓証菩提木魚ぽくぽく　歌川山黛

鶏が樹に登つて明日は天気らし　辻本義一

大統領選結果如何にと　林由子

信玄の風林火山の幟立つ　左海延子

蜂の子肴温め酒よし　岡田ふさの

文人の集ひ閑かに今日の月　岩井双葉女

恋の通ひ路雪に閉され　安藤ぬい

執念の少将九十九夜さを　岩尾美智子

サバンナの宿バッファロー出る　竹山美代子

藤の木古墳錦宝石続々と　山川真智子

回峯径の太き早蕨　森田蓉子

大淀の長柄堤は花盛り　岡田水都子

耕し了へて夕日をろがむ　清水幾湖

昭和六十三年十月二十九日首尾

（於・大阪・真田山・慶傳寺）

《西宮・俳諧接心―その五》

歌仙『伝統を』

阿波野青畝捌

伝統をうるさう説くな花に雪　阿波野青畝
春あけぼののものの輝き　岡本春人
乾蔵巣づくる燕いそがしく　岡本星女
　丹波杜氏の酒焼けの鼻　畝
月明に裾のほつれて腰衣　人
へちまの水を取り忘れたり　星
改元（ウ）の沙汰なく秋は暮れにける　畝
ファミリーランドにホワイトタイガー　人
十九カラットダイヤモンドの妖光が　星
もの狂ひして向日葵を描く　畝
炎天の空美しと詠へる句　人
無明の渕の片目無き魚　星
埋火の灰に内緒の文字あり　畝
　下ばりの絵ののぞく唐紙　人
歌占の末うたかたの恋なりし　星
　市章山の灯おぼろなるかな　畝
古備前の壺に桜の大枝垂　星
東風によそ見をせぬ風見鶏　人
衝（ナオ）突のしさうな舷に観潮す　畝
　水引掛けて古ぶへその緒　星
ふだらくの嶺目のまへに現はるる　人
　その腫ものはものもらひなり　畝
袖口をキッと噛みしめてゐる役者　星
　炎と燃ゆるくちなはの舌　人
隠すべきものを隠さず写すとは　畝
　小説の「鍵」仮表紙とす　星
ばかでかい旅行鞄の処女ばかり　人
　馬肥えてゐる那須の篠原　畝
月の面豊旗雲の一ト（ナウ）ならび　星
　伽羅たきしめて露の起き伏し　人
情（ナウ）なしロッキード又リクルート　畝
　掘り尽したる佐渡の金山　星
分限者の昔のことは口堅し　人
　水ぬるめども亀は目覚めず　畝
初花の阿国の墓は丸き石　人
　蓬だんごの味のよろしき　星

昭和六十三年十二月十三日首
平成元年三月十六日尾（文音）

《西宮・俳諧接心―その六》

十二調『生身魂』

岡本春人捌

生身魂気ずい気ままの傘寿なり　岡本　春人
目鼻くづれし西瓜提灯　葦生　はてお
ペルシャ絨緞日に5ミリづつ織り進み　竹山　美代子
とうとうたらりたらりらたらり　岡本　星女
山重畳三千丈の滝落下　人
課長のままで僻地転勤　お
虎使ふ鞭一閃の美女なりし　星
バレンタインのチョコをこつそり　代
そこはかとなく梅匂ふ薄月夜　お
灘の地酒の名前知られず　人
舌もつれ河豚あたりかや切炬燵　星
浮寝の鴛鴦に降りしきる雪　代

平成元年八月十六日首尾（於・寒菊堂文庫）

《西宮・俳諧接心―その七》

出花『鉄斎の』

阿波野青畝捌

鉄斎の詩は山水を涼しうす　岡本春人
置物として凭せたる琵琶　阿波野青畝
海見えてくる江の電に乗換へて　〃
雀いろどき街道の松　加藤三七子
月の出のそのころしめし合はせんと　岡本星女
蚯蚓の鳴ける夜這口なり　人
生涯の郵便配達山粧ふ　〃
一枚欅拭きこまれたる　畝
目を皺め円空仏のほほゑみし　七
後ろすざりの猫の吹き合ひ　星
障子しめ切られ山門不幸とか　畝
雪の降り積む大原の里　人
足る日とし白酒黒酒を神々へ　七
口論好きの韓（から）の人々　畝
散る花に鼓の音の昂ぶりて　〃
金環出土草萌ゆる也　星
鶯の羽洗ひをり思ひ川　七
化粧塩してうろくづの春　畝

昭和六十二年六月二十七日首尾（於・宝塚、七福荘）

《東京・白塔歌仙会》

①劇作家西川清之（名丸）氏を中心に俳句仲間の有志で結成。昭和61年2月設立。
②爽かに佇つ白い塔のイメージに、暗に「シロウト」ともどいて読む寓意を含める。
③会員数現在10名。月一回例会開催。不定期に雑誌『白塔』を発行
④式目は尊重するが繁文縟礼には陥らない。門扉は鎖さないが敢えて大発展は求めない。

歌仙『湯葉求む』

西川名丸捌

湯葉求む祇園会ちかき夕間暮　山本やよい
染めてみたきは藍のあぢさゐ　荒井道三
黒き鳩朝日に追へる子等ありて　木本ひでよ
練習曲の絶えざる館　坂口玲子
宿題の手につかないで窓の月　上村以和於
大川端に秋雨の傘　西川名丸
ウひつそりと撫子の咲く狭庭なる　山本隆則
転々とする独り寝の閨　道
土産買ふ亭主は脛に傷を持ち　加地美知子
口座の金は遂にマイナス　や
海賊はこの入江にも帆を揚げし　玲
ハックルベリー・フィンよ何処に　ひ
香水はギ・ラロッシュなり冬の月　名
狸の如き付け睫濃き　以
人形にあらずとノラは家を出る　美
あとは野となれケーキ無茶喰ひ　隆
縄文の謎に満ちたる花の種子　玲
春塵の舞ふ発掘現場　や

ナオ耕して天に至れる真昼どき　以
カレーライスは印度に限る　隆
こんなものあんなものにも消費税　道
まづ署名簿に書いて下さい　ひ
地の憂ひ包みて深き夏木立　美
短夜といふ不思議なる刻　名
いとほしき知の鎧なきムイシュキン　玲
縊らるる間も君の名を呼ぶ　木本公世
マドンナを待てど汚職で行方不明　隆
無理を通して列車停まらす　道
喧噪を吸ひて昇れる赫い月　ひ
貧しき町に初時雨降る　以
ナウちちろ啼く奈落に竹刀おちてあり　名
明日は明日と不貞寝する宵　美
野良犬が自殺をやめて歩き去る　や
風船高く高く飛べ飛べ　ひ
今生を楊貴妃桜花咲きぬ　公
残雪淡き山越えの道　玲

平成元年八月五日首尾（於・神田「竹むら」）

《東京・芭蕉記念館連句会—その一》

歌仙『風痕の』

宇咲冬男捌

東京江東区芭蕉記念館の開館から同館の運営にかかわった冬男が、現代は俳句オンリーで、芭蕉の心血をそそいだ連句が忘れられている、芭蕉記念館設立の意義の中に連句の普及を—と区へ進言。冬男が指導者となり、昭和五十六年、超結社の俳諧道場を開いたもので、特長は連句と共に俳句（立句）の勉強にも力点を置いていること。

風痕のひとつに木守柿ありぬ　宇咲冬男
月宮殿の階の白々　山崎宗喜
井水やせ水底に影正すらん　藤沼亜緋子
記念写真のシャッターの音　福田太ろを
ありありと欄間に彫らる昇り竜　島川寅一
あちらこちらで煤払いする　大野花子
一条の白雲消えし大旦　福山照
佳き名をもちて裾曳ける嶽　安藤正一
深窓に育ちし女の薄たけし　松澤晴美
家庭教師の域踏みはずす　秋場豊
水さしの水のこぼれしままにあり　冬
テレビニュースの告げる震度五　富安英子
原爆忌月赫々と照らしいて　豊
蟻地獄より思い湧き立つ　太
温泉は関八州に多かりき　宗
なまぐさ話無きと集まり　山元志津香
酒よりも花の雅びにひたる人　太
朧に並べ志野や唐津や　志
恋猫の恋に破れて戻りくる　豊
交通ルールがんじがらめに　亜
平等の叶う日祈る南阿国　寅
湖も大河も神のものなり　冬
むらさきの布袋葵のびっしりと　照
夏帽ぬげば瞳濡れいし　寅
ふたり湯の溢るる音の静まりて　太
鸚鵡返しに名を呼ぶ鸚鵡　冬
寒ぬくく任地の窓の開きいし　宗
原生林のはるか広がる　豊
と見るまに高々上る望の月　照
唄うたいつつ新蕎麦を打つ　宗
売店を連ねるばかり文化祭　亜
賞総なめの利根川博士　花
坂道はゆっくり歩き行くものと　寅
巣箱の雛の声の洩れくる　亜
年古れる幹のぬくもり花の翳　冬
空うららかに屋根の葺替　太

昭和六十二年十一月二十五日首
昭和六十三年　二月二十四日尾　（於・東京・江東区芭蕉記念館）

《東京・芭蕉記念館連句会―その二》

歌仙『噴水の』

宇咲冬男捌

噴水の水に戻りて更に噴く　宇咲　冬男
仲むつまじき軽鳧の親と子　岩城　順子
仕草まで二代目に似ていとしくて　藤沼　亜緋子
襲名祝う宴続きし　秋場　豊
幔幕を高く掲げて月を待つ　順
街の外れに刈萱を刈る　福田　太ろを
山刀伐の帽子まぶかに深む秋　太
黒を流行らすパリコレクション　豊
さびしさを賭にまぎらすばかりなる　〃
真珠の指輪はずせざりしよ　冬
泡粒のひとつ消えてはまたひとつ　太
過ぎゆく時はとどめ得ぬもの　亜
失業のまるめたる背に冴ゆる月　寺崎　恭一
悴かみし手に探るワープロ　山元　志津香
子がふえて川という字に点がつく　大野　花子
鮭のおむすび固ゆで卵　順
花筵彩とりどりをえらびかね　太
真綿のような春の浮雲　福山　照
笑う山めぐらし詩情ほしいまま　山崎　宗喜
応募小説入選したる　亜
ぽっくりと風流夢譚逝く七郎　恭
落書一枚出しそびれたり　花
壁のしみかくす団地の紅の花　宗
妹の鏡の割れし短夜　冬
ふつふつとふき出す妬心持てあまし　宗
焼けぼっくいをよそごととして　恭
潮騒を遠く砂丘の越えがたき　宗
遮断機のみの国境のあり　冬
弾痕のなおなまなまし夜々の月　宗
草の実さえもつかぬ荒れ墓　照
地上げ屋のはびこるなかを海嬴廻す　亜
塀の内では開く古書展　太
落款の彫りが何ともいえなくて　冬
無形文化の技を受け継ぐ　島川　寅一
爛漫とはた深々と花の奥　冬
のたりと田鼠鶉と為れり　宗

昭和六十二年六月二十四日首
昭和六十二年十月二十八日尾
（於・東京・江東区芭蕉記念館）

《東京・芭蕉記念館連句会―その三》

歌仙『ブランデーグラス』

宇咲冬男捌

ブランデーグラスの薄き夜の短か　宇咲冬男
ゆったり脚を載せる籐椅子　福田太ろを
かねてより望みの版画彫りもして　島川寅一
大き音たて鯉の跳ねたる　藤沼亜緋子
敷石の数に月光きらきらと　山崎宗喜
豆柿たわわ旧き街道　太
追い剝ぎの出ると言わるるそぞろ寒（ウ）　寅
ローマの駅に立ち往生す　亜
純情を捨てきれざるを悔いもして　冬
自伝小説めく恋文の　宗
歳古りし机にいつか傷のあり　小林和夫
新表札のかかる石門　太
弦月の塾から帰る子に冴ゆる　寅
親を殺して熊に喰われし　亜
どこにでも阿弥陀如来は在わします　宗
小さな窪に宿る春露　冬
汚れ無き深山の花の色淡く　和
暮れかねているせせらぎの音　太
待ちぼうけ食わせ団子をほおばって（ナオ）　寅
胸のバッチがいやに気になる　亜
北鮮と韓国意地を張り通す　宗
股をくぐれる故事の思われ　冬
夕立のなかなか止まぬ雨宿り　和
髪を洗って待つは新妻　太
贈られし揃いのパジャマ着せ合いて　寅
真実一路とはゆかぬもの　亜
校塔に今ものこれる大時計　宗
都の海は広漠たりし　冬
残業の灯のおちこちに望の月　太
草の実つけてそばやの小僧　和
秋の磴どこまで続く門前町（ナウ）　寅
陣中膏は何にでも効く　亜
連勝の横綱のとる右上手　宗
浅黄群青古代紫　松澤晴美
通り抜けせし眼裏に花の綾　冬
曲暖かに溢れくる部屋　安藤正一

昭和六十三年五月二十五日首
昭和六十三年八月二十四日尾
（於・東京・江東区芭蕉記念館）

《岐阜・巴世里の会》

歌仙『青葉の雫』

大野国士捌

①昭和六十二年十二月、言葉の勉強会として発足。
②「はせを」よりの、まったく恣意的な変化。
③会員八名、年齢は三、四十台、月例。
④古きになずまず、新しきに溺れず。

あけぼのは青葉の雫硯石　塚本真博
玉章しるす羅の袖　大野国士
源に近き流れに佇みて　成瀬多恵子
トンネル抜けるブルートレイン　加藤洋治
クレーンを月の渡れる造船所　伊藤慎一
甘き西瓜の冷えてゐる縁　〃子
若き弟子連れて庭師の松手入れ　〃
徳利かかへ潜る山門　博士
かたくなに天動説を信奉し　〃子
悪夢の去りて妊るを告ぐ　〃子
考へる人罪多き日も過去に　一
オホーツクへと駈ける野兎　博
飛び交へる軍事衛星月冴ゆる　〃子
座敷童は淋しがりやよ　〃士
縫ひぐるみ抱いてやさしく語りかけ　博
寅次郎ゆく雉子の参道　士
花婿の雅楽に眉のうらうらと　〃子
畑焼く煙まつすぐに伸び　蛇（ナオ）・蜥蜴・蟻・地虫・蟇穴を出づ　士
暴走族のアジト摘発　子
特種に胸踊らせる女性記者　博
ボーイフレンド五つ年下　子
教室の席かへの日の待ち遠し　〃
海から上り海へ入る虹　士
炎天の難民キャンプ満員に　子
こけら落としに集ふ村人　博
アタックのたびに黄色い声が湧き　士
猫が隠るる鬼灯の畑　博
去年ありて今年は見えぬ月の客　〃
栗むく母の指細りし　子
古書店（ナウ）に捜しあてたる文庫本　一
坂の上にはニコライの鐘　士
留学生故国へ帰る日も近く　博
息をととのへ引きしぼる弓　士
真昼間の城跡に花降り止まぬ　一
子守りの人に吹ける軟東風　子

平成元年七月二十二日首
平成元年十月　十四日尾　（於・喫茶フィールド）

《八戸・八戸俳諧倶楽部—その一》

歌仙『鬢に白きものを』

関川竹四捌

明治三十六年に時の宗匠互扇楼、星霜庵、百丈軒、花月堂、二川居らを中心に創立された。その主義目的は記録によれば「正風俳諧を研究するに在り」とある。現在、十七世星霜庵を中心に連句の勉強会に取り組んでいるが、九十周年記念大会を迎えるに当り、伝統ある歌仙興行（文台捌きによる）の披露にも意を用いている昨今である。

鬢に白きものを加へて万愚節　関川　竹四
べレーかぶりて春風をゆく　星野　佑美
野遊びの頭上に光あまねくて　菊地　敏子
同じところを二度通りけり　小池　美千子
昇りたる月まんまろし湖畔宿　高橋　白晶女
セレナーデ聴く秋のともしび　敏
ウつれだちて寺詣りする萩の頃　佑
手相みられてからの気がかり　大橋　たつを
面影を想ひ浮かべて眠りけり　山下　節子
ツルゲーネフの初恋の本　佐々木　ツタ子
独り居もまた楽しきと言ひ訳し　〃
塩せんべいを四、五枚も食ふ　高橋　すず江
本尊の背ナの窓から月の影　小林　凡石
一村の空鳥渡りけり　美
秋祭裸電気に人寄りて　晶
車座になり酌みかはす酒　苫米地　古北
ここかしこ桜の花の咲きみちて　河原木　房子
野焼の匂ひ街に流るる　晶

ナオおぼろにて犬の嗅ぎゆく池の面　凡
眠りを覚ますパトカーの音　た
板塀に折れて添ひゆく影二つ　凡
内ポケットに秘めし恋文　美
手を上げてタクシー止める街の角　佑
はや明け近くほととぎす鳴く　す
裏町に津軽訛りの金魚売り　敏
黄砂降るとの予報ありけり　節
黒牛の突つ立つてゐる昼下がり　房
俄か雨きてシーツ取り込む　す
農の膝折りて写経の玻璃の月　陽
どこからとなく鈴虫の声　古
ナウ秋灯下こけしの目鼻描き入れて　ツ
夫と二人で熱き茶を飲む　房
海峡を列車で過ぐる旅をして　節
朝の日課を犬と散歩に　た
石段を登ればやさし初桜　古
国光の碑にもゆる陽炎　泊

昭和六十三年四月十六日首尾
（於・八戸市公会堂）

《八戸・八戸俳諧倶楽部―その二》

歌仙『帰る雁』

関川竹四捌

帰る雁振り返りたきことあらん　関川竹四
ものの芽の吹く紙漉きの村　佐々木ツタ子
掲示板に「告」の一字の薄れゐて　高橋白晶女
下校の児らの声透るなり　小池美千子
流鏑馬の的を照らして月のぼり　星野佑美
石に腰かけ虫の音を聞く　山下節子
萩咲いて誰もゐぬらし古格子　大橋たつを
斜めに貼りし千社札あり　小林凡石
片恋のときめく胸の鼓動鳴り　菊池敏子
文箱に出さぬ恋文の束　苫米地古北
若者の一気に飲みしコンパ酒　河原木房子
コーヒーの香にボレロ流れて　高橋すず江
月のせて青き屋根見ゆ養護園　晶美
秋の七草彩溢れをり　美ツ
農鍛冶の火花の散れる秋日かな　節
影ゆらゆらと水の上ゆく　佑
参道に開きそめたる朝桜　凡
春風のなか並ぶ陶椅子　敏
春雨に新調の靴汚しけり　す
消防車来る南部旧邸　古
横丁に曲りて消ゆる二人づれ　房
窓より洩るるあまき恋唄　佑
時刻表開き旅路に思ひはせ　た
船の窓打つ雪しきりなり　凡
うすずみの津軽海峡冬景色　古
駅長が駅長ラーメン啜りをり　た
シベリヤからの風の冷たさ　敏
うつかりと吸ふ禁煙車輛　節
ほのかなる香の匂ひの薄月夜　美
木の実の落つる音のひびきて　す
書を読んで膝を正しぬ秋灯下　ツ
テレビの裏に埃溜めをり　晶
ブティックの女の生活いきいきと　陽
明日のバザーの賑はひ思ふ　藤井泊
花吹雪足かろやかに磴上り　池田風信子
長者の森に蝶の舞ひ見む　竹

昭和六十三年四月十六日首尾（於・長者公民館）

《八戸・八戸俳諧倶楽部―その三》

歌仙『年の瀬や』

関川竹四捌

年の瀬やガードの下の鰈売り　関川竹四
をりから雪を運ぶ川風　高橋白晶女
夕支度までのひととき外歩き　藤井泊陽
見知らぬ犬が蹤いて来にけり　瀬知和子
雲割つて片側町を照らす月　四
更けてほそぼそ虫の声して　女
きらきらと露置く寺の石だたみ　陽
柴折戸の桟半ば開きをり　子
幼な名で呼んで呼ばるる二人仲　四
思ひもかけぬ邪魔の入りくる　女
転勤の噂ちらほら出はじめて　陽
立読みをする旅行案内　子
河鹿鳴く湯宿の庭に月射して　四
吊り橋渡る人の涼しき　女
茶を淹れて四方山ばなし弾みたり　陽
竿竹売りのマイク近づく　子
桃桜いちどきに咲く北の国　女
よき夢をみて朝寝むさぼり　陽
散策のついでに植木市のぞき　子
二度の勤めの先輩の顔　四
ループタイの琥珀が胸に華やぎて　女
少しはなれてをんな立ちをり　陽
吸ひかけの煙草を棄てる夜のホーム　子
闇の奥にてほととぎす啼く　四
松島の松はみどりを滴らし　女
岸辺を洗ふ荒き白浪　陽
コップ酒一気に蜑の呷りけり　子
三味線草を屋根に咲かせて　四
月の出のほのぼの明し杉の梢　女
社の池に鯉のひそめる　陽
産土の杜を洩る灯の爽やかに　子
貰ひ風呂して戻る近道　四
無燈火の自転車二台すれちがひ　女
土手行く人の影のおぼろに　陽
朝桜日にあはあはと色こぼし　子
うすむらさきに霞む山脈　四

平成元年十二月二十一日首尾
（於・八戸市・関川竹四宅）

《松本・花野連句会》

二十韻『とうがらし』

小出きよみ捌

①水城澄さんが友人に勧められ、近しい方々の集りができました。満十年を越えます。
②小出きよみの連句集「花野」からとって連衆の上條絹子さんがつけてくれました。
③毎月一回、昼食をはさんで楽しんでいます。
④先師根津芦丈先生の歩まれた道を、東明雅先生の御教導に依り、踏んで行きたい。

野分去りあちこち向きてとうがらし　橋爪万津子
ビニール色に漂へる月　小出きよみ
四十雀の籠の掃除をしてやって　川口栄子
帽子に飾る赤きブローチ　増田真波
ウバス待ちのカバン持つ手の十あまり　布山翠
ひそひそ話に猫が耳立て　万
いい男みな妻子ある口惜しさよ　み
障子の穴のかすか音立て　翠
雪舞ひて讃美歌洩るる夜の道　波
襟巻の人犬抱いて来る　翠
ナオ舶来の時計の振子ゆったりと　栄
開きっぱなしの廻転扉　万
宮様の恋の噂に蛍とぶ　波
ビールのむかう月と君の目　小出まこと
UFOの青き光にまどはされ　栄
作務衣の僧の肩の細々　波

ナウ打ち寄せる波に芥ももろ共に　万
地球汚染に鳶のうららか　栄
尋ね来て花の吉野の奥の奥　み
田打人見ゆやすらけき国　波

平成元年九月十日首尾

《松山・祓川（はらいがわ）》

脇起古桐　『うすものや』

鈴木春山洞捌

昭和五九年一〇月創立。会名は初代代表者・島津百壺庵氏の住所から採集。本会は鈴木春山洞先生の教え子になる旧制愛媛県立松山中学校卒業生扶桑会の有志を母胎に成立。春山洞先生の御指導を受け、現代の生活の詩・連句を楽しんでいる。現代表者・黒田耕三。例会場・三津朱庵。毎月例会・第二水曜午后七時から。初心者歓迎。

うすものや薄くれなゐの下重ね　松根　東洋城
四畳半にも入りし冷房　鈴木　春山洞
賑はひし祇園祭のつきはてて　丸木　一　秋
笹舟浮かべ児等の戯る　井門　可奈女
振り仰ぐ下弦の月の光（かげ）蒼く　森　法輪
古歌（ウタ）に詠まれし鳥渡りゆき　寺田　作蔵
恋托す草の穂絮の一筋に　洞
寝乱れ髪の乱れ流るる　秋
島々を瀬戸の大橋架け連ね　奈
仏画売買キャラバンの旅　輪
病人へ日溜まり淡く帰り花　蔵
北庭あたり虫の嗄れゐる　洞
浜田市は河川氾濫水浸し（ナオ）　秋
てんやわんやの家の子郎党　奈
目を窃み手に手をとりて離れ屋へ　輪
縺るるふたり玻璃にうつれる　蔵
こつこつと靴の跫音遠ざかり　洞
空海像を射す月涼し　秋
赤と黄と金玉糖を盛り付けに　奈

友（ナウ）と集ひし師を囲む宴ン　輪
鼻唄にナツメロの曲口誦み　蔵
卒業式に母涙する　奈
花の山松籟を聴く坐禅石　洞
朝風の中匂ふ壺焼　秋

昭和六十三年八月二十日首尾
（於・松山市三津・朱庵）

《松山・芭流朱連句会―その一》

歌仙『二色に』

鈴木春山洞捌

昭和五五年一一月創立の鈴木春山洞の会である。芭流朱は当字。「バルシュ」はドイツ語・鱸の意。本会は松根東洋城先生の俳諧精神を継承し、風雅の誠に生き、実作して楽しく、捌いて楽しく、校合して楽しく、後から読んでも楽しい連句を、現代の生活の詩として詠いあげ、連句醍醐味を気軽く堪能しようとする会です。初心者歓迎。

二色に盛り合ひアイスクリームかな　鈴木　春山洞
窓開け放ち入るる薫風　芥川　良美
砂浜に置かれし舟を漕ぎ出して　池田　澄子
頼まれ事を果たし来しなり　美
人形師眉かく筆を照らす月　守口　津夜子
刷く薄墨に忍びよる秋　藤村　貴美
あれこれと冬の仕度に気を配り　美
迷ひ心で装選び　澄
灯を消さば素直にならん愛深く　貴
仏間に籠り鳴らす鉦の音　洞
白鳳の甍に遊ぶ雀見て　夜
礎によせ憶ふ遠つ世　美
御手植ゑの大樹にかかる寒の月　澄
剝製の熊射止め親爺よ　貴
故郷をあとに自動車で旅に出で　洞
春加茂川の友禅流し　夜
花ありて花と緑の博覧会　美
子を背負ひたるピクニックなり　澄
ストローを空にめがけてシャボン玉　貴
家鴨の列のくぐりゆく橋　洞
竹藪を煽り貨物列車の長々と　夜
低調講義にうんざりとする　美
乳のあたり汗の浮き出る恋をして　澄
いなす素振りに廻す絵日傘　貴
ぶつつけに唇奪ふ真昼中　洞
古き軍歌のメロデーに酔ひ　夜
玉串料訴訟関せず参拝し　美
読みさししまま捨て週刊誌　澄
芋煮会月の光も味に添へ　貴
一際高き新酒の香り　洞
失言の悔いつまでも冷まじく　夜
利休を修す集ひこのごろ　美
東予銀座女友達連れ立ちて　澄
青髯ならぬ先生多き　貴
そよりともせず暮れかかる花の白　洞
蜃楼惜しみ渚を歩む　澄

平成二年四月十六日首尾（於・東予市桐瑠庵）

《松山・芭流朱連句会―その二》

脇起歌仙『山茶花の』

鈴木春山洞捌

山茶花の咲くを書斎と定めたり　正岡子規
ひとり静かにゐる冬籠　鈴木春山洞
「またかな」と声し灰猫掻き出して　白方筍子
厨ごとなる音のかたかた　九十六叟田中拓星
なごやかに進む連句も望下り　井門可奈女
鳴き収まれる群稲雀　筍
寺(ウ)の田に落穂拾ひのちらほらと　洞
花嫁姿父に見せたく　奈
玉章はあれやこれやと思案して　星
おろし磨(す)り溜(た)む青墨の艶　洞
ブッシュ氏が大統領は美国なり　筍
ガラス器にビー玉を盛る　奈
夏の月夜風に吹かれ川に落ち　星
大苗打ちは男一人で　筍
嬌声のふざけかかれる店を脱け　洞
しどろもどろの足の運びよ　星
リアス式入江に臨む鳥羽の花　奈
春ショールするひとを伴ふ　洞
喜(ナオ)んでくれる親なく卒業し　筍
浮世絵といふ世界の絵画　奈
紙造型色とりどりに彩どりて　星
温(ゆ)泉宿の客は縕袍(どてら)ひつかけ　筍
剝げ椀の巻繊(けんちん)汁をすすりあひ　洞
老いそめし歯の痛みまされる　星
寂びまさる時計の捻子を捲き忘れ　奈
脚さし入れて来る闇の中　洞
あまりにも惨たらしきにこれが恋　筍
またも遭ひたる夢のまた夢　星
はすかひに月よぎりゆく鳥群れて　洞
澪標ある川の水澄む　筍
気(ナウ)がねして米とぐ気配秋深く　星
着物を質に枉げて来し妻　洞
座敷飼ふ犬専用のくぐり窓　奈
明日という日もあろと言ひあひ　星
をちこちの花の便りに旅重ね　筍
八十八夜の茶摘み唄聞く　奈

昭和六十三年十一月二十二日首尾
（於・松山市三津・朱庵）

《松山・芭流朱連句会―その三》

二十韻『石蕗咲く』

鈴木春山洞捌

石蕗咲くや海蝕の洞抜くる舟　鈴木　春山洞
冬日のぬくみ受けゆく背中　長井　南茶亭
味噌汁の香り漂ふ部屋にして　高橋　乱水
ふるさとからの荷物届きぬ　梶野　浩楽
月中天ブルートレインひた走る　亭
出し忘れたるラブレター秋　洞
合図めく菊を窓辺に置きならべ　楽
秘書の仕業は逃げ台詞なり　水
長々と続く轍の曲折に　洞
瀬戸内よぎる大橋の景　亭
兜虫見つけし子等の喜びに　水
浴衣娘と月を仰ぎぬ　楽
歌ひつつ居酒屋暖簾くぐりそめ　森　法輪
紅のつきたる盃の艶　亭
夜通しのことに及びて疲れ切り　水
ねぢり鉢巻受験勉強　楽
白砂を撒きゐる寺の庭広く　輪
角落したる飛火野の鹿　水
帯解し間より花のこぼれけり　亭
漱石去りし西霞む山　楽

昭和六十三年愛媛県民芸術祭参加作品
昭和六十三年十一月二十六日首尾
（於・愛媛県生活文化センター）

《松山・芭流朱連句会―その四》

カタカナ歌仙『春雪崩』

鈴木春山洞捌

アルプスに春雪崩きく旅寝かな　鈴木春山洞
谷の朧を吹くホルンの音　守口津夜子
一鉢のアネモネを抱き訪ね来て　芥川良美
メモに言伝テしたためて置き　藤村貴美
月港白きフェリーの横付けに　夜
パークに虫のりんりんと鳴く　洞
爽ウやかにスケッチブック描き続け　貴
懐かしき香のヘリオトロープ　美
藹たけし幼馴染にプロポーズ　洞
壁の落書ピカソ調ウにて　夜
凍て道のスロープ街へ歩きそめ　美
ロッカーの鍵掛け忘れたり　夜
銀の匙メロンに添へて月の卓　貴
ピーチコートの乙女来たりぬ　洞
北の国ローカル線の思ひ出よ　夜
安売り卵パック積み上げ　貴
サービスの弁当に花散りかかり　美
モラルの低下歎く永き日　洞
デパートにみちのく秘仏御開帳ナオ　貴
ゲートボールを老打ち興じ　美
高らかにビヤガーデンの歌はづむ　夜
時を告げたるデジタル時計　貴
半ドンに三寒四温ひつかかり　美
セッター連れて狩に出でたる　洞
オープンに家族ぐるみで交際し　美
ムードに酔ひて混浴の風呂　貴
ナイーヴを愛し玉脂を洗ひたる　夜
パッシブといふ譏りあるらん　洞
木の梢レにシルエットとも月の鳥　美
アラヴ模様の秋袷着る　夜
在祭ナウ小銭重たくポケットに　貴
目のつけ加減掏摸のセミプロ　洞
お土産と父に貰ひしペンダント　夜
ゴム風船は手より離るる　貴
リコールの噂広がる花見なり　洞
ボートレースの応援の波　美

昭和六十三年二月二十日首尾
（於・東予市壬生川桐瑠庵）

《松山・芭流朱連句会―その五》

脇起二十韻『柿若葉』

鈴木春山洞捌

ひらと來し鶲の子らし柿若葉　船橋しづ
崖の清水を受くる掌（ラ）　鈴木春山洞
欄（マ）に天女乱舞の部屋にゐて　丸木一秋
馥郁の香の中に漂ふ　井出重陽子
竹生（ウ）島浮べる湖に月登る　白方筍子
芒の径によりそふふたり　井門可奈女
甘口の新酒をそつと口移し　洞
石垣の海見る青珊瑚　秋
日曜はごろ寝ですごす老となり　陽
牛肉オレンジ自由化どうする　筍
オリンピック選手つぎつぎ決まりゆき（ナオ）　奈
月の凍てつく夜半の掻巻　洞
雪まつり賑はふ坩堝札幌市　秋
公園の隅石ベンチある　陽
恋文に「裏をかへせ」と玄人めき　筍
長き接吻しばしの別れ　秋
山門（ナウ）に利休おきたる寺ありて　奈
春の北斗に史書の悲しさ　洞
薄墨の花の盛りを通り過ぎ　陽
ただ一筋に揚ぐ雲雀なり　筍

昭和六十三年四月三十日首尾
（於・松山市久万台松久庵）

《松山・東松山連句会》

脇起歌仙『天の破れ』

重松冬楊捌

松山連句会で「いでゆのかほり」が出版され俳句グループに広まり昭和五十三年結成。会員の居る昔久米郡であった地域は、現在松山市の中心より東に当るので東松山とした。毎年十数名で組分けをして文音。年三回座をもつ。連句集「松のみどり」昭和六十三年刊。芭蕉を研究して連句界全般の長所を学び、楽しみながら全員捌ができるようにつとめる。

瀧落つる天の破れや時鳥　松根東洋城
さっと素麺流す竹樋　重松冬楊
達筆に三行ばかり書き添へて　渡部伸居
めくれるまゝのしぶき絵暦　中須賀畦月
ゐながらの月に消されし星の影　池川蜩谷
いづくともなく匂ふ木犀　森本蛍子
古備前の徳利は早稲酒満たしたく　楊
言ひ寄る隙をわざと与へつ　居
毒舌の男らしさに絆さるゝ　月
はやつながりし瀬戸の大橋　谷
べたべたと観光ポスター壁に貼り　蛍
鬼の岩屋の今に残りし　楊
鉄窓に心も凍つる冬の月　居
届けとばかり寒声をあげ　月
思ひ出は午砲の鳴りしお城山　谷
セピアに褪せし遠き写真ぞ　蛍
ニュールックの制服映ゆる花の下　楊
自由創造碑文うらゝか　居
浴み給ふみ堂の内の甘茶仏　月
うす白雲の浮べるを見る　谷
開かれし国体の無事祈りゐて　蛍
止めやうのなき株の暴騰　楊
鮓香ふ浪速裏街昼下り　居
にぎやかに鳴る軒の風鈴　月
郵便の配達いかん待ち兼ねて　谷
速度増しゆくペアの自転車　蛍
フロントに新婚様と慶ばれ　楊
湖へひらける見晴しのよさ　居
千年の松を離るゝ望の月　月
団栗の実に踏み転びたり　谷
招かれて在の祭の客となる　蛍
へぼ碁の石を並べたるまゝ　楊
塀越しに紙飛行機の舞ひ込んで　居
朝の公園塵一つなき　月
ひらひらと散りゆく花の狂詩曲　蛍
接木上手がすませ法楽　谷

平成元年一月　十日首
平成元年七月十八日尾　（文音）

《神戸・白燕連句会―その一》

①昭和二十四年五月、橋閒石主宰の俳誌「白燕」創刊と同時に発足、今日に至る。
②「びゃくえん」と音読するが出典は芭蕉七部集中の句　白燕濁らぬ水に羽を洗ひ　荷兮
③月一回の連句会で古典俳諧の勉強と閒石指導の連句実作。その他会員同志自由に実作。
④伝統形式に拠ると共に、閒石提唱の非懐紙連句により時代に即した連句を推進する。

歌仙『柿の村』

せゝらぎを橋の名にして柿の村　高藤馬山人
鵙一声のあと閑かなり　佐野千遊
月の出を待つおばしまに風出て　馬
戯れ書の墨絵をかしき　千
来るほどの碁敵はみな酒の友　馬
忘れたところで止める謡曲　千
童顔（ウ）に天神髭のよく似合ひ　馬
八卦の燭のくらき夜の秋　千
横丁は恋の細道ゆきどまり　馬
α β うはの空なり　千
談林の無心所着の付合に　馬
月寒々と草庵の留守　千
なにごとぞ柑子の垣根うとましき　馬
一二を競ふ京の細工師　千
暖簾に忌中の紙の貼られゐて　馬
春風遠く過ぎる楽隊　千
居合抜散る花びらを切つてみせ　馬
怪訝な顔の仔猫親猫　千
ブラジャー（ナオ）をさらりと外す鏡の間　千
弱きものとは誰が言ひ初めし　馬
イプセンを読み明したる東雲に　千
職安前のニコヨンの列　馬
空缶が転がる響長々と　千
待宵草のひらき初めたる　馬
夏風邪の身を今日一ト日持てあまし　千
巴里仕込みのシャンソンの歌手　馬
秋深き隣はいかさま坊主にて　千
梁山伯は骰子の月　馬
濁流は馬をも流す霧の中　千
旗指物に白の目立ちて　馬
ぶつぶつ（ナウ）と何かつぶやくばかりなる　千
立見席から半畳が飛ぶ　馬
燈火の揺れて妖しき場末川　千
真一文字に走る高速　馬
陸奥の花はほのぼの染るらん　千
見果てぬ夢を追駆けの春　馬

昭和六十年十月三十一日満尾

《神戸・白燕連句会―その二》

非懐紙『黴の宿』

花の名を間毎に黴の宿灯す　橋閒石
にわかに増しし峡の瀬の音　佐野千遊
胸のうち聞くにしばらく時おいて　吉田不可止
香のかおりが移るくろもじ　奥村方月
はからずも時雨する日を石庭に　秋山正明
歌にもならぬかれがれの冬　石遊
ひと飛に南の国は椰子の陰　止月
風の触れゆくTシャツの首　明石
落日にきらりと光るクリスタル　月明
復活祭の祈りはじまる　石遊
渦巻いてむらがる鳩の暖く　止月
いつもの老婆いつものベンチ　明石
川沿いに屋台いろいろ並びそめ
久濶を叙す一杯の酒
サイレンを鳴らし過ぎゆく救急車
鶏の声する有明の方

昭和六二年七月十七日首尾（於・兵庫県民会館）

《神戸・白燕連句会―その三》

歌仙『灯を消すや』

灯を消すや殊に鈴虫鳴きつのる　吉田不可止
　ステンレスにも映る月光（ひかり）　品川鈴子
架け橋の工事半ばに秋暮れて　止
　盥回しに渡る政権　子
水打ってしばらく涼の戻りおり　止
　彩あざやかな波乗の板　子
燈（ウ）台の岬に向い道伸びて　止
　塒を発ちし鳥の羽搏き　子
幼さの残る二人に愛育ち　止
　団地育ちのシンデレラなり　子
夢のある未来へ托す筆の先　止
　芭蕉の絵巻余白そのまゝ　子
旅僧に添うごと移る冬の月　止
　茶屋に自慢の狸汁など　子
ほろ酔の舌なめらかに武勇伝　止
　鉄の楔をしかと打ち込み　子
ゆったりと山車を回せば花散りて　止
　先ず売切れるパンダ風船　子
命（ナオ）綱して採る崖の燕の巣　子
　ふと甦える大人の貌　止
双幅の軸に沈香燻きこめて　子
　宿の女将の粋な計らい　止
訣別のことを告げ得ず後朝に　子
　水の嵩増す暁の川　止
アンコール・ワットの仏灼けいたり　子
　漸くみのる文化交流　止
節まわしばさまゆずりの子守唄　子
　烏が二つ山の端に消ゆ　止
月あかりやゝ湿りたる落し紙　子
　かそけき風に萩の零れる　止
ゴルファー（ナウ）に嫌われている穴惑　子
　コーヒータイム午後にもうける　止
東西の壁もとう〳〵開かれて　子
　明日の予報は曇のち晴　止
万朶なる花ひとひらも放さずに　子
　睡りを誘う虻の羽音　止

昭和六十三年三月十日満尾

《神戸・白燕連句会―その四》

非懐紙『帷子に』

帷子に替えてそぞろや二日月　橋閒石
祭囃子の稽古はじまる　秋山正明
山人の編みて呉れたる蔓籠に　渋谷道
古びし物は常にあたらし　石
明眸のミイラマスクの翳暗く　明
砂あらし来る前のしずけさ　道
老犬のしきりにからだ擦り寄せて　石
ペットホテルの日差し麗らか　明
橋のなき対岸に花咲き満ちて　道
逢わぬとなればいっそ涼しき　石
しっとりと座っておりし泣ぼくろ　明
肉も蕪もすこし煮くずれ　道
暮るるよりはや困の気配して　石
なかなか埒のあかぬ書き物　明
石蹴って下駄の歯を折る立売堀　道
親を尋ねて置引きに逢う　石
すいすいと目にしむような赤とんぼ　明
絵本の中の秋はやさしき　道

昭和六十三年十月満尾

《神戸・白燕連句会―その五》

歌仙『藁しべ』

藁しべも円周率も冬至かな　橋閒石
笹鳴きのいる古き窯跡　大林信爾
沼の水切り落としたる山陰に　石爾
牛が耳立つほどの風あり　石爾
いつのまに光となりし七日月　石爾
やや色青き新そばの味　石爾
駅前で会う約束の秋袷　石爾
国の訛りを聞くも楽しき　石爾
大仏と仇名されしも既に亡し　石爾
菊の小鉢を十ばかり置き　石爾
そのうちに心づもりの温室を　石爾
物忘れすることの多くて　石爾
洋傘を杖の代わりにして戻る　石爾
坂ある町に照り返す海　石爾
バイブルにはさむ五月の恋愛詩　石爾
深く掘りたる穴のかなしき　石爾
しらしらと花散りやまぬつごもりに　石爾
ひたすら磨く春陰の窓　石爾
退職の日々好日と初つばめ　石爾
旅のしるしの地酒届きて　石爾
たたなわる山に山彦生まるらん　石爾
金剛杖は西の方指し　石爾
一念の色は変わらず冬椿　石爾
障子閉まれる内の松風　石爾
ふたつ目の老眼鏡を取りかえて　石爾
まず気にかかる経済の欄　石爾
スポーツに国威をかけて争うか　石爾
日暮の雲のすこし明るむ　石爾
ひとり居の月見団子を買いおきて　石爾
籠の浅きに芒かたむく　石爾
啄木鳥は急ぎの用と叩くなり　石爾
墨するままに思い冷えゆき　石爾
緑青をうかべロダンは羞じらえり　石爾
またすれ違う図書館の裏　石爾
芽柳にまじりて花の咲きはじめ　石爾
蝶溶けてゆく陽炎のなか　石爾

昭和六十三年十二月十五日満尾

《神戸・白燕連句会―その六》

歌仙『老人と』

老人と別れてよりの真冬かな　橋閒石
千両よりも万両の朱　村木佐紀夫
離れまで筧あらたにしつらえて　石
望湖庵とはまこと佳き名ぞ　夫
雁わたる満ちゆく月の明るさに　石
赴任仕度も整いし秋　夫
やや寒の酒残りいる壺の底　石
それしゃ上りと判かる物云い　夫
落とす気もなくて加わる稲荷講　石
やはり今年は伊勢を身延へ　夫
急ぎ裁つ木綿一疋いさぎよく　石
端午の朝に男児誕生　夫
郭公の森をうしろにいちご畑　石
縄文のものも時に出土す　夫
日曜は地方紙ながら文化欄　石
紅茶運ばす春風邪の床　夫
花につけ月につけても呼びに来る　石
八十八夜の別れ霜まで　夫
噂とはとかく成り行き次第なり　夫
はつかに匂う水茎の跡　石
妖しくも籠の蛍を燃えたたし　夫
阿闍梨が通る道の涼しさ　石
石積みを残す坂本鶴喜そば　夫
お呼びと見えて鈴の音する　石
一筋に生きて長屋の変わり者　夫
たすきに長く帯に短し　夫
犬の子をさし上げますと紙を貼り　石
かえり見すればたそがれの色　石
橋杭の岩のつづきに月昇り　夫
網干してある陰の刈萱　石
萩すすき只うたかたの四十年　夫
時に机の向きを変えもし　石
退屈に疲かけし長者ぶり　夫
河童の皿に鯰泳がせ　石
頃はよし獺も顔出す花の冷　夫
山ふところの春斜めなり　石

昭和六十三年十二月満尾

《神戸・白燕連句会―その七》

非懐紙『胴伸びる』

胴伸びるときの無想や秋の猫　橋閒石
二日の月の融け入りし空　秋山正明
食卓に銀の燭台運ばれて　石明
エレクトーンの懐かしき曲　明石
教会の裏まで潮のひたひたと　石明
別れしあとの誇りいつまで　明石
消ゴムで消えた筈なる備忘録　石明
籠の蛍をはなつ庭先　明明
頼まれし媒人役の気が重く　明石
事のついでに博多ひと巻　石明
大穴のレースに荒れる競馬場　明石
たんぽぽ運ぶ風のいたずら　石明
のどやかに陰陽石の祀られて　明石
菎蒻買いに婆の手をとる　石明
受け入れのホームステイの献立に　明石
鋏つかわぬ折紙の徳

昭和六十三年十二月満尾

《神戸・ひよどり連句会―その一》

①約十年前に近辺の同好者で始め、平成元年に産経学園の神戸と大阪梅田に教室が出来た。
②地名〈ひよどり台〉より。橋先生の「白燕（びやくえん）」に倣（なら）う鳥。鵯（ひよどり）は利巧で逞しく情愛が深い。
③『芭蕉七部集』の評釈や歌仙の基本を教室で実習。折々全グループで連座。文音など。
④鵯のような連衆の付合いで、細く長く実作を重ねる事。作品には文芸の香を尊ぶ。

歌仙『顔見世』

品川鈴子加朱

顔見世の枡席に袖触れ合へり　品川　鈴子
蜜柑取り出す合財袋　岡田　芳子
飛行雲引く大空の華やぎて　乾　展子
土塀が続く城下町なり　清水　千枝代
月明の路地の奥より謡ふ声　野瀬　潤子
木犀の香が漂ひてくる　鈴
秋（ウ）祭子供神輿も荒ら荒らし　芳
来世も添はん女と生れて　展
満天の星に想ひを問ひかけむ　千
鍛へぬかれる宇宙飛行士　鈴
別宅の築山プランとととのひて　潤
橋の上より眺む鮎釣　展
盃と湖にも一つ夏の月　千
簾の奥に透ける人影　芳
生ひたちの知れぬ少女と尼公と　潤
読経終りてもとの静けさ　芳
薄曇り花の散るさへゆくりなく　鈴
出で来たる野に春駒の跳ね　広瀬　加代子
大（ナオ）きめの帽子被りし新入生　芳
父の手書の名札まぶしく　鈴
香を焚き亡き人の文ひろげ見る　展
郵便ポスト赤き塗りたて　千
雪国を時計がはりの汽車が過ぐ　加
連弾に揺る壁炉の炎　潤
間借りしてウィーン暮しも久しけれ　鈴
居留守と知ってゐても慕はし　芳
風呂の窓恋といふ字を湯気に書き　展
九折（つづらをり）坂バイクかしまし　潤
参道の木立に月を遮られ　千
句会始まるちちろ鳴く宿　加
片寄（ナウ）りて玉蜀黍（たうもろこし）に焦目つく　芳
革命すでに遠き日のこと　鈴
耐ゆといふ言葉も知らずなりにけり　展
笑みを浮べて眠る幼児　千
花満ちてダイヤモンドの婚を祝ぐ　加
錦松にも風光る海　潤

昭和六十年三月首
昭和六十年八月尾　（文音）

《神戸・ひよどり連句会―その二》

脇起歌仙『水　底』

品川鈴子加朱

水底に白線引かれプール満つ　山口誓子
夏休みにも朝の練習　小原みどり
町なかに昔を探し描きたれば　豊島紀久
暖簾の奥に人影の見ゆ　水原貞子
昇る月全き円をなぞりたり　みどり
夜を通して鳴く鉦叩　清水千枝代
盆（ウ）支度仏の器皆小さく　貞子
あなたなんだとままごと遊び　紀久
いつよりか本音となりし相聞歌　千枝代
電話の前でお辞儀してゐて　みどり
海へ向く塔のクルスの光りたり　紀久
和蘭坂に物売りの声　貞子
月の出に所在なき身の懐手　千枝代
毛糸の玉に差せる編み針　みどり
誕生日届くパンダの縫ひぐるみ　貞子
覚えられぬは西暦の年　紀久
招かれて盃を重ねる花見酒　千枝代
炉を塞ぎても香が漂ふ　みどり
みちのくの山は一気に笑ひ出す（ナオ）　紀久
川瀬早みて岩に激する　貞子
眠られぬ夜はいたづら書をして　みどり
アニメとなりし宮沢賢治　千枝代
近づけば形もなくて虹の橋　貞子
緑の丘に吹ける口笛　紀久
園児らの瞳はすぐに輝きて　千枝代
二人になればいとけなく拗ね　みどり
悪からず殺し文句と知りながら　紀久
減税約す総理大臣　千枝代
月の蝕今か今かと待つて居る　貞子
遊び足らずに二学期となり　みどり
林檎（ナウ）畑にも風林火山の旗　貞子
何の喧嘩か声高になる　紀久
襖開け猫がのつそり横ぎれり　千枝代
新幹線に多き隧道　みどり
花どきは吉野へ行かむ歌心　紀久
峠の茶屋に鶯をきく　貞子

昭和六十三年七月十四日首
昭和六十三年八月二十七日尾（文音）

《神戸・ひよどり連句会―その三》

脇起歌仙『今年竹』

品川鈴子捌

新緑の最も新は今年竹　山口誓子
はるか彼方に鳴く子規　金田美恵子
架け橋は世界最長銘うちて　佐藤テル
電子頭脳にたよる此の頃　品川鈴子
夕月に誘われてゆくシンフォニー　大越稠子
壺に盛りたる黄菊白菊　鈴子
結(ウ)いあげし衿足みせて秋袷　テル
詩歌に痩せしのみならずして　鈴子
湖の水尾は二人の櫂の跡　稠子
彩とりどりの観音の幡(はた)　岡田芳子
禁札も薄れ明治の行在所　稠子
破れだらけの障子なりけり　テル
寒月へ缶をころがす塾帰り　稠子
見るひまが無きビデオとり溜め　美恵子
病みつきのゴルフ・マニラの勤務にて　鈴子
相も変らぬエアメール来る　芳子
飽食の鯉散りし花飲み込んで　美恵子
とぎれとぎれの遠足の列　芳子
宗(ナオ)因の忌の宮居にて鳩遊ぶ　鈴子
磨きぬかれし広き板の間　テル
おうおうと鼓打つなり能の舞　〃
二筋三筋茶柱の立つ　芳子
ブロンズの乳房上向く五月晴　稠子
この薫風を智恵子欲しがる　芳子
安達太良の峯にひとひら雲浮きて　鈴子
ふと出くわして顔の赤らむ　美恵子
Tシャツの背にお揃の英文字　稠子
犬吠えたてて虚を突かれたり　美恵子
三宝に供物整う初月夜　芳子
庭下駄もやや露をおびたる　テル
爽(ナウ)やかに時刻表繰る旅ごころ　稠子
人気役者の黄ばむポスター　芳子
叙勲受く額に皺の刻まれて　美恵子
切れ味の良き包丁捌き　テル
花の宴琴の調べは「雲井」かや　鈴子
つちふるままにしみる目薬　稠子

昭和六十三年四月二十四日首
昭和六十三年四月　三十日尾　（於・天満宮）

《大津・広野連句会》

○橋閒石師に連句指導を得た村木佐紀夫を中心に昭和六十年六月結社を結成する。
○蒲生野の八日市での俳句結社「曠野」同人を主とした連句活動のため「広野」と命名。
○現在会員は主として滋賀県在住で総数十八名。将来は三十名位まで会員を増したい。
○師系・橋閒石の連句を目標に、歌仙、非懐紙形式の現代性豊かな連句への修練が目標。

歌仙『夕暮れて』

村木佐紀夫捌

夕暮れて音なき音や秋しぐれ　小菅信　一
煙のごとき白木槿垣　村木佐紀夫
叢雲に月見の団子を頬ばれば　安田柾比呂　一
俗事に疎く農を一筋　夫
凩に潜りて遊ぶかいつむり　夫
焚火に明ける崎の名園　呂
由緒書因果話の面白く　一
何時も泣くのは女性ばかりか　夫
雨降って地の固まるの置手紙　呂
大山鳴動鼠一匹　一
無い袖は振れぬ道理と知り乍ら　夫
とにもかくにも赤飯配る　呂
植え終えし田の面に溢る月の光　一
夜蟬の声は旅の慰め　夫
新聞の死亡欄にも目を通し　呂
ラジオ相手に老の閑日　一
ちらほらと花散りかかる古墳塚　夫
野辺の送りも霞とぞなり　呂
御詠歌に鉦が供する遍路道　一
夕辺を帰る鴉二三羽　夫
居酒屋へふらりと入る背広連れ　呂
酔った弾みで仲人の役　一
夢うつつ三三九度の素焼盃　夫
昭和史を手に夏蜜柑買う　呂
先帝の声懐かしき夜の秋　一
裏参道に石碑の古り　夫
平日も矢張り混み合うゴルフ場　呂
歩き疲れて腰おろす芝　一
月代に宵待草のやるせなく　夫
渋柿剝けば聞こゆ追分　呂
萩芒過ぎたる年を数えても　一
胃カメラ呑みし今日の一日　夫
路地曲がり肉焼く匂い流れきて　呂
瀬戸と有田が並ぶテーブル　一
花の家留守居の役も気にならず　夫
丘はなだらか八十八夜　呂

平成元年九月五日首
平成元年十二月三十日尾（文音）

《東京・風信子の会―その一》

歌仙『風信子』

別所真紀捌

東京義仲寺連句会は昭和四十六年十月、財団法人義仲寺史蹟保存会の主催による『俳諧時雨忌』（第二回）を機縁として、故・野村牛耳を中心とする有志により結成。昭和五十二年一月より俳諧雑誌『杏花村』（一～一〇〇号）を刊行。昭和六十年四月、同誌終刊を受け継いで、有志による俳諧同人誌『風信子』刊行、今日に至る。

硝子屋の硝子に少しづつの枯れ　四方万里
ペーパーナイフみがく初雪　別所真紀
わが裡に立ち上がる樹ののびやかに　村野夏生
エンプティネストに滴れる蜜　滝田遊耳
いちまいの月光とかげの定着地　真
つりがね草に会釈やさしく　万
さまになる髭面厚き男振り　遊
指稚なくてだまし舟折る　夏
川明り今宵逢はねば消ゆるかと　万
木星人と碧い婚姻　真
泡雲幻夢童女の墓を洗ひをり　夏
南郷庵にやや寒を棲む　遊
かぜねこの声ばかりなる昼の月　夏
皮膚よりほろぶ陸生動物　真
ヒマラヤの山頂で貝を蹴つてゐる　夏
帽子の中から小旗が出ます　万
花を摘む夜ごとの業を哀しめる　遊
この世の旅のげんげはこべら　夏

道行の百里かなたの蜃気楼　万
包のをとめは乳の香のして　真
地の底に愛の象の魚刻み　夏
補陀落海に腹浮かすなり　遊
志てふさびしきものよ青杏　真
相好どつと崩し焼酎　万
麺棒を吊るして窓は油照り　〃
解体新書行きつ戻りつ　夏
リリルルリルルリリメカの虫冴ゑて　〃
駱駝の瘤の水澄めるころ　真
怪鳥と怪人つどふ月世界　万
稲穂焙つて八寸に載せ　真
うしなひし今日を時雨のひとしづく　遊
カサブランカと死んだかもめと　夏
ねぎ坊主かたみに触るる影ならむ　〃
春の日傘にかくす眼帯　万
亜麻色の幼年連禱花の島　真
はづみあふれてをり風信子　万

昭和五十九年十一月十六日首尾（於・新宿瀧八）

《東京・風信子の会―その二》

歌仙『天使の尻』

水野　隆捌

蕗の薹天使の尻は天に光る　村野　夏生
　玻璃の蝶透くこころたそがれ　水野　隆
きさらぎの樹々に水鳴る音のして　別所　真紀
　遠きを負ひてひとり畦焼く　滝田　遊耳
この谷を跳べば月夜の鷹となるか　生紀
　たとへば凍る獅子のたてがみ　〃
砂(ウ)いろの幼年傳説さびしみて　生隆
　華清池畔を歩むゆるやか　紀生
あぢさゐの妻が乳暈陽を弾き　紀生
　蛇のたまごのうすきみどりよ　紀生
三千の閨つぎつぎと灯を消して　紀生
　経帷子の仮縫ひに来る　生隆
秋を病む猫に見舞ひの長電話　隆紀
　姿見の奥月虧くるなり　紀耳
酒蔵の黴とちちろとトンカ・ジョン　生紀
　トラピスティヌに麺麭匂ふ暁　耳紀
花篝幽きに出でし尉の面　紀隆
　ひとつの村の消えてゆく春　隆紀
粗(ナオ)壁の斧の刃蒼く雪解せり　紀耳
　象は痩せつつオッペルの納屋　耳紀
禅定に入りたる鯉の影濃くて　紀耳
　み山もさやにさやぐ笹なれ　耳隆
鳥羽殿へ五六騎駈けるロケーション　隆耳
　指に捲きけり野分来し髪　耳隆
まろばせる石の言葉よ吾亦紅　隆生
　秋の星座を封ず水甕　生隆
朝月の飢餓大陸にただ浄く　隆紀
　こんがり焦がすベーコンの刻　紀隆
脱ぎすてて毛皮の裏の朱くらし　隆耳
「女囚携帯　乳児の墓」と　耳紀
フランシス(ナウ)・ジャムの哀歌の姉(ひと)の夏　紀隆
　帽子の下の汗美しき　隆生
火の山の杳き記憶を眠らせて　生紀
　金管楽器の吹くシャボン玉　紀隆
廃寺いま扉(とぼそ)の隙(ひま)を花過ぎぬ　隆生
　混沌(カオス)がなかに蛙(かはづ)顔出す　生

昭和六十年二月二日首尾（於・関口町芭蕉庵）

《東京・風信子の会―その三》

歌仙『溶けてゆく』

村野夏生捌

春浅き青着て聖母戴冠す　村野夏生
草の朧に溶けてゆく存在（もの）　別所真紀
うつうつと身の裡にゐる亀聞いて　滝田遊耳
どおんどおおん海の大銅鑼　生
億年の化石水噴く鹹き月　紀
馬肥ゆる夜を合はぬ帳尻　耳
秋澄（ウ）めばしばらくはまた死んだまま　生
雲の規律の四次元の村　紀
列なしてゐます同じ服着てゐます　耳
饅頭を生む自動機械よ　生
願満ちし夜の黒髪を洗ひけり　紀
逢初橋を渡る駒下駄　耳
狼のジョジョーは帰るアリゾナへ　紀
仁王立ちして描く凍て月　生
唐銅の龍天心を切り裂きて　耳
石人の鼻ほろほろと崩え　生
花が散るチ・エ・ホ・フといふ音がする　耳
午后の微風に蜂の休止符　紀

肋骨（ナオ）の枝に巣籠る小禽（にとり）ゐて　紀
看護婦を連れ逃げる病人　耳
少女なりし叔母の恋文やさしけれ　生
横目悲しく形見分けする　耳
ユークリッド正立方体ジャングルジム　紀
配電板に猫の髭生え　生
生姜焼定食が好き徴税史　紀
ブヨに喰はれしヨブの嘆きは　耳
鎖引く水洗トイレの秋さびし　生
すすきかるかや酒の空瓶　紀
月光に笑ふ菌（きのこ）がわつと湧き　耳
少年墜ちゆく高層の隙（ひま）　生
羽根（ナウ）濡らし鳩は眠つているだらう　生
ふいとよぎりし灰の記憶に　耳
時雨れてはむらさきふかき草千里　紀
神の痣持つ街の夕空　生
父母未生以前の闇の花一樹　生
同心円に結ぶ薄氷（うすらひ）　耳

昭和六十年二月二十三日首尾（於・関口芭蕉庵）

《松山・鳳松連句会》

六吟歌仙『紫木蓮』

重松冬楊捌

平成元年三月二十八日に鳳松園で発会。会員は小野椿俳句会のメンバー六名。会名は鳳凰の態をした大松の在った会場の冬楊居に名を取る。連句は俳句と車の両輪とした芭蕉直結の道であり、大和の世界に至る文芸である、これを現代に広く学び広めてゆきたい。始めて一年後国民文化祭に力を注ぎ、平成三年から会場を公民館に移し鳳松連句会と改名。

紫木蓮崩れんとあり疾風雲　矢野盛正
合はせさへずる野の鳥の影　重松冬楊
笑ふ山遠く遙かに望みきて　三好柾秋
通学生のバスを降りたる　大沢津弥子
さゞ波の消えつゝ浮かぶ池の月　佐藤喜代
香焚かれある座敷さはやか　楊
焼味噌（ウ）の好みの味を愛でながら　正
逃げし女をふと思ひだす　秋
裏戸打つ荒息づかひ迎へ入れ　津
不在電話のベルの寒さよ　喜
釣銭の壱円アルミ新しく　楊
消費税には振りまはさるる　野中史香
夕月に端居の声のはづみゐて　秋
ラガービールをぐいと飲み干す　正
地蔵様の赤き前掛色褪せし　〃
鈍行列車のがたびしとゆく　津
花に酔ひそゞろ歩きの人のむれ　秋
狆ころの消ゆおぼろの小径　楊

点点（ナオ）と沖の白帆の霞む海　秋
リクルートにて奪はれし職　〃
旅仕度身軽に持ちしルイヴィトン　津
天安門に会ひし知りびと　正
おとがひを埋む毛皮の襟巻に　楊
電線鳴らし吹雪く最中　津
産土の社に打たぬ大太鼓　秋
八百屋お七の芝居始まる　正
断ち難き未練に狂ふさま悲し　秋
窓開け放つ時の流れよ　楊
下駄の音からころとして月の路　津
訪ねし友のくれし甘柿　秋
ふるさとの（ナウ）秋の祭を久しぶり　正
瀬戸の大橋島をつないで　楊
茜空西へ連れ翔ぶ磯千鳥　秋
琴の調べはゆるやかにして　津
短冊へしたゝむる詩に詠める花　正
くるりと廻す春の絵日傘　津

平成元年三月二十八日首
平成元年五月　十九日尾（於・鳳松園）

《仙台・北杜連句塾》

歌仙『雪女郎』

狩野康子捌

昭和六十一年六月、近所の同年代仲間六人が半歌仙を試作したのがこの会の始まり。連衆の住居が「杜の都・仙台」の北西部に位置することから『北杜連句塾』と名付ける。六十三年、連句の面白さを伝え聞いた第二グループ八人また男性会員も加わり、a・bグループ各々月一回、一日がかりの連句会を楽しむ。自分達なりの特色をと頑張って居ります。

雪女郎ふと親しみをおぼえけり　狩野康子
更けゆく窓に極む北風　舟岡富子
喧騒の街思い出す秘湯にて　佐藤千枝子
本屋の旦那立見チェックし　山田史子
岡っ引手柄もなくて明けの月　高橋初子
かくれんぼ子は藪虱つけ　大沼節子
もぎごろと他家の柿の木眺めては　史
共に地獄と覚悟の二人　初
ワイドショー帰ってくれと叫ぶ夫　枝
千鳥の浜は今も荒れてか　初
突然の自由の旗に壁陥ちる　枝
瓦礫早速商売になり　節
青簾病の床に月漏れて　富
バナナを食べてばななさん読む　史
好プレーゲートボールに夢中です　富
空き地の朝は駄犬名犬　初
京紅の花魁歩く古都の花　節
ぺんぺん草の昔なつかし　史
訪れも遠慮がちなる春の蠅　枝
屋台の並ぶ駅の裏道　史
煩悶の徒のふところに「歎異抄」　初
あの字この字と辞典を開き　節
枯園であやかりジョギング髪ゆらし　富
肌よき蕪下がるベランダ　史
移り香を甘く匂わせ午前様　枝
手切れはずんで老舗の若ぼん　初
オクションが判子ひとつで転がって　節
満願成就鳥居献納　富
金星を包みこんだり三日月　康
隠した濁酒知らぬまに減り　枝
ピチピチのジーパン気にし障子張る　史
バイクずらりと仙台新港　節
富める国おやつ気分で飲む薬　史
鴉が鳴くよ吉か凶かと　富
遅咲きの深山の花の盛るらん　康
逃げ水追いつ伸ぶハイウェー　初

平成元年十一月十六日首
平成元年十二月十八日尾　（於・山田宅）

《東京・松喜久会》

祖父に宗匠をもつ中原刀禰（小島慶三）が、東洋城語録などを書いた岩崎泉渓と、俳句歴の古い中島櫟郊と、昭和49年12月設立。会名は暫く連句の席であった鳥森の「松喜久」から。毎月一回交詢社で三吟歌仙、別に文音歌仙を巻き、阿片瓢郎先生にご校閲を願う。原則として式目に従い、落着いた雰囲気のうちに、新鮮で雅味豊かな作品を目ざす。

歌仙『秋　空』

秋空や常にもあらず澄みわたり　岩崎泉渓
ちよつと欠けたる十三夜月　中島櫟郊
鴨の鍋ふつふつと煮え心みちて　中原刀禰
古い映画に秘めし青春　渓
夏の山キレット小舎の今も在り　郊
入道雲に機影かくれる　禰
老（ウ）いらくの豪州旅行思ひ立ち　渓
肩寄り添ひてそつと囁く　郊
二三人昨夜の舞妓がスナックに　禰
沁みじみ見入る三鬼のテレビ　渓
囚はれのエスペラントの会の友　郊
心経覚えめぐる観音　禰
榾を焚く煙の上の月赤く　渓
厚氷張る庭の水盤　郊
まきびしく平成の代は始まれり　禰
一にも二にも消費税にて　渓
幸せは榮耀ならず花に住み　郊
鶯目白競ふ餌台　禰
八重椿（ナオ）漸く咲いて見事なる　渓
救世主なき近頃の政治　禰
ソドムには硫黄の雨の降りぬべし　郊
英詩人伝寄附し嬉しき　渓
書を乾して苦渋の日々を送るのみ　禰
墓拾ひたる雨の道の辺　郊
久々に会ひて酒酌む灘の宿　渓
横笛の音にいそいそと出る　禰
あでやかにプレーンの髪をなびかせて　郊
群発地震揺らぐ保養地　渓
長安の月も黄沙におほはれて　郊
大雁塔は白露の中　禰
今年（ナウ）また巨蜂の葡萄故郷より　渓
田も畑もなく父母も在（おは）さぬ　郊
世界中行かぬ地は無しビザの印　禰
曽遊の家を尋ねあぐねて　渓
花うけて稿了の湯に身を沈め　郊
藤浪ゆれる長き堤防　禰

昭和六十三年十月二十六日首
平成元年八月三日尾　（於・交詢社）

《松山・松山連句協会》

歌仙『改　元』

永田黙泉捌

古俳諧研究の最高権威山田孝雄博士内弟子星加宗一（帯木）永田黙泉・渋柿派富田狸通三人で歌仙を巻き初め昭和四十三年六月「松山連句会」発足。全国俳句大会で知られた松山を連句の中心ともなすべく連衆の増加と共に今日では松山連句協会ともなり愛媛県連句連盟の中核ともなって発展。今やヨーロッパにまで連句の心をひろげつゝある。

淑気厳と今日改元の日を迎ふ　永田黙泉
御降りすこしふりかゝる道　鈴木春山洞
うららかに二人晴着をきかざりて　中須賀畦月
雛の部屋に幼な子はしやぎ　井門可奈女
眉なせる朧の月が描く影　渡部伸居
うつつともなく時は過ぎゆく　泉
法華津坂トンネル脱けて汽車走る　洞
とびても行かな君が枕辺　月
水くきの筆の運びも彼氏の名　女
池の太藺に糸とんぼ憑き　居
万緑に隠れしつとり一軒家　泉
旅の草鞋をぬぎし玄関　洞
月を得てやをら連句の座をひらき　月
柿の皮むく白き指先　女
大空を雲かとまがふ鳥渡る　居
新築の棟ひらめく御幣　泉
花映す渕に小舟を浮べけり　洞
緑に憩へばそよぐ春風　月
七色にふはり〳〵と石鹸玉　女
取手のとれしバケツころがる　居
転生の命のバトン石拝む　泉
遠ざかりたる鈴の音淋し　洞
としよりの五六人寄り焚火の輪　月
妖しのおつう（鶴）雪におとづれ　女
相槌は気ぬけし言葉ばかりにて　居
握られし手の温み忘れじ　泉
移り香にむせび涙をながしつゝ　洞
小波おこる礁なり　月
月光に芋炊きの宴笛聞こゆ　女
蕉翁偲ぶ那須の野の萩　居
徂く秋の名残に詩篇ひもときつ　泉
唐紙をのべて墨をする人　洞
厨から物の匂ひの鼻につき　月
レーガン政権ブッシュにわたる　女
老大樹満開の花あでやかに　泉
日永の牛と童連れだつ　居

平成元年一月二十二日首尾（於・梅之家）

《松山・松山連句教室》

歌仙『緋牡丹』

松永静雨捌

(一)師系　宇田零雨・松永静雨。
(二)創立　昭和五十四年一月。
(三)近況　第一・第三・土曜日、例会を開いている。
(四)傳統に即した正しく新しい連句を目ざして精進している。

雨意孕む緋牡丹の香の妖しけれ　松永　静雨
塀の外よりひびく草笛　白石　葉子
打ち集ふ俳諧の座の和やかに　井上　弥生
新人にして眉目秀麗　永井　政子
月はいま金波銀波を生みつづけ　前原　四月
なびくともなく靡く穂芒　松田　絹恵
逆縁の位牌を負ふて秋遍路　桑原　光子
バトンガールのリボン親しき　神尾　千津子
たくましき色気を街にまき散らし　中野　かずえ
世紀末として奔放な恋　砂田　冨士江
万博のイベント広場そこ此処に　矢野　トミ子
低血糖に効きし黒飴　静
柔道の稽古帰りの月寒く　政
軒の氷柱の光る淋しさ　葉
ポカポカと駈けゆく駒の丘こえて　弥
夢にまでみし最果ての旅　四
散りしきる花曼陀羅に憑かれたる　千
おぼろの底に消ゆる舟唄　二神　芙久子

そのかみの砦の跡に草萌えて　政
野口雨情の歌碑がひつそり　弥
拭ひやる乙女の涙美はしき　芙
ロンドンへ迄追ふて来し人　静
クーラーのスイッチ少しゆるめもし　葉
柳川鍋の匂ひなるらむ　静
初孫をふんわり抱いて宮参り　政
でん〳〵太鼓振ればよく鳴る　弥
酸性雨などが降るとは思はれず　静
松の手入れのすみし中庭　芙
大臣も知事も招きて月の宴　静
豊作なのに米を買へとか　光
捨てもせで何でもかでもチラシまで　葉
枯木にぎはふ宿り木の玉　か
ひと声をよいしよとかけて立ち上り　政
人気力士が子供相手に　冨
咲きそめし花の名所の通り抜け　ト
百囀りにしばし佇む　か

平成二年八月八日満尾　（於・松山市民会館）

《東京・摩天楼連句会―その一》

歌仙『純情派』

星野石雀捌

○昭和六十年五月設立、名称は野村牛耳連句集「摩天楼」に因む。
○主宰星野石雀の隠棲以来活動不活発。
○連句は歌仙を専らにしている。

探梅の乙女に遅れ純情派　星野　石雀
暖冬の山竹のさみどり　八木　浩子
奥座敷唐墨匂ふ夕にて　佐久間　多満
三更かけて装丁の案　斎藤　徳治
ジャンボ機の窓斜交ひに華奢な月　木村　駿
新居はなやぐ蘭の大鉢　明石日　小文
案山子作る村長無慈悲といふ噂　治
風邪の枕に行平の粥　岩田　玲子
財テクもハイテクからも遙かにて　岩永　楠生
義賊の墓に絶えぬ線香　満
引く手あまた北のスパイも美女なれば　玲
愛情すると吃りつつ言ふ　桜岡　素子
宦官のなかのひとりが長欠伸　満
オカリナ吹いて精霊を呼ぶ　治
銭亀が次々生まれ月ゐざる　〃
稲荷の御籤くりかへし読む　文
花なんて言はれて困る豆桜　浩
蜂の巣に触れ韋駄天となる　玲

弥生尽三時のロンド鳴りそめて　生
峰打ちばかり強い浪人　治
日本中発掘されてああしんど　素
皺を数へて描く肖像画　玲
鰻屋も寿司屋も休み城下町　文
舞妓の袖に落とす恋文　治
剃りあとの青き若衆四条の灯　満
掻きさぐれども空蟬のひと　玲
いらいらと外人投手出番待つ　駿
べつたら市に鼻をつまんで　素
竜神の棲む菱沼の月あかり　満
早く逃げ出せ雄の蟷螂　玲
だんだんに大仏に似る奈良の犬　文
内と外では言葉たがへて　治
莨火のゆらめいて消えメトロ駅　浩
鶯餅に折からの雨　素
花莚博多仁和加の裏通り　生
一病息災陽炎を踏む　素

昭和六十三年二月七日首尾（於・葛飾自賛亭）

《東京・摩天楼連句会―その二》

脇起歌仙『冬籠り』

星野石雀捌

冬籠りまたよりそはん此はしら　松尾芭蕉
風吹かぬ日は落葉焚きこそ　星野石雀
粗壁の塀に笛の音染みるらん　神山みち
みづうみ蒼く山の影濃く　桜岡素子
帽子のやうに浮かぶ昼月指さして　〃
菊人形が笑ったと言ふ　堀口みゆき
秋苑に取残されし石像　木村駿
小川になびくオフェリヤの髪　村田実早
風景は終り夜汽車の逃避行　斉藤徳治
心太ほどうまいものなく　き
血痰のごとき金魚を釣りあげて　治
長唄なども絶えし路地裏　駿
月凍り自縄自縛のくらがりに　小倉流花
ショールのミンク何か呟く　き
抱いてゆく光の束が尾を曳いて　花
転がるやうに田螺・小坊主　子
凱旋の隊列憎む花の窓　治
たんぽぽの絮王の眼鏡に　花

新しき布断つ時はときめきて　早
イメージ違ふ人に誘はれ　き
二人の夜ペプシコーラで胃洗浄　花
地上げに揺らぐ月光の街　ち
親方は脳出血で秋深み　子
誤解とけずに毬栗を踏む　早
大霊界あると断定する男　駿
カーテンを身に巻いて隠れる　治
母の匂ひを消したい父は酒浸り　花
つんつん氷柱殴つて行かう　子
飼猫の知恵をふやして寒い晩　治
ひつそり合はす政治家のキイ　子
束の間の夢ひと振りの金の斧　花
骨を埋める高遠の土　早
ONの昭和も古りて天子病む　駿
不覚の涙山葵漬にも　子
けざやかに晶子曼陀羅花の乱　早
雀隠れにリクルート株　子

昭和六十三年十月二十三日首尾
（於・グリーンホテル水道橋）

《東京・摩天楼連句会―その三》

歌仙『登山電車』

星野石雀捌

登山電車停まり紅葉の冷えかすか　星野　石雀
スイッチバック冬遠からず　岩田　玲子
いつぽんの歯がこそばゆく月まんまる　伊沢　恵
まだあたたかき山菜の粥　桜岡　素子
惜しさうに全集を売る古本屋　斎藤　徳治
睡い大人と睡れぬ子供　恵
梟（ウ）の笑ひかけたる木の下に　堀口　みゆき
室咲き抱いて暗い病棟　素
少女期のつらい思ひ出並べたて　治
なんのかんのと別れそこなひ　恵
ママさんのゲランが匂ふ終電車　斎藤　龍亭
帰宅拒否症カラオケの父　治
天国に二日の月のあるといふ　駿
ドラキュラ伯も血に飽きた秋　玲
葡萄園空気枕の吊られゐて　き
うつつに崩るベルリンの壁　駿
荘子琴を奏して窓の花ざかり　恵
磯巾着がおいでおいでと　素
遠足（ナオ）はビスケット色の小麦原　治
山高帽のぬつと現れ　き
コマネチは自由の国に着地して　素
シャワーをはじく若者の膚　玲
後の朝ビードロの冷えなつかしく　〃
疑心暗鬼に脱ぐ一張羅　恵
播磨屋に似せた心算で見得を切り　亭
カマンベールの封を開けましよ　恵
塵紙に追悼歌などかはいさう　治
釣鐘マントで曇らせる月　玲
ここよりは京都も北の雪景色　亭
バスをのがして又舟に乗る　治
水槽（ナウ）の鯰が昨日自殺した　玲
熱砂の中の大き石ころ　き
泣き虫と言はれながらも古希が来て　素
日永の縁で読む土佐日記　亭
花三分三厘三毛長子生れ　治
陽炎よりも長く佇む　き

平成元年十二月三日首尾（於・箱根強羅）

《西尾・三河連句会》

歌仙『月挙げん』

宮下太郎捌

○昭和39年高校の授業で猿蓑を学び発足。45年以降宮下太郎先生顧問。
○斎藤吾朗が俳誌白桃を発行していたが他に委託したので、平成元年より三河連句会と改称。自然態の活動。

月挙げん麒麟は顔をのぞかせて　鈴木春山洞
赤き額なる芒大原　白方筍子
秋高く求むる道の俳諧に　井門可奈女
絵の具の匂ひこもるアトリエ　宮下太郎
桐の花あつという間にすぎし窓　中島啓世
ラムネを飲んでほつと一息　中島まさし
分(ウ)去れの地蔵の前で道を聞き　東郁子
乗馬の夫人婉然と笑む　東明雅
てのひらの鞭の痛みに情炎燃え　白藤花夜子
ビバルディーきこゆとぎれとぎれに　矢崎藍
地球儀の四季は日本が第一番　小林しげと
久遠の環境護れかしとぞ　川部洋子
何もかも凍てて月の出待ってゐる　斎藤吾郎
伴天落葉舞ふ丸の内　柴原睦夫
画廊にてガラスの向かうよき日和　倉内保子
昨日歩きし吉野の山々　高島秋潮
ゆつくりと濃紅色の花開く　太
屋根の上なる陽炎一座　別所真紀

茶(ナオ)摘唄物語りひめ手古奈池　高中静美
音立ててさす黒きかうもり　加藤耕子
水戸街道いづくかと問ふ老の顔　石崎緑風
揺れる車に腰のぎしぎし　加藤治子
夏の風髪飛び放つ夕の刻　山田京
医業はゆづり焼酎一気　安江真砂女
黒ミサの炎の陰に狂四郎　山本正之
国境越えて恋の凱旋　山本文夫
慰安婦にしがみついたる少年兵　吾
夕ぐれの中ビルの赤々　加藤雄二
影法師踊るがごとし酔の月　秋
婆々が屋根より柿取りくれし　庵崎京子
鶏(ナウ)頭と競ふ油絵天高く　いづもとつや
ケーブルカーの景色ながめて　品川昭代
過ぎし日の想ひ出田んぼアスファルト　鈴木桂
三州瓦映えるあけぼの　五明竜史
衛士立つ桜田門の中も花　神谷瓦村
平成の代の水ぬるみたる　行方克巳

平成元年十月十六日首尾
平成元年十一月二日尾
（於・東京丸の内画廊　斎藤吾朗個展会場）

《松山・夢茶の会》

歌仙『投げ捨てし』

鈴木春山洞捌

昭和六一年一月結成。会場・松山市大街道甘党喫茶夢茶。毎月第一月曜午后六時半から例会。女性本位の会ながら男性歓迎。代表者・中出夢女。古い詩連句の指導者が、七十歳過ぎの老高校長というので、おっかなびっくり参集したら、気さくな若者顔負けの明るい老青年で二度びっくり。指導者・鈴木春山洞。連句実作に旅吟に励んでいる。

投げ捨てし衣に紐ある朧かな　鈴木春山洞
髷ときし影映す春灯　黒田耕三
山峡に鮮やかに咲く桜見て　中出夢女
轆轤挽く手の荒るるこのごろ　倉本淑女
昇り初む月に水車の止まる音　児玉凡松
萩咲く道を急ぎ足ゆく　井門可奈女
喜多郡の芋煮の会にバスツアー　三洞
前の座席のリボン揺れたる
初恋のつのれどされど片想ひ　原井川酔
聴診器おき独り笛吹く　松淑
手造りの菓子のつるりとすべり込み　酔
面倒くさき消費税なり　三奈
屋上のビヤガーデンを照らす月
プールサイドへギャルの集へる
舶来の最高級車横づけに　三酔
北へ南へ名所たづぬる
浅蜊取る遠浅海へ花濺ぐ　酔夢
甘茶寺には美しき僧
よなぐもる原の細路うねりゆき（ナオ）　洞酔
ハモニカメロディ近づいて来て
履き初めの下駄の鼻緒をそとゆるめ　夢淑
白髪光る足ながをぢさん
閉す家の軒の氷柱に目をうつし（さ）　松淑
寒鰯釣りの竿の並べる（ぼら）　酔淑
誘ひの「アカデミー賞よ」と気を引きて
闇に衣ずれ息ひそめゐる　夢洞
こと突如野性に戻る気配なり　洞奈
動かぬ時計みな電池式
駅弁と地酒求めし旅の月　奈酔
雲の流れて信濃柿ゆれ　淑凡
錦秋の峠を眺め涙ぐみ（ナウ）　酔
十円残る財布ワニ皮
青簾寺二三子集ふ桂山忌（あを・す）　夢
群がる鳩のぱつと飛び立つ　酔
道後の温泉花の彩濃く咲き乱れ（ゆ）　洞
川さかのぼる競漕のあと　奈

平成元年四月三日首
平成元年十二月四日尾（於・夢茶）

《横浜・瑶沙連句会》

①旧制浦和高等学校同窓者の俳句会「くぬぎ句会」の有志により六十年二月発足する。
②母校及び寮の在りしところを「瑶沙が原」と称したことに由来。瑶は美玉のこと。
③会員十四名。例会は月一回を原則とするも年間七、八回である。
④全員捌きが出来るように研鑽する。積極的に他結社人と風交すること。

歌仙『夏深し』

戸谷是公捌

びいどろに七彩八彩夏深し　戸谷 是公
白雨沛然そよぐ庭の樹　石井 飄士
賓客に秘蔵の梅酒封切りて　土屋 実郎
読み下しつつ誉むる掛軸　小張 昭一
ノクターン楽譜取り出し寝待月　酒井 久志
蜻蛉にじやれて仔猫ころげる　土屋 真澄
絶壁の灯台めがけ秋の涛　長谷川 ひとし
ポット囲んで握り飯喰ふ　五十嵐 荘司
往き往きておとなひ得たる伎芸天　北村 かつを
碧い眸の娘と席隣り合ひ　保坂 木羊
うたかたの恋に溺れし異郷にて　し
新口村につもる薄雪　一
凍月を掌にのせ歩むわれ　澄
宅急便の河豚魚またるる　し
日の本にひとりの偉人なきや今　澄
ハンチングにて気付かれぬ禿　郎
石鹸玉花すり抜けて昇りゆく　羊
法典ヶ原駈くる若駒　し

古雛面ざし心なしか怨　を
わけは言はずに眉濃ゆく引き　志
あぢさゐに三味一筋の妓なる　司
しがらみ多き現世にして　士
うとまれて空ッ威張する粗大ゴミ　し
年金おろすGパンに下駄　一
十億の自由を戦車踏みにじり　郎
衛星放送おわんアンテナ　公
神域の影黒々と月高く　志
風ひつそりと渡り虫の音　羊
冬支度単身赴任遂に翌　志
オートメカメラ構へ押すだけ　羊
山鳩が舗装道路を濶歩する　澄
信号待ちの車尻目に　司
疑は人間にあり羽衣の舞　士
端艇競ひ櫂立ての札　一
花守も花疲れせむ夕べには　を
寮歌低吟そぞろ春愁　公

平成元年八月四日首尾（於・横浜びいどろ亭）

《東京・葉門連句会》

脇起歌仙　『たんぽぽや』

葉門連句会衆議判

木村葉山（健二郎）先生御他界により『柴門連句会』（元連句協会所属）が解散後、平成元年三月、一部の会員が『葉門連句会』として継続。現在毎月例会に十人程参加（磯直道先生の捌き）。これまで歌仙三巻、愛媛一巻、表六句四巻満尾（国民文化祭に積極参加）「現世の憂鬱を吹き散らすような楽しい春の風」（柳田国男）を満喫している。

たんぽぽや長江濁るとこしなへ　山口　青邨
黄塵に息つめて佇み　今井　楊
ひらひらと蝶がみちびく山の道　明石　潤子
この閑けさを一人じめして　上野　好子
萩芒活けて今宵の月を待つ　〃
おさと自慢のだだちや豆添へ　矢口　美穂子
野仏の首なき肩に赤とんぼ　美
バイクつらねて若者の群れ　楊
思ひ出のエリザベス号目の前に　菊地　梨枝子
面影似たるフランス娘　福島　時子
常連の大和をのこの席があき　梨
祐天寺ここ筍の風　好
地球儀に洋と海あり夏の月　時
孫に聞かせしジョン万次郎　楊
久々に手作りケーキ・ティータイム　丸山　敬子
窓辺にじやれる小猫三匹　潤
花ふぶき渦巻きながら近づける　楊
まちまちに置く春泥の靴　敬
黒潮のうねり乗り越え鰆釣り　福島　新吾
黄八丈織る流刑地の島　時
草ぐさの可憐にそよぐかぜまかせ　好
地面すれすれ冬の蠅飛び　潤
老妻も髪をまとめて柚子の風呂　内田　たづ
三代も着て花嫁衣裳　好
大櫟伐り倒されてビルが建ち　楊
幽霊までが道に迷へる　〃
手を引いて俄か孝子になりすまし　〃
新蕎麦の粉の小包がつき　時
人去つて越中八尾良夜なり　〃
耳をすませばちちろちちろと　美
外国の地震のテレビ驚きて　井口　昌亮
職退きてよりひと日のながく　敬
下駄音をひびかせ渡る歩道橋　〃
青きを踏みてせせらぎもよき　好
霽れ上り酔はんばかりに花疲れ　〃
うららうららと時の過ぎ行く　亮

平成元年三月二十四日首
平成元年十月　二十日尾　（於・目黒山椒亭）

《横浜・連句愛好会―その一》

①昭和五八年柴崎正寿郎が大阪天満宮に独吟千句を奉納した機会に、連句好きが集まった。
②連句愛好会はそのグループの仮称で、現代俳画協会の会員が多い。
③昭和五九年五月、会の連絡誌「句と連句」を発行し、不定期刊で現在四九号まで発行。
④付句と同時に即席画も描き連句俳画とし、新芸術ジャンルを指向している。

歌仙俳画(画略)

歌仙『獅子頭』

珍らしや団地街ゆく獅子頭　岩佐文子
初空高く日の丸の旗　柴崎美恵子
もどり船卒業式に間にあひて　文
シャッターをきる春風の中　美
酔もよしおぼろ月夜のふところ手　美
ころばぬさきの杖をうつかり　文
室生寺の塔にひかれてひとり旅　美
全く読めぬ床の掛軸　文
かきつばた生けしは末の娘らし　美
見合ひの席の手順よろしく　文
肩よせてモロッコをみし遠き日よ　文
稜線はるか湖ぞひのみち　美
淡水化議論柿むく手をとめて　文
堂々めぐり出でし遅月　美
虫の声しきり果報は寝てまたむ　文
名もなき島にはや三とせごし　美
せめてもと花びら入れしエアメール　文
春のツアーは聖地巡礼　美

鳥帰る遠来の客出迎へに　美
残留孤児の笑みにひそむ苦　文
古傷を水着の下にかくしきて　美
百科事典にはさむへそくり　文
火あそびが本ものになりこの始末　美
霜夜の町をゆきつ戻りつ　文
風花に大橋小橋並びゐて　美
変りばえせぬ閣僚の顔　文
狂言師野村万蔵喜寿の宴　美
芸に年なし今日も床ふむ　文
夕月にねむれぬ馬の背をなで　美
新藁の香もたかき曲屋　文
天の川いさり火遠く日本海　美
神やすらけく浜にまします　文
長病みの癒えてゆつくり万歩計　美
盆栽自慢垣をへだてて　文
祝婚のコーラス流れ花ふぶき　美
更けてひそかに春の雨ふる　文

昭和六十三年一月　十日首
昭和六十三年四月二十二日尾　（文音）

《横浜・連句愛好会―その二》

歌仙『宗因忌』

宗因追悼

柴崎正寿郎捌

舞ひまどふ墓苑の蝶や宗因忌　柴崎 正寿郎
訪ふ人もなく梅散りし後　中島 果寿
巣立鳥一片の雲にはばたきて　由利 香住
海外進出任地はるけく　安田 芳苑
草も木も情念もぬれて月明り　河野 美風
枯山水に放つ邯鄲　福島 桂子
稲架の形それぞれ異ふお国振　郷矢 恵美子
猫好きもあり犬好きもあり　長尾 信子
マニキュアの爪でひらきし返し文　中野 ルツコ
抱きよせてキス絵馬堂の裏　中野 桐風
またの折を相合橋で指ちぎり　岡田 昌子
どんぐりまなこの人形の看板　桑原 美津
夏の月スピード違反の車ゆく　河村 喜久子
土用うなぎの煙もうもう　信
胃を病みて控へ目にする酒の席　美
十八番の歌をさきにうたはれ　風
散る花に遂に幕とず勘三郎　恵
おたまじやくしもいつか蛙に　桂

城おぼろ濠に漂よふ破小舟　芳
太公望の父と子と母　果
中国に旅立つ朝のせはしくて　信
ゆつくり上る熱気球なり　喜
冬茜富士山頂の西染める　香
ダウンジャケット色々の彩　香
この肌を許さむ人を思ひつつ　美
道説く君に乱れ髪梳く　香
聞きとれぬ声細々と目のゆくへ　桂
子を捨てし夜の今もありあり　昌
マリヤ像仰げば額に月の光　正
独りしみじみ萩に茶をたて　果
不忍の池を巡りて雁渡る　芳
なまり懐し駅の待合　恵
パチンコ屋軍歌流して混み合へる　ル
白衣の天使も春の装ひ　風
「通り抜け」絢爛きそふ花の精　昌
日がな一日光る川風　正
　　桂

昭和六十三年四月二十四日首尾（於・大阪天満宮）

《横浜・連句愛好会（爽睦会）―その三》

歌仙俳画（画略）

歌仙『宍道湖に』

岡本睦緒捌

宍道湖にちりめんじわや春めきぬ　守谷　加智子
青菜ゆたかに盛れる朝市　岩佐　文子
進級の子等映画館にたむろして　石田　操
地下鉄出口またも間違え　種田　栄子
新月は楡の小枝に宿りいる　中村　房枝
虫の音しきり燈籠のかげ　栗原　富子
秋灯下遺品となりて筆硯　岡本　睦緒
読み人知れぬ句碑にたたずむ　西野　愛子
花束に軽いジョークを入れておき　柳楽　鶴丸
夕映の中背を向けて佇つ　目次　美里
片恋のウクレレは弦きれしまま　房
香りいつものあの人のもの　加
寝そびれて思いは遠く夏の月　富
山ふところに青葉木菟鳴く　睦
去りがたく阿修羅の憂いふかければ　文
ひねもす痛む親指の傷　操
遠近に花ある里の日暮どき　愛
おぼろおぼろに嫁が島浮く　美
東風を行く裳裾の色をこぼしつつ　栄
真由美という名のテロしおらしく　愛
目鼻だち変えてもみたり主のため　加
エリーゼ弾いてゴルフウイドー　文
新婚の切符に磁石当ててみる　鶴
粉雪まとい来る杣のひと　房
くさめして咽に居座るはやり風邪　睦
反核の手で部品をつくる　鶴
イランイラク首都の撃ちあいもうやめて　美
自由化の波かざる食卓　愛
昼の月かかげて稲架の並びおり　操
お帰りなさいと秋刀魚の煙　鶴
旅了えて両手に重し梨の籠　富
鈴を鳴らしてじゃれる三毛猫　房
荒海にかけ声ひびく船神事　操
人の心に深く生き継ぐ　睦
大道芸置きたる笊に花の散る　栄
火男のほほ黄砂降りくる　加

昭和六十三年三月十四日首尾（於・松江、アーバンホテル）

＊この作品には句と共に作者が即席俳画も付けています。

《仙台・連句会「Za」》

歌仙『北風ぞ』

昭和五十五年、長い間読書会だった「土の会」が鑑賞から創作へ向かおうと、その試みとして「連句」をはじめた。その後、六十二年に連句会として独立し、連句は座の文芸であるところから「Za」と称す。現在会員十名、萱場健之氏を中心に、月一回、同氏のきびしい捌きのもと、歌仙を巻く。式目を広く理解し、個性をもった会に、と。

北風ぞ沈黙の呼吸合いて行く　蓬田まるき
枯木立の影針の如くに　宮腰滝
砂時計ものうげに見るティータイム　〃
マスターのひげ今日もすっきり　三上秋桜
新しき看板小さく宵月夜　若生芥子
初紅葉して山峡の宿　滝
ウどんぐりの独楽つくり合う日曜日　芥
筒井筒にて生意気盛り　滝
カウンセラー悩み聞きつつ恋に落ち　〃
心晴れればれドレス新調　秋
あと五キロせめて五センチ努力して　滝
ジョイナー女史の盛り短し　高橋径
赤々とつれなく昇る夏の月　佐藤無風
草かげろうは川面をよぎり　芥
今日もまた共稼ぎの妻帰路急ぎ　秋
中国社会子は一人だけ　芥
薄墨で画布一ぱいに花散らす　秋
春の陽ざしの窓にやわらか　芥
ナオサラリーマン昼飯につく浅蜊汁　ま
オバタリアンの漫画読みつつ　無
顔なじみ新幹線の自由席　芥
津軽海峡景色は見えず　径
底冷えの室で深夜にラジオ聴く　秋
株トップ高毛皮にしょうか　滝
魚屋が集めにきたよ新聞紙　ま
新婚旅行に猫連れで発ち　〃
略奪のペルシャの姫の黒ヴェール　滝
「悲しき口笛」もうきこえない　秋
月高く不良少年帰るころ　ま
三代目ひそと秋移転　径
ナウ朝寒の門に連載「きのね」待ち　芥
ロープ巻きつつ来し方笑い　径
山頂にかえるこだまを繰返し　ま
なまりなつかし古里列車　滝
とびとびの目に入る花の並木なる　鈴木圭子
遍路の鈴の遠くかすかに　芥

平成元年一月二十三日首
平成元年七月二十四日尾　（於・エルパーク仙台セミナー室）

《新座・連句研究会―その一》

○設立昭和五〇年七月、師系松根東洋城、野村喜舟。
○初心者への連句の普及のため「連句研究」を隔月発行今日に至る。
○主宰阿片瓢郎（久五郎をもじった）連衆三百人。

歌仙『八幡像』

僧形の八幡像やお元日　野村喜舟
破魔矢頂き帰る人々　阿片瓢郎
宝恵籠のあとを見送る玉霰　舟郎
水のよどめる町川の橋　郎舟
剝き身屋の油障子に日の射して　舟郎
素焼の鉢と種子袋買ひ　郎舟
蟻（ウ）の塔くづれもせずに月の秋　舟郎
国分寺とて礎石正しく　郎舟
蟬のあと絶えんとしてなほ続く　舟郎
忘れ扇の京畳なり　郎舟
鼻の穴たおやか風邪を引き給ふ　舟郎
三平と書きまるがほと読む　郎舟
はたち過ぎ赤らむ顔の恥しく　舟郎
踊り太鼓のいつ止みし月　郎舟
ちりぐに人の散りゆく流れ星　舟郎
水車のこれる宿場外れを　郎舟
老夫婦花の昼餉をゆつくりと　郎舟
はいふきのある床几暖か　郎舟
雞（ナオ）に猫の子追はれ臼の上　郎舟
音を立てずに物の倒るゝ　舟郎
托鉢の礼して去りし草鞋にて　郎舟
乞食坊主の後さまよふ　郎舟
市の日の古道具いつ売れるやら　舟郎
香炉の彫り菊の紋章　郎舟
文鳥に餌の催促されにけり　郎舟
かたはら赤い洋蘭の花　舟郎
西伊豆へ町内会の旅に妻　郎舟
何やら彼やら話合はせる　郎舟
茶を汲みて栗洋かんを縁の月　舟郎
月々詣る講中の雨　郎舟
経（ナウ）具師の二日つづきの夜業とか　郎舟
屏風一つに検校せつかち　舟郎
小石川昔施療所ありし坂　郎舟
芋学者とて世に尊ばれ　舟郎
剣菱といふ酒に決め庵の花　郎舟
首無し地蔵立てるおぼろ夜　舟郎

昭和五十六年一月　二日首
昭和五十六年五月二十六日尾

《新座・連句研究会―その二》

歌仙『端居して』

端居して濁世なかなか面白や　阿波野青畝
いつに眠るか垣の蝸牛　阿片瓢郎
井戸水の豆腐つくりを守りつつ　岡本春人
玉子の殻を鉢の万年青に　郎
紺青の空見つめれば残月が　人
蜩急に啼きそめし森　郎
山荘の早や肌寒し歌仙巻く　人
中の一人の江戸小紋なり　郎
舞ひの手に男まさりのあらはれて　人
金の工面を母よりの文　郎
みちのくの細道いまも草枯るる　人
きびしき月の塔に咳く　郎
伝来の古文書あまた散逸し　人
ろくろ廻しも年に何度か　郎
酒に目のなき老人と好まれて　人
竹ばかりなる坪庭の寂　郎
花時は富士見えぬ日のつづくなり　人
馬を雇うて暖く行く　郎

万屋に煙草二函春の雨　郎
札所をめぐる観光の旅　人
方言は国の手形と湯につかり　郎
持病の癪の止みしこの頃　人
盆栽に如露の水をしたたらし　郎
六日の月に星の涼しさ　人
遠山へ稲架のつづける長き列　郎
宣長へ真淵の書なり秋の夜　郎
霜降り肉の値段法外　人
メスを煮る外科の場面のテレビにて　郎
欧州今年寒波襲来　人
二階バス赤く走れり落葉して　郎
留守の斎庭のしるき箒目　人
蕎麦つゆに七味を振れば招き猫　郎
乗除電卓加減算盤　人
花の雨絵絹をのべて筆未だ　郎
孕雀ののぞきゐるなり　人

甫・昭和五十六年三月　三十日
了・昭和五十七年二月二十一日

《新座・連句研究会―その三》

賀・連句歳時記完成

歌仙『風呂吹』

風呂吹や無名に生きて惑ひなく　阿片瓢郎
時雨るる夜を編みし歳事記　宮下太郎
昼過ぎの頃より空の晴れて来て　野口里井
艫をこぐ音の山を左右に　小林しげと
声もろとも俵担ぐや月の下　宗像元介
倉の戸閉ぢて虫の闇断つ　徳永佐和女
さくさくと林檎食べゐる女の子　加藤望子
笛の司と文を交しぬ　坂田はま子
更けて待つ衣ずれ襖ではたと止み　蒲幾美
俄かにおこる谿よりの風　嶋津てい子
島民の全く去りし大噴火　菊池由美
大海原に夏の月見る　河村扶美
豆食べてまめに達者に打水す　宮内恭子
パンダの子供近き命名　芳田龍子
遠くよりうから揃ひて傘寿の賀　柳沢澄子
覚めやらぬ街走るトレパン　佐々木展子
花ざかり阿片先生励ませば　草間時彦
雀の卵いくつふえたか　山口みづゑ

踏絵なるしきたり嘗てありし寺　安江眞砂女
長崎どこも坂の多さよ　黄川田美千穂
背伸びして見るやけぶらふ沖の船　黒坂綾子
みな知つてゐる欺されたふり　畑村春子
よろこびを尽くし別るる霜の朝　勝田けい子
アニメもどきに襟巻の人　山田章子
ピカソの陶凸凹多し玻璃のうち　城戸崎丹花
夜光の盃にそそぐ美酒　志甫江美子
塞外に胡の歌をはるか聞き　小林梁
べうたん鯰無病息災　高畑自遊
月の出にお頭付きの鯛焼を　戸田貝江
積み上げられしこの年の米　遠藤翠
十一面観音様のさはやかに　岩田玲子
西の京なる古き道ゆく　岩崎泉溪
私鉄駅を出て方向の音痴なる　鵜田秋甫
ひたむきなるは百千鳥にて　松村武雄
たのもしき花を幾重の長堤　伴野溪水
未来開きし春の礎　今泉宇涯

昭和六十一年十一月二日首
昭和六十一年十一月十六日尾
（於・俳句文学館、あと文音）

《新座・連句研究会―その四》

歌仙『匂ひ鳥』

急ぎ啼け彼岸も近し匂ひ鳥　清水瓢　左
白壁清う梅の四五輪　今泉忘機　郎
陽炎のもゆる石橋かかりゐて　阿片瓢郎　左
道行く人の覗き込む画架　機
月待つといつもの顔の夕日山　郎
欄高く地芝居の触れ　機
虫(ウ)かごを造る子供を励まして　左
一時帰休のひねもすの雨　機
百鉢のおもとさぼてんねもごろに　郎
よき日の当る窓下の室　左
日曜は今日だと空のアドバルン　機
馬券散らばる駅の閑散　郎
秋桜所せきまでよく育ち　左
夕暮れ帰る舟の三日月　機
軒低く砧いまなき家のさま　郎
近年急に増えし鳥の巣　左
出来たての公園淋し花未だ　機
啄木忌なる学童の声　郎
写真展その発起者は少女にて(ナオ)　左
谷中寺町のこる下町　郎
なつかしき水からくりに冷えラムネ　機
見合済まして軽うなる肩　左
紋彫りて引出物なる銀の匙　郎
治にゐて乱を忘れずとかや　機
流鏑馬は残り犬追物は絶え　左
官幣大社なりし鬱蒼　郎
文政の古絵図通りに道ありて　機
旅に出て待つ猟の解禁　左
酒廃めてものうき月に涵りけり　郎
欠席と書く秋の学会　機
佛教(ナウ)の国宝展の素晴らしさ　左
短冊石の庭につづけり　郎
見舞状返事に一日終りたる　機
春尚寒く訪ふ人もなく　左
花散らす風語ひそかにたのしめば　郎
変らぬ杉の形りものどけし　左

昭和六十二年三月　四日首
昭和六十二年八月二十一日尾　（文音）

《東京・連楽会》

会結成の経緯・競争原理を排し、連衆の和と協同に拠る連句興行の社会性に惹かれ、その普及を念願して杉並区公報紙に会員の募集を広告、昭和六二年一二月発足。
名称の由来・連句を楽しむ会＝連楽会。
会の現況・会員六名、月一回例会開催。会員間の文音は常時進行。

歌仙『灰汁』

高畑自遊校合

灰汁つよき叔母のおはぎや秋彼岸　佐久間淑子　京
ミネラル大事手抜き礼讃　高畑自遊　淑
地を離る銅（あかがね）の月大きくて　石田京　光
夜景をふさぐ新庁舎の体　山崎田鶴子　京
青蔦を這はせてみたいどこまでも　大崎光枝　遊
腹掛けの嬰の座敷せましと　淑　光
前（ウ）おんぶカンガルーに教はつて　遊　鶴
南十字に愛を誓ひし　鶴　遊
足あとを渚にのこし二人連れ　京　淑
生活排水河口泡立て　淑　鶴
ふくらんだ泡で買つたる夢の城　光　遊
聖徳太子藪にざくざく　京　淑
凍りたる漬物樽に窓の月　遊　光
キーホルダーにミニの雪靴　光　京
ランドセル手提げに代へて塾に行き　鶴　遊
職人芸を嗣ぐ者のなく　遊　光
目立屋の仕事はじめる花の下　淑　光
すみわたる空ぶらんこで蹴り　鶴　鶴
犀（ナオ）川の川波ひかる猫柳　京　遊
化石あつたと大声を挙げ　淑　遊
先ず酒を頼んでおいてひとつ風呂　光　淑
笹に黄金は夢か希ひか　京　鶴
上り坂道は夕焼空に入る　遊　鶴
泳ぎの帰り父子で合唱　光　遊
しもじもの気楽な家業豆腐汁　鶴　遊
すすめ上手に買つたネクタイ　遊　淑
しつつこく誰の見立てとすねられて　淑　鶴
弁慶まゐつた月の橋上　鶴　京
無患子（むくろじ）の跳びも跳んだり閼伽（あか）のなか　京　淑
いつしか隅でこほろぎの鳴く　淑　光
安定剤（ナウ）服んではみたが寝つかれず　光　京
婆の口説きの長電話切る　京　遊
屋根の下ひとつひとつに生活（たつき）あり　遊　光
幸ある方へ花の舞ひ行く　光　鶴
佐保姫がお手々つないで輪になつて　鶴　遊
鈍行列車旅目借どき　遊

平成二年九月二十七日首
平成三年四月二十六日尾　（文音）

《川崎・鹿吟舎―その一》

歌仙『落　椎』

池　翳雉捌

1　一九七五年夏、竹馬の輩一夜の語らいに発足。
2　連衆六人に達して鹿の字を案じ、斯は定む。
3　連衆十名。月例歌仙。何を措いても鹿吟舎。
4　宗匠なければ放埒自在。隔年『鹿柴』発行。

椎の秋仔犬を拾う出来心　桜井蹴石　洲
庭に隅なき夜すがらの月　池　翳雉　蘭
盃を重ねる新酒香に顕ちて　鈴木　撫蘭亭　石
ただ無造作に瓶の草花　朱牟田　恵洲　雉
文選工はこの頃閑をかこち顔　雉
鯛焼買いの籤引き当てる　蘭
木枯しやビルの国旗の数見えて　洲
南国の旅謳う貼札　雉
来ぬ人を松屋の裏の喫茶店　蘭
噛むやパセリのほろ苦き味　洲
音一つ欠くオルゴールのねじを巻く　雉
深沈として逝きし子の部屋　蘭
初霜の明日は降るやら月の色　洲
遊侠伝の読み切りの跳ね　雉
雪駄鳴らし弥蔵を決めて得意なり　蘭
背ばかり伸びて角の甚六　洲
あれに行く己が小町や花曇り　雉
春霞靄と遠き鐘の音　蘭
復刻の少年倶楽部繰っている　洲
灰皿埋めてピーナツの皮　蘭
轟音にコスモス揺れて基地百里　石
没日背に追う波乗りの群　雉
小余綾の磯降り残し虎が雨　蘭
どっかと縁を占めてなた豆　石
枝ぶりを矯める手順の思案して　雉
軍縮交渉やや進むらし　洲
それまでと坐る轆轤の土の冷え　蘭
精霊ばった動くともなく　雉
鏡には魔法使いの顔と月　石
今日開店の赤キノコ亭　蘭
踏切の番小屋ありしひと昔　洲
松葉相撲を日の暮れるまで　雉
市人と里人となって兄弟　石
テープカットは島つなぐ橋　洲
燦爛と渦潮に花散りやまず　蘭
南を指して行く春の蝶　雉

昭和六十年十一月二日首尾
（於・川崎市民プラザ）

《川崎・鹿吟舎—その二

歌仙『杜鵑』

池　翳雉捌

あわただしき一年なりき杜鵑　鈴木　撫蘭亭
猫の額に黄ばむ梅の実　池　翳雉
水音の句座の浄机へ響ききて　白井　風人
燐寸の函に佛蘭西の城　坂口　暗吾
独り居て十五夜お月さん口ずさむ　中岡　幸子
向かいの窓がさんま焼き出す　蘭
鯛（ウ）や下駄多きゲラ読み暮す　人
十団子というを送られにけり　雉
訪ねんとちぎりし人の遙かにて　蘭
戎衣（じゅうい）の胸の写真触れみる　人
雑巾は固く絞れとやかましく　吾
羊・鯨と雲のいろいろ　蘭
村二つつなぐ土橋や夏の月　人
笹船どこへ流れ行くやら　子
壺坂のさわりばかりを聞き飽きて　雉
梅干飴を舌に遊ばす　人
一目万本眼下に花の吉野あり　蘭
この蝶の名をスジクロチャバネセセリ　吾
下（ナオ）闇の底にギターのアルペジオ　雉
地雷のキーを夏草の中　蘭
踊りの輪英字新聞踏み裂かれ　人
残り毛糸で編んだ手袋　子
鑑識は時雨の空を仰ぎけり　吾
ダイヤモンドを鷹が持ち去る　人
うらうらとケンタウロスの昼の夢　蘭
二日やいとの束の間の程　黒崎　桃雉
近頃はまた何やかや三里塚　籬
送電線の鉄路越えゆく　人
鯛焼をポケットにして冬の月　籬
イルカのいない曲芸の台　吾
羽蝶（ナウ）飛ぶ葡萄牙（ポルトガル）から帆船きて　人
目にあたたかきパプリカの赤　子
四月馬鹿敢えて気付かぬ振りをする　籬
まかり出たるこれ太郎冠者　蘭
今朝の雨くさめの花となりにけり　吾
島のあり処（ど）や春潮の果て　雉

昭和六十二年六月六日芒種
（於・川崎市民プラザ）

《川崎・鹿吟舎―その三》

歌仙『淡　影』

坂口暗吾捌

蹤き来るや淡き二月の影法師　朱牟田恵洲
記録破りの暖かき冬　坂口暗吾
白面の大関出でて豆打ちて　池翳雉
夕餉の支度に足りぬものあり　瀧波信子
横ざまに月待ちいるや赤毛布　桜井蹴石
縁の欠けたるどびろくの壺　白井風人
凝(ウ)りいる湯の華アールヌヴォーなり　雉
懐かしきかなこの肋骨　吾
二丁櫓を沖の島まで押し切って　雉
郵便行嚢土間にばさりと　人
草原に光は満ちて初燕　中岡幸子
曲がった釘で幾何の解法　石
何ルクスありや今宵は望の月　洲
蚯蚓鳴くなど以ての外じゃ　人
さて一節女は芋を食い終り　吾
港の見える丘の日の暮れ　雉
花吹雪古墳の皇子はいつ覚めん　人
西の訛りをうららかと聞く　洲

とっと(ナオ)昔鬼棲みしとふ山の茶屋　鈴木撫蘭亭
犬雉猿が連れ立ちてゆく　信
おそるおそる覗けば青し銀河系　石
コイン一つに夏の夜の夢　洲
塩沢の上布の肩の細かりき　蘭
人目の関も今は越ゆらん　雉
落日の火の粉を浴びて飛ぶ蜻蛉(あきつ)　吾
三号高炉音立てて崩る　蘭
大道に山と投げ売る青蜜柑　雉
組体操のピラミッド立つ　幸
細い月と飛行船あり昼の空　蘭
とろりと苦き土耳古珈琲　洲
試(ナウ)みの取り木の八っ手根付きけり　雉
こんなところに失せし黄楊櫛　吾
天金の聖書に長き栞紐　人
無人燈台灯をともす頃　信
日一日花だんだらに裾野より　雉
節ある縁に湿る春雨　石

昭和六十三年二月六日首尾（於・桜井シロービル）

《本庄・若泉連句会》

①昭和五十八年十月、宇咲冬男氏の指導により発足。
②新しい連句をイメージ化して若泉と命名。
③会員十五名で、伝統を踏まえた新しい連句の実践をしている。又、高校生への普及も会の方針である。

半歌仙『寒晴れ』

川田章夫捌

寒晴れの浅間にこころひきしまる　川田章夫
冴えてりりしき生徒等の声　宇咲冬男
伸びまさる柏木高く仰がれて　今野菊男
埋め立て進み街生まれゆく　小泉史人
満月の光り川面に照りかえり　金沢順子
垣根の下ですだく鈴虫　小林亮一
干柿を作る卒寿のおばあさん　山田悟史
税は嫌いでもらう年金　野村仁智
警察に目をつけられてロスに飛び　亮
めし恋しくてはいる寿司屋へ　菊
金髪の彼女に言えぬアイラブユー　順
灼けた砂丘を二人駆け行き　仁
夏の月小町の末の思われて　史
めぐりめぐりて三井寺に着く　悟
カンバスを立てるところを探しつつ　史
酒くみかわす外は春雨　亮
目にもしみ心にしみる花の色　菊
夢の架け橋走れ仔馬よ　章

平成二年一月十三日首尾
連衆は高校二、三年生・冬男一直
（於・埼玉県立本庄高校）

「座談会」

――現代連句のあれこれ――

平成三年七月六日　於・東京・赤羽会館

出席者（司会）福井　隆秀
土屋　実郎
小林しげと
近松　寿子
上田　渓水
宮下　太郎
中尾　青宵
（発言順）

福井　この度、連句協会から『現代連句集』が発行されることになりまして、全国のグループからの優れた作品が多数収録されることになりました。しかしまだ、俳句人口などに比べても連句をしている人は少ない。式目が難しいのではないか、とか、大勢で集まらなければ、とかで連句を毛嫌いしている人も多いと思います。そこで今日お集まりの皆さんで、連句の楽しさ等を話し合っていただきたい。先ず皆さんがどういうことから連句に関心を持たれたか、そういうことから話し合っていただきたいと思います。私が司会でございますので、隗より始めよ、で私からお話させていただきます。

私は昭和十四年に東京の商業学校を卒業しました。実業界を目指す人が多かったのですが、私は文学をやりたいと思っていました。もっとも一年後輩には、詩人の田村隆一、北村太郎氏がいるんですよ。私も文学青年で詩をやりたいと思っていました。

偶々その頃、三省堂から山口誓子の『俳句鑑賞のために』が出ましてね。これが素晴らしいのですよ。恋の句なんかもありましてね。俳句というのもなかなか面白いなと思ったのですが、誓子は関西の人なので、雑誌をとって投句するだけでもいいのですけれども、直接指導を受けたいと思いましてね。私はその頃深川に住んでいまして関西はちょっと遠いなと思っていましたら、東京には加藤楸邨という先生がおられたのです。句会にも参加し、丁度『寒雷』が創刊されたばかりで、当時東大生の金子兜太さんとか安東さんとか沢木さんとかと一緒に勉強していたんですよ。

俳句が面白くなって、軍隊へ行ってからも戦後も昭和二十三年頃まではやっていましたね。ところが、別に桑原武夫の第二芸術論ではないですが、私はもっと人情とか恋とかを表現したいと思うようになっていましたから、それなら散文の方がいいかなと考えました。映画も好きでしたから大映や松竹の助監督の試験を受けたりしました。ビリで受かったことは受かったのですが、胸の病があったものですから、結局辞めまして、その後映画のシナリオやラジオドラマ、小説等を書いてきました。当然、この分野では恋でも人情でも描けるわけですから。そんなわけで、昭和二十三年にはもう俳句とは完全に訣別していましたね。

ところが三十年経った昭和五十六年に突如「週刊朝日」に石川淳とか丸谷さん、野坂さん、井上ひさしさん、結城昌治さんらの小説家連中や大岡信さんが連句をやっているのが載ったんですよ。石川淳は尊敬している作家ですから読みましてね。成程連句とはこういうものか、芭蕉もやっていたというんで七部集なんかも読み始めました。難しいので注釈付きで読んだのですが、成程これなら恋も時事も詠めるし小説と同じように人情も現わすことができる。しかも一人でなく数人の人とするのだからこれは楽しいのではないかと思いましたね。早速東先生に手ほどきを受けまして、それからもう八、九年になりますか、今は〈猫蓑会〉会員という訳です。連句というのは、集まって一座して巻くのが原則なんですが、文音という方法もありまして、葉書や手紙を投函しさえすれば出掛けて行かなくても巻けるわけです。非常に楽しいものなので、もっともっと皆さんに連句の楽しさを味わってほしいと思いますね。

土屋　直接の動機は、大学を出てから結核になりましてね、主治医から手ほどきを受けたからですが、下地は寺田寅彦だったと思いますね。寅彦は中学の教科書にも載っていましたし、高校時代は全集も読みました。そんな下地はあったのですが、昭和三十年頃、先程お話しした主治医の先生が、山本六丁子先生のお弟子で「このままでは連句が滅びる」というので、一対一で教えてもらいました。二巻同時進行、二時間で六句、六回で二巻というペースでした。十四・五巻巻きましたかね。それから十何年かは全くブランク。今から十五・六年前ですが友人から勧められて俳句を始めました。丁度その頃、阿片さん（連句協会会長・阿片

瓢郎）が『連句研究』を創刊されたのを知り、早速申し込みまして付句の応募などをやっているうちに俳句文学館で大会がありました。そこで瓢左さん（故・清水瓢左氏）の捌きの座に連なりました。帰りに瓢左氏から〈都心連句〉へ来ないか、と誘われました。ですから私が〈都心連句〉へ行くきっかけは阿片さんがつくって下さったのですよ。それから今日に至っていますが福井さんもおっしゃった通り非常に面白くて、やればやるほど抜けられなくなっている、そのような現状です。

小林　私は皆さんに比べて非常に晩学なんですね。昭和四十年代の終わり頃、勤務先の職場の俳句会で作品集を出そうということになりまして、清瀬の療養所がそれをやってくれるというので出掛けました。その時一緒に行った友人から連句のことを聞きました。なかなか面白そうなので今度は俳句はそっちのけで連句を始めました。しかしどんな風に巻いたらいいのか当時はまるで判らない。岩波の『芭蕉句集』などを読みながら手探りで、その友人と二人が中心になって四・五人で巻いていました。一応形はできるんですが自分たちの作品が良いのか悪いのかわからない。そんな時、日経新聞文化欄に連句の記事が載り阿片先生のことを知りました。自分達も井の中の蛙でなく、指導を受けようではないかと先生をお呼びしました。昭和五十年の始め頃でしたか、丁度『連句研究』が始まって先生も意気盛んな頃で、毎月私達の職場まで指導に来てくださいました。その中、職場の近くに石川宏作さんという方がおられまして、石川宏作さんと野村牛耳さん達との連句の作品が『摩天楼』という本に載ったのですね。阿片先生も毎月来て下さるのは大変だったので今度は石川宏作さんに指導を受けるようになりました。ところが間もなく石川宏作さんが亡くなられまして仕方がないので当時出版されだした連句入門書などを頼りに巻いていました。折しも連句懇話会が結成され、第一回の大会が比叡山で開催されまして参加しました。連句は大林杣平先生の捌で斉藤石叟・鈴木春山洞・山路春眠子氏等と一緒だったことを今でもはっきり覚えています。新幹線ではわだとしお（村野夏生）氏と一緒で石川宏作氏の話もでましてね、杏花村塾の連句会へ誘われましたので出掛けました。高藤馬山人・真鍋天魚・珍田弥一郎・八木荘一氏等や確か宮下さんも来ておられました。私

はどうも連句が自分の体質によく合っていてあちこちの連句会へ出掛けて行く、そのうち縁あって都心連句会へ誘われました。清水瓢左・宮脇昌三・見学玄・京極吐藻・戸塚黒猫子・三好龍肝氏等、土屋さんとか錚々たる人々が一座しておられまして、中々自分の句が採られないことが何回もつづきました。まあそんな時期もあって今日に至りました。

近松　いま多くの懐かしい方々のお名前をうかがいました。その中でも、石川宏作さんとは小林さんも深い関わりをお持ちのようで、しみじみ懐かしく思いました。

順序を立ててお話しますと、私は俳句が好きでノートに書留めたりもしていましたが、実際に結社に入ったのは昭和四十五年頃、近所の方から、結社の主宰による句会を高槻でもつことになったので、と誘われまして員数あわせのように、私自身も見学だけのつもりで参加しました。そこで出句しなければならないようになって出した句が特選扱いになりました。そんなことはよくあることらしいのですが私は嬉しくなって俳句に熱中しました。その結社に俳文学者の京都女子大・浜千代清教授がおられました。茨木は京都に程近いものですから〈茨木文学同好会〉を結成、月一度の「俳諧」の講義をしていただくことになりました。「俳諧」の講義を満二年、続けて「奥の細道」の精講を三年余、後半は連句の実習もいたしました。その頃所属していた同人誌の指導者的な方が俳諧好きで、合評会のあとなど、箸紙やメモを千切って付を楽しんだりしました。同人誌に載せた連句（胡蝶）が、その頃同人誌評を御担当だった林富士馬さんのお目にとまりました。俳人林　空花として胡蝶形式を推進しておられましたので関西での試みを大層喜んでくださいました。いろんな連句に接したこともあってその魅力の虜になって、学ぶ過程の勉強ノートのようなものを本にまとめるにあたって伝統的なお話もと、神戸の橋閒石先生をお訪ねしました。伝統を踏まえながら新しさのある連句を巻いていらっしゃいました。昭和五十四年の暮に本になりまして、翌年の春の出版記念の会へ林　空花氏と一緒に石川宏作氏も御来阪くださいました。連句懇話会の発足は昭和五十六年、その創立総会の帰り岡本春人先生と御一緒で、連句の今後、殊に関西での発展について熱意をこめて話されました。翌年の第一回大会（比叡山）の時

からいろいろとお手伝いさせていただいてありがたかったと思っています。〈茨木文学同好会〉の連句好きとその他、俳人・歌人・作家達と〈茨の会〉として連句を楽しみつつ今日に至っておりますが、いろいろの面で難しさを感じたりもしています。

上田　私も皆さんと同様に俳句から入りました。昭和二十三年に〈かびれ〉に入門。早くから俳論に興味をもち、俳句と連句の関わりあいが解ってくるにつれて連句への関心が強まって参りましたが、なにせ松戸在住吾れ一人では連句は巻けません。ですから実作を試みたのは、昭和三十年代に入り療養の身となって、療養所内に句会をひらき、連衆が得られてからでございます。先師（大竹孤悠）著『かびれ記』所載の昭和俳諧式目や『孤悠連句集』をお手本にしました。しかし連衆が相次いで他界して中断。本格的に連句の勉強をはじめたのは、ずっと下って昭和五十年代後半で、東京近郊の幹部同人の勉強会（於俳句文学館）が発足し、その世話役をするようになってからです。小松崎爽青主宰の指導よろしきを得て、今のところ文音が三つ飛び交っています。ときたま「発想は面白いがたまに付く人に席をゆずってもらいます」などという返信が参りますが、捌き手の心遣いがわかります。また、付句の中で母の病を気遣う挨拶をされたりしますと、しみじみ連衆の温かさを感じます。俳句の感動もすばらしいものですが、連句の思いやりの心は付味の面白さにもまして嬉しいものです。

宮下　私は今までいろいろ回り道をして連句に到達して、まだ模索を続けている状態ですが、若い時、朝倉文夫先生の書生をしていました。朝倉先生は優れた彫刻家であるばかりではなく、諸事百般といいますか自然を慈しむという、玉川学園の小原先生にも影響を与えた素晴らしい教育家でもあったわけですね。私は単なる造形の勉強だけでなくいろんなことを、俳句まで教えていただきました。昭和三十九年に亡くなられてから、近くへお茶とお花の稽古に通ったのですが、そこへ俳句の指導に来ていた人が、小笠原樹々先生で連句も教えてもらったのです。私としては若い時に連句に接することができて本当に良かったと思っています。四十一年に『連句というもの』という本を出されましたが当時は孤軍奮闘というところで、連句連盟（うまくいかなかった）や連句スライドを作ったり、私もカメラを担

いでお手伝しましたよ。小笠原先生が〈渋柿〉系だったので野口里井・伴野渓水氏等と知り合い〈市ケ谷連句会〉へ参加しました。そこへ同じ〈渋柿〉の阿片瓢郎先生が連句誌創刊の相談にみえました。それが『連句研究』で私は第一号から参加させていただいています。もう百号になります。

先程の小林さんや近松さんの話懐かしくて、近松さんの本も知っていましたよ。

私は学校に勤めているものですから若い人達の心の動かし方など興味があり、学生と連句を楽しむこともたまにあります。表現という問題は目に見えるいろんなジャンルがありますが、表現に至る心の問題はノウハウがないんですね。連句はそれにヒントを与えてくれるものがあるようです。連句というのは、また個の尊重の時代に前句に心を寄せ、個人の仕事ではないという形で一つの作品ができるのですね。付けるという行為の面白さに加え、連句には実に様々な楽しみ方があるものですね。それに風雅・風交・滑稽といった世界が連句にこそ存在すると思いますよ。

中尾　連句は楽しいとか、やってみれば楽しいということはよく聞くのですが私自身は始めのうちは楽しいこと全然なかったですね。何がなんだかさっぱりわからない。俳句はかなり前からやっていたのですが常に横に連句という、なんか居候というか大家さんみたいのがいてどうも気持ちが悪い、という気がいつもしていましたね。伝統の〈獅子門〉で俳句をやっているわけですから勿論連句は疎かにはできないとは思いつつ手をつけていなかった。連句は、俳句を作っていく上で一つの課題だったのですね。だから連句を読んでも少しも楽しくなかった。いつか実作の場に誘われて回をかさねて行くうちに楽しいと思うようになりましたし、芭蕉たちの俳諧を読んでも面白く判るようになってきました。芭蕉理解には連句実作は不可欠です。しらずしらずのうちに或る山を越えたのでしょうね。最近初心の人に手ほどきをしている時も、楽しいですよと勧め、皆さんも楽しいと言ってくださる。自分の付句を採っていただく、或いは自分の句または人の句が捌によってものの見事に良い句に変ってゆく。そういうところに驚きがあり喜びがある、本当に句がよくなることを正直に喜ぶ心さえあれば連句の座は楽しいのではないか。俳句から入ると、俳句

にない短句の楽しさ、四季でない雑の句の楽しさ。これらも連句の楽しさでしょうね。

実作と鑑賞というか古典の勉強を車の両輪のように励んでいくのがいいと自分では思っています。

福井　どうもありがとうございました。

最近は、俳句の雑誌にも連句が採りあげられるようになりまして、『俳句研究』の平成三年七月号にも、俳人協会理事長の草間時彦氏が東　明雅・暉峻康隆、そして平井照敏・飯島晴子の各氏たちと巻かれた連句が載っておりますし、一昔前に比べますと俳人の方々もかなり関心をもつようになってきました。国民文化祭の正式種目にもなった事ですし、しかし、まだまだ連句は難しいのではないか、とか、俳句は予め作っておけるが連句はその場で、しかもルールに則って詠まなければいけないから、とか敬遠している人が多いように思いますが……。

上田　老人大学ではむずかしいルールをひとまず置いて〝付け〟の勉強をしてみています。老人は経験・知識・語彙が豊富だから、短句を出してそれに長句を付けさせると、面白いといってすぐ乗って来ます。はじめは短句をつける方が難しいようです。

福井　連句の場合はどうも人生経験が必要だと思いますね。

近松　その通りとは思いますが、先程宮下さんが、「若いうちに連句に出会えてよかった」とおっしゃいましたね。若い時に連句に会えなかった者としましたら全く羨ましい限りで、今の若い人に連句を知って欲しいと思いますね。

宮下　いろいろな出会いがあるわけですね。俳句から連句にアプローチする人、誰か師匠というか捌きのできる人を求めて指導をうける、また、全く俳句をやらない人でも連句は俳句の親分だなどということは余り考えずに心の運動である、言い直せばストレス解消のゲーム性のある心のレクリエーションと捉えることも可能なんですね。これは生涯教育が目指すべきものと似ていますね。コミニケーションの原点ともいえるでしょうか。付け合というのは心の運動なんですね。若い人は若いなりにキャッチフレーズ作り、言葉のキャラクターなどに非常に敏感なんですが、連句と出会う場がない。これからだと思いますよ。

福井　私はこういう勧め方をするのですよ。芭蕉は俳句だ

けを読んでいると枯れ切った世捨て人のような面しか判らない。ところがなかなかどうして恋の句の名手で、それは連句を読まねば判らない。俳句会では恋の句はあまり出せないが連句では必ず恋が詠める。女性方は喜んで、丈高い恋、下世話な恋、いろんな良い句を詠まれますよ。式目も始めは余り難しいことはいわずに中級になってから注意するようにしています。式目は完全だが面白くない連句よりは、少々外れていても面白い連句の方が良い。もっともゲームにもルールがある様に、その場限りの駄洒落をやっている訳ではなく文芸ですから、当然の弁えは要りますが。

土屋　式目の前に付味の面白さを知って貰うといい。式目を文字から知って貰おうとすると抵抗が多い。現場で出会った時に体で覚えて行く、それが良いでしょうね。

中尾　式目というのは非常に多くの人が長い時間をかけた最大公約数的な、作者と鑑賞者の美意識だと思うんですね。ですから絶対なものではない。個人皆それぞれ違う美意識をもっているわけですから。しかしそれ故に仲々手強い。又座の進行上必要です。ただルールというものは時代と共に厳しくなりがちで、厳しくするものと緩やかにすべきことがある筈です。それを心得た上で、今は実作に一人でも多くの人を誘うということが大切でしょうね。しかし水辺に馬を連れて行っても馬が飲みたくなければ飲まないように、折角来て下さった方に連句は本当に楽しいと感じていただく工夫の必要がありますね。だが自分の場合もそうなんですが、いやいやでもついて行く、又はどんなものかなと覗いているうちに判ってくる、ということもあるわけですから常にその様な開かれた場を用意しておくことも必要でしょうね。

小林　最近、俳句の結社誌でも連句を採り上げるところが多くなりました。『かびれ』では一頁を割いて付句募集をしていらっしゃいますが、そこへ投句する人は決まっているのでしょうか。

上田　いまのところ二十人くらいでしょうか。

小林　投句しない人でも連句をしてみようと思う人はいるのでしょうか。

上田　いるでしょうね。しかし会員が全国に散らばっていますので、なかなか座を楽しむ機会が持てないんです。

小林　そういう俳人たちを連句へ誘うのにネックとして、

場所・時間・式目とかの問題があると思うのですがどのように解決すればいいでしょう。

中尾　二つのケースがあると思いますね。俳句は盛んにやっている、では連句もやろうとすると連句はどうも、と俳句会まで不成立になることを惧れるケース。俳句と連句を同時に楽しんでいるケース。やはり良い捌き手によって連句実作の楽しさを知ってもらうのが先決でしょうね。最近、三四時間連句をやり、あと俳句会に切り換えることをしています。後の時間の俳句会はとてもリラックスして楽です。

上田　ある句会では、最後の三十分を連句にあてています。前回の宿題を治定し、解説を加えてあと一句。そして次の付けを宿題にしています。

土屋　私の入っている結社では連句は駄目と反対なのです。まあ一般的に俳句をしている人は連句に入りにくいですね。〈獅子門〉は会員四百人と聞いていますがそのうち連句をする人は？

中尾　三・四十人は常時ですね。

宮下　俳句は個の産物、連句は座の文芸で執着度が分散するのですね。お茶とお花の関係に似てるかもしれませんね。お茶会は一つのパフォーマンスで連句、お花は俳句。連句は第一義的には巻いている時の楽しさが大きいのに結果として作品の評価もされる、そこに問題もありますが、連句の効用はいろいろあります。

中尾　俳句は好きなものは好き、駄目なものは駄目として捨てられる。連句はとにかく前の句に付けて、いかに下手な句が出ても捌がうまく拾い上げ辻褄を合わせる。ともかく最後まで仕上げなければ、というところに我々の失敗の連続かもしれない人生に似ている。とにかく皆で一つの作品を仕上げるというのは人生の縮図のようでそこに意義があると思いますね。

宮下　捌は良い句を待っているときりがない。見合い、ではないですがまだいい句が出るかと待っていると際限がない。そこそこのところで決断して進めてリードする、そういう捌の役割は大事ですね。捌きをすると勉強になります。

上田　私は俳句・連句両方をやっているので、それぞれの良さ・面白さがわかるのですが、欠けている点も見えて来ます。例えば、今の俳句は挨拶よりは独白。ぎりぎりのも

のを詠おうとするから、連句の方から見ると冷たく感じます。逆に俳句の方から見ると連句の発句は格調の高いものが少ないように思えますがどうでしょうか。

福井　俳句に向いている人と、連句に向いている人があるのでしょうね。

宮下　連句好きというタイプがあるかもしれませんね。やっているうちに心の執着がありますとだめですね。座においてうまく自分を解放できる人は連句向きでしょうね。捌きはそのようにリードすることも出来るでしょう。

福井　俳句が俳諧味より雅の方にかたよっている傾向もありますね。その点、加藤楸邨の句なんですが、

梨食ふと目鼻片付けこの乙女

カフカ去れ一茶は来れおでん酒

百代の過客しんがりに猫の子も

等はまさしく俳諧ですね。先生は安東さんと連句もなさっておられましたし……。

中尾　連句は極論すれば人生肯定・現実主義的である。連句は半分芸術、半分遊びですから遊びを遊びたい人には非常に向いているのでは。

土屋　小宮豊隆でしたか、〝連句文楽論〟文学論でなくて文楽論というのを書いていましたね。

近松　俳句は強い個性とか、少々偏っていても独自な考え方や表現が周囲を驚かす句を生むということがありますね。自分一人の作品をつくっていく。連句の座でも平凡でない句が連衆や連句そのものを活々させるのですが、あくまで前句に付き後の句も付け易いという協調性が必要ですね。さっき俳句と連句の発句の違いが話題になっていましたが、連句の発句は格調も必要ですが当然として脇を受け入れる要素が要りますね。その発句が俳句に変遷したわけですが現代の、自分の俳句は五・七・五で完全に独立していると思っておられる俳句に脇を付けたりすれば怒る人があるかもしれません。それからいくら時間をかけても自分個人の作品にならないし、というせこいというかそんな考え方のひともおられますね。

宮下　それは所謂アートの世界に於てもありますよ。個のワーク（作品）尊重といっても、建築のように一人で全部やるわけにいかない、というものもある。だが作品というからには捌き（ディレクター）が責任を持たねばならない。

近松　私の場合、俳句はいくら変わった句を詠もうとしても結局狭い自分の周囲しか詠めていない。主語の無い俳句の主語は自分、といわれているから当然かもしれませんが連句であれば全然別の人の立場に立った句とか、ぽん、と違う世界、宇宙へまで行ける、また時代までも超せますね。それがこの上なく楽しみですね。

福井　連衆とのコミュニケーションのうちにいろんな知識を得る事もありますしね。

近松　俳句では使う季語もおのづから限定されていた様に思います。連句ではそれこそ別の人間になったり別世界へも行かなければならない訳ですから相応しい季語を、と一生懸命『歳時記』を繰ります。連句のお蔭で使った季語も多いのです。

福井　私は若い人達に連句を手軽にやって欲しい、と切実に思いますね。連想ゲームや言葉遊びには慣れてる人達ですから、そんなところから入って連句の面白さに親しんで貰えたら、と思います。各大学には俳句部なんかあるんでしょうから、協会の幹部が手弁当で大学の連句部開発に当ったらどうでしょう。その他皆様の御意見をどうぞ。

中尾　連句は一貫した主題もなく無心所着かつ場面転換が多いので猥雑な感を与える。それを形式、表のこと、月花四季挙句等の式目及び五七五と七七の正調律で支えている。この辺が近代人の好悪二分するところではないか。

　現在蕉風復興に勢力が注がれていますが、連句も時代時代の新しさが必要で、形式や内容、とくに形式構造に於いて何が現代性なのかということをこれから考えて行かねばならない。連句の普及には伝統の良さと新感覚で遊び得る良さと両面備えることが肝要で、急いでも出来ることではないが、この課題は忘れてはならないことだと考えています。

福井　いろいろ貴重なご意見も伺いましたが、時間となりましたので、終らさせて頂きます。ありがとうございました。これからも連句界発展のため、ご尽力よろしくお願い致します。

祓川（はらいがわ）	黒田　耕三	791松山市新浜9-25黒田耕三(0899-51-2889)
芭流朱（ぱるしゅ）連句会	鈴木春山洞	791松山市三津1-3-13鈴木春山洞(0899-51-0064)
東松山連句会	重松　冬楊	791-02松山市平井町1508重松冬楊(0899-75-1461)
白燕（びゃくえん）連句会	橋　閒石	654神戸市須磨区潮見台3-2-30佐野千遊(078-731-0334)
ひよどり連句会	品川　鈴子	651-11神戸市北区ひよどり台1-17-1品川鈴子(078-743-2221)
広野連句会	村木佐紀夫	520大津市桜野町1-13-16村木佐紀夫(0775-22-5444)
風信子の会	村野　夏生	165中野区江古田4-18-2杏花村塾(03-3387-2331)
鳳松連句会	重松　冬楊	791-02松山市平井町1508重松冬楊(0899-75-1461)※
北杜連句塾	狩野　康子	981仙台市青葉区双葉ケ丘2-5-12狩野康子(022-271-0005)
松喜久会	岩崎　利一	104中央区銀座6-9-4岩崎利一(03-3571-0319)
松山連句協会	永田　黙泉	791-01松山市溝辺町1009永田黙泉(0899-77-0015)
松山連句教室	松永　静雨	790松山市余戸中2-13-19井上弥生(0899-73-6055)
摩天楼連句会	星野　石雀	281千葉市花見川2-6-105星野石雀(0472-86-0725)
三河連句会	斉藤　吾朗	445西尾市伊藤町伊藤前15-1斉藤吾朗(0563-57-8332)
夢茶の会	中出　夢女	790松山市大街道2-2-7香和ビル３Ｆ中出絢子(0899-26-0218)
瑶沙連句会	土屋　実郎	233横浜市港南区上永谷3-20-34土屋実郎(045-843-8059)
葉門連句会	井口　昌亮	155世田谷区代田2-9-1福島新吾(03-3414-8426)
連句愛好会	柴崎正寿郎	241横浜市旭区若葉台4-7-704柴崎正寿郎(045-922-2851)
連句会「Za」	伊藤　直子	981仙台市泉区南光台3-3-9伊藤直子(022-233-7732)
連句研究会	阿片　瓢郎	352新座市石神1-5-9阿片瓢郎(0424-73-8714)
連楽会	高畑　自遊	168杉並区和泉4-26-15高畑自遊(03-3323-2454)
鹿吟舎	池　央耿	213川崎市宮前区土橋6-15-1A214池央耿(044-855-8546)
若泉連句会	川田　章夫	372伊勢崎市中町15-2川田章夫(0270-32-8410)

＜※印はその後変更あり＞

啐啄会	森三郎	369-12埼玉県大里郡寄居町寄居982森三郎(0485-81-0077)
染井の会	蒲幾美	215川崎市麻生区王禅寺767-36蒲幾美(044-955-8726)
第六天連句会	今泉忘機	272市川市平田3-23-14浅野黍穂(0473-76-8196)
多摩連句会	宮下太郎	206多摩市落川1235宮下太郎(0423-74-7002)
丹想	秋山正明	661尼崎市塚口町1-22-1-207秋山正明(06-421-1606)
出合川	中川久子	790松山市余戸南4-14-24中川久子(0899-71-0486)
東京義仲寺連句会馬山人記念会	川野蓼艸	182調布市上石原2-27-9川野蓼艸(0424-85-5480)
東京義仲寺連句会水分(みくまり)の会	眞鍋天魚	177練馬区南田中5-20-2眞鍋天魚(03-3997-2548) ※
桃夭榭唸聚	赤田玖実子	228相模原市上鶴間395赤田玖実子(0427-45-0407)
桃林会	宮崎明月女	171豊島区池袋2-1066今村ゆき(03-3984-7906)
都心連句会	大林杣平	167杉並区南荻窪3-19-9大林杣平(03-3333-4880)
どん・あ・くらぶ	豊島呑烏	790 松山市道後一万11-13豊島正憲(0899-24-2936)
習志野連句会	鴇田秋甫	275習志野市実籾町2-80鴇田秋甫(0474-72-6270)
南海放送学苑連句教室	永田黙泉	791-01松山市溝辺町1009永田黙泉(0899-77-0015)
虹の会	馬場東夷	143大田区中央2-12-9馬場宏一(東夷)(03-3771-9409) ※
猫蓑会	東明雅	413熱海市熱海1812-282中銀ライフケア梅園台421杉内徒司(0557-82-6460)
乃木坂散人連	古館曹人	102千代田区一番町20-10-202古館曹人(03-3262-9350)
俳諧寺芭蕉舎	窪田薫	060札幌市中央区北6条西23丁目窪田薫(011-631-4009)
俳諧接心	岡本春人	663西宮市二見町14-231岡本春人(0798-67-6051)
白塔歌仙会	上村以和於	166杉並区阿佐ケ谷北5-24-12上村以和於(03-3337-7942)
芭蕉記念館連句会	宇咲冬男	135江東区東陽町3-26-8藤沼亜緋子(03-5690-3362)
巴世里(ぱせり)の会	大野国士	501-61岐阜県羽島郡笠松町東陽町1大野国士(05838-7-2035)
八戸俳諧倶楽部	関川竹四	031八戸市湊町上の山55-2関川竹四(0178-33-3432)
花野連句会	小出きよみ	390松本市筑摩東2419小出きよみ(0263-25-5136)

義仲寺横浜戸塚連句会	八木　荘一	245横浜市戸塚区深谷町671八木荘一(045-851-1655)
錦心会	渡部　伸居	791-02松山市小野町15渡部伸居(0899-75-1532)
句華苑吟社	吉本　三蔓	328栃木市室町1-13吉本画廊内(0282-23-3665)
草茎	宇田　零雨	332川口市飯塚4-4-7磯直道(0482-51-3033)
草茎松山支部	寺岡　情雨	791-01松山市白水台4-12-8寺岡情雨(0899-23-6028)
くのいち連句会	暉峻　桐雨	101千代田区内神田2-12-5内山漕店内山秀子(03-3252-2941)
興聖寺連句会	松永　静雨	790松山市末広町17-5安野次子(0899-43-3334)
郡山連句会	佐藤　淳	963-01郡山市三穂田町川田字東2佐藤淳(0249-45-0218)
小松連句研究会	石丸　信義	799-11愛媛県周桑郡小松町駅前2丁目石丸信義(0898-72-2616)
ころも連句会	矢崎　藍	473豊田市竹元町二ツ池6-44加藤治子(0565-53-2224)
佐久良連句会	井門可奈女	790松山市湊町4-6-6丸三書店内(0899-31-8501)
三冊子研究会	宇和川匠助	780高知市福井東町23-11宇和川匠助(088-72-7081)
鹿の会	阿片　瓢郎	352新座市石神1-5-9阿片瓢郎(0424-73-8714)
子規記念博物館友の会連句教室	鈴木春山洞	790松山市道後公園1-30松山市立子規記念博物館事務室内(0899-31-5566)
慈眼舎	三好　龍肝	154世田谷区下馬5-35-3-101三好龍肝(03-3424-8841)
獅子門	国島　十雨	501-11岐阜市黒野古市場193国島十雨(0582-39-0037)
秋紅雅友連	大野　秋紅	446安城市里町荒井31大野秋紅(0566-97-8083)
樹氷連句会	犬島　正一	939富山市西中野本町5-14犬島正一(0764-21-3494)
湘南吟社	名古　則子	359所沢市並木8-1-1-709名古則子(0429-96-0820)
正風大府支部	久野　溪流	470-11豊明市阿野町上納91-6鈴置一花(0562-92-4521)
正風和気支部	桐山　北天	709-04岡山県和気郡和気町衣笠171桐山北天(0869-92-0807)
信州大学連句会	宮坂　静生	399-65松本市寿台4-5-3宮坂静生(0263-57-2461)
新庄北陽社	笹　喜四郎	996新庄市宮内町7-10笹喜四郎(0233-22-2086)
すみれ連句会	岡田水都子	669-13三田市中町7-39岡田水都子(07956-2-4110)

参加グループ一覧

グループ名	代表者	連絡先	
藍の華連句会	白方　筍子	791松山市久万ノ台1165白方アキ(0899-22-0111)	
青葉城連句会	小野寺妙子	980仙台市青葉区梅田町4-28小野寺妙子(022-233-0693)	
あした連句会	宇咲　冬男	114北区豊島4-16-34王子ビューハイツ403号宇咲冬男(03-3927-1022)	
あしべ俳諧塾	片山多迦夫	666-01川西市御園町1-3-406号片山多迦夫(0727-58-3198)	
あらくさ連句会	草間　時彦	249逗子市逗子2-4-5北沢義弘(0468-71-5393)	
市ケ谷連句会	宮下　太郎	206多摩市落川1235宮下太郎(0423-74-7002)	
市川俳諧教室	今泉　宇涯	272市川市市川1-8-1今泉ビル(0473-22-4214)	
伊豆芭蕉堂連句会	石渡　蒼水	414伊東市弥生町3-2石渡蒼水(0557-37-1831)	
茨の会	近松　寿子	567茨木市北春日丘2-13-7近松寿子(0726-23-8817)	
奥美濃連句会	水野　隆	501-42岐阜県郡上郡八幡町新町929おもだか家(05756-5-3332)	
小野連句会	渡部　伸居	791-02松山市小野町15渡部伸居(0899-75-1532)	
おぼろ連句会	長井南茶亭	790松山市余戸中6-3-28長井良策(0899-71-6386)	
海市の会	鈴木　漠	650神戸市中央区港島中町3-1-47-202鈴木漠(078-302-2230)	
佳菊会	森　月鼠	431-31浜松市半田町68森月鼠(0534-34-3711)	※
かすみ会	森島香代子	616京都市右京区竜安寺衣笠下町1森島香代子(075-463-1534)	
風の巷	守口津夜子	799-13東予市壬生川191-7守口津夜子(0898-64-2634)	
花扇会	宮　県人	344-01埼玉県北葛飾郡庄和町大衾600-4二宮方宮県人(0487-46-1443)	
金石公民館俳諧研究会	江森　峰雲	920-03金沢市金石西4-18-4江森峰雲(0762-67-0463)	
かびれ連句会	小松崎爽青	317日立市本宮町2-7-25かびれ社(0294-21-1341)	
からむし庵連句会	宮脇　昌三	399-42長野県駒ケ根市中沢菅沼(0265-83-7496)	
夏炉の会	高橋　柿花	780高知市曙町1-28-35高橋歯科内(0888-44-0409)	
義仲寺婦人連句会	高橋　微代	336浦和市大谷口981-6高橋微代(0488-85-1668)	

『連句協会』顧問・名誉会員・評議員及び役員名簿（1992．現在）

（顧　　問）　阿波野青畝・宇田零雨・暉峻康隆・東　明雅
（名誉会員）　橋　閒石・草間時彦・岡本春人・永田黙泉
（評 議 員）　今泉忘機・宇和川匠助・江森峰雲・片山多迦夫・加藤耕子・加藤三七子・見学　玄・小松崎爽青・重松冬楊・品川鈴子・関川竹四・牧野　巌・松永静雨・真鍋天魚・水野　隆・宮坂静生
（役　　員）
会　　長　阿片　瓢郎
副 会 長　今泉宇涯・宇咲冬男・大林杣平・國島十雨
理 事 長　土屋　実郎
常任理事　赤田聴雨・秋元正江・磯　直道・上田溪水・川野蓼艸・小林しげと・鈴木春山洞・近松寿子・中尾青宵・名古則子・福井隆秀・宮下太郎・森三郎
理　　事　天野正三・伊藤藪彦・井門可奈女・唐渡北勢子・窪田　薫・式田和子・柴崎正寿郎・寺岡情雨・松村武雄・八木荘一・山地春眠子・柚木治郎・渡部伸居
監　　事　城戸崎丹花・小林　　梁

あとがき

近松　寿子

この記念事業の担当を仰せつかったとき、用意したノートの表紙に私は「昭和連句集」記録と記しました。第一頁の第一行の日付は一九八九年三月五日になっています。

序文にもありますように、最初は、昭和年代に巻かれた連句を纏める意向の依頼を主たるグループ宛にいたしました。現在のように印刷やコピーの容易でなかった時代の記録は身近な方々の御尽力に依ってしか収集し得ないものと思われ、そして、だから、今の段階で断行しなければならないと思いました。大変な御苦労の末の昭和初期の貴重な記録も届きました。特に〈白燕〉橋　閒石・佐野千遊、〈かびれ〉小松崎爽青・西　幾多、〈都心連句会〉名古則子の各氏にここに改めて御礼とお詫びを申し上げます。〝資料の収集は困難ゆえもっと年月をかけて慎重にする必要がある〟との意見も強く、「昭和」と冠した連句集は断念せざるを得ませんでした。連句懇話会発足後の作品を主として収録する方針に決まった時、平成二年版の連句年鑑に登録され、連句を発表されている全グループに自己グループの紹介文の提出をお願いしました。紙幅の関係で、百六十字内または一行四十字内で①グループ結成の経緯　②名称の由来　③現況　④方針の様に箇条書でも、との条件を付けさせていただきましたが、二、三の参加辞退と、無回答の数グループを除いて続々とユニークな文章が寄せられました。御担当の皆様、ありがとうございました。私が連句の素晴らしさに魅せられた昭和四十八、九年頃、連句の状況は見通すべくもなくて、かろうじて俳句の年鑑などで連句にも関わっていられる方々や俳誌等を探ったことを思い感慨無量です。連句懇話会結成の苦心や経緯などは、〔十年史〕に詳述されておりますが、著名な俳人・歌人等が国際文化交流の途次に連句を試みられたり、海外からも熱い関心を寄せられている今、連句のより良き発展を願わずにはいられません。

ぎっしりと記録を書き込んで、数々のメモ類まで挟んで、いよいよ分厚くなったノートを閉じるにあたり、「現句年鑑」編集の体験等からの助力をいただいた福井隆秀氏、組み方その他の無理を適えて下さった朝陽会の澤全孝氏に感謝の意を表します。

平成四年五月二十五日　印刷
平成四年五月三十日　発行

現代連句集

頒価　二、〇〇〇円

編集　近松寿子

発行所　230横浜市鶴見区生麦三ノ一六ノ六
新盛油槽船㈱内　土屋実郎方
連句協会
電話〇四五―五〇一―四九〇七

印刷所　114東京都北区豊島四ノ二ノ四
印刷局朝陽会
電話〇三―三九一三―五五二六

★ご注文の方は東京九―九〇〇二四番（連句協会）宛
郵便振替で送金して下さい。